
星は何処に

真菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星は何処に

【Nコード】

N9617T

【作者名】

真菜

【あらすじ】

一人の少女―五月美鈴はひょんなことからマフィアの世界に入ってしまう。彼女を取り巻く運命とは・・・

※リング戦突入です

いろんな設定

名前 五月美鈴 さつきみれい

C V 小瀬〇絵

歳 6歳

髪 栗髪ストレート 長さは肩より上

身長 110cm

体重 11kg

出身は日本

短髪のせいでぱっと見男子

性格は時と場合による。超甘えん坊だったりする。

あまりこの設定に意味はないです。

正直いろんなアニメが混ざってます。だってコイツ錬金術使えるもん。霊圧読めたり・・・あれ？これって言ってよかってっけ？まあいっか（笑）

他にも・・・読んでいればわかる！！

本当にすんませんorz

それと文章より会話や効果音が多いです。そのタイプが苦手な人はご了承ください。（ペコリ）

プロローグ

暗い・・・寒い・・・ここは何処・・・？

・・・なんでこんなことになったのだろう・・・

こんな・・・はずじゃなかった・・・

もう私はイライナイ人間・・・

いつそのことこの短かった人生をここで終わりにしよう。

サヨナラ・・・

あの世でも誰とも会いたくない。

・・・6年って短いね。ホントに・・・

お父さん・・・お母さん・・・みんな・・・

・・・ごめんなさい・・・

どろっ

プロローグ（後書き）

駄文が多いですがよろしくお願いします。

出会い（前書き）

ヴァリアー出ます。

出会い

イタリア某所

銀髪の男と金髪の少年が森の中を走っていた。

男「うゝおゝおおい！ テメー新入りのくせにラクしてんじゃねえ！
」

少年「うっせ…鼓膜破れる（ボソ）オレ王子だから何してようがいの♪」

男「キモイから『♪』付けんなあ」

少年「カッチーン王子怒った」

男「てめえなあ…ん？」

不意に銀髪の男が足を止めた。それに気づいた少年も足を止めた。

少年「何止まってんの？ ボスに怒られんぜ」

男「うゝおゝいあれなんだあ」

男が指した先には何かが倒れていた。少年は興味半分でそれに近づいた。

少年「ヒト？ うわ、コイツ血まみれジャン」

少年が言ったように、倒れていたのは子供だった。血にまみれ少年が少女を見分けがつかなかった。

男「う お おい何でこんなところにガキがいんだあ」

少年「知るかよ。つかコイツ生きてるっぽいぜ。たぶん怪我とかしてんだろーからアジトにつれてかね？　ってことでよろしく」

男「ふざけんなあ。お前が背負っていけえ」

少年「やだね。だってオレ王子だもん」

男「てめえ生意気な（ダツ）んだって逃げんなあ！」

少年に逃げられた男は、渋々その子供を背負って走り出した。

—	
—	—
—	—
—	—
—	—
—	—
—	—
—	—
—	—
	—
	—
	—
	—
	—

男がアジトにつくと既に少年は待っていた。

少年「遅えよ」

男「ちっ」

ギ
イ
イ
イ

突然扉が開いた。

「あんらあ、ベルちゃんにスクアアロじゃない。お帰り」

出てきたのはオカマだった。

銀髪の男……スクアーロは背負っていた子供を下ろした。

スクアーロ「ルッスーリア、コイツを医務室に運んで怪我してねえ
か見てやれえ」

ルッスーリア「(っっ!!)」

ベル「引いてんじゃねえよ、オカマ」

ルッスーリア「んもうっベルちゃんたらひどいわね、オカマなんて」

ベル「だって事実じゃん」

ルッスーリア「あんらっ」

スクアーロ「ルッスーリアふざけてねえでさっさと行け!!」

ルッスーリア「はいはい。それじゃあ行きましょうね」

ス／ベ「(意識ねー奴に話しかけてるし)」

ルッスーリアが行き再び二人になった。

スクアーロ「うゝおゝおいベル、ボスに報告に行くぞお。任務の事
とあのガキの事だあ」

ベル「スクアーロだけで行けば？王子メンドイの嫌いだし、それに
眠いし」

スクアーロ「ふざけんなあ!!あのガキ連れてくるって言ったのは
お前だろー(ダッ)がってだから逃げんなあ!!!!」

ベルは二度目の逃走を果たした。

スクアール「ちっ。しかたねえオレがいくかあ」

結局諦めたスクアールだった。

悪夢

美鈴side

夢を見た。地獄の日々の夢を・・・。

？「それをよこせ!!」

それ？それって何??？あなたは誰!？

？「貴様の————をよこせ!!」

何？聞き取れない・・・。

そいつの手に刃物が見えた。

「やめて…!」

走ってくる。

「やめてえええええ!!」

パチッ

覚めた。よかった。・・・あれ?ここどこだろう??

知らない場所・・・。

周りを見回してみた。そこには・・・。

「っっ!!」

私の顔を覗き込む――――の顔が・・・。

悪夢（後書き）

意味わかんないな。
いったい何がしたい・・・

誰の叫び声？

「キャアアアアアアア！！！！！」

突然、悲鳴のような叫び声がアジトの中に響き渡った。

ベ／ス「！！！？？」

医務室から聞こえた。

＼ボスの部屋＼

スクアアロ「確か…あのガキが」

バリーン

スクアアロ「つつ痛！！」

突然飛んできたコップがスクアアロの頭に直撃した。

スクアアロ「うゝおゝおおい！！何すんだぁクソボス！！」

？「るせえ、カスが。黙らせて来い！！」

スクアアロ「ちっ。x a n x u s のヤロ」

＼廊下＼

ベル「ん？今の医務室じゃね？」

？「ム、ベル今の叫び声に心当たりがあるのかい？」

不意に声をかけられたベルは声のほうを見た。そこにはフードをかぶった赤ん坊がいた。

ベル「マーモンじゃん。ん…ちょっとね。任務の帰りに謎な奴拾ってさ。ルッスーリアが医務室に…」

マーモン「ベルも十分謎だよ（ボソ）」

ベル「ん？」

マーモン「いや、何でもないよ。それより知っているなら行った方がいいんじゃない？」

ベル「何で？」

ベルが聞き返すとマーモンは表情を曇らせた。実際はフードで見えないが…。

ベル「マーモン？」

マーモン「もし目が覚めて最初に見たものがルッスーリアの顔となると…」

ベル「つつー!!」

マーモン「あの叫び声の説明がつく」

なるほど、ベルが言いかけた時：

「いやああああ！！」

ベ／マ「！！／っっ！！」

さっきとは違う叫び声。

マーモン「兎に角行った方がよさそうだね」

ベル「しししっ今のってルッスーリアじゃね？」

タタタッ

ス「おっ」 ベ「あっ」 マ「ムッ」

医務室に行く道中3人は出くわした。

スクアーロ「うゝおゝおいさっきの叫び声って」

ベル「たぶんあいつだよ」

スクアーロ「そーいや何でマーモンもいるんだあ」

マーモン「ムム、僕がいちゃ悪いかい？」

スクアーロ「そういうわけじゃねえが」

マーモン「僕はさっきベルから軽くだけど聞いたのさ」

タタタッ
ガチャッ

スクアーロ「うゝおゝおいどうしたあ!!」

ルッスーリア「スクアーロ!! ベルちゃん!! マモちゃん!!」

マーモン「いったい何があったんだい？」

ルッスーリア「それが…」

チャキッ

殺気を感じた4人はその方を向いた。そこには・・・
銃を持ったあの子供だった。

夢？現実？

美鈴side

目を覚ましたとき、私の顔を覗き込んでいたのは・・・
お母さん・・・？その顔には不敵な笑みが・・・

「キヤアアアアアアア」

ウソだ！！お母さんは私が…私が…

私が悲鳴を上げたことで、そいつは少し困惑した顔になったが、怒っているようにも見えた。

「いやあああああ！！」

今度はそいつが悲鳴を上げた。無意識のうちに私の手にはナイフが握られていた。

ガチャ

さらにそこに3人入ってきた。そいつらは・・・

「ウ…ソ……。お父さん？お兄ちゃん…？」

なんで？何でみんなここにいるの？だってみんな私が…私が…
……………

私がこの手で殺したハズなのに。

望むもの

目の前には見知らぬ人、見知らぬ風景。
その人たちに向いている銃。

美鈴「あゝ私いったい何を（ガシャ）↑銃落

ガクッ 私はまた座り込んだ。

目の前の人たちが私に駆け寄ってきた。一人は金髪の少年、一人は銀髪の男、一人はオカマ？一人は赤ん坊？？

美鈴「ぷっっ」

全（美以外）「??」

最後の二人の謎さに思わずふき出した。でも

美鈴「（ハッ）……」

視線が怖い……（汗）

銀髪「うゝおゝおおい！！テメーいったい何もんだあ！！」

突然叫ばれた。

美鈴「っっ！！……鼓膜破れます（ボソ）」

金髪「スクアーロ声でけーよ」

オカマ「そうよお、この子大声にびっくりしてるわよ。ねえマモちゃん」

赤ん坊「それに今『鼓膜破れます』って聞こえたしね。…ルッスーリア近すぎ」

どうやらスクアアロと呼ばれた銀髪の人はずいぶん前から声が大きいらしい。

空気が微妙すぎる。何かいわないと…えっと…えっと…

美鈴「あ…あの…」

ル「うん？」 ベ「ん？」 マ「ム？」 ス「…」

美鈴「（（ビクッ）やっぱり怖い）えっとあの…」

お風呂入りたいです」

全「……………」

しまった、余計に重くなった…（汗）でも今はこれが精一杯だった。

ス「うゝおゝおいテメー怪我してんじゃねーのか？」

美鈴「あ…いえ別に。僕は怪我してないです」

スクアアロ「（僕ってことはコイツ男か？）」

マーモン「ふーん。じゃあ何でそんなに血まみれなんだい？」

血まみれ？言われて自分の体を見る。

確かに血にまみれていた。えっと確か・・・

美鈴「返り血」

全「！！！！！」

スクアール「そうかあ、ルッスーリアこのガキを風呂に連れて行け
(ちっ)」

ルッスーリア「はぁーい(今舌打ちしたわね)」

美鈴「すみません(舌打ちされた)」

テクテクテクテク・・・

く風呂場く

ルッスーリア「はいここよ」

美鈴「広っっ！！」

銭湯の五倍くらいあるよ。

ルッスーリア「着替えは私が用意し——」

美鈴「持っているので心配なく」

ルッスーリア「あらそう？」

なぜ残念そうに言うのでしょうか・・・

ルッスーリア「それじゃ出たら言ってね。外で待ってるわ」

美鈴「僕だってそのつもりです。あと僕のバックなるべくあさらないでくださいね」

ルッスーリア「はいはい。（いつの間にバックが？）」

美鈴「それでは」

〽十分後〽

はあ・・・血がこびりついて洗うの大変だったあゝ
バックから着替えを取り出す。上下黒のジャージ。

美鈴「ふう。」

（コンコン）OKです」

ルッスーリア「それじゃ皆のところへ戻りましょうか」

美鈴「はい!!」

お風呂のせいで無駄にテンションがあがった。

〽医務室〽

美鈴「失礼します」

ルッスーリア「戻ったわよー」

そこにはさっきの人たちが待っていた。

美鈴「お風呂ありがとうございました」

ベル「しししちゃんと喋れんじゃん」

失礼な!!

スクアール「うゝおいそれでテメーは何もんなんだあ」

なぜ銀髪の方はそればかり。。。。

マーモン「そうだね。君はいったい何者なんだい？何故あんなに返り血を？」

美鈴「えっと僕は…（グウ）↑お腹の音

／／…限界です…」

スクアール「何がだあ!!」

美鈴「10日間何も食べてなくて…（パタッ）」

スクアール「うゝおゝおおい!!」

マーモン「ベル、今何時だい？」

ベル「ん？夜の八時」

スクアール「ルッスーリア!!急いで飯作ってもってこい!!」

ル
ッ
ス
ー
リ
ア
「
は
い
は
い
」

望むもの（後書き）

主人公ぶっ倒れちゃった・・・

レッツご飯タイム

ルッスーリア「できたわよー」

ベル「おいチビ、起きろ」

ベルが思いっきり体を揺らすと美鈴は目を覚ました。

美鈴「ん……？（クンクン）

ご飯のにおい」

テーブルの上に所狭しと並べられた料理。

美鈴「イタリアン料理……」

ベル「ん？当たり前じゃん、ここイタリアだしな」

美鈴「……え？ここってイタリアなんですか！？」

全「はぁ！？」

美鈴「てっきり日本かと……」

スクアーロ「うゝおゝおいガキいふざけてんじゃねえぞお」

美鈴「ふざけてません。それに銀髪の人！！僕の名はガキじゃないです」

スクアーロ「うゝおゝおい『銀髪の人』ってなんだあ。オレはS・スベルビ

スクアールだあ」

マーモン「そういえば自己紹介がまだだったね。僕はマーモン」

ベル「オレはベルフェゴール。ベルって呼んでな」

ルッスーリア「私はルッスーリア。ルッス姐って呼んでね♪」

美鈴「はい。えっと、スクアールさんにマーモンちゃんにベルさんにルッス姐さんですね」

マーモン「何で僕だけ『ちゃん』なんだい？」

美鈴「可愛いから」

マーモン「（即答・・・）」

ルッスーリア「で？あなたの名前は？」

美鈴「僕は美鈴です。美しい鈴と書いて美鈴です。みすずではなくみれいです」

マーモン「1つ気になるんだけど、君は男の子かい？」

美鈴「なっっ正真正銘の女の子ですっ健全な六歳です！！」

全「（6歳！？）」

ベル「ししっ姫オレと2つ違いじゃん」

美鈴「姫!？」

ベル「しししっ」

マーモン「見た目も一人称も男の子だったからね」

美鈴「見た目はお母さんの趣味です。だから気に食わない。一人称は気分テキにです。だからいつもは私って言ってます」

マーモン「ふうん」

ルッスーリア「さっご飯たべましょ」

全「はい」

モグモグ

ルッスーリア「そういえば美鈴ちゃん、さっきイタリアってことにびっくりしてたけど何で？」

美鈴「僕は日本人です。羽田から神戸の飛行機に乗ろうと思ったんですけど…イタリア行きだったみたいですわね」

コネコネ

ベル「ひゅめっ何作ってんの？」

美鈴「おにぎりです（何で姫なんだろう?）」

スクアーロ「うゝおゝおいテメーなんで血まみれ（ボフッ）ん!？」

全（美以外）「!！」

美鈴「食事中のグロい話はアウトですよ。スクアアロさん（ニコッ）」

スクアアロ「んん（喋れねえ）」

スクアアロの口の中にはおにぎりが…。

美鈴「その他の質問なら」

全「（こえゝ）」

ルッスーリア「えっと私はないわよ」

ベル「オレも」

マーモン「僕もだよ」

スクアアロ「（ゴクン）オレもだあ」

美鈴「声でかい（ヒュッ）」

スポッ

スクアアロ「んん!!（またかよ）」

美鈴「んじゃ、僕から質問いいですか？」

ベル「いんじゃない?」

美鈴「えっと…こ（バン）……」

突然医務室の扉が開いた。

レッツご飯タイム(後書き)

終わり方微妙(汗)

さてきたのは誰でしょう
WW

レッツご飯タイム part 2 (前書き)

読んでくれた人ありがとうございます!!!

レッツご飯タイムpart2

? 「おい、カス鯨はいるか」

スクアーロ「x a n x u s ! !」

マーモン「珍しいね。ボスが食堂に来るなんて」

美鈴「(この人がボスさん)」

スクアーロ「用は何だ」

ドガッ↑かかと落

美鈴「……………(痛そ)」

x a n x u s 「そいつが例のガキか」

美鈴「?????」

x a n x u s 「スクアーロ。さっさと飯持って来い」

バタンッ

全「……………」

スクアーロ「ちっ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんさっき何て言おうとしてたの?」

美鈴「あ、はい。えっとココってなんですか？」

ルッスーリア「あのねえココはボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーってところなの」

ベル「言っちゃったね」

美鈴「…ボンゴレ？アサリですか？あんさつ？ってなんですか？」

ベル「しししっやっぱコイツ6歳だな」

マーモン「どうせなら知らなくていいよ」

美鈴「マーモンちゃんのケチ」

スクアーロ「ゴチャゴチャ言っていないでさっさと食え！」

ルッスーリア「美鈴ちゃん。ココだと難だし、余ってる部屋があるからしばらくそこに泊まっていいいわよ」

美鈴「本当ですか！？ありがとうございます！」

ルッスーリア「案内するわね」

スクアーロ「オレはx a n x u sのところに行ってくる」

（空き部屋）

ルッスーリア「ここよ」

マーモン「ついでで言つとくと、右がベルで左がスクアール、正面が僕だよ」

ルッスーリア「マモちゃん!! 私の部屋は!!」

マーモン「美鈴には健全でいてほしいからね」

ベル「言えてる」

美鈴「???」

ルッスーリア「んもう!! ひどいわぁ。私の部屋は右前よ」

美鈴「了解です」

マーモン「ついでに君の話を聞こうじゃないか」

カチャ

美鈴「広い!!」

ベル「姫の部屋オレのより広いし」

美鈴「(ヴァリアーってすごく広いな。お金持ちなのかな?)」

スクアール「うゝおゝおい!! 何でテメーはあんな状況だったんだあ!!」

全「っっ!!」

美鈴「スクアアロさん！？いつの間に！？」

スクアアロ「いまだあ」

ベル「やけに早かったじゃん」

スクアアロ「うるせえ」

美鈴「とりあえず声のボリユーム落としてください」

スクアアロ「くっ」

美鈴「で『あんな状況』ってなんですか？」

マーモン「君が返り血にまみれていたことだよ」

美鈴「あーそれ！それは・・・」

レッツご飯タイム part 2 (後書き)

きり方へたくそですね。orz

やっとなりあり揃いました!!!!

? 「オレを忘れてるぞ」

ん? 誰だっけ??

まいっか(笑)

過去（前書き）

作「主人公ちゃんの過去を公開!!!!」

美「テンション上がるな！」

ガッ

作「ごへっ」

過去

美鈴「それは皆殺^やっちゃったからだと思うよ」

マーモン「さらっと言ったね」

ベル「皆殺^やってたってのは何で？」

美鈴「私ね日本の小さな町に住んでたんだけどね、なんかある日を境に皆にイジメられたの」

マーモン「なんかシニールだね」

美鈴「それで最初は幼稚園のクラスの人たちだけだったんだけど気づいたら町の人対私一人になってたの」

全「……は？」

美鈴「すっごく怖かった、まるで地獄。みーんな刃物とか持ってるの。包丁とか彫刻刀とかカッターとかe t c…それで怖かったから反撃の意で殺^やったの」

美鈴「最初は両親から。幼稚園で作った色水に、家にあったいろんな薬を混ぜてお父さんとお母さんに飲ませた」

マーモン「（ある意味毒だね）」

美鈴「お兄ちゃんたちはナイフだったかな？で——そのほかの人たちは包丁とかカッターとか奪って殺^やって…」

スクアールロ「町の奴全員殺^やったってのか!？」

美鈴「（ブンブン）違います。だって皆足速いから追いつけないし。だから町ごと焼いちゃいました」

全「……」

美鈴「それで飛行機に乗ったけど・・・」

マーモン「イタリア便に乗ったというわけなんだね」

美鈴「うん」

ガチャ

ベル「スクアールロ、どこいくの?」

スクアールロ「xanxusのところだ」

ベル「ん? 何でまた?」

スクアールロ「美鈴のことを話してくる」

ボタン

秘密の話（前書き）

題名意味わかんねー！！？

秘密の話

スクアールside

＼xanxusの部屋＼

スクアール「うゝおゝおい！！テメエちゃんと話聞いてたかぁ！？」

人が説明してるつつうのに寝そべりやがって（イライラ）

xanxus「るせえ」

スクアール「だとお！」

このヤロー（怒）

xanxus「おい」

スクアール「ああ？」

xanxus「そのガキにこれを渡しておけ」

手渡されたのは、ヴァリアーの入隊手続き——いうなれば契約書。

スクアール「うゝおゝおい！どういふつもりだぁ！」

コイツ美鈴をヴァリアーに入れる気か！？いったい何のために！？

xanxus 「例の作戦で奴が使えるかもしれない」

スクアール 「何っっ!!」

例の作戦だど! あいつに何ができるっていうんだ。いやxanxusのことだ、何か策を練ってるのかも知れねえ。だがそううまくいか・・・

xanxus 「入隊自体は契約書を見て決める。使える駒は多いほうが手っ取り早い」

やはりコイツからしたら美鈴もただの捨て駒か。
オレ的にはあいつにマフィアなんて似合わねーと思うがな。

スクアール 「よし、わかった。だがもし気に入らなかった場合どうするつもりだ」

xanxus 「テメエには関係ねえ」

ちっ。オレは軽く舌打ちをして部屋を出た。

秘密の話（後書き）

例の作戦ってなんでしようね
W
W

契約書

（美鈴の部屋）

ガチャ

美鈴「あ、お帰りなさい」

スクアール「おい美鈴、これ書け」

渡された紙を受け取る。

美鈴「何ですか？」

スクアール「契約書だあ」

ス／ベ／マ「つつ！！」

美鈴「？契約書？何の？」

ルッスーリア「ボスどういうつもりかしら」

ベル「コイツ何にもできないじゃん」

マーモン「どうせ金にもならないよ」

美鈴「あのおこれなんですか？契約書って？」

ルッスーリア「そうね。貴女にもわかるように説明してあげるわ。」

美鈴ちゃん家に帰れないのよね」

美鈴「…………（コクリ）」

ルッスーリア「これはヴァリアーの入隊契約書、要するにここに住むためのもの」

美鈴「え・・・それって」

ルッスーリア「私たちのボスは美鈴ちゃんがココに住むのを許してくれたのよ」

美鈴「！！ホント！？ココに住んでいいの！？」

ルッスーリア「ええ。契約書はその手続きと考^{それ}えていいわ」

マーモン「（さすがルッスーリアだね。子供の扱いに慣れてる）」

美鈴「（ペラッ）…イタリア語…」

ベル「だからココイタリアだって」

マーモン「お金くれれば僕が翻訳してあげるよ」

美鈴「だ、大丈夫です。（お金取るの！？）」

ゴソゴソ

ルッスーリア「あら、何かしらそれ」

ベル「見て分かれよ。どう見てもメガネだろ」

美鈴「はい。でも度は入ってません」

マーモン「じゃあ、何のために出したの？」

美鈴「これ翻訳メガネなんです」

全「？」

美鈴「これをかければ設定した言語に見えるんです」

マーモン「へえ、面白いね。でも君が持っているのはそれだけじゃないよね」

ベ／ル／ス「??」

マーモン「だってここはイタリアだよ？なのに場所も知らない文字も読めない6歳児が、イタリア語で僕らと喋れると思うかい？」

その通りだった。美鈴はずっとイタリア語で彼らと話していた。

美鈴「それは…（ゴソゴソ）これです」

ベル「補聴器？」

ルッスーリア「と、ピンマイク？」

美鈴「これも言語を設定すればその言葉で聞こえます。そしてこのマイクを通せば臨機応変に相手の言語に変換されます。だから私に

とっては日本語に聞こえ日本語で会話してるんです」

マーモン「なるほどねえ」

美鈴「それじゃあ、

『Q1 七ヶ国語以上話せるか』

無理だけどたぶん大丈夫。

『Q2 戦闘経験はあるか』

（あれは戦闘に入るのかな？）…無しだと思う。

『Q3 武器は何を使っているか』

武器？…ある分けない。

『Q4 暗殺経験はあるか』

（毒って入る？ いや、あれは違うよな）無し。

『Q5 通り名はなんと言うか』

通り名？ 無し。

『Q6 出身国はどこか』

日本。

『ではサインを』

サイン？ えーっとえーっと… M i r e i …でいいのかな？

はい書けました」

スクアアロ「よし、アイツんともって（パシ）くぞってベル！
」

ベル「姫のみして。ふうん、やっぱおもしろ」

スクアアロ「返せ。それじゃあこれは x a n x u s に出してくる」

ボタンッ

スクア―ロ「（これじゃ美鈴は入隊できねえな）」

契約書（後書き）

はい。いつものごとくテキストですっ

結果

「x a n x u sの部屋」

ガチャッ

スクアール「うゝおゝおい書かせてきたぞお」

x a n x u s「貸せ（パシッ）……ハッ面白え」

スクアール「コイツは条件を何一つクリアしてねえ。どうすんだ？」

x a n x u s「明日入隊試験を行う。勿論戦闘試験だ」

スクアール「何考えてんだあ！アイツは6歳だろ！できっこねえ！」

x a n x u s「それがどうした。ベルは8歳だ」

スクアール「ベルは論外だ！そもそも女子を入れようって言うその考え自体が——」

x a n x u s「うるせえ。オレはヴァリアーのボスだ。ヴァリアーのことはオレが決める」

スクアール「……ちっ。勝手にしやがれ」

バタンッ

く美鈴の部屋く

スクアール「ということで、明日お前の入隊試験がある」

美鈴「にゅうたいしけん？」

ルッスーリア「美鈴ちゃんがここで住めるかどうかのテストよ」

美鈴「テっ…テスト!？」

ベル「だーいじょぶだって。姫だったら簡単に合格できるって」

美鈴「ベルさん…。だいいですね」

マーモン「ま、ボスのことだ。無理かもしれえないね」

ベル「お前士気下げるようなこと言ってんじゃねえし」

マーモン「フン」

ベル「カッチーン。何王子にその態度」

ルッスーリア「コラコラ二人とも、やめなさいって」

美鈴「フフツアハハハ」

スクアール「何笑ってんだあ」

マーモン「不気味だよ」

美鈴「アハハごめんなさい。皆さんにぎやかだなんて思って。楽しい人たちだなんて」

マーモン「ふーん。そういわれたのは初めてだよ」

美鈴「どうしてですか？」

ベル「オレらは暗殺部隊だからな」

美鈴「へえ？」↑暗殺部隊わかってない

マーモン「まあいいさ。それより美鈴、明日は早いんだろ？僕たちはこれで失礼するよ」

スクアアロ「聞くことは聞いたからなあ」

ベル「しししっ姫おやすみ」

美鈴「おやすみです。

疲れた…ふぁゝ眠いZZZ」

ゝ廊下ゝ

ベル「ホントに謎な奴」

マーモン「スクアアロ明日の入隊試験、誰を相手にするんだい？戦闘試験なんだろ？」

ルッスーリア「そうよお。さらっと町を焼いたって言ったけど、あの子はまだ6歳よ？」

スクアール「ああ。だからレヴィでいいと思う」

ルッスーリア「大丈夫かしら」

ベル「やばいかもね、顔的に」

全「……」

スクアール「大丈夫だろ（汗）」↑ケツコー心配

美鈴の相手をするレヴィとは一体…（笑）

ベル「ナレーション遊んでね？」

スクアール「うゝおゝおい遊んでんじゃねーぞお!!」

ゴメンナサイ…（汗）

結果（後書き）

次回やつとヴァリアーのメンバー揃います。

入隊試験

翌日

美鈴「zzz」

スクアール「うゝおゝおい朝だあ起きろお」

美鈴「にゃ!？」↑ww

スクアール「朝飯できてんぞお」

ガバツ

美鈴「おはようございます。スクアールさん(ニコッ)」

ご飯に敏感な美鈴である。

スクアール「:行くぞ」

美鈴「ふぁゝい」

ゝ食堂ゝ

ガチャツ

美鈴「皆さんおはようございます!~!」

ルッスーリア「美鈴ちゃんおはよう」

ベル「姫おはよっ♪」

マーモン「起きたんだね」

美鈴「どういことですか（怒）」

マーモン「別に」

？「ぬ。」

美鈴「…誰？」

レヴィ「オレはレヴィ・ア・タンだ。レヴィでいい」

美鈴「レヴィさんですか」

スクアーロ「おい、さっさと食べて試験行くぞ」

美鈴「は、はい！！」

レヴィ「ぬ、試験？」

ルッスーリア「ヴァリアーの入隊試験よ」

マーモン「まあ、ヴァリアー自体分かってないみたいだけどね」

レヴィ「このガキが入隊だど！？」

美鈴「ガキって言わないでください。私には美鈴って言う名前があ」

スクアアロ「うゝおゝおいさつさとしろ!!」

レヴィ「せいぜいがんばれ」

ベル「何言ってるの？相手お前だし」

レヴィ「なぬ!？」

ベル「なぬじゃねーよ、ムツツリ」

レヴィ「ベル!! 貴様!!」

スクアアロ「うるせーぞお!! テメーらあ!!」

美鈴「あなたが一番うるさいですよ（ボソツ）」

マーモン「美鈴ってケツコー毒舌だね」

ルッスーリア「ご飯冷めちゃうわよ」

全「はい・・・」

（数分後）

スクアアロ「それじゃ行くぞ」

ベル「レヴィ、姫に怪我させたらお前殺すから」

マーモン「それじゃ意味ないよ」

美鈴「x a n x u sさんも来るんですか？」

スクアーロ「当たり前まえだあ。こなきや意味ねえだろおが」

レヴィ「貴様ごときが気安くボスの名前を口にするな！！」

美鈴「（ビクツ）…うう…ヒック」

ベル「泣かした」

マーモン「責任取りなよ」

スクアーロ「レヴィ何やってんだあ」

美鈴「うああああん」

レヴィ「ぬう…」↑焦w

美鈴「フッフ…アハハハハ」

全「!？」

スクアーロ「うゝおゝおい何笑ってんだあ。泣いてたんじゃねえのかあ」

美鈴「挑発です」

レヴィ「（怒）」

ルッスーリア「挑発？」

マーモン「レヴィがきれかけてるよ」

ベル「大人げねーの」

レヴィ「貴様！！ヴァリアーに入隊できぬようにしてやる！！」

美鈴「フン」

スクアーロ「それじゃあいくぞお！！」

トレーニングルーム

x a n x u s 「おせーぞカスが」

レヴィ「すみません、ボス」

美鈴「（なんかキャラ違うし）」

スクアーロ「よおし始めるぞお」

マーモン「ちよつと待ちなよ」

スクアーロ「なんだあ」

マーモン「美鈴、素手で戦うのかい？」

スクアーロ「……」

美鈴「ご心配なく♪」

パン バッシュ↑槍練成

レヴィ「ぬっ!？」

マーモン「ム…」

ベル「ん？」

スクアール「お、おい」

x a n x u s 「…(フッ)」

美鈴「準備OKです」

ベル「何それ」

美鈴「詳しいことは終わったら♪」

スクアール「始めろ」

レヴィ「丸焼きにしてやる!! レヴィ・ボルタ」

バサッ

ベル「アイツマジで本気じゃん」

美鈴「傘…? デカイ! (バチバチ) って電気い!?! 電気大っ嫌い
!!」

サクツ タン ピョン

スクアール「槍を足場にして飛んだか」

レヴィ「ぬう…」

ルッスーリア「まあ身軽ね」

美鈴「じゃあ私も行きます」

タタツ

レヴィ「自ら突っ込んでくるとは愚かな」

美鈴「ちっさいから当たりませんませんよーっだ（べー）」

スッ パリン

レヴィ「ぬおっ！！足が！！」

マーモン「凍ってるね。これは幻覚ではなく現実だよ」
リアル

ベル「あれ？姫はどこに行った？」

美鈴「ここだよ」

レヴィ「天井！？」

スクアール「どーなっていやる」

美鈴「これで終わり♪」
ラスト

タツ

スクアーロ「そこまでだあ」

ピタツ↑空中だよw

美鈴「ちえっ」

スクアーロ「降りて来い」

美鈴「はい」

シュタツ シュルシュル

マーモン「ム：ワイヤーかい？」

スクアーロ「天井にいたトリックかあ」

美鈴「はい。レヴィさんの傘を足場にして飛んで、ワイヤーを取り付けたんです」

ベル「（ワイヤーか。うしし…使えるね）」

xanxus「おい、ガキ」

美鈴「はい（またガキかいな）」

x a n x u s 「合格だ」

美鈴「本当ですか！？ヤッター住む場所できたあ^^」

全（？以外）「そこ！？」

レヴィ「おい、それはいいからこの氷を溶かせ」

美鈴「あっすみません」

パン　ガラガラ

ベル「姫合格おめでとう」

ルッスーリア「それでもう仲間よ。だから敬語じゃなくていいわ」

美鈴「はい、ありがとうございます…じゃなくてありがとうございます！」

マーモン「それじゃあ改めて」

全「ヴァリアーにようこそ」

入隊試験（後書き）

晴れてヴァリアーの一員となりました。

ほっとしてあれこれ

美鈴「それじゃ皆の呼び方変えるね」

スクアーロ「どうせ特に変わらないだろ」

美鈴「アハハ。えっとスクアーロにマーモンにベル兄にルツス姐で」

ベル「何でオレだけ変わってんの？」

美鈴「だって年齢的にお兄ちゃん的位置だから」

ベル「ま、姫だから許す」

ルツスーリア「立ち話もなんだから部屋に行きましょう」

マーモン「そうだね」

く美鈴の部屋く

美鈴「何で私の部屋？」

全「広いから」

美鈴「即答!？」

マーモン「いちいち気にしてたらきりがないよ」

美鈴「…まいっか」

ルッスーリア「それより試験のときのあの技なあに？」

ベル「確かに。両手合わせるだけで物が作れるってうけんだけど」

美鈴「あーあれかぁ。あれは錬金術って言って…説明メンドイな」

錬金術…それは物質一の物から別の物質一の物を作り出す技。詳しくは鋼○錬「うゝおゝおい！！それ以上はアウトだぁ！！」

マーモン「ナレーションも真面目にやりなよ？」

・・・。

美鈴「ということでそれ参照で」

マーモン「美鈴も説明省いたね。まいいけど」

ベル「いいのかよ」

ルッスーリア「……あそういえば」

全「?？」

ルッスーリア「美鈴ちゃんヴァリアーに入隊したんだから隊服作ってあげないかね」

美鈴「隊服？」

ベル「ヴァリアーの証的なやつ」

美鈴「それって一緒に住んでる証ってこと？」

全「（え————っ）」

ルッスーリア「まあ、そういうことね。なんかリクエストある？女の子だからスカートなんてどう？」

美鈴「スカートは遠慮します。皆と同じでいい。あと猫耳フードつきで！」

ルッスーリア「わかったわ。それじゃ」

ボタン

ルッスーリア「さて可愛くしてあげましょう」

美鈴『可愛くなくていいから』

ルッスーリア「……」

————

美鈴「あっぶな（汗）」

ベル「ネコ耳付けんのに可愛いのだめなんだな」

美鈴「そこ突っ込んだら負け」

マーモン「負けとかあるんだ……」

美鈴「ん…そうだってレヴィって人大丈夫かな？」

スクアール「アイツの心配はしなくていいだろ」

ベル「だな。あのムツツリ」

美鈴「（嫌われてるんだ…）」

マーモン「二人とも言い過ぎだよ。あくまでも彼も幹部なんだからね」

ベル「へいへい」

美鈴「幹部？」

マーモン「言ってなかったね。僕らは皆幹部って言ってヴァリアーの中で上の立場なのさ」

美鈴「あ？」

マーモン「まあ、君も幹部だけど」

美鈴「ほっ」

コンコン ガチャ

ルッスーリア「隊服できたわよ」

ベル「さっすが」

美鈴「は…速い」

ルッスーリア「そりゃあヴァリアーの女将さんだもの（ハート）」

ベル「キモッ」

美鈴「（ハート!?!）」

マーモン「ルッスーリア、美鈴が引いてるよ」

ルッスーリア「あんらあ？そんなことないわよねえ」

美鈴「いや…正直ドン引き」

ルッスーリア「（ガーン————）」

美鈴「って隊服!!」

パサッ

美鈴「おお〜メッサいいよこれ。試し着」

〜少々お待ちを〜

美鈴「あれ？何でサイズが合ってるの？」

ルッスーリア「実は美鈴ちゃんが寝てる間にこっそり」

美鈴「（ガーン————）お嫁にいけない…」

スクアール「テメー何してんだあ」

バコッ

ルッスーリア「うげぼっ」

ベル「しししっ野太え声」

ガチャ

xanxus「おい、任務だ。美鈴お前の初任務にする」

美鈴「にんむ？」

ルッスーリア「ここにいる限り私たちはお仕事をしなくちゃいけないの」

美鈴「うん。わかった」

マーモン「美鈴一人かい？」

xanxus「マーモンとベルもだ。コイツの力を見て来い」

マーモン「で、内容は？」

xanxus「シルアスファミリーを潰して来い」

ベル「へーい」

マーモン「わかったよ」

美鈴「了解っス！」

ルッスーリア「がんばってね」

美鈴「はい！」

x a n x u s 「（結構隊服、様になってるな／／／／）」

ほっとしてあれこれ(後書き)

次回は初任務に出かけマース
つーか最後の x a n x u s どうしちゃった!?

初任務（前書き）

作「初任務ガンバ！」
美「誰にいつてんの？」

初任務

タタタッ

美鈴「ねえそのシリアスファミリーってどこ？」

マーモン「シリアスじゃなくてシル・アスだよ。確かココから北2？、東に400mだよ」

美鈴「よし。Let's go!!!です」

ベル「テンションたっけー。ホントに6歳かって」

美鈴「ホントだよー。というかベル兄はなんでヴァリアーに入ったの？」

ベル「オレ？オレはみーんな殺してヴァリアーが面白そうだから入った」

美鈴「へえー。

お、着いた。ココ？」

マーモン「そうだね」

ベル「人数は？」

マーモン「今やるよ。スウ〜粘写…ズビー」

美鈴「……なにこれ」

ベル「粘写。きったねーよな」

美鈴「……」

マーモン「ム：見張りが五人で中が25人」

美鈴「少なっ。学校の一クラス分もないじゃん」

マーモン「ココは弱小ファミリーだからね」

美鈴「ふーん？それじゃこれつかってみよ」

シャキッ↑短刀2本出現

ベル「どっからだしたの？」

美鈴「さあ？いこっ」

マーモン「これで美鈴の面白い力が見れるかもね」

ダッ

美鈴「It、s show time♪」

ザシュッ ザクッ

ベル「何の抵抗もなしに人殺せるんだな」

マーモン「案外暗殺者に向いているのかもね」

美鈴「ボスさんどちら♪鬼さんこちら♪」

マーモン「ちゃんとボスを倒すって分かってるんだね」

ベル「つかゲーム化してるし」

美鈴「ん？この気配…ココの部屋だ！！」

バン

ベ／マ／美「いた」

ボス「何故分かった！？」

美鈴「君には関係ないさ。それじゃあ…

see you.

パン　ボゴツ　グシャ

ボス「…（ドサツ）」

マーモン「今のも錬金術かい？」

美鈴「ん…まあね（パンパン）」↑手を払う

ゴソゴソ

ベル「何それ手袋？（パチン）なんで指鳴らして——」

美鈴「急いでココが出るよ（タッ）」

マ／ベ「美鈴？／姫？」

美鈴「急いで！！」

マ／ベ「…（ダッ）」

美鈴「5∴4∴3∴2∴（ダッ）↑外
…1」

ドオオオン↑アジト爆

マ／ベ「え？」

美鈴「かんりょー」

マーモン「一体何をしたんだい？」

美鈴「ボスさん倒したあとにその周りに火薬を撒いて」

ベル「あの手払ってたとき？」

美鈴「うん。で発火布で点火したって訳ですわ」

マーモン「発火布？」

美鈴「手袋だよ。詳しい説明はメンドイのでしない」

手袋と指パッチンで火をつける方法なんてまるで鋼の「ちょい待っ

たあー。おいナレーション!! しっかり、私がしないからって」

ベル「姫が説明しないからナレーションが暴走しちゃったじゃん」

美鈴「だってえゝメンドイんだもん（ウルウル）」

マーモン「でも火薬だけじゃあんな爆発無理だよ」

美鈴「あのボスさんね、体中にいっぱいボム持ってたから」

体中にボムなんてまるで獄寺のよ「ネタばれ自重!!」

美鈴「ナレーション!! いい加減にしないと三枚におろすぞお!!」

ベル「刺身にしてやんぜ」

何故にスクアール!?

美鈴「針千本のサボテンに…」

ベル「それ、オレの台詞だし」

マーモン「二人ともナレーションに当たる暇があったらさっさとかえるよ」

ベ／美「はい」

ゝアジトゝ

美鈴「ただいま戻りましたぜ皆様方!!」

スクアアロ「うゝおゝおい何があったあ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんのキャラが変わってるわよ」

マーモン「さーね。僕は知らないよ」

ベル「任務が楽しかったんじゃないの？」

美鈴「〜♪」

レヴィ「ご機嫌だな」

美鈴「あっレヴィ無事だったんだ」

レヴィ「なぬっ!？」

スクアアロ「ベル、マーモン。美鈴の力はとうだった？」

ベル「殺しはゲーム感覚」

マーモン「美鈴が本気を出したら恐ろしいだろうね」

スクアアロ「じゃあアイツは本気を出さなかったのか？」

マーモン「見たところまだ10%ってところだったね。美鈴にはまだ隠された力があるらしい」

ベ／ス「隠された力？」

ベル「何それ」

マーモン「さあね。確証はないから信じるかどうかは君たちしだい
だけだね」

ベル「で？」

マーモン「それは――」

初任務（後書き）

隠された力とは・・・！次回公開（ウソ）
全「おい！！」

皆の部屋

マーモン「それは――」

美鈴「ねえ！」

マーモン「（ムス）なんだい？」

美鈴「皆の部屋見たい！」

ベル「ん？ いいぜ」

美鈴「わーい」

マーモン「お金払わないと見せないよ」

美鈴「ケチ（ウルウル）」

マーモン「：仕方ないね。今回はつけにしておくよ」

美鈴「やった」

ルッスーリア「私もいいわよ」

美鈴「ありが――」

ベル「行かせねーよ」

マーモン「美鈴に見せるわけにはいかないよ」

スクアール「テメーは論外だあ」

美鈴「??（何があった?）」

ルッスーリア「ひどいわあ」

美鈴「え…えっとじゃあルッス姐は最後で。スクアールは?」

スクアール「いいぞお」

美鈴「それじゃあベル兄の部屋から」

ベルの部屋へ

ベル「ほい」

美鈴「おお〜キレーだ」

ベル「当たり前じゃん。オレ王子だもん」

マーモン「見かけによらないね」

美鈴「ん? ピアノ線? じゃなくてワイヤーだ」

ベル「ししっ今新技試し中」

美鈴「へえ〜。よし次はマーモンの部屋」

マーモン「美鈴以外はあとでお金貰うよ」

スクアール「強欲チビがあ」

くマーモンの部屋く

ガチャ

マーモン「見ても面白くないよ」

ベル「机とベッドとダンスだけかよ。つまんなっ」

美鈴「え？」

スクアール「テメエのほうが見かけによらないだろ」

美鈴「？」

ルッスーリア「金庫ぐらい合ってもおかしくないのにねえ」

美鈴「ちよっと何言ってるの？奥にでっかい金庫があるじゃん」

全「何!？」

マーモン「まさか僕の幻術が見破られるとはね」

シュウウウ

ス／べ／ル「あ!!!」

スクアール「この金庫を隠してたのかあ」

マーモン「あまりお金は入ってないけどね。盗まれたら大変だからね」

ベル「でもマーモンの幻覚見破れるなんて姫やるじゃん」

美鈴「アハハ…」

くスクアアロの部屋く

美鈴「うん。予想通り」

スクアアロ「ちいっ」

マーモン「適度に汚いね」

ベル「いやきつたないだろ」

美鈴「お、鯨の剥製発見。鯨好きなんだね」

スクアアロ「悪いかあ」

美鈴「ううん」

美鈴「よし。最後にルツス——」

ベル「ごめん。オレ用事が…」

マーモン「僕もだよ」

スクアール「オレもだ」

美鈴「ちよっ待ってよ（泣）」

ピタッ

ベル「だよな」

マーモン「一人はきついね」

スクアール「そうだな」

ルッスーリアの部屋

ルッスーリア「ココが私の部屋よ」

ガチャ

全「っっ！！（おえっ）」

「ごめん用事が！！」

ダダダッ

ルッスーリア「んもう。遠慮しちゃって」

違うだろ…ww

美鈴「ハアハア…何あれ」

マーモン「だからいったんだ」

ベル「マジでアイツきもいだろ」

スクアール「……………（おえっ）」

一同が見たものはこれでもかというほど部屋に積まれたマッチョな男の死体の山。

美鈴「忠告聞けばよかった」

ベル「気分転換にどっかでおしゃべりしようぜ」

美鈴「大賛成」

ということとで皆でおしゃべりタイム。

おしゃべりタイム

（美鈴の部屋）

ガチャッ

美鈴「あっ私の部屋、土足厳禁にしたから」

ベル「なんで？」

美鈴「だって私日本人だもん。日本は土足厳禁なんだよ」

マーモン「しっかり靴箱も設置してある。わかったよ」

美鈴「土足で上がるとトラップが発動するよ（ニコッ）」

ベル「スクアアロに言っとけ。たぶんアイツそのままあがりそうだからな」

美鈴「だね。っと…そうだ、マーモンに聞きたいことがあるんだけど」

マーモン「なんだい？」

美鈴「なんでマーモンは赤ちゃんなのにヴァリアーに入ってるの？」

ベル「そういえばそうだな。なんか術とかも使えるし」

マーモン「そのことかい？それはお金払わないと教えないよ」

ベ／美「（またお金かよ!!）」

ベル「マジでむかつくんだけど、このチビ」

マーモン「やるかい？」

ベル「任務暇だったしさ」

マーモン「だろうね」

注意…ココ美鈴の部屋ですよww

美鈴「ちよつと二人とも!! 払うからさ!! やめて!!」

ベル「ちえっ（ボソ）…姫が払うなら王子も払うか。（やっぱ払わなくても…）」

マーモン「どうも。僕はアルコバレーノって言う呪われた赤ん坊さ」

美鈴「アルコバレーノ？虹？」

ベル「聞いたことあるぜ。確か世界に七人いるんだよな」

マーモン「その通りだよ。本来は普通の人間だったけど、アルコバレーノになるときに、呪いで赤ん坊の姿になったんだよ」

美鈴「ふーん？」 ↑ 難しいの苦手（だって六歳だもん）

ベル「へえー」

美鈴「ヴァリアーって不思議というか個性的な人がいっぱいだね。
特にルッス姐とか…」

ベル「…」

マーモン「そのうち慣れるよ」

ベル「眠い…」

美鈴「お開きにしようか。もう夜遅いしね」

マーモン「そうだね。それじゃおやすみ」

ベル「ふぁ〜。おやすみ」

ボタン

美鈴「……………（パタッ）
すう〜」

寝つきのいい美鈴でした。

おしゃべりタイム（後書き）

短っ!?

て言うかスクアール一緒になかったんだ

星

ベル「ひゅめ」

マーモン「どうしたんだい？」

ベル「マーモン、姫見なかった？」

マーモン「見てないよ」

ベル「ちえっ」

タタッ

ベル「オカ…ルッスーリア、姫見た？」

ルッスーリア「今オカマって言ったわね？」

ベル「知んね」

ルッスーリア「……ふう。美鈴ちゃんなら上よ」

ベル「上？」

ルッスーリア「そう。屋根の上よ。何でも今日は星がきれいだから眺めてるんですって」

ベル「サンキュ」

（屋根の上）

ベル「やっと見つけた」

美鈴「お、ベル兄。ベル兄も星見に来たの？」

ベル「ちげーよ。ほれ（カサ…）」

美鈴「ケーキだ。ありがとう」

ベル「しかし、ホントにきれいに星でてんな」

美鈴「でしょ？私さお母さんによく聞いてたの。星は何で明るいのかって」

ベル「は？」

美鈴「そしたらね、星は皆を見守るために明るいんだって言われたの」

ベル「随分とロマンチックな母さんだな」

美鈴「だね。それで思ったの。一人ひとり生まれた場所、生きていく場所は違うけど皆同じ地球って言う名前の星に生まれたんだって、皆どこかで繋がってるんじゃないかって」

ベル「ふうん。なるほどな。姫って思考回路が普通じゃないよな」

美鈴「ん？なんで？」

ベル「だって普通の六歳児は星を見ただけでそんな感想は言わないぜ」

美鈴「そう?」

ベル「ああ」

美鈴「そっか。そうだよ。なんか哲学者みたいなこと言っちゃったね」

ベル「ま、星がきれいだし、オレもしばらく見てくか」

二人で空を見上げる。澄み切った夜空に何千何万の星が輝いていた。

美鈴「イタリアに来て星がこんなにきれいって知った」

ベル「日本で見なかったのか?」

美鈴「周りに明かりが多いと星ってきれいに見えないの。でもココは森の中、明かりなんて全くないからとてもきれい」

ベル「姫はイタリアに来て良かったと思ってるか?」

美鈴「勿論! イタリアに来てこんなに楽しい人たちとあえてこんなにきれいな星を見ることができた。とってもうれしいよ。」

……人は死んだら星になるって言われてる。私が殺した町の皆も星になって私を見てるのかな?」

ベル「さーな。オレはロマンチストじゃないからさ。けど姫がそう

思うならそうなんじゃね？」

美鈴「絶対に恨まれてるよなあ（汗）」

ベル「殺された奴も悪いだろ。だって姫のこと殺そうとしてたんだろ？」

美鈴「まあそうだけど」

美鈴は複雑な気持ちで星空を見た。星はどこまでも広がって見えるものすべてを癒した。

星（後書き）

内容が全く意味がわからないよ（汗）

お買い物（前書き）

軽めの日常です。

お買い物

美鈴「お買い物、お買い物♪」

ルッスーリア「あらあらそんなにはしゃいじゃって」

ベル「もうちょい大人しくしてろよ」

美鈴「だってお買い物大好きなんだもん♪」

スクアール「うゝおゝおい！！オレたちまで来る必要あったかあ」

レヴィ「ぬ…」

ルッスーリア「あったわよ。だってスクアールがいなくちゃボスの好み分らないじゃないの」

美鈴「そうだよ、スクアール。せっかくのボスの誕生日なんだから」

つまりはそういうことである。一同はx a n x u sの誕生日プレゼントを買いに、町まで来ていたのだ。元々はルッスーリアと美鈴だけだったのが、姫が行くならとベルも付いてきてさらにそのメンバーだとボスの好み分からないということでスクアールも付き、マーモンは任務で不在、一人残されるのがいやだったレヴィはとりあえず付いてきたのだ。

美鈴「と言うことで、ボスの好みは何ですか？」

スクアール「んなの知るか！」

美／ル「（ガーン）」

ベル「ししっこの際なんでもいんじゃないね？ テキトーに買ってけばさ」

レヴィ「ボスへのプレゼントを^{貢物}買うというのにテキトーは断じて許さん！ ！」

ベル「じゃあお前ボスの好きな物^{モン}知ってんのかよ（つーか貢物じゃねーし）」

レヴィ「ぬう…それは…」

美鈴「ほらあ変なことでケンカしないでよお。だからベル兄もナイフしまつてよね」

ベル「ちえっばれてたか」

美鈴「もう（呆）」

スクアアロ「何でもいからチャツチャと買うぞ」

レヴィ「スクアアロ貴様！ オレがテキトーは許さんと言ったばかりでは——」

美鈴「うっさい」

ドスツ↑飛び蹴り

レヴィ「ぬおっ」

ベル「しししつぶっさま♪」

レヴィ「このガキが…」

美鈴「（カチン）……あーそーですか君はここで人生を終わりにしたいんですね？（ゴゴゴゴゴ）」

レヴィ「…………（フリーズ）」

ルッスーリア「美鈴ちゃん落ち着いて（汗）今はボスの誕生日プレゼントが先よ。レヴィは後にしなさい」

美鈴「ちっはーい」

レヴィ「（遠まわしにオレのことを殺っていいと言われた気が…）」

ベル「んで？結局何買うの？正直何かっててもボスは喜ばねーと思うし、良くてスクアーロいびり、悪くてアジト全壊だと思っぜ」

ルッスーリア「そうよねえ」

スクアーロ「うゝおゝい！何で良くてオレがあいつにいびられなきゃなんねーんだあ！！」

美鈴「仕方ないよ、スクアーロはそういうキャラなんだ」

スクアーロ「子供を諭すような口調で言うなあ！！」

美鈴「よしこうなったらじゃんけんだ」

ベル「ジャンケン？」

美鈴「そう。ジャンケンをして勝った人がプレゼント選び、負けた人がボスにプレゼントを渡すって言う形で」

ベル「ししっおっもしろそ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんがいいなら別にいいわよ」

美鈴「いくよっジャンケン——」

美「パー」　ベ「チョキ」　ル「チョキ」　ス「チョキ」　レ「チョキ」

全「………弱！？」

美鈴「じゃんけん弱いのを忘れてたー！！」

スクアーロ「これでプレゼントを渡す奴は決まったな」

ベル「んじゃ次いこうぜ。ジャンケン——」

ベ「グー」　ル「グー」　ス「グー」　レ「パー」

レヴィ「ぬおおおおお！！！！」

ベル「決まりだな。と言うことでレヴィ、任せたぜ」

と言うわけで三時間後。

ベル「長……」

美鈴「すうー……」

ルッスーリア「あまりに長くて美鈴ちゃん寝ちゃったわよ」

ベル「ししっ姫の寝てるとこネコみたいじゃん」

ルッスーリア「そうかしら？」

ベル「ちょー丸まってさ幸せそうな寝顔してっからさ。そーゆーとこネコみたいじゃね？」

ルッスーリア「まあ言われて見ればね」

スクアーロ「うゝおゝおいまだ決まんねえのかあ！」

レヴィ「か…買ったぞ」

ルッスーリア「それじゃ帰りましょうか」

ゝアジトゝ

ベル「姫がんばれよ」

美鈴「う…うん」

ガチャ

美鈴「失礼します……」

x a n x u s 「何のようだ」

美鈴「えっと今日ボスの誕生日って聞いて皆でプレゼント買ってき
たんです。よ…良かったらどうぞ」

x a n x u s 「………」

美鈴「プレゼント選んだのレヴィなのでセンスの保障はできないん
ですけど…。ではこれで」

タタタツボタン

x a n x u s 「……（ゴソゴソ）」

出てきたのは耳あて。

x a n x u s 「（イラッ）」

ドガァン

十月十日、アジト半壊、負傷者一名（スクアールロ）

ヴァリアーっていいね

美鈴 side

私が入隊してから二ヶ月が経った。↑早いです。ゴメンナサイ

今ではSランクの任務に一人で行けるようになった。いろんなことを通してヴァリアーに馴染むこともできた。それに隊員さんたちも丁寧に扱ってくれるし。

スクアール「うゝおゝおい美鈴、任務だあ。サイドファミリーを消して来い」

美鈴「OKですぜい!!」

スクアールの大声にも慣れた…多分。

ゝ敵アジトゝ

美鈴「おゝ人がいっぱいだね…やりがいがありそう♪」

パン ドゴツ↑地割れ

門番「うわっっなんだあ!」

美鈴「サヨナラゝ」

敵「敵襲だ(シュツ)ぐああ」

最近の基本武器も定めた。手裏剣がお気に入り♪

美鈴「It、s show time!!」

敵「うああ」

ボス「貴様何者だ!？」

美鈴「うわ、ボス自ら来たよ…(呆)私はヴァリアーなんすよ」

名乗ってみた。

ボス「こんなガキがか!」

因みにボスさんの身長は目測187cm…

美鈴「小さくて悪うございました!!(怒)」

パン グシャ↑人体破壊

ボス「な…(ドサツ)」

美鈴「ふん」

タタツ パチン

美鈴「Let、s」

ドオオオオオン↑アジト爆

美鈴「任務完了っと。帰ろ」

――――
「アジト」

美鈴「ただいま」

ベル「おかえり」

レヴィ「ご苦労だったな」

美鈴「ありっ？ マーモンは？」

スクアアロ「アイツは任務だあ」

ガチャ

マーモン「今帰ったよ」

美鈴「お帰り」

スクアアロ「全員揃ったか。昼飯のあと会議室に來い」

美鈴「会議室？（なんかあんのかな？）りょーかい」

ベル「ん」

マーモン「わかったよ」

レヴィ「…」

ルッスーリア「ご飯できてるわよ」

美鈴「おなかすいたあ」

〈食堂〉

モグモグ

美鈴「やっぱりイタリアン料理っていいね。いつ食べても飽きないよ」

ベル「普通にイタリアにいる六歳の日本人って姫ぐらいじゃね」

美鈴「あはは。そうだね」

モグモグ

美鈴「ご馳走様」

ベル「はいいな」

スクアーロ「てめえが遅いんだ」

美鈴「よし、会議室に行くか」

ルッスーリア「私は片付けてからいくわね」

〈会議室〉

xanxus「揃ったか」

スクアール「ああ」

マーモン「どうしたんだい、ボス。突然の召集なんて」

レヴィ「何事ですか」

xanxus「来週ボンゴレを襲撃する」

全「つつ!!」

美鈴「あ、あれ？ヴァリアーもボンゴレじゃ…」

マーモン「なるほどね。とうとうあれが始まるのか」

レヴィ「10代目はボスだけです」

美鈴「あのー話が全く見えないんだけど」

マーモン「ボスは現ボンゴレボス9代目の息子なんだよ」

美鈴「へえ!!」↑今回は理解

xanxus「それで今回の襲撃の作戦を立てる」

全「はい」

xanxus「そこで美鈴、今回お前に囹をやってもらう」

全（美以外）「つつ!!」

xanxus「その為にボンゴレ本部にお前の入隊を報告していない」

マーモン「でもボス、美鈴はまだ六歳だ」

xanxus「だからこそだ。相手が子供なら誰も警戒はしねえ」

スクアーロ「相手側に隙を作らせるということか」

レヴィ「だがボス。このガキに出来（ガン）」↑殴

美鈴「ガキって言うな！ムツツリ」

レヴィ「貴様!!」

美鈴「ボス、私囨やります。いや、やらせてください!」

ベル「姫?」

美鈴「せっかくの恩返しのチャンスだもん」

恩も何もこのために入れられたんだけどね（笑）

美鈴「なんか言った?」

いえ何も。

ルッスーリア「でも美鈴ちゃん、囨ってたくさん敵をいっせいに

引きつけるのよ？」

美鈴「うん、わかってる」

xanxus「決まりだ。ベルとルッスーリアは通路、レヴィは中庭、マーモンは司令室だ」

ベル「へーい」

マーモン「OKだよ」

レヴィ「仰せのままに」

ルッスーリア「はあい」

xanxus「スクアアロはオレと一緒にじじいを殺る」

スクアアロ「ああ」

xanxus「決行は来週の水曜日だ」

全「はい」

xanxus「解散しろ。美鈴は残れ、囃の内容について詳しく説明する」

美鈴「はい」

ゾロゾロ

x a n x u s 「お前がやることは…」

x a n x u s が美鈴に託した囃の内容は…

1、なるべく多くの敵をひきつけ他のメンバーが侵入しやすくする。
方法は問わない。

2、ひきつけた敵は一人残らず全て殺す。

3、ヴァリアーの侵入がうまくいったらベルたちに加勢する。

…ということ。

x a n x u s 「わかったか。必ず成功させろ、その先はお前にかかっている」

美鈴 「はい。がんばります」

x a n x u s 「もどっていいぞ」

美鈴 「失礼しました」

ガチャ

美鈴 「ふうー」

？ 「どうだった？」

美鈴 「うわっ皆何してんの!？」

ベル 「姫が心配だったから」

美鈴 「大丈夫。なんとかなるって（笑）」

ルッスーリア「あら、そう？」

マーモン「策は立ててあるんだね？」

美鈴「うん。確かこれをかぶると…（スポツ）」

シュルルル

美鈴がフードをかぶると一瞬にしてネコになってしまった。

美鈴^{ネコ}「ニャーン」

ベル「へ？どーなってんの？」

パサ シュツ

美鈴^{ネコ}がフードを取るといつもの美鈴に戻った。

美鈴「と言うことなんで」

ベル「アンビリーバボー」

ルッスーリア「がんばってね」

美鈴「モツチロン！！」

それから一週間、幹部は全員総出の修業を行った。そして完璧に仕上がった。

ヴァリアーっていいね（後書き）

もうすぐ揺りかごです！！

作戦実行・・・はまだしない!!

作戦実行前日

この日は美鈴からトレーニングルームに来るように全員に召集がかった。

スクアール「うゝおゝいアイツどういうつもりだあ」

x a n x u s 「…」

ベル「どうしたんだろ」

トレーニングルーム

美鈴「皆まだかな」

ガチャ

スクアール「うゝおゝおい!! 用事って何だあ!!」

美鈴「やっと来た」

マーモン「ム：なんだいそれ」

美鈴が持っていたのは…

美鈴「カメラだよ♪」

デジカメだった。

美鈴「明日は作戦実行日でしょ？だから、明日何があっても皆ここに一緒にいんだって、皆仲間なんだって証を残しておきたくて」

x a n x u s 「…くだらねえ」

美鈴「あまり写真をバカにしないでよボス」

スクアール「写真かあ。別にいいんじゃないかねえか？」

ベル「王子は賛成♪」

マーモン「僕も構わないよ」

ルッスーリア「証なんていいじゃない」

レヴィ「それもそうだな」

美鈴「よし。じゃ撮ろ♪」

ルッスーリア「ホラ皆並んで」

マーモン「ボス、せっかく美鈴が提案したんだ。いいじゃないか」

x a n x u s 「ハッ…るせえ」

全「……」

美鈴「と、撮るよ（汗）」

ピッピッピッカシャ

美鈴「うん、撮れた。これ後でプリントして皆に配るから」

ベル「楽しみじゃん」

美鈴「楽しみにしといてね」

x a n x u s 「誰がするか」

スクアール「おいx a n x u s、美鈴がやってくれるっつつてんだからその態度はやめやがれ」

x a n x u s 「チッ」

ドガッ↑カメラスタンド投

スクアール「（ゴチン）でっ！！う　　お　　おい、x a n x u s！！」

スタスタスタ

全「……」

美鈴「（明日ホントに大丈夫かな）うん…用はこれだけ。写真は出来るまで時間が有るから戻っていいよ……」

（美鈴の部屋）

美鈴「ボス機嫌悪すぎ…（汗）」

カチッ↑pc起動

貴女六歳ですよね？

カチャカチャ

ピー

美鈴「うん、出来た。カンペキ」

くベルの部屋く

コンコン

ベル「へーい」

美鈴『ベル兄写真できたよ』

ガチャ

ベル「おっサンキュ」

美鈴「はい」

ベル「ぷっボスとレヴィ超仏頂面してんの」

美鈴「私他の人に渡してくるから」

ベル「ん」

くスクアーロの部屋く

コンコン

スクアール「誰だ？」

美鈴『私だよ』

ガチャ

美鈴「写真持ってきたよ」

スクアール「おう、すまねえ」

美鈴「いいっていいって」

スクアール「こうやって見ると、やっぱりベルと美鈴は本当にチビだなあ」

ドガツ↑殴

美鈴「怒るよ（ニコッ）」

スクアール「す…すまん（もう怒ってるだろと突っ込んだら負けだろうな）」

美鈴「他の人んトコ行くから（プイ）」

くマーモンの部屋く

コンコン

マーモン「ム…入っていいよ」

ガチャ

美鈴「マーモン写真持ってきたよ」

マーモン「ありがとう」

美鈴「ねえマーモン」

マーモン「なに？」

美鈴「やっぱり何でもない」

マーモン「フーン」

美鈴「やっぱり聞く」

マーモン「どっちだい」

美鈴「ルッス姐の部屋、行くの最後のほうがいいよね」

マーモン「…そうだね」

美鈴「じゃあ私次の部屋行くから」

レヴィの部屋

コンコン

美鈴「レヴィ写真持ってきたよ」

レヴィ「…お前がオレの部屋に来るのは初めてだな」

美鈴「そりゃそうだよ。誰にも教えてもらってないもん」

レヴィ「ぬ？じゃあどうやって来た？」

美鈴「あ…どうやって来たんだろう？何故かわかったんだよね」

レヴィ「そうか」

＼xanxusの部屋＼

コンコン　　がチャ

美鈴「失礼しま…（ヒュン）…！！」

パリン

コップが飛んできた。

頭上50cmほど。いつもならスクア―ロの頭に当たる位置…

美鈴「ボ…ボスうゝ（泣）」

xanxus「…（あっ）何のようだ」

美鈴「しゃ、写真が出来たので持ってきたんですけど…（今『あっ』って聞こえた…（ブルブル））」

xanxus「そうか。明日は早い。明日に備えてしっかり休め」

美鈴「はい」

パタン

x a n x u s 「…ハッ証か…くだらねえ」

次の日↑早いww

ベルs i d e

王子楽しみでちゃんと眠れなかった。因みに今は朝の四時。

ししっ姫の部屋にいたずらにいこっ♪

く美鈴の部屋く

カチャッ

そく

美鈴「あ、ベル兄」

パタン

……ちえっ起きてた。

ガチャ

ベル「何で起きてんの?」

美鈴「何でって…眠れないから」

ベル「何だ姫もか」

美鈴「『も』ってことはベル兄も緊張してるの？」

ふうん。緊張してるんだ。

ベル「いや、オレは楽しみで眠れなかった」

今日は何人殺せるかな♪

美鈴「じゃあさ、寝不足にならないようにおまじないしてあげる」

おまじない？

chu☆（ホッペ）↑六歳ですので恋愛とかではないですよっつ

ベル「なっ／＼／＼」

美鈴「にゃは！！（ニパッ）」

ベル「んじゃ王子からお返しで緊張しないおまじない」

chu☆（ホッペ）↑八歳なんだから恋愛じゃないよっつ

美鈴「ふにゃ／＼／＼」

ベル「とにかく姫は明日大切な役なんだからもっかい寝れば？子供に不眠はよくないぜ」

美鈴「いやいや…ベル兄も子供だしよ…（呆）その言葉そのまま返してあげる」

ベル「オレは大丈夫だし。だってオレ王子だもん」

美鈴「王子関係ないよ!!じゃあ私もっかい寝るから」

ベル「んじゃオレも戻るな。お休み姫」

ボタン

ベル「ふあゝ」

あれ?なんか眠くなってきた…おまじないの効果?

オレも二度寝しよ。

作戦実行・・・はまだしない!! (後書き)

ル「ちょっと私の部屋は？」

作「meの気分が悪くなりそうなのでカットした」

ル「いやあああ!!」

作戦開始

6..00

まだ薄暗い廊下。幹部たちの部屋の前に立つ人物が一人：

スクアール「うゝおゝおおおい！！！！！テメーらぁ！！さ
つさと起きやがれえ！！！」

パリーン↑コップHIT

xanxus「るせえ、カスが」

ルッスーリア「んもう、スクアールったら朝っぱらから大声出して」

美鈴「そんな大声出さなくても起きられるって」

ベル「お、姫よく眠れた？」

美鈴「おかげさまで。そっちは？」

ベル「オレも」

全「?？」

マーモン「スクアール、朝っぱらからそんなに気力使って、作戦の
ときに倒れたりしないよね」

レヴィ「貴様朝からボスの機嫌を損ねるな」

スクアール「チィ!!」

? 「ああ、やはり行ってしまわれるのですね」

ベル「あっ」

美鈴「おっ?」

マーモン「ム…」

ルッスーリア「あら…」

レヴィ「ぬ…」

スクアール「テーマは…」

x a n x u s 「オツタビオ」

オツタビオ「x a n x u s 様…」

彼・・・オツタビオはヴァリアーの副隊長、いわゆる?2だ。オツ
タビオの詳しい説明は隠し弾第二巻で。シークレットプレット

全「(コイツ説明テキトーだな…)」

x a n x u s 「てめえ今更何しにきやがった」

オツタビオ「いえ、別に何も。あなた方は止めても行ってしまう
るのでしょ」

スクアール「それじゃあ一体何しに来たあ」

オッタビオ「見送りですよ。しかしベルフェゴールや美鈴まで動くとは……。幹部とはいえまだ十歳にもなっていない二人が……」

ベル「うしし、だって面白そうだモン」

美鈴「ボスのおかげで私はココでこうして生きてる。だったらその人のために動くのが筋ってモンじゃないの？」

ベル「話だと作戦に参加しないのお前だけなんだってな」

オッタビオ「私は皆さんが無事に帰ってくるのを待っていますから」

x a n x u s「テーマらいくぞ」

全（オ以外）「はい」

美鈴「（何で突然オッタビオ来たんだろう）」

作者の気まぐれです（笑）

スタスタスタ

くボンゴレアジト本部く

美鈴「うわーとうとうきたあー」

スクアール「うまくやれよ」

美鈴「う、うん…（スポツ）」

シュルルル

美鈴^{ネコ}「ミヤ〜ン」

タツ

全「（ほわ〜ん）」

小さな黒猫に見とれる全員であった。

美鈴^{ネコ}「ニヤ〜ン」

門番「ん？ネコ？」

門番「おいどうした？お、可愛い黒猫だな。お前のか？」

門番「違うよ。どっからか迷い込んできたんだ」

美鈴^{ネコ}「ニヤニヤニヤ」

一瞬美鈴^{ネコ}の目が光ったのに誰も気づかなかった。

門番「それにしてもこのネコ不思議な奴だな。右目と左目の色が違うぞ」

門番「ホントだな。きれいな深紅の色じゃないか」

門番「オレ他の奴ら呼んでくるわ。こいつ見せてやろうぜ」

くしばらくしてく

ゾロゾロ

ベル「うわ、何あれ。中から人がいっぱいじゃん」

ルッスーリア「よくもまあネコ一匹であんなに人が来るわね」

ベル「オッドアイのネコが珍しいんじゃないの？」

スクアーロ「アイツってオッドアイなのか？」

ベル「あ、知んなかったカンジ？」

マーモン「僕は気づいていたよ」

美鈴^{ネコ}『（クルッタン）』↑^{ネコ}宙返り

ボンゴレの皆様方『おおく（パチパチ）』

x a n x u s 「おい合図が来たぞ」

全「（さっきの宙返りって合図ですか!?!）」

サササッ

美鈴^{ネコ}「（よし。皆入ったね）シャーッ」

ダッ

ガブッ

男「うわっ」

ブチッ

美鈴^{ネコ}「（さあショータイムの始まりだ）」

ブチッ グシャッ

ドサドサ

パサッ シュッ

相手全「こっ子供!？」

美鈴「フフフフ……It、s s h o w t i m e♪」

こうしてヴァリアーによるボンゴレ本部襲撃は幕を開けた。

作戦開始（後書き）

天国にて

男「あのネコ欲しいなあ」

男「何を言っている！あれはオレのだ！！」

門番「何だと！オレが最初に見つけたんだぞ！」

男「なにを」

ポカスカ

死んでもまだ戦い（？）続ける男たちであった（笑）

作戦の先には・・・

（廊下）

パンパン

男「敵だ」

男「どこにいる!？」

コツコツコツ

ルッスーリア「・・・」

男「うわっっ」

男「何だ貴様は!？」

男「ん?その服…ヴァリアーの奴じゃないか？」

男「何だ味方か。ちょうどいいお前敵を見なかったか？」

ルッスーリア「うっふっん見たわよ」

男「何？」

男「どこだ？」

ルッスーリア「うふふ…あなた達のま・え（ハート）」

ドガッ バキッ

男「き…貴様あ!!」

ドサッ

く中庭く

男「クーデターだ」

男「敵はヴァリアーらしい」

ザ・・・

レヴィ「・・・」

男「相手は一人だ」

男「袋叩きにしてしまえ」

男「行くぞお!!」

レヴィ「フン雑魚共が。丸焼きにしてやる、レヴィ・ボルタ」

バチバチッ

男たち「うわあああ!!!!!!」

く廊下く

男「防護壁をおろせえ!!」

ガシャン ガシャン ガシャン

男「これで大丈夫(スパッ) …なに!？」

ベル「しししっこんなんで止められると思ってんのかよ。誰相手にしてんのか分かってんの？」

シュッ スパッ

男たち「ぐわあ!!」

〈司令室〉

女「Aブロック、Bブロック、Cブロック、Dブロック突破されました」

男「くそっ」

グニャ ザバアア↑幻覚の水

女「きゃああああ」

男「うわああああ」

マーモン「ボンゴレの心臓部ともいえる司令官がこんなものかい」

〈廊下〉

美鈴「皆どこだろゝ加勢しに来たのに」

男「いたぞ!!」

美鈴「ん? (ダダダッ) おお!! 人が沢山!! 20人くらいですかね?」

男「こんなガキに侵入を許すなど!!」

美鈴「(プチッ)」↑キレタ

男「撃てえ!!」

ズガガガガガガガガガ

男「死体を確認しろ」

男「なっっ誰もいない!?!」

美鈴「どこみてんだか(呆)」

男「天井だと!?!」

男「奴の周りにあるのは…弾!?!?!」

美鈴「6歳相手に大人げないなあ…。今君たちが撃った分だけ返してあげる」

パン フッ↑全て落下(美鈴も)

ストツ↑着地

男「逃げろおお!!」

美鈴「ムリ」

ズガガガガガガガガガ

ベル「おっ姫じゃん」

ルッスーリア「大丈夫だったのね…? 血まみれだけど」

美鈴「ああ（ポン）これはこの人たちの血でございますわ（ニコッ）」

ベ／ル「……（汗）」

マーモン「ムム、全員無事のようにだね」

ベル「全員じゃねえよ」

マーモン「レヴィがいないのか」

レヴィ「ココに…いるぞ…ゴホッ」

美鈴「ダサッ…あ! マーモン、ボスとスクアーロは？」

マーモン「九代目のところにいったよ」

ルッスーリア「私たちも行きましょう」

全「うん」

〽???〽

ドガン バゴン

x a n x u s 「ハア…ハア…じじいここまでやるとは思わなかったぜ」

九代目「家光はお前を殺すなど言ってくれた。だが、ここまで犠牲を出してしまった以上私がやらなくては…」

x a n x u s 「やっと本性を出しやがったな!! じじい!!」

九代目「x a n x u s 何故お前は…」

x a n x u s 「うるせえ!! それはお前が一番良く知っているはずだ!! なぜならオレは———」

スクアーロ「つつ!!」

x a n x u s 「分かったらかつ消えろ!!」

九代目「……皆すまん。やはりわしには…」

ボツ ボツ カッ

x a n x u s 「何だこの技は!?! ぐわああ!!」

ビキビキビキ

スクアール「はぁ…はぁ…（xanax）」

コツコツコツ

スクアール「（行ったか…）」

タタタツ

スクアール「つつ!!」

美鈴「スクアール!!ボス!!」

ルッスーリア「大丈夫!？」

スクアール「おめーらすまねえ…」

ベル「スクアール、ボスは？」

スクアール「あそこだあ」

スクアールが指差した先には…

全「つつ!!」

氷付けにされたxanaxが…

レヴィ「ボスう!!」

マーモン「どうなっている」

美鈴「氷なら私が…（パン シーン）…崩れない…じゃあこれは
！！（パチン ドオン）う…そ…」

氷はびくともしなかった。

スクアール「もうすぐ他の奴らがきちまう。急いで出るぞ」

美鈴「でもボスは」

ルッスーリア「この氷ごと行くのは無理よう」

レヴィ「ふざけるな！！」

ベル「諦めろよレヴィ。姫もさ」

美鈴「……ボス…ごめん」

スクアール「行くぞ」

タタタッ

男「九代目これは！？」

九代目「x a n x u sを地下に厳重に幽閉しておけ」

男「はっ」

くヴァリアーのアジトく

美鈴「うう…ひつく…ボス…（泣）」

ベル「…」

ルッスーリア「…」

マーモン「…」

レヴィ「ボス…」

スクアード「ちくしょう…xanaxus…」

ガチャ

全「…!」

入ってきたのはボンゴレの幹部だった。

幹部「これよりヴァリアーの処分を言い渡す。ヴァリアー隊長xanaxusはボンゴレ地下に幽閉・監禁処分。ヴァリアー副隊長オツタビオを除くヴァリアー隊員は無期活動停止処分とする」

オツタビオの名が出たときみんなの中にムカツキが出たことは言うまでもない。

美鈴「無期活動停止…」

レヴィ「ヴァリアーが潰れぬだけましか…」

幹部「ヴァリアーをつぶさぬのは九代目のご慈悲だ。ありがたい思え」

ボタン

幹部が出て行って沈黙が支配した。

ベル「これからどうする？」

ルッスーリア「おとなしくしてしましょ」

全「ハァ」

設定パート2

ココから一気に話が二年飛びます。

年齢；8歳

身長；126cm

瞳の色；左が茶色右が深紅（前回入れ忘れました。すみません（ペコリ））

髪；栗色 長さは肩より5cm下 前髪は微妙に右目を隠している

所持品；謎のリング↑今はほとんど関係ないです

発火布（手袋） 手裏剣 短刀2本

ツナ出てきます。多分……

なんかいろいろテキトーですね。揺りかごまで読んで頂いた方本当にありがとうございます。まだまだ駄文が続くと思いますが、ママンのように心が広い方はどうぞ読み進めてください。ついでにこれから応援よろしくお願いします。（ペコリ）

いざ日本へ

「揺りかご」――あのクーデターの日をマフィア界の人々はそう呼ぶようになった――から二年がたった。しかし、ヴァリアー内の空気はあの日から何も変わっていなかった。その中でも特に異常だったのが：

ベル「ねえ姫？」

美鈴「・・・」

ベル「ひーめっ」

美鈴「・・・」

ベル「姫ー聞こえてるー？」

美鈴「・・・」

美鈴だった。

ベル「？なあ、最近姫の反応が無いんだけど」

ルッスーリア「え？」

マーモン「ム？」

スクアーロ「はあ？」

レヴィ「なぬ？死んで…」

ベル「ねえから」

ルッスーリア「そういえばご飯に対する反応も最近鈍いわね」

マーモン「確かにね。ちょっと美鈴」

美鈴「・・・」

ルッスーリア「美鈴ちゃん？」

美鈴「・・・」

レヴィ「おい」

美鈴「・・・」

スクアーロ「うゝおゝおい！！美鈴い！！」

美鈴「・・・」

ベル「スクアーロの声にも反応しないし」

全「（マジで死んでんじゃないの？）」

マーモン「何があったんだい？」

ルッスーリア「心当たりは？」

ベル「あるわけねえだろ。おい、姫!!（ボン）」

美鈴「わひゃあ!!!!!!」

全「つつ!!」

美鈴「あ、ベル兄どうしたの？」

ベル「どうしたのじゃねえよ。何回呼んだと思ってんだよ」

マーモン「一体何をボーツとしてたんだい？」

ルッスーリア「そうよお。スクアーロの大声にも反応しないなんて」

美鈴「ごめん、考え事してた」

マーモン「ココ最近ずっとかい？」

美鈴「うん」

ルッスーリア「なにについて？」

美鈴「…ボスのこと」

レヴィ「ボス…」

ベル「何で突然ボスのことを…」

美鈴「それが突然って訳でもないんだよね。正直2年まえはパニツクで何もわからなかった。時が経つにつれて冷静になったのはいい

んだけど、そしたら逆に疑問が出てきたの」

ベル「疑問？」

美鈴「九代目は息子であるボスを凍らせた。それってボスを十代目として認めてないってことだね」

ルッスーリア「あ…」

ベル「確かに」

マーモン「ム…」

レヴィ「何故ボスは…」

スクアーロ「(くそ…)」

美鈴「スクアーロ」

スクアーロ「…なんだ」

美鈴「ボス以外にも十代目候補っているの？」

スクアーロ「ああ、確か4人ぐれえいたな」

美鈴「どんな人？」

スクアーロ「聞いてどーすんだ？」

美鈴「別に。ただ知りたいだけ」

スクアール「……4人中3人は九代目の甥達だ。歳はx a n x u sより上だと聞いた」

マーモン「あと一人は誰なんだい？」

スクアール「門外顧問 沢田家光の息子、沢田綱吉だ」

ベル「門外顧問の息子!？」

スクアール「今は日本に住んでいて歳は美鈴と同年だそうだ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんと」

マーモン「同年だって？」

美鈴「そっか、それなら私……に行く」

ベル「何？」

美鈴「日本に行く」

レヴィ「どういうつもりだ」

美鈴「ボスのため。いつ戻ってきてもいいように相手の情報を得る」

ルッスーリア「でも私たちは活動停止処分なのよ」

レヴィ「そうだ。勝手に動いて罪が重くなったら」

美鈴「勿論ヴァリアーとして動く気は無いよ。これは一人の人間としての命の恩人への恩返しなの」

ベル「でもよ」

美鈴「ね？いいでしょ？スクアアロ」

スクアアロ「…わかった。日本に行くことを許可する」

マーモン「スクアアロ！」

スクアアロ「だが！お前一人では行かせない」

美鈴「え？」

スクアアロ「美鈴一人で行かせて暴走されても困る」

美鈴「なあ！？私がいつ暴走したって言うの？」

マーモン「町を1つ焼いたこと自体が暴走だと思うよ」

美鈴「うつつ…」↑凶星ww

スクアアロ「だからもう一人連れて行け」

マーモン「誰が行くんさい？」

ベル「それ決めんのは姫だろ」

美鈴「…わかった。ベル兄一緒に行こう」

ベル「オレ！？ま、いっか。日本行ってみたかったし」

スクアアロ「よおし。それならベルに個人的命令を言う。美鈴は旅行にでも行った気分ですきにしてい。ベルは美鈴が暴走しないためのストッパーをしてもらう」

ベル「へーい」

美鈴「じゃあ、これから準備して明日の朝早くに出るね」

スクアアロ「ああ」

ベル「じゃあオレも用意しとこつと」

バタンツ

ルッスーリア「ねえスクアアロ本当にいいの？」

スクアアロ「オレだって奴に願掛けしてるからなあ」

レヴィ「ボスへの忠誠心ならオレだって…いやオレの方がある」

マーモン「ふーん（誰もレヴィには聞いてないよ）」

（美鈴の部屋）

美鈴side

明日から日本…ヴァリアアの皆とはしばらく会えないな。

美鈴「そうだ。報告をテレビ電話にすればいいんだ」

確かこの辺にp cがもう一台…

美鈴「あった…」

カチャカチャカチャ

これでよし。皆にはまだナイショにしておこう。

くベルの部屋く

ベルside

ベル「日本か。どんなところかな？しししっ♪」

楽しめそうなご当地の殺し屋いるかな？

ベル「つーかこの任務、姫が暴走しなけりゃ王子も自由なんだろう？
だったら楽しまなくっちゃな」

ししっ

次の日 朝3…00

くスクアアロの部屋く

スクアアロside

そろそろ美鈴とベルが出発する頃か…。

〓回想〓

ルッスーリア「ねえスクアーロ、ほんとうにいいの？」

マーモン「もしものことがあったらどうするの？」

スクアーロ「もしものこと？」

マーモン「美鈴の暴走だよ」

スクアーロ「ああん？その為にベルをつけたんだろうが」

マーモン「僕が心配してるのはそこじゃないよ」

スクアーロ「じゃあなんだ」

マーモン「美鈴にはまだ美鈴自身も気づいていない隠れた力がある」

スクアーロ「何っ!？」

ルッスーリア「どういうこと？なあに、隠れた力って？」

マーモン「正直僕にもわからない」

スクアーロ「テメーふざけてんのか？」

マーモン「ふざけてなんかいないさ。だって彼女が知らないんだ僕が知るはずがないだろう」

レヴィ「それでは何を根拠に」

マーモン「美鈴が僕の幻覚を見破ったのを忘れたのかい？」

全「あ・・・」

スクアアロ「それがあいつに隠された力か？」

マーモン「たぶんね」

ルッスーリア「確かに自分が知らないなら力のコントロールもしようがないわね」

スクアアロ「なるほどなあ」

||終||

本当にあいつに隠された力があるとすれば…いや今更考えてもしかたねえ。だが暴走すれば厄介だな。

コンコン

スクアアロ「つつっ!!」

美鈴『スクアアロ、私だよ。もうそろそろ行くね』

スクアアロ「そうか。気をつけていけよ」

美鈴『うん。ありがとう』

く大広間く

美鈴「それじゃ、いこつか」

ベル「だな」

ガチャ

美鈴「あ…皆」

マーモン「気をつけてね」

ルッスーリア「行ってらっしゃい」

レヴィ「死ぬなよ」

ベル「当たり前だろ」

美鈴「グス…行ってきます」

ギイイイ バタン

ルッスーリア「行っちゃったわね」

レヴィ「ああ」

マーモン「ボスも美鈴とベルもいつ帰ってくるかわからないんだ。僕たちも今やれることをやっておこう」

レヴィ「ああ」

ルッスーリア「そうね」

く空港（イタリア）く

コツコツコツ

ベル「姫、ホントにいいのか？」

美鈴「なにが？」

ベル「日本は姫にとっていやな思い出の場所なんじゃないの？それにヴァリアーの皆とも会えないんだぜ？」

美鈴「過去のこととは自分で背負っていく。自分でそう決めたから。あとヴァリアーの皆のことは大丈夫。アジトにサプライズを残してきたから」

ベル「サプライズ？」

美鈴「はら！飛行機に乗り遅れちゃうよ！」

ベル「おい姫待ってって」

いざ日本へ（後書き）

さてさて日本に向かった二人、どうなるんでしょうね？

題名で日本に行く気満々だったのに日本についてませんね（笑）
でも次回は日本です。っていうか日本ばかりです。

日本に来ました!! (前書き)

美 「タイトルでテンションあがってどーすんの？」
作 「気にしない気にしない」

日本にきました!!

く空港（日本）く

ベル「姫、1つ聞いていい？」

美鈴「なあに？」

ベル「オレ等の家ってどうすんの？」

美鈴「沢田綱吉って人が住んでる並盛に手配してあるよ」

ベル「手配って…」

美鈴「私のお母さんの口座とか使って買っておいた」

ベル「姫本当に8歳かよ（汗）」

美鈴「またそれ？話は後。行こっ（ニコッ）」

ベル「だから待ってって」

くヴァリアーのアジトく

スクアード「そろそろ日本に着いたか」

ルッスーリア「そうねえ。二人とも元気かしら」

マーモン「ルッスーリア、二人が出てからまだ数時間しか経ってな

いよ」

ルッスーリア「そうだけど…」

スクアーロ「うゝおゝおい!!心配しすぎだあ!」

意外とヴァリアーの皆は活気を取り戻しつつあった。

ゝ並盛ゝ

美鈴「来たあ――

――っっ!!!!」

ベル「テンションあがりすぎだし。ふーん結構でかいじゃん」

美鈴「あったりまえだよ」

ガチャ

美鈴「ちゃんと家具もそろえてあるよ」

ベル「で、空港での続きなんだけど」

美鈴「へ? ああ、あれね」

ベル「姫さ、何であんなにいろいろできんの?」

美鈴「昔からなんかこうなる気がしてたの。なんていうか生まれたときから、私は『すぐにこの家族、この町から離れるときが来る』って感じてた」

ベル「?..?」

美鈴「だから、文字が読めるようになった頃からいろんなことを必死で勉強した。機械関係とか、日常的に使える情報はなるべく覚えたいの」

ベル「あの錬金術ってのは？」

美鈴「錬金術はおまけ。私ねすっごく科学が好きなの。それでいろんな本を読んでいるうちに、科学の元となった錬金術を見つけた」

ベル「科学の元?どゆこと？」

美鈴「そのところは良くわかんない。で、錬金術に興味を持って調べてたら、いつの間にか使えるようになってた」

ベル「どんなだよ…(苦笑)」

美鈴「アハハ…(苦笑) : あ、そうだ、ベル兄お買い物いこっ」

ベル「買い物?別にいいけど何買うの？」

美鈴「ご飯の材料と変装道具」

ベル「変装の必要ある？」

美鈴「あるよ。いかにして怪しまれずに近づくか。それにベル兄の金髪&ティアラは目立つし」

ベル「わかったよ。ばれなきゃいいんだろ？」

く並盛商店街く

ベル「こんなところに売ってるワケ？」

美鈴「さあ？……あ、あった」

ベル「げっマジかよ」

美鈴「行こう」

ベル「おい姫」

店員「いらっしやいませ」

美鈴「すみませーん。コスプレとかに使うカツラのコーナーってありますか？」

店員「それなら奥にありますよ。（何！？このガキ。コスプレって何すんだし！？）」

ベル「おいっ先に行くなって」

美鈴「ゴメン」

店員「（金髪にティアラって何のコスプレ！？）」

美鈴「ありがとうございます（ニコッ）」

店員「いえいえ。（謎が多すぎるよこの子達）」

美鈴「ほらベル兄行くよ」

ベル「姫だからって王子より先に行くの許さねーよ」

美鈴「……（ススス）↑下がった

ゴメンナサイ……………」

テクテクテク

ベル「ココらしいな」

美鈴「バリエーション豊富だね。うーんとね、ベル兄はこの茶髪のヤツ」

ベル「なんでだよ。ってか勝手に決めんな（怒）」

美鈴「気にしない気にしない」

ベル「最初の作者みたいなことしてんなよ」

美鈴「むゝ（プクーツ）」

ベル「／／／／／んじゃあ姫はこれで」

美鈴「えっと…黒髪？」

ベル「王子とおんなじくらいのショークット」

美鈴「いつつつ…」

？「いたいよお」

ぶつかってきたのは茶色のつんつんした髪型の男の子だった。

美鈴「あっゴメンナサイ」

ベル「大丈夫か？」

美鈴「うん大丈夫」

？「ほらツー君謝って」

？「ごめんなさい」

？「本当にすみません」

美鈴「あいえ別に」

スタスタスタ

美鈴「?????なんだ？」

ベル「アイツマジ殺してー（シャキッ）」

美鈴「町中なのでやめましょう」↑冷静ww

ベル「…」

美鈴「とにかくさっさと買い物済ませて帰ろう」

ベル「…（チツ）」

ゝ家ゝ

美鈴「ハアゝ疲れた」

ベル「ひめゝアイツ殺してきていい？」

美鈴「ダメだし。明日から学校行くよ」

ベル「はあ？学校？」

美鈴「そつ。沢田綱吉って人が通ってる並盛小学校だよ」

ベル「マジかよ」

美鈴「手続きは済んでるし。んで、私たちの名前^{サツキリン}だけど、学校
…って言うかあいつ等の前ではベル兄は『五月鐘』だから」

ベル「『鐘』^{リン}？何でかね？」

美鈴「だって…ベルから連想しちゃったんだもん（ウルウル）」

ベル「…で？姫は？」

美鈴「私は『五月悠里』^{サツキ ユウリ}だよ。だからね、学校では私のこと姫って
呼んじゃダメだよ。私もベル兄じゃなくて鐘兄にするから」

ベル「悠里って呼ぶの？メンドクサ」

美鈴「仕方ないんだよ？だって…だってあたしまだ8歳だもん（ウルウル）」

ベル「じゃあやんなよ！！」

美鈴「あーご飯作ろーっと（棒読み）」

ベル「無視かよ！！」

日本に来ました!! (後書き)

あれ〜なんかツナっぽい人いたね (笑)

学校と沢田綱吉

コケコッコー コケー（棒読み）

美鈴「（イラッ）なんか人の声で鳴いてるニワトリがいるー」

ベル「ナレーションしめる」

美鈴「私にもやらせてよー」

・・・（汗） ダッ↑逃

美鈴「逃げた。まいっか」

ベル「チェッ」

美鈴「んん」（ググッ）朝ごはんパンでいいよね」

ベル「ん」

）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．）．

モグモグモグ

美鈴「…あ、ベル兄に一個いい忘れ」

ベル「何？」

美鈴「私たち双子設定だから」

ベル「…何で？」

美鈴「だってそのほうが監視しやすいでしょ？」

ベル「それもそうだな」

美鈴「よしっ学校行くぞー！！」

ベル「もうかよ！？」

く学校く

コンコン

べ／美「失礼しまーす」

先生「おお来たか。今から君たちの教室に案内しよう」

べ／美「はい」

美鈴「同じクラスだからね（コソコソ）」

ベル「沢田綱吉は？（コソコソ）」

美鈴「いるよ（コソコソ）」

ベル「なにやってんだし（コソコソ）」

く2ーAく

先生「ここだよ。ちょっと待ってなさい」

ガラガラ

美鈴「ん、そうだ。私たちの名前表記って大丈夫？」

作者「まかせいっ。今からツナたちのいるところって言うか変装してるときはその役の名前で表示するよ」

悠里「んおっなってる」

鐘「やっぱりしっくりこねーな」

先生『それでは二人とも入って』

悠里「私が何を言っても突っ込まないでね」

鐘「ん？ ああ」

ガラガラ

悠里「五月悠里です。よろしく」

鐘「五月鐘だ。よろしくな。ししっ」

クラス「うわ／＼／／／」

先生「二人は双子で、お父さんの都合でイタリアから来た。仲良くしてやれよ」

クラス「はい」

先生「悠里さんの席は綱吉さんの隣、鐘さんは窓際です」

ツナ「悠里さんココ…ってええ!!」

悠里「ん? ああ!!」

鐘「あいつ…」

なんと沢田綱吉とは前日美鈴とぶつかった少年だった。

先生「何だお前ら知り合いか？」

ツナ「いえ…昨日商店街で見かけて…」

鐘「じゃなくてぶつかったんだろ」

先生「そ…そうか。それじゃあ一時間目は…道徳か…。それなら質問タイムにするか」

クラス「わーい」

ダダダダッ

女子「ねえねえ五月さん」

悠里「名前で呼んでもらえるとうれしい」

女子「うんわかった。じゃあ悠里ちゃん」

女子「悠里ちゃんってイタリアから来たの？」

悠里「うん（さっき先生が言ってただローが）」

女子「イタリアってどんなところ？」

悠里「どなところ？ んん んん んん んん んん
からない」

鐘「ケツコーいいところだぜ」

女子「そっそうなんだ／＼／＼」

悠里「（コイツベルに惚れてる（ムカ））」

女子「何人家族なの？」

悠里「何人？（私・ベル兄・レヴィ・スクアード・マーモン・ルツス姐…ボス）7人だよ」

女子「すごい、いっぱいだね」

女子「お父さんって優しい？」

鐘／悠「え、い？ ムリムリ！！怖いって！！」

女子「（ハモったーっ）」

男子「なあ、お前ら二人に質問していいか？」

男子「W質問ってヤツ？オレからいいか？好きな食べ物は何？」

鐘／悠「牛乳」

女子「それは食べ物じゃないよ（苦笑）」

男子「それじゃお母さんのことどう思ってる？」

鐘「キモイ」

全「えゝ！？」

悠里「料理おいしい（あとオカマWW）」

女子「二人とも誕生日いつ？」

悠里「九月十四日」

鐘「十二月二十二日」

全「え…？」

男子「誕生日違うんだね」

女子「私双子って確実に同じだと思ってた」

悠里「まあ、いろいろだよ（ヤベッ）」

ツナ「……………」

悠里「綱吉君？」

ツナ「え！？あの、僕はツナでいいよ」

悠里「じゃあツナ君。何で黙ってるの？」

ツナ「え…いや…その…」

男子「コイツ、ダメツナって言うんだよ」

鐘／悠「ダメツナ？」

男子「ツナは何をやってもダメダメなんだ」

悠里「そうなの？」

ツナ「えつと…」

鐘「だから悠里とぶつかったんじゃないの？」

男子「お前ホントダメツナだな」

ツナ「ゴメン…」

悠里「まあまあ」

キンコーンカーンコーン
ガラガラ

先生「はい、質問タイムは終了です。次は算数ですので速やかに準備をしてください」

クラス「え――――」

勉強レベルは如何ほどか!?

現在算数のお時間です。

先生「それじゃあこの式、綱吉君」

ツナ「は…はい。えーっと『 2×8 』は…10?」

悠里「(足してるし)」

先生「残念。じゃあ悠里さん」

悠里「はい。16です」

先生「よし、正解だ。それでは次、鐘君」

鐘「へーい。ん?『 3×7 』?…21」

先生「当たりだ」

ツナ「二人ともすごいね」

悠里「別に」

先生「それじゃあ最後だ。わかる人だけでいいぞ」

『 12×14 』

クラス「わかるかーっ!」

鐘／悠「はい」

ツナ「え？悠里ちゃん、鐘君？」

先生「何だ二人とも、分かるのか？じゃあ、同時に答えてみる（黒笑）」

鐘／悠「168」

先生「あ…当たりだ（汗）」

クラス「…すごい」

悠里「（楽勝）」

鐘「ししっ」

女子「イタリアの学校って進んでるのかな？」

男子「すげーな」

こうして無事転入一日目を終えた。↑端折った

美鈴「ナレーションの問題なのか作者の問題なのか…」

ベル「例え作者でも殺るのはナレーションだな」

！！
ダッ↑逃

美鈴「今度は逃がさない（ダッ）」

作者「端折ってるのは作者だよ★」

ゝ家ゝ

美鈴「ふぁゝ楽しかった」

ベル「アイツあつたま悪いな」

美鈴「ホントだね。スクアアロたちに報告しないとね」

ガチャ

美鈴「繋がったかな？」

ゝヴァリアーのアジトゝ

スクアアロ「あいつらはちゃんとやってんのかあ」

マーモン「さあね」

?「♪」

ルッスーリア「あら？このメロディーって」

マーモン「美鈴がご機嫌のときに良く歌ってた曲だね」

スクアアロ「どっから聞こえてるんだあ？」

ルッスーリア「美鈴ちゃんの好きな曲だから、あの子の部屋じゃないの？」

レヴィ「行くだけあるな」

ス／マ「（いつからいた？）」

マーモン「とにかく行ってみよう」

美鈴の部屋

ガチャ

マーモン「やはりここだったらしいね」

スクアアロ「パソコン？」

カチャ

ピー パッ

美鈴『あっやっと出た。遅いよ』

スクアアロ「美鈴!？」

マーモン「何これ」

美鈴『テレビ電話。報告に使えるし、皆のことも見れるし一石二鳥でしょ?』

ベル『サプライズってこれかよ』

美鈴『まあね』

ルッスーリア「それで？ なにかあったの？」

美鈴『実は今日から小学校に行って沢田綱吉って人に会ってきたの』

ベル『で、そいつが勉強・運動etc何をやってもダメダメでさ、あだ名がダメツナって言うんだぜ』

マーモン「ダメツナねえ」

美鈴『ま、そういうことでうまく近づけたから、がんばって監視しマース。じゃね☆』

ブチッ

スクアアロ「お…おい」

マーモン「切られたね」

ルッスーリア「あらま」

レヴィ「そんな奴が候補とは…」

〽五月家〽

ベル「皆元気そうだったじゃん」

美鈴「そうだね。沢田綱吉……その皮を剥がしてやる」

ベル「（怖）」

こうしてベルと美鈴の日本の生活がはじまった。

私とツナと九代目（前書き）

美「ちょっと待って！何なのこの、バカテスみたいなサブタイトル
！？」

ツ「いやいや、そこでバカテスって出す君もどうかと思うよ…」

ベ「ま、いんじゃない？コイツ今それにはまってるらしいし」

作「言うなーーーーっ」

私とツナと九代目

美鈴 side

ツナ「ねえ今日家に遊びに来ない？」

悠里「はい？僕なんかが行っているの？」

ツナ「うん！それにこの前のことも謝りたいし」

悠里「……分かった。というか、もう許してるけどね」

とにかく潜入捜査（？）が出来そうなのだ。行くしかないよねっ。

ツナ「それじゃあ放課後にね。後で案内するから」

悠里「じゃ、鐘兄に、言ってくる」

テテテッ

悠里「べーる兄」

鐘「おいっ（ペシッ）」

悠里「アテッ」

はたかれた……うう……（シクシク）

悠里「僕が何をしたらって言うのさ」

鐘「その名前で呼んだらダメだって言ったのそっちだろ」

はううつ　小声だからいいではないかいジワル。それに誰も聞いてなんか無いよう。

鐘「んで？どうしたの？」

悠里「あのね、今日ツナん家に行くの。だから、先に家に帰ってて？」

鐘「ハア？何？悠里だけアイツん家に行くの？なんで？」

悠里「いいのいいの。そういうことだから」

テテテッ

悠里「んじゃ、行こっ」

ツナ「うん」

ゝ沢田宅ゝ

ツナ「ただいま」

悠里「お邪魔します」

？「まあ、ツー君がお友達を連れてきたわ」

なんかテンションが高めのお母さんだな。ちょっと羨ましいかも。

ルッス姐は、テンションが高すぎだからうるさいというか……。

悠里「こんにちわ。ツナのクラスメイトの五月悠里です」

奈々「私は綱吉の母親の沢田奈々です。よろしくね」

なんていうか自分の本当の母親が恋しくなってきた。もう死んでるけど。

家光「どーも、ツナの父の家光です。ツナと仲良くしてくれな」

……この人が門外顧問の沢田家光か。随分とだらけてるって言うかノホホンとしてると言うか。

家にはもう一人いた。って、この人って……

九代目「こんにちわ。綱吉君に悠里君でいいのかな？」

きゅっ…九代目え!!?!

ななな何で九代目がこんなところに!?!もしかして勝手に動いたのばれちゃったのお!?

ツナ「お母さんこの人だあれ？」

何も知らずに平凡なツナが羨ましい。私なんて今恐怖で心臓バクバクなのにくっ

奈々「この人はねお父さんの仕事の上司さんよ」

違う!ちがく無いけど違う!

九代目「家光にはいつも世話になっているからね。こうやって遊びに来たんだよ」

なんとと言う運の悪さ。偶然出会ってしまったとは……。

奈々「悠里君、何も無いけどゆっくりして行ってね」

悠里「はい」

そういえばさっきから悠里”君”って呼ばれてるけど、そんなに男子に見えるのかなあ。ま、その点に関して言えばベル兄に感謝だな。

九代目「おいで二人とも。一緒に遊ぼうか」

ツナ「わーい」

悠里「は、はい」

うう…正体がばれる前に帰りたい…
だけどここは無邪気な子を演じなくちゃ。

悠里「何して遊ぶ？」

ツナ「ボール使って遊ぼっ」

九代目「ああ、いいよ」

なんだろう、さっきから九代目の視線が私のほうにばかり来てる気が……。

九代目「君とはどこかで会ったかい？」

ギクリ

悠里「そ、そんなこと無いですっ」

やばいいいいいい

悠里「えっとそのお：僕イタリアから来たばかりなのでこっちの人とは接点が無いって言うか」

九代目「イタリアから？そうか、それならきつと、私がイタリアで君を見かけたのかも知れないね。すまないね、知り合いに君と似た人がいたものだから」

私と似た人？…ってもしかして私がヴァリアーにいたことばれてるーっ！？でっでもボスは私が入隊したことは報告してないって言うってたし、ありえー！

九代目「仕事関係でね」

絶対バレてるしーっ！

家光「九代目（ボソ）」

九代目「どうしたね家光」

家光「（ゴニョゴニョ）」

悠／ツ「??:?」

九代目「そう決め付けるのは早いよ」

家光「ですがもしそうだとしたら」

九代目「大丈夫だよ」

一体何の話をしてるんだろう？

ボンボンボン

突然鳴り出す時計。うわっ時間が！

悠里「ごめんなさいっ時間が無いので帰りますっ」

奈々「そうなの？」

ツナ「また明日ね」

家光「いつでもまた遊びに来てね」

悠里「はい」

ボタン

その後急いで家に帰った物のおなかをすかせたベル兄に怒られた。
災難な一日だ…………。

美鈴とツナと死ぬ気の炎

ツナ「ねえ、今日家に遊びに来ない？」

悠里「何スか、この前回に似た始まり方」

ツナ「あ…今日は忙しいの？」

悠里「そんなことは無い。遊びに行くよ」

しっかり仕事してくださいね（笑）

悠里「うっさい黙れ」

ツナ「誰と話してるの？」

悠里「独り言」

そして帰り道。

ツナ「そおだ、この前のおじいちゃん今日も来てるんだよ」

悠里「ごへっ」

ツナ「????大丈夫？」

悠里「大丈夫（えゝまた九代目いんの？ボスのくせに暇ですなゝ）」

ゝ沢田宅ゝ

ツナ「ただいま」

悠里「お邪魔しまーす」

奈々「あら、悠里君。いらっしやい」

悠里「今日もお世話になります」

ツナ「おじいちゃん、悠里君連れてきたよ☆」

九代目「そうかそうか。こんにちは悠里君」

悠里「こ、こんにちは」

ツナ「悠里ちゃんボール」

悠里「ボール？これで遊ぶの？」

ツナ「うん！（ニコッ）」

九代目「おじさんも入れてくれるかい？」

ツナ「うん!!」

（数時間後）

悠里「（へたっ）づがれだ」

ツナ「（キャッキャッ）」

悠里「（ちびっ子の好奇心か。よく疲れないモンだよ）」

戦闘向きの体力は、遊ぶ体力には不向きなのである。（美鈴限定）

悠里「黙れよクソナレ」

ふんっ（プイッ）

ツナ「あっ、ボール……」

九代目「ゴメンよ」

悠里「ん？」

見ると、ボールが庭に転がっていていた。

ツナ「ひっ！……グス……うええええん」

悠里「????」

何故か突然泣き出すツナ。そこにいたのは、

チワワ「クウーン」

悠里「チワワ相手で泣いたの！？（ガーン）」

ツナ「うええええええええええん」↑泣きすぎW W

ポウッ

九／家「!?!?」

泣きじゃくるツナが、わずかに死ぬ気の炎を纏っているのを九代目と家光は見た。因みに美鈴は気づかず。

九代目「家光、やはり君の子だ。この子はしっかりといい子に育つ」

家光「そう願いますが、犬を怖がるほどで…」

九代目「そのほうがより将来が楽しみじゃないか。おいで、綱吉君」

九代目はツナをそっと抱くと、その額に人差し指を当てた。

ポウッ

そこから放たれる死ぬ気の炎。ツナは炎に誘われるように泣き止み、眠った。

悠里「!?!? おじいちゃんツナに何したの?」

九代目「綱吉君は遊び疲れてしまったようだね」

悠里「ふうん（嘘だ。今わずかだけど変な感じがした）」

奈々「ゴメンね悠里君。折角遊びに来てくれたのに、ツナったら寝ちゃって。もう帰る? 時間も遅いしお家の人心配しちゃうんじゃないかしら?」

悠里「（お家の人か……）良いんです。僕には心配してくれるよう

なお家の人はいませんから（どうせベル兄は人のこと心配しないだろうし）」

奈々「あら、そうなの？」

悠里「だから別に。……………」

その時、家光と九代目の頭の中に不思議な映像が流れてきた。次々と殺されていく人々、赤く燃える町。

家光「九代目、これは…」

九代目「恐らくこの子の過去なのかもしれない。（この歳でこのような過去を持つ子がいるなんて、この国も廃れてしまったか）」

家光「どうしますか？このまま放って置くと彼自身の精神が危ぶまれます」

九代目「私たちには何も出来ないよ。過去を変えることも許されない」

悠里「（お父さん…お母さん…なんで私を殺そうとしたのかな……そうすればまた皆で笑って過ごせる日が来たかもしれないのに……。ヴァリアーもいいけどやっぱり本当の家族が欲しいな）」

フォ……

家光「！！？九代目…これは……………！！？」

九代目「死ぬ気の炎……………この色は白、いや白銀……………！！？」

家光「白銀の炎……まさか!？」

九代目「悠里君、こっちにおいで。(過去を変えることは出来ないが、こうするしかない)」

ポウッ

再び九代目の指に死ぬ気の炎が灯る。

悠里「……………(フッ トサッ)」

そして倒れこむ美鈴。

家光「九代目……………」

九代目「家光、この子をしっかりと見守ってやりなさい。この子の力を記憶と共に封印した。時が来れば、力だけの封印が解かれるはずだ。もし記憶を取り戻せば、取り返しの付かないことになる。だから…」

家光「仰せのままに」

その後、家光により美鈴はしっかりと家に届けられた。(笑)

美鈴とツナと死ぬ気の炎（後書き）

ベル「ん？なんか今回俺の出番なくね？」

作者「中身の関係で泣く泣く出番カットです（泣）」

ベル「これからちゃんと出番有るんだろーな？」

作者「もちっす。でわノシ」

設定パート3 (前書き)

PVが10、000アクセスを超えましたっ。
ありがとうございます!!

設定パート3

こんなに設定いらなくね？って思った人、ゴメンナサイっ
どうしても必要なんですっ。この駄作のように時間が相当昔から
だと設定が必須なんですっ。

「読むのがめんどくさい」とか「こんなの読んでどうするの？」と
いう人は読まなくても結構です。

と、言うことで、前回の話から5年も話がぶっ飛びます。

要するに中学生じゃー！っ！っ！なのです。一人でテンションあ
がってすんません。

でわでわ、設定です。

五月美鈴↑いい加減名前覚えてくれた？「みれい」ですよっ。

髪の長さは、腰まで。家にいるときは、ポニーテールなんです。純
白のリボンで結ってます。

趣味は人を殺すこと（笑）

好きなことは料理とか、料理とか料理とか。

五月悠里

身長…151cm

体重…乙女のシークレット

髪…黒。男子と同じくらいのショートカット。

瞳…右が深紅、左は茶色。

その他…性格は男子っぽい。一人称は「僕」。皆には男子かと思われるほど。

五月鐘

身長…165cm

体重…52kg

髪…茶色。ベルの髪をくせっ毛にしたカンジ。勿論前髪で目が隠れてます。

その他…悪戯好き。よく悠里と騒動を起こしている。

な、カンジですかね（笑）

一応ストーリー的には、次回はリボンが来る一日前にしようかと思っっています。

僕とツナたちと並盛中学校

美鈴 side

沢田綱吉を監視するために日本に来てから早五年。今私たちは中学生となり、並盛中学というところに通っている。

美鈴「くうく朝日を浴びると気持ちいいな」

ベル「あ、姫。おはよ」

美鈴「ベル、起きたんだ。おはよ」

いつもの通りにベルが起きてきた。まあ、いつもの通りって言うのは危ないんだけどね。

ベル「朝ごはん何？」

美鈴「とっくに出来てるよ。全く、何回起こしても起きないんだから。遅刻したら、またアイツに怒られるよ」

「アイツ」とは、また後ほどに。

美鈴「それに、あのバカも呼びに行かなきゃいけないんだからね？」

ベル「何であいつと一緒に行かなきゃなんないわけ？」

美鈴「仕方ないでしょ？おじさんに頼まれてるんだから」

ベル「あの門外顧問のことおじさんって呼ぶのやめろし」

お分かりだと思うが、「あのバカ」とは、ツナのこと。友達（仮）になってから、おじさん——つまり沢田家光に、学校での面倒見を任されてしまったのだ。

美鈴「とにかく時間無いから早く！」

ベル「へーい」

ガチャ

（沢田宅前）

悠里「すう………」

バカツナ起きやがれ————っっ！！！！」

『ガラガラガシャーン』

家の中からのすごい音が聞こえた。恐らく私の声にびっくりしたツナが階段から落ちたのだろう。

数分待つと、食パンを啜えたツナが、家から飛び出してきた。

ツナ「鐘、悠里。ごめん！」

鐘「おせーよ」

悠里「君は何度アイツの餌食になりたいのかな？」

ツナ「ごごごめんっっ!! い、急ごう!」

〈学校〉

————タタタッ

ツナ「ハア…ハア…」

悠里「何とか間に合ったか？」

？「間に合っていないよ。また、君たちかい？」

ツナ「ギクッ」

振り向くと、そこには黒髪のスラっとした少年がたっていた。

悠里「雲雀さん、どうも」

彼の名は、雲雀恭弥。ここ、並中の風紀委員長にして、並盛の不良の頂点に君臨する男。最凶の風紀委員長。

雲雀「どうも、じゃないよ。君たちの遅刻は、これで何回目だい？」

悠／鐘「全部ツナコイツが悪いんです」

ツナ「お、オレ!？」

雲雀「誰が原因かなんて聞いてないよ。ただ、僕も鬼じゃないからね、後一分だけ待ってあげるよ。その間に教室に行かなかったら、咬み殺すよ」

ツナ「ひいいいっ！」

咬み殺すといっている時点で鬼だと思うのは突っ込んだら負けだろう。

絡むのも面倒だからさっさと教室に行くことにした。

悠里「ほれ行くぞ」

（廊下）

悠里「んじゃ、鐘。またあとで」

鐘「ん。悠里もな」

私とツナは1-A、ベルは1-Bである。

ガラッ

ツナ「おはようございます（ボソボソ）」

悠里「シャキッと声出せ!!」

ドカツ

ツナ「うあっ（ドテッ）」

男子「お、やっと来たな。ツナと悠里のダメダメ遅刻コンビ」

悠里「五月蠅いっ」

いつも遅刻をしているせいで、プライドに傷が付くあだ名を貰った。第一遅刻するのはツナが寝坊するせいで、私たちは待ちぼうけを食らってるだけだし。

キンコーンカーンコーン

先生「その二人も席について。出席をとりますよ」

悠里「へーい」

．．．．．

？「よっ。今日も遅かったな、悠里」

悠里「山本」

彼は山本武。一言で言うなら野球馬鹿。もしくは天然バカ。

悠里「文句ならツナに言ってくれるかな？遅いのはアイツなんだから」

山本「そっか」

ツナ「寝坊は認めるけどそこまで言うことかな？」

悠里「認めるなら許されるべきことだと、僕は思うよ」

ツナ「ハア」。

ねえ、悠里。今日の数学、わかんないところがあったからさ、教えてくれない？」

悠里「また？自分で考えろって何度もいったよね？そんなんだからダメツナってあだ名が付くんだ」

山本「まあまあ。教えてやればいいじゃねーか」

悠里「放課後」

ツナ「あ、ゴメン。オレ放課後空いてないんだ」

悠里「じゃあムリ」

ツナ「（ガーン）」

山本「心配すんな、ツナ。代わりにオレが教えてやってもいいぜ」

悠里「本当かな？いつもツナと一緒に赤点とってる山本武君♪」

山本「う…悠里っていつもストレート発言なのな」

悠里「それにしても、何でこんなに時間がたってるのに君はこう成長しないのかなあ」

ツナ「お、オレだってがんばってるんだよ！ただ、なかなか結果が出ないだけで……」

悠里「それならまずはその頑張りを、ゲームから勉強に移すところから始めようか」

ツナ「あ……………そ、それは」

山本「そーいや二人っていつからの付き合いなんだ？」

悠里「小学二年生のときだよ」

ツナ「友達のいないオレの、初めての友達なんだよな」

山本「なるほどな。だからこんなに仲がいいのな」

悠里「（今までのやり取りで仲が良いと判断した君は、神レベルの天然さだよ）」

キンコンカンコン

山本「もうお昼の時間なのな」

ツナ「っいうか、今のチャイム何？やけに変じゃなかった？」

悠里「ん？いつものことだろ？」

ツナ「そう？ま、いいや。屋上で弁当食べよう」

山本「そうだな」

悠里「鐘も呼んで来るよ」

〽1―B〽

悠里「リ〜ン〜いるか〜？」

鐘「ん？もうそんな時間？ししっ　りよーかい」

女子「じゃあね鐘君♪」

悠里「もててるね」

鐘「だってオレ王子だし。それを言うならそっちだってもててるじゃん。

女子に　　」

悠里「（ズーン…）」

鐘「じよ、冗談だっつーの」

〽屋上〽

ツナ「そういえば、前から思ってたんだけど、悠里とヒバリさんてなんとなく似てるよね」

悠里「は？」

ツナ「綺麗な黒髪とか、細身の体とか」

山本「言われてみればそうだな。これじゃ鐘よりもヒバリと兄弟って間違われそうだな（笑）」

悠里「ツナ、山本。言っている冗談と悪い冗談の区別をつけろ」

ツ／山「（ゾクッ）」

ツナ「ごっゴメン……………」

山本「わ、悪い……………」

鐘「殺気抑えな（コソ）」

悠里「（はっ）危なかった」

ツナ「（でもやっぱり似てるよなあ）」

それ以上言うと、君、殺されちゃいますよ（笑）

ツナ「はいはい（呆）」

時は過ぎて、各自帰宅完了。

美鈴「……………この端折りレベルはすごいと思う」

ベル「内容考えんのがめんどくさかったんじゃないの？」

美鈴「ベル、ナレにきれてないの？」

ベル「しししっ王子それくらいじゃ怒らないし」

美鈴「ふうん。」

美鈴ちゃんの明日の占い

運勢…小吉

明日は思いがけないことが起こりそうです。今のうちに災難に備えどんな事態にも対応できるようにしましょう。」

ベル「……………どうしたの？」

美鈴「明日、何か良からぬことが起こりそうだから、気をつけてね」

僕とツナたちと並盛中学校（後書き）

次回、ツナに異変が！？
京子や花、出でくるよ。

突然壊れた日常

悠里「じ……………」

ツナ「……………（汗）」

鐘「じ……………」

ツナ「え…と…？二人とも？一体どうしたの？」

悠／鐘「じ……………」

こんな状況になったのは、さかのぼること昨日のこと。

ピピピピピピ カチッ

美鈴「ふぁゝ…眠い」

ベル「姫おはよ」

美鈴「……………ベルがもう起きてる。やっぱ昨日の予報どおりに何かおかしいことが起きるのかも」

ベル「オレが起きてたらおかしいのかよ（怒）」

美鈴「当たり前でしょ？お寝坊さんのベルが早く起きてるんだもん」

ベル「……………」↑反論できず

美鈴「ま、いいや。とにかく今日は、何かが起こる可能性が高い。気をつけないと」

〈学校〉

1—Bにて。

ガラッ

鐘「おはようございます」

女子「あっ！鐘君おはよう」

女子「おはよう♪」

1—Aにて。

悠里「おはようございます」

男子「おっ。悠里、今日は早えな」

悠里「まあな」

女子『ねえ、あそこ見て！京子と持田先輩のカップル！』

女子『本当だ！やっぱ、モテる京子は羨ましいよ』

窓の外には、学校のアイドル笹川京子と、当学校剣道部主将持田剣介の姿。

悠里「（笹川京子か……。ツナの片思いの相手なんだよな。ま、アイドル相手じゃツナは無理だろうけど）」

ふうっ、と溜息をついたそのときだった。

？「うおおおおおおおおおっ！！！！！！」

悠里「つつっ！！あれは！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

沢田綱吉は走っていた。走っている理由、それはそこに道があるから———というわけではなく、ある人物を追いかけていた。

ツナ「うおおおおおおおおおっ！！！！！！」

目標は、学校の正門のところにいた。

ツナ「見つけたあっ！！」

その人とは、笹川京子だった。

ドガッ

持田「うわっ」

隣にいた持田は突き飛ばされたが、偶然通りかかった山本にキヤツチされた。

女子「キャー山本君かっこいい」

男子「さっすが野球部」

山本「ん？あいつ、ウチのクラスの…」

ツナ「笹川京子！！オレと付き合ってください！！！」

京子「え？」（チラッ）

突然の告白に驚くが、しかしながら目の前の人物はパンツ一丁。

京子「キヤアアアアッ」

タッ

ツナ「あ…」

持田「テメー京子に何やってんだ！」

ドカッ

悠里「話をそらさないで」

鐘「昨日のこと、全部はきな」

ツナ「いや……そんなこと言われても……（ダッ）」

悠／鐘「逃がすかつ（ダッ）」

花「あれ、沢田たちじゃん。何やってんだろ」

山本「おっ朝から元気なのな（笑）」

雲雀「…………（ムスッ）学校の風紀が乱れる」

ガシッ

ツナ「ひいいいいっ!!」

悠里「もう逃げられないよ」

ツナ「ホントに何にも無いって!」

悠里「やましいことが無いなら何故逃げる必要があるんだい?」

ツナ「そ……それは」

男子「おー、いたいた。探したぜ」

ツナ「(ほっ)ど、どうしたの?」

男子「持田先輩が今日の昼休み武道場に来てさ。何でも昨日の落とし前をつけるって」

ツナ「んなーなーっ!!?」

鐘「ししっ諦めな。お前に逃げる道は用意されてねーんだよ」

悠里「そういうことだ。男なら大人しくやられて来い」

ツナ「(それ、何か間違ってる気がする……)」

男子「んで、お前が負けたら、二度と笹川と口を利くなっさ」

ツナ「なっ」

そして昼休み。

パッパパラパー

パチパチパチ (棒読み)

全「イラッ」

持田「おい、沢田はどうした」

男子「トイレ行きたいって言うんで、行かせました」

男子「あいつトイレ逃亡エスケープしたな」

持田「ということでオレの不戦勝だ。ぶわぁーっはっはっは」

男子「先輩って皆頭良いのかと思ってたよ(コソ)」

男子「オレも(コソ)」

悠里「はあゝ。呆れた」

鐘「あんな奴がボス候補なんて笑えるよな」

悠里「ホントだよ」

？『うおおおおおおおおおっ！！！！！！』

悠里「っっ!?! なんかくる」

バァン!!

ツナ「死ぬ気で何が何でも一本とる!!」

男子「来たぞ! 変態のお出ました!」

花「うわ……本当にあいつパンツ一丁だし」

京子「……………」

悠里「(やっぱり額から死ぬ気の炎……。一体どうなってんだろう)」

ツナ「死ぬ気で勝つ!」

持田「ぶわぁーっはっは。ブアカの極みだな。だがオレには勝てん!」

バキッ↑竹刀 折

全「!?!」

持田「何っ!?!」

ガッ
ブチブチブチブチ↑髪抜

ツナ「一本どころか百本取ったぞ！」

全「……………（ポケーツ）」

男子「あっはっはっは！ツナの奴考えたな！」

男子「確かに一本とってやがる！」

ツナ「（ギロツ）」↑睨

審判「ひいひいひいっ！！！！」

ツナ「これでもダメなら————」

ブチブチブチブチッ

ツナ「全部本」

審判「あああ赤！勝者沢田綱吉！！！」

男子「か、勝った」

男子「すげえよ！あのツナが持田先輩に勝った！！！」

シュウウウウウ

悠里「（炎が消えた…………）」

ツナ「や、やった。オレも死ぬ気になれば、先輩に勝てるんだ…………」

京子「沢田君」

ツナ「京子ちゃん！？（やばい！まだ怒ってるのかな？合わせる顔が無いよ（汗））」

京子「昨日はゴメンね？逃げちゃったりして」

ツナ「あ、いや…それは俺も悪かったって言うか」

京子「私よく友達に笑うところが分かってないって言われるの」

ツナ「（告白冗談だと思われてるーっ）」

京子「沢田君ってすごいんだね！只者じゃないってカンジ」

ツナ「え……？」

京子「今日から『ツナ君』って呼んでいい？」

ツナ「も、勿論！！」

（外）

？「沢田綱吉。お前の力を見せてもらう」

なんだかまだまだ嵐の予感（笑）

突然壊れた日常（後書き）

次回、獄寺登場っ

謎の転校生

キンコンカーンコン
ガラララララ

先生「はい、朝のHRを始めます。が、その前に皆さんにお話した通り、今日からこの学校に通う転校生を紹介します。ささ、獄寺君入って」

ドアから入ってきたのは、柄の悪い男子。

先生「獄寺君はずっとイタリアに留学していて、先月帰ってきたそうです。皆さん仲良くしてあげてくださいね」

悠里「（イタリアかあ）」

獄寺「（ギロツ）」↑睨

ツナ「ひいいいっ」

先生「それじゃあ獄寺君の席はそこ（ズカズカ）……って、獄寺君？」

ドカツ↑机蹴

ツナ「うあっ」

悠里「ツナ、知り合いか？」

ツナ「しっ知らないよ。目が合ったただけなのに机蹴ってきて」

悠里「でも、あの様子だと向こうはツナのことを知ってるみたいだよ」

ツナ「っていわれても」

先生「H Rは以上だ。各自、授業の準備をするように」

ガラララ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

山本「ツナ、ちょっと良いか？」

ツナ「なに？どうしたの？」

山本「今日の球技大会出てくんねーか？」

ツナ「はあ！？何でオレが！？」

山本「実はな、メンバーの殆どが食中毒にやられてさ」

ツナ「絶対アイツノ仕業だーっ！」

山本「あいつ？」

ツナ「ううん、なんでもない。それよりメンバーなら悠里とかいるじゃん」

悠里「バカだな。僕は既に正式なメンバーだよ」

ツナ「え？」

山本「頼むツナ!このままだと人数が足りなくて不戦敗になっちゃうんだ」

悠里「ツナ 僕からも頼むよ。こんな理由で負けるなんて、僕のプライドが許さないからね」

ツナ「ええ!? でも、オレなんか入ったら、余計に負けちゃうんじゃない…」

山本「心配ねーって。最近のお前スゲーからな」

ツナ「(すごい?) ……うん、わかった! 引き受けるよ」

山本「本当か！？サンキュ」

悠里「ついでに本音を言っておこう。お前がしくじっても、野球部エースの山本と運動神経抜群の僕。この二人がいればなんら問題ないという、他のメンバーの見解さ」

ツナ「（いろいろヒデーっ）」

山本「因みに獄寺もいるからな」

ツナ「んな――――つ！！？」

[illegible]

先生「それでは、1―A対1―C、バレーボール対決 始め」

ダンッ

男子「行ったぞツナ！」

ツナ「え？え！？うわっ」

ドスッ

全「……………」

獄寺「チッ」

悠里「（プイッ）」

山本「ドンマイ。次行こうぜ」

ピーッ

ダンッ ドガッ

ツナ「うあっ」

バシッ

ツナ「ひいっ」

バンッ

ツナ「ああっ」

全「……………（呆）」

男子「本当にこれが持田先輩を倒した男かよ」

女子「全然ダメじゃない」

京子「ツナ君……」

メンバー「おいツナ。ちゃんとやれよ！」

メンバー「オレたちや真剣なんだよ！」

獄寺「（ギッ）」↑睨

ツナ「（ひいっ睨んでるよ）えっと……そその、この前の一戦で
足くじいちゃって」

メンバー「え…そうだったのか？」

メンバー「ムリすんなよ。悪化したら悪いからな」

悠里「そうだね。嘘をついて逃げるのは気に食わないけど、そんな
覚悟だったらいるだけ邪魔だからね（コソ）」

ツナ「つつっ!!」

悠里「それともう一つ。逃げるなら、その前に全員の身体状況を確認
してから逃げな（コソ）」

さて、第二試合を始めよう」

ツナ「（みんなの身体状況？……あつ皆傷だらけ…へオレたちや真剣なんだよ！　そんな覚悟ならいるだけ邪魔だよ」そうか。皆この試合で勝ちたいんだ……）」

メンバー「どうしたツナ？休んでいいんだぞ？」

ツナ「ゴメン皆。オレ、間違ってた。オレもみんなに負けないくらい精一杯がんばるから」

悠里「ようやく分かったな」

ツナ「うん。逃げようなんて考えてごめん」

？『よく言ったな。それじゃあ、コイツをプレゼントだ』

悠里「！！！？？」

ズガガン

ツナ「うわっ（足撃たれた）」

山本「ツナ？大丈夫か？」

ツナ「う、うん。（あれ？おかしいな）」

山本「それじゃ、がんばろーぜ」

ピー　　ダンッ

メンバー「ツナ！ブロックだ！」

ツナ「うん！（ピョン）ってええ！？」

全「なあ！？」

軽く飛んだはずが、ネットの上までとんだツナ。本人は勿論、この光景に驚かない者はいなかった。

そして、ツナの活躍により、1－Aが勝利を手にした。

山本「ツナやったな！」

獄寺「チッ。全く目に余るやわさだぜ」

ツナ「え……？」

獄寺「テメーに十代目なんか継がせねえ」

ツナ「んな！？何でそれを？」

獄寺「ちよっとこっちに來い」

ツナ「（グイッ）ちよっ獄寺君！？」

山本「お、おい。どこにいくんだ？」

悠里「怪しい（スススス）」

（体育館裏）

悠里「ここらに隠れてみるか」

？「お前誰だ？」

悠里「！？誰！」

振り向くと、そこにはスーツを着た赤ん坊がいた。

悠里「ふう。まさかこの僕が後ろを取られるとは。君は殺し屋かい？」

？「鋭いな。そうだぞ、オレは殺し屋だ。それよりお前、驚かないのか？」

悠里「それは君が喋っていることにかい？僕はそんなことでは驚か

ない（そもそもマーモンが喋る赤ん坊だし、コイツおしゃぶりをつけているから、アルコバレーノと見て間違いないだろう）」

？「お前、こんなところで何してんだ？」

悠里「それはこっちの台詞だね。ここは中学校、赤ん坊がいるべきところじゃない。僕はただ、あの二人の様子を見ているだけさ」

ツナ『リボーン！どこにいるんだ！どうせどっかでオレを見張ってるんだろ！』

？「お呼びだな。じゃあな」

悠里「リボーンか。ちょっと待ちなよ。さっき沢田綱吉に何か細工をしたのは君だね」

リボーン「気づいていたのか。褒めて然るべきだが、その話は後だ（タンッ）」

悠里「黄色のおしゃぶりを持つアルコバレーノ、リボーン。一体あいつに何をしたのか、その実体を見せてもらおう」

リボーン『よく来たな獄寺。随分と早かったじゃねーか』

獄寺『あんたが、九代目が信頼してるって言うリボーンか』

リボーン『そうだぞ』

ツナ『え？リボーン、獄寺君のこと知ってるの？』

リボーン『勿論だ。コイツは俺が呼んだんだからな』

獄寺『こいつを殺せばオレが十代目ってのは本当なんだろうな』

ツナ『ちよっ何言って…！』

リボーン『ああ、本当だぞ』

ツナ『はあ！？お前、オレを十代目にするって言ったよな？あれ、嘘だったのか！？』

リボーン『強い奴が上に立つのは当然のことだ』

獄寺『目障りだ。果てな』

ジュツ

ツナ『んな！？どこからダイナマイトが！？』

リボーン『コイツはなイタリアで有名なダイナマイト使いで、体の至る所にダイナマイトを隠し持ってるんだ。人間爆撃機って呼ばれているんだ』

獄寺『またの名を、スモークン・ボム・隼人。果てろ』

ドオオン

ツナ『ひiiiiiiiiっ！！』

悠里「スモーキン・ボム…か。後で皆に聞いてみるか」

山本『あっ、いたいた』

獄寺『ちっ（邪魔が来た）』

山本『（ポス）ん？なんだこれ花火か？』

ツナ『ああっダメエ！！』

ジュッ

ツナ『あつつダメだ。消せない！』

リボーン『いや、お前が消すんだ』

ズガン

悠里「あれは…：特殊弾？」

死ぬ気ツナ『復活^{リ・ボーン}！！死ぬ気で消火活動！』

山本『ツナ？』

死ぬ気ツナ『消す消す消す』

ジュッジュッジュッジュッ

獄寺『チッ。二倍ボム！！』

死ぬ気ツナ『消す消す消す消す消す消す』

ジュツジュツジュツジュツジュツジュツジュツジュツ

獄寺『くそつ。さ、三倍ボム…（ポロ）しまった!』

ジジジジジジジ

獄寺『ジ・エンド・オブ・俺…』

死ぬ気ツナ『消す消す消す消す消す消す消す消す消す消す』

ジュツジュツジュツジュツジュツジュツジュツジュツジュツ
ジュツジュツ

獄寺『!?!?』

シュウウウウ

ツナ『よ、よかった。消火できた』

獄寺『御見それしました!?!』

ツナ『!?!?』

獄寺『命を狙ったオレまで助けてくれた。あなたこそ十代目に相応しい』

ツナ『ちよっ何言って』

獄寺『自分が十代目になろうなんていう大それたことを考えていません。ただ、十代目候補が自分と同じ年と聞いて力を見たかっただけなんです。でもあなたは、オレの想像をはるかに超えていた。一生付いていきます』

リボーン『よかったじゃねーか。部下第一号だぞ』

ツナ『部下って、あのなあ!』

リボーン『負けた奴は勝った奴の下に付く。それが普通だ』

山本『なんか面白そうなことやってるのな。オレも入れてくんね?』

獄寺『(怒)』

悠里「獄寺隼人、荒くれ者っと(メモメモ)」

リボーン「んで、お前は何者なんだ?」

悠里「Wowリボーンいつから?」

リボーン「たった今だぞ。もう一度言うがお前は何者だ? 何故、ツナを監視している?」

悠里「監視してるだなんて酷いね。僕はただ、あの二人が何をするのか見たい、そういったはずだよ。僕はただの世間から外れた女子中学生さ」

リボーン「……女子?」

タタッ

ツナ「あっ悠里！」

悠里「やあツナ。君のお連れさんは失礼だね、どうやら僕を男だと思ったみたいだよ」

ツナ「リボーン、それは失礼だよ。悠里はれっきとした女の子なんだから（とか言ったけど、正直オレもたまに忘れちゃうんだけどね）」

リボーン「ふむ……」

悠里「おっと、自己紹介がまだだったね。僕は五月悠里。れっきとした女の子さ」

リボーン「それじゃあ悠里、お前に話がある」

悠里「話？」

謎の転校生（後書き）

次回予告で獄寺しか言っていなかったのにリボーンも出ちゃいましたね（笑）

次回は美鈴ちゃん、リボーンに勧誘されるカモカモ^^

どいつのファミリー？どいつのファミリー

リボーン「お前、ツナのファミリーになれ」

悠里「は？」

ツナ「な！？」

リボーン「お前みたいな奴が居れば、きっとどうにかなる」

悠里「そんなテキトーな理由で利用されるのはゴメンだね」

リボーン「利用じゃねえ。仲間に入れてやるって言ってるんだ」

悠里「悪いけど、お断りだよ。友達ならまだしも、そんな得体の知れないものに入りたくないからね」

ツナ「そ、そうだよな」

リボーン「興味がある、なんてことはないか？」

悠里「ない」

リボーン「（まずいな。こいつが本当に五月悠里であるならば、なんとんでもツナのファミリーに居なきゃならねえ。それがあいつとの約束だからな）」

悠里「（コイツは一体何を考えているんだ？）」

リボーン「それじゃ、お前としては入らなくていいが、オレの中では入れるそれでもいいか？」

悠里「却下だ」

リボーン「お願い（ウルウル）」

悠／ツ「登場そうそうキモイことすんな!!」

リボーン「ちえー」

悠里「どうして君はそこまでして僕を入りたいの？」

リボーン「九代目に頼まれているからだ」

悠／ツ「っっ!？」

悠里「（何で九代目はこう、私に付きまとうかな……）」

リボーン「ボンゴレ九代目、お前も知っているはずだ」

悠里「知らない」

ツナ「そうだよリボーン。悠里が知っているはずないじゃないか」

リボーン「そんなはずはねえんだが」

悠里「とにかく僕はそのファミリーとやらに入る気はないよ。もっとも、友達として遊びに誘ってくれるのは大歓迎だよ」

美鈴「的なことがあって」

マーモン『リボーンには気をつけなよ。あいつはアルコバレーノの中で、一番タチが悪いからね』

ルッスーリア『それより、何で九代目は美鈴ちゃんをファミリーに入れようとしたのかしら』

レヴィ『貴様、そちらに行ってから九代目との接点はあったのか？』

美鈴「覚えてない。けど目を付けられる様な事はしてない」

ベル「ま、姫は何回か沢田綱吉の家に行ってるから、門外顧問からの連絡でも受けたんじゃないの？」

美鈴「そういえば、家光おじさん一年前からずっと日本に帰ってきてないんだよな。話によると蒸発したとか」

マーモン『何を言ってるんだい。家光ならイタリアでずっと九代目のそばで働いているよ』

美鈴「あ、そうだったんだ」

ベル「とにかく、いろいろ分かったな。特殊弾とかe t c . . .」

スクアーロ『とにかくだあ。アルコバレーノには気をつけやがれえ』

美鈴「了解です」

星を眺めるその心には、一体何が映っているのだろうか。

空に広がる満天の星空。どこまでも絶えることなく続くそれ。

ツナ「なんか不思議な気分だ。まだ出会って間もないメンバーで、
こうしていられることが」

リボーン「おい、今日は並森山に行くぞ」

事の発端は、リボーンのこの一言。

悠里「並盛山？何のために？」

リボーン「なんとなくだ」

悠里「（イラッ）そんなくだらない理由で僕を誘わないでくれる？」

山本「まあまあいいじゃねーか。このメンバーで遊ぶの初めてだろ
？面白そーじゃねーか」

獄寺「うるせーぞ、野球バカが。」

オレは、構わないですよ。リボーンさんが言うのなら」

鐘「オレはパス一。そーゆーメンドイこと嫌いなんだよね」

悠里「それなら僕も遠慮しておくよ。得体の知れないものには、参加しないって言ったよね？」

悠里君、君は日本に來た目的を忘れていないかい？そこは付いていくが吉だとは思わんのかね。

全「誰？」

毎度おなじみの、ナレーションでございます。

悠里「ふうん」↑絶対零度視線

作／ナ「サーセンっした！！！！」

ツナ「何で作者まで謝ってんの？」

作者「だって馬鹿ナレが口を滑らせてるから」

っっ！！ここは逃げるが吉だ！！！！

ダッ★

全「（★とかムカツクーツ）」

リボーン「まあ、馬鹿はさておき。行くか行かないかは聞いてねえぞ。全員強制参加だ」

悠里「行って僕にメリットは？」

リボーン「今日は天気がいいからな。あそこなら綺麗に星が見えるぞ（ニツ）」

悠里「よし、行こう」

ツナ「決めんのはやっ!？」

ツナ「ハア・・・ハア・・・」

獄寺「大丈夫ですか、十代目」

ツナ「う、うん。ありがとう、獄寺君」

悠里「私は、一体どこに居るのでしょうか。暗い暗い闇の中。

あなたは、一体どこに居るのでしょうか。いくら探しても見つからない」

全「? ? ?」

山本「悠里?」

悠里「いつの間にかあなたは私の前から姿を消した。そんなの許した覚えはない。

でも、やっぱり許すわ。私はやがて星になり、そこであなたを見つけた。

人はいつか星になり、暗い夜を照らし出す。

愛した人が、迷子にならないように・・・」

獄寺「コイツどうしたんスか? 急に歌いだして」

ツナ「さ、さあ?」

京子「私この歌知ってるよ。『星の帰り道』^{シルエット}って言う曲なの。あまり知ってる人は居ないけど、女の子には人気の曲なんだよ」

ツナ「そ、そうなんだ(やっぱり、京子ちゃんが居ると和むなあ)」

悠里「けれどいつかその想いが届く前にあなたは星になる。私の心を置き去りにして・・・」

ツナ「つか、その曲暗すぎでしょ!」

そして、あたりは暗くなり、空一面に無数の星が浮かび上がった。

京子「うわぁ、綺麗」

悠里「日本でも綺麗に星が見えるところがあったんだな・・・」

鐘「泣いてんの？」

悠里「ばっ…誰が泣くか！」

鐘「ししし」

京子「星って不思議だね。見てみると心が癒されるみたい」

悠里「実際、癒しているさ。星はその柔らかな光で見えるもの見ないもの全てを優しく包み込む」

山本「なんか、いつもとキャラが違うのな」

悠里「星は全てを見ている。騙すことなんて出来ない。『星の帰^{シルエ}り道』もそういう曲さ」

リボーン「今日はここで野宿するぞ」

ツナ「はあ！？何言ってるんだよ！」

リボーン「明日帰ったら、全員に感想文書いてもらうからな（ニツ）」

獄寺「分かりました」

山本「了解だ」

京子「感想文か。ちゃんと書けるかな」

悠／鐘「メンド．．．．．」

星を眺めるその心には、一体何が映っているのだろうか。（後書き）

感想文は次回です。

って言うか次回は感想文 only ですから。

それと注意事項。『星の帰り道』シルエットという曲は実在しませんので探さないでくださいね？ 歌詞とかも即興で作り上げた駄文なので、グダグダです！

ごめんなさいっ！！！

感想文

五月悠里の感想文

おい、リボン。いい加減ファミリー扱いするのはやめてくれる？星を見せてくれたことには感謝だけど、強制参加って事が気に食わない。

とにかく感想文だから感想を書いておく。

山登り面倒くさい。

ツナ五月蠅い&情けない。

星綺麗だった。以上。

五月鐘の感想文

何でこんなメンドイの書かなきゃなんないわけ？

別に星に興味とかないし、ただ面倒なだけだったし。

ま、綺麗つつつたら綺麗だけだな。

沢田綱吉の感想文

今まで星なんて気にしたことなんてなかったけど、実際に見てみて、良かったと思う。

いつもリボーンに振り回されっぱなしだけど、こういうのならいいと思う。

京子ちゃんも来てくれたし。

獄寺隼人の感想文

リボンさん、昨日は本当にいいものを見せてもらいました。
星は本当に綺麗でした。野宿も新鮮でしたし。
またいつでも誘ってください！

山本武の感想文

星ってすんげー綺麗なんだな！昨日見てビックリしたぜ。
ビックリといえば、悠里って歌うまいのな。さすが女子だぜ。

笹川京子の感想文

ツナ君昨日はありがとう！

初めてあんなに綺麗な星が見れて、初めて野宿して、とってもいい思い出になったよ！

今度は夏にでも、花火皆で見に行こうね。

「ふう。全員感想文になってねえぞ。日記もしくは手紙カンジだな」

彼は、提出された課題を読み終えると、静かにエスプレッソを飲んだ。

「悠里と鐘のこと、いっぺん調べてみるか」

感想文から二人のことになった経路は誰にも分からず。

感想文（後書き）

突然なのですが、ハートを記号表記するやり方を知ってる人は、感想のところでいいので教えてください。

このままでは、ルッスーリアの台詞の部分が悲しくなってしまう。

ボンゴレ式クイズ大会

悠里「おはようございます」

ツナ「おはよう、悠里」

悠里「……………」

ツナ「へ？あの？オレの顔なんか付いてる？」

悠里「なん…で…ツナがこんな時間に学校に来てるの…？」

ツナ「なっ！（ガーン）」

獄寺「テメェ！十代目に対して失礼だ！」

悠里「……誰？」

獄寺「なあっ！？オレは獄寺だ！並盛山に行った時居ただろうが！
つかお前こそ何モンだ？ファミリーでもねえくせに、十代目に付きまわりやがって！」

悠里「僕は悠里。別に僕は好きでツナの周りに居るんじゃない」

獄寺「十代目の無礼はオレがゆるさねえ！」

悠里「ふん。十代目十代目ってお前はツナがいないと生きてられないのかよ。忠実な部下も良いけど、度が過ぎればただの迷惑に過ぎないよ」

獄寺「てっテメエ!!!!」

ツナ「お、落ち着いて獄寺君!!悠里も獄寺君を煽らないでよ!」

悠／獄「ふんっ（コイツとは仲良くなりたくもねえ）」

?「随分と賑やかじゃねえか」

全「!?!」

ウイイイン

リボーン「ちやおっス」

ツナ「リボーン!!」

獄寺「リボーンさん!!」

悠里「……やあ」

リボーン「感想文、読ませてもらったぞ」

詳しくは前回へGO!

リボーン「全員赤点だ。罰ゲームをかねた補習をやるから、今日全員ツナんちに集合だ」

ツナ「なっ」

リボーン「悠里。ちゃんと鐘も連れてこいよ」

悠里「面倒なことは嫌いだ」

リボーン「それとツナ、京子もしっかり誘っておけよ」

ツナ「京子ちゃんも！？危ないことはしないんだろうな！？」

リボーン「ああ。勿論だ。

京子が帰るまではな（ボソ）」

ツ／獄／山「????」↑聞こえてない

悠里「（コイツ一体何を考えているんだ？笹川が帰った後、何をする気だ？）」↑聞こえてる

リボーン「誰一人拒否権は与えられないからな（ニツ）」

ツ／悠「（理不尽だーっ）」

山本「ははっやっぱコイツおもしれー」

獄寺「大丈夫です。リボーンさんが言うことなら自分、何でもやりますから」

リボーン「集合時間は4…00だぞ」

この学校の下校時刻、4…00。

全「ムリだーっ」

リボーン「全員このプリントを終わらせろ。他の奴との相談は禁止だ」

目の前に積み上げられた大量のプリント。

リボーン「なるべく8..00までには終わらせろ」

開始から三十分。

悠／鐘「終わった」

ツ／山／獄「早っ！」

からの三十分。

獄寺「終わったぜ」

からの十分。

京子「自信はないけど、全部とき終わったよ？」

からの一時間。

山本「教科書見れば、案外できんのな」

からの……………

リボン「おい、まだおわんねーのか？」

ツナ「え……………」

山本がとき終え、二時間が経過していた。つまり開始してから、四時間十分が経過していた。

鐘「とっくに8..00オーバーしてるぜ」

リボーン「しかたねえな。京子、もう遅いから帰って良いぞ」

京子「えっ？う、うん。じゃあね、ツナ君。がんばってね」

リボーン「ツナ、お前も切り上げろ。京子が帰ったから本題に移る」

全「！！？」

悠里「やはり、この補習は全員を集めるためのカモフラージュか」

ツナ「ちよっつりボーンということだよ！」

リボーン「それじゃあ始めるか。ボンゴレ式クイズ大会をな」

獄寺「ボンゴレ式」

山本「クイズ大会？」

悠里「何それ？」

リボーン「簡単な話だ。オレが問題を出し、オメーらが答える。それだけだ」

ゴソゴソ

リボーン「答えはこのホワイトボードに書け」

全「（どっからだった！？）」

リボーン「最も多く答えられた奴には景品があるぞ。但し、ビリの奴にはお仕置きが待っている」

ツナ「んな――――っ!! オレビリ確定じゃん!!」

獄寺「大丈夫です。十代目なら全問正解ですよ」

ツナ「(獄寺君、さっきのオレを見てムリだと気づいて)」

悠里「拒否権は？」

リボーン「ないといったはずだ。それじゃあ第一問」

「ボンゴレとはイタリア語でなんという意味か」

ツナ「それ、普通の問題じゃないから!!」

リボーン「いいから、さっさと答えろ」

ツナ「そんなこと言っても皆が……」

悠里「舐めてるね」↑イタリア出身(と思わせている)

鐘「しっバカにしてんの？」↑生粋のイタリア人

獄寺「これくらいいけます」↑イタリア出身

ツナ「何気イタリア多いし!」↑イタリアのかてきょー付き

山本「ん? 聞いたことあるな。何だっけ」↑ノー天気な日本人

リボーン「時間切れだ。全員答えを見せろ」

悠里「あさり」

鐘「アサリ貝」

獄寺「アサリ貝」

ツナ「アサリ」

山本「アサリ」

リボーン「よし、全員正解だぞ。山本、お前よく知ってたな」

山本「ああ。ウチにある道場が『あさり組』って言う名前なんだけどよ、前に親父が『アサリ』ってのはイタリア語でボンゴレって言うんだ』って教えてくれたんだ」

ツナ「へへ」

リボーン「んじゃ次いくぞ」

「オレはツナをどうするために日本に来た？」

ツナ「だから普通の問題出せよ！」

ドガッ↑蹴

ツナ「ふげっ！」

獄寺「大丈夫ですか十代目！」

ツナ「うん、大丈夫」

山本「小僧が来た理由？」

リボーン「時間だ、答えを聞こう」

悠里「……………ム○カ？」

リボーン「いいからさっさと見せろ」

悠里「ダメツナをご立派なボンゴレ十代目ボスにするため（誰がさせるかコノヤロー）」

鐘「沢田綱吉をボンゴレボスにするため（コイツにを十代目なんかにはさせねーし）」

獄寺「立派なボンゴレ十代目にするため」

ツナ「オレをマフィアのボスにするため」

山本「勉強が出来るようにするため」

リボーン「山本以外全員正解だぞ」

ツナ「あれ？なんで悠里と鐘、知ってんの？」

悠里「球技大会の日君たちが話してるのが聞こえたんだよ」

リボーン「嘘をつくな（チャキツ）」

ツナ「ひっ」

悠里「脅しかい？そんな物僕には無意味だ」

リボーン「あの日、お前はツナたちの後をつけていた。違うか？」

ツ／＼獄「!？」

悠里「クスッ 違うって言うてるだろ。それよりさあ早く、クイズ大会を進めなよ」

リボーン「チッ。第三問だ」

「オレのペットの名前は何だ」

鐘「ゲッ知んねえし」

リボーン「答えを見せろ」

悠里「レオン」

鐘「知らね。つか居たんだ（笑）」

獄寺「」↑分からなかった

ツナ「レオン」

山本「わかんないのな」

リボーン「ツナと悠里が正解だ。……何故知っている？」

悠里「僕は五感全て、いや六感全てがずば抜けているのをお忘れなく」

ツナ「六感全て!？」

獄寺「な、なんつー奴」

鐘「生態不能な変な奴」

ひゅんっ ストッ

鐘「……（汗）」

悠里「次は目だ」

なんつー殺気でしょうか。ツナは震え獄寺は固まり、リボーンですら顔をしかめた。
その中で唯一動けるのは、

山本「へー、スゲーのな。手裏剣なんていいセンスだな」

武器の確認を行えるほど、殺気に怯えていなかった。否、

山本「おもちゃにしてはリアルなのな」

殺気を感じないほどノー天気なのである。

全「緊迫感ねー奴」

リボーン「最終問題だ」

「どうしてツナはボス候補になった？」

悠里「（問題腐ってんなー）」

リボーン「見せろ」

悠里「知らん」

鐘「初代ボンゴレボスの子孫だから」

獄寺「すごいお人だから」

ツナ「オレのひいひいひいじいちゃんが初代ボンゴレのボスだから」

山本「なんとなく」

リボーン「ツナと鐘が正解だな。結果を発表するぞ。一位は全問正

解のツナ、景品はラ・ナミモリーヌの商品券だぞ」

ツナ「いない!!」

リボーン「ビリは山本だ。罰としてプリント増量だ」

ドサッ

山本「いっっ」

悠里「(ケーキケーキケーキ)」

鐘「沢田、商品けんいらねーなら悠里に渡してやりな」

ツナ「へ? 何で?」

鐘「こいつの顔見てみろよ。ケーキ以外何も言ってないぜ」

全「……………(汗)」

後日、商品券によりケーキを買いまくった美鈴である。

ランボさん登場だもんね!!

リボーン「答えは……」

ツナ「さ…3？」

リボーン「はずれ（カタン）」

ドゴオオン

ツナ「んぎゃあああ!!」

奈々「賑やかねえ」

ツナ「ゲホゲホ……どこに答えを間違うたびに部屋ごと爆破する家庭教師が居るんだよ!」

リボーン「ここに居るぞ。これがオレのやり方だ」

ツナ「間違ってるよソレ!!」

ピロリロピロリロ♪

ツナ「ん？オレの携帯……………」

宛先…ダメツナ

件名…お疲れ

本文…やあダメツナ君。朝から爆発だなんて騒がしいね。

ハッキリ言って近所迷惑だよ。

話がそれるけど、君の部屋の窓付近、変な牛ガキが銃を構えてるよ。

爆発に巻き込まれて泣いてるけどね（クスッ）

以上 悠里

ツナ「（窓の外？）んなっ!!!?」

窓を見ると、確かに牛ガキ発見。

牛「我慢なんて出来ないモンねーっ（泣）

ランボさんのこと無視するなんて許さないんだもんねーっ（泣）
」

ツナ「（え——————（ガーン））」

牛「リボーンなんて…………うああああん」

ツナ「なありボーン。外に変な奴がいるんだけど…………」

リボーン「それじゃあ今やったところのおさらいするぞ」

ツナ「シカト————！！？」

牛「うああああ（ミシミシ）あ…あ…？」

バキツ ヒュウウ ドデン

牛「ぐぴゃっ」

ピポピポピポ

牛「リボーン君あそぼー」

奈々「はい（ガチャ）あら？」

牛「ガハハ侵入成功！！」

バン

牛「久しぶりだなリボーン!! オレっちだよランボだよ!!」

ツナ「うわっ入ってきた!! リボーンの知り合いかよ!!」

リボーン「この公式は覚えておけよ」

ツナ「え?」

ランボ「……………」

まるでこの部屋には自分とツナしかいないように接するリボーン。

ランボ「コラー無視すんじゃないね——————!! いてまうぞコラー!!」

ビシイッ↑殴
ドガッ↑激突

ランボ「ぴゃん!!」

ツナ「わあっ。ひ…ひでー!! (この二人一体どういう関係なんだ?)」

ランボ「おーいて… (ズルズル) 何かにつまずいちまったみたいだ。
イタリアから来たボヴィーノファミリーのヒットマン、ランボさん5歳はつまずいちまった!!」

大好物はブドウと飴玉で、リボーンとバーであったランボさんはつまずいちまった~~~~!!」

ツナ「（一生懸命自己紹介してる――！！（ガーン））」

ランボ「ってことで改めて、いよおりボーン！オレっちだよ、ランボだよ――！」

リボーン「今の公式でコイツを解いてみる」

ツナ「あ……んん……」

ランボ「（ピタッ）」

ツナ「（オレも無視すればいいんだよね……）
よ……4かな？」

リボーン「そーだぞ、4だ」

ランボ「グス……」

奈々『ツツ君、ちよっといいかしら？』

ツナ「はーい。リボーンちよっとゴメン」

リボーン「しかたねーな」

とんとん

ツナ「何、母さん？って悠里！？なんでウチに？」

悠里「居ちゃ悪いかい？あまりにも五月蠅いからね、僕も勉強会参

加させてもらおうと思ってね」

ツナ「あ…うん。いいよ、って言うか居てくれたほうが助かるかも…
…（あのランボって奴がいるし…）」

奈々「悠里君、ツナのこと頼んだわよ。このこったら、リボーン君とは喧嘩ばかりで…」

悠里「了解しました。さ、行くよ」

とんとん

ツナ「でね、悠里」

悠里「ん？何」

ツナ「さっきの牛の子が（ガチャ）居て…って入るの早いよ!!」

ランボ「ぐぴゃああああああああつ」

リボーン「ウゼエ（ヒュッ）」

ドガアアアアン

悠／ツ「……………何をしたらこうなるの？」

リボーン「ちゃおっす。よく来たな悠里」

悠里「よくきたも何も僕の家隣だから」

リボーン「そうだったのか？（ニツ）」

ツナ「リボーン！さっきの子どうしたんだよ？」

リボーン「さっきの子って誰だ？」

ツナ「だから、あの牛柄の服を着た…（ツンツン）え、何………あ」

悠里「あいつのことか？」

悠里がさした先には、真っ黒に焼けた牛（笑）

ツナ「ちよっ何もこんなにしなくても…！知り合いなんだろう！？」

リボーン「しらねーぞこんな奴。どっちみち、ボヴィーノファミリ
ーって言ったら中小マフィアだ。

オレは、格下は相手にしねーんだ」

ぶっ飛ばした時点で相手にしてるだろ、と突っ込んだら負けなのである。

？「ししっおんもしれーことしてんじゃん」

ツナ「あっ鐘！どうしたの？」

鐘「なーんか面白いことやってそうだからさ、来てみただけだぜ？」

ツナ「（なんていうか、この二人傍観好きだよなあ）」

作者「突然だけど、十年バズーカ見たい人ーっ」

全「はい？」

作者「見たい人が居なければcutしちゃうんだけど」

悠里「ソレって、後で絡む？（私が居るところで）」

作者「うん！絡むよ、いーっぱいね！」

悠里「そう、それじゃあそのときでいいよ」

作者「了解っ☆」

鐘「あれ？もしかしてオレの出番もう終わりなカンジ？」

リボン「そーじゃねーか？」

鐘「じゃあ何で出したし」

悠里「そりゃあ……………」

全（作含む）「作者の気まぐれ？（笑）」

ランボさん登場だもんね!! (後書き)

時系列メチャクチャですいません。内容とかも全然違うし……

ランボは個人的に嫌いなのでさっさと切り上げたかったです。

それで、ふと思った。

「日常編細かすぎね!？」

ただでさえ長い日常編を、グダグダと意味のないオリストを交え、しかもスタート地点が古すぎる。

なんか…なんか…orz

でもとりあえず必要なだけ書くので、中身が薄くなるかもしれないけど、心が優しい方は、根気強く読んでください。

大丈夫……日常じゃなければきつと……

美鈴「作者がバグリ始めたね」

ベル「いいんじゃない? どうせバカだし」

突然の訪問者

美鈴「眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い」

ベル「眠いはいいけど、早くご飯作ってくんね？」

美鈴「ん、ゴメン」

テテテッ

美鈴「（んゝ何作ろうかなあ。ハンバーグを作ろうにも材料がないし、パスタを作るには時間がない。おにぎりを作るにしてもご飯を炊いてないし……………）」

って何も作れないじゃないか！！！」

ピンポーン

美鈴「ベルゝ出てくれない？変装するのも忘れないでね」

ベル「分かってるっての」

ガチャ

鐘「あれ？誰も居ない…………？」

？「ちゃおっス」

鐘「赤ん坊じゃん。どしたの？」

リボーン「今日のことですいろいろと話があつてな」

鐘「へえ。立ち話もなんだし、とりあえず上がれば？」

リボーン「ああ。そうさせてもらうぞ」

美鈴「んで、誰だったの？て、あわわわっ（バババツ）」

悠里「やありボーン。何か用かい？」

変わり身の早い美鈴である。

リボーン「今何か違かつたような気がするんだが」

悠里「気のせいじゃない？」

リボーン「そうか？（怪しいな）」

鐘「つか、用があるならさっさと済ませてくんね？まだ晩飯食つてないんだよね」

リボーン「それじゃ、夕食に邪魔してもいいか？」

悠里「話って今じゃないとダメ？」

リボーン「まあな」

悠里「……………分かつた。食べていきなよ。丁度出来上がったからね」

鐘「なっ（何やってんだよ！！敵をご飯に誘うとか、正気の沙汰じゃねえだろ！！）」

しかし、そんなベルの心配は美鈴には届かず。

リボーン「短刀直入に聞くぞ。お前らマフィアに関係してるだろ」

悠／鐘「！！！！？？」

悠里「何でそんなこと」

鐘「俺たちはマフィアとかしらねえし」

リボーン「隠しても無駄だ。今日のお前の動きと殺気、あれは一般人のなせる業じゃねえ」

悠里「昔から家柄そういうことが得意になっちゃんたんでね」

リボーン「マフィアじゃねえってなら、どこの家のモンだ？」

鐘「(姫、どう答えるつもりだ？ヴァリアーの事言うわけにはいかねえし、だからといって姫が自らあの家のことを言うとも思えねえし)」

悠里「僕の家は本当にマフィアなんて物とは無縁の物。ただその町に住んでいる人たちがやけに喧嘩っ早くてね。必然的に強くなることを求められた」

鐘「??????」

もう既に何の話をしているのか分からなくなっているベルなのだ。というか美鈴自身も何の話をしているか分かっていない。なぜなら、たった今作ったテキストな話なのだから。しかし、何故カリボーンは気づかない。

リボーン「ふむ。そうか。それともう一つ。何故マフィアを嫌う？」

鐘「いや、嫌ってるわけじゃ……」

悠里「一度、住んでいる町がマフィアに襲われたからね」

鐘「????????」

悠里「やっぱりアルコバレーノは違うよね」

リボーン「!？」

鐘「おいっ!」

リボーン「オレがアルコバレーノって事を知ってるんだな」

悠里「クスッ。アルコバレーノのことは知ってるよ。だって僕の町を襲った奴等の中に、アルコバレーノが居たからね」

鐘「なっ!?! (姫何言ってるの!?!)」

リボーン「何!?!」

悠里「ま、この話は君たちを信じることが出来た暁にでも教えてあげるよ」

リボーン「俺たちのことを信頼してないって事だな」

悠里「質問に答えてあげたんだから、こっちの質問に答えてよ。どうしてダメツナをボスにしようとなんかしてるの? いくら初代ボスの子孫だとしても、適任者はいくらでも居るんじゃない?」

リボーン「企業秘密だ」

悠里「拒否権は君にはないよ」

リボーン「(ちっ、なんつー殺気だ) ……ふう、仕方ねえんだ。今、イタリアの巨大マフィアボンゴレファミリーにはボス後継者がツナしかいねーんだ」

悠里「いない? (スクアーロの情報とずれてる?)」

鐘「何それ、どゆこと?」

リボーン「一人は抗争中に射殺(ピラ) 一人は溺死(ピラ) 一人

は気づいたら白骨死体になっていた（ピラ）そうだ」

悠里「誰も写真を見せろとまでは言っていないが」

リボーン「そして一人はクーデターを起こし嚴重幽閉中だ」

悠／鐘「っっ！！！」

悠里「（ボ…ス…）」

リボーン「どうした？」

悠里「いや、なんでもない」

リボーン「ツナがボスになるためにはいろんな人との交流が必要だ。鐘、悠里。ツナと仲良くしてやってくれよ」

悠里「それはどうだろうね。僕は昔から友達が出来ない性質でね」

その理由が、常に殺気を出しているせいだと言う事を本人は知らない。それでもツナと一緒に居られるのは、ホントにボス体質だというのも、全員気づいていない。

リボーン「ツナとなら、きっとうまくやっていけるぞ」

悠里「分かってないね。今度ツナに聞いてみるといい。僕とつるんだ人間がどういう目に遭ったのかを」

鐘「あのことを覚えてんだ」

リボーン「そうか。今日は邪魔したな」

ツナ「リボーンどこ行ってたんだよ？」

リボーン「ツナ。お前昔悠里とその周りで起こった事件について知ってるか？」

ツナ「事件？知ってるけど何で？」

リボーン「少し詳しく教えろ」

ツナ「（えらそうに（ムスッ））あれは、俺たちがまだ小学四年生だったときの話だよ」

当時、悠里と仲のよかった女子が居たんだけど、ある日何故か悠里に対する態度が一変したんだ。

『悠里、アンタうざいのよ。消えてくれる？』

その言葉を初めに、皆が悠里をいじめるようになったんだ。まあ、元々悠里は人と馴れ合わないタイプだから、別に気にしてる様子もなかったんだ、けど。

リボーン「けど？」

その態度がその女子を逆上させた。

『調子に乗ってんじゃないわよ！！』

イジメはエスカレートしていった。だんだん、悠里にも変化が現れた。

不登校になることはなかったけど、気休めにとって教室に来てくれる鐘にさえ、話をしようとしなくなった。

そしてある日事件が起きた。

一日に一人、学校に来ない人が増えていった。理由は、全員何者かに襲われ怪我をしたということ。

最初は誰がやったかなんてわかるはずがなかった。先生たちも、犯人探しに追われていた。

そんな時とうとう目撃者が現れた。犯人は、悠里だった。

リボーン「!？」

悠里本人は、自分が何をしているのか気づいていない。先生は、悠里がいじめを受けているということを知らなかったんだ。だから勿論殺人未遂って事で逮捕もされた。悠里は無論、無実を主張した。オレも鐘も悠里の無実を求めた。でも、当時悠里は嫌われていた。オレと鐘以外に悠里の肩を持つ人なんて居るはずがなかった。

でも、悠里は本気で自分は何もしてないと思っていた。自分はいじめられたとしても、仕返しをするようなことは決してしないっていつも言ってた。

結局、目撃があっても証拠不十分ってことになって、無実になった。あの日以来悠里は誰も信じようとしなくなった。オレとも今までどおりに接してくれた物の、やっぱり感情がないような、そういう話し方に変わってた。

ツナ「そういう事件があったから、悠里は自分と鐘しか信じていない。オレやリボーンや獄寺君にあんなにつめたいのはそのせいなんだよ。もとはきつと優しい人だよ。」

だからさ、悠里をこれ以上マフィアとかに巻き込まないでくれよ」

リボーン「（そんなことがあったのか。九代目に任されたもう一つの家庭教師は面倒だな）」

突然の訪問者（後書き）

すみませんすみません！！！！

この回本当は「ボンゴレ式クイズ大会」から帰ってきてからなんですっっ！！

割り込み投稿を失敗してしまい、このザマです。

ほんっつとうに、ごめんなさあぁいっつ

初めてであった親友

悠里「詰まんない。何も面白いことがない。いい加減誰か殺したい」
ここは公園。あまりにも暇なので来てしまった美鈴。しかし、余計にやる事がなかった。

悠里「ハゝ（ゴロン） Z Z Z Z Z Z」

ガサガサ

？「あ……あの」

悠里「Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z」↑爆睡中

？「……………死ん…じゃった？」

悠里「勝手に殺さないで欲しいな」

？「（ビクッ）あ……あの」

そこに現れたのは、黒髪の少女。どこか一般人ではないような、そんなオーラを放っていた。

悠里「あ、邪魔か。悪いね（ムクッ）隣、座りなよ」

？「（コクリ）」

悠里「んで、君誰？僕は悠里」

凧「……凧」

悠里「ふうん。どこに住んでんの?」

凧「…黒曜のほう」

悠里「（なんか無口な奴。それにしても黒曜か、あそこの学校って荒れてるって聞いたな）こんなところで何してるの?」

凧「……散歩。親が忙しいから家の事は自分で…」

悠里「親って何してるの?」

凧「……お母さんが女優で、お父さんが大手企業会社の社長……………」

悠里「な!? 凧の家は超リッチーっ!?!」

凧「……（フルフル）お父さんもお母さんも忙しくて私に構ってくれないから……」

悠里「親のこと好きかい?」

凧「……（コクリ）」

悠里「友達とか居るの?」

凧「……（フルフル）」

悠里「どうして?」

凧「……皆、私が変な子だって避けるから」

悠里「変な子か。そんなこといつまでも気にしてたらずっと出来な
いと思うな」

お前の言える台詞ではないぞ、バカたれ。

凧「……??」

悠里「コイツは気にするな」

凧「??」

悠里「凧…だっけか? 君、秘密を絶対守れる?」

凧「?……（コクリ）」

悠里「（たまにはこういう子と仲良くなっても悪くないな。この子
面白いし）」

僕…いや私の名前は美鈴って言うの。わけあって悠里って名
乗ってるけど、君はなんだか似た物を感じる」

凧「……似た物?」

美鈴「うん。だから、友達になってくれるかな? 私のヒミツを初め
て話した初めての親友」

凧「／／／私なんかでいいの?」

美鈴「勿論。だからヒミツはちゃんと守ってね？」

凧「……（コクリ）」

美鈴「凧って携帯持ってる？」

凧「（コクリ）」

美鈴「（突然反応早くなった！？）メアド交換しよう」

凧「……え」

美鈴「ホラ早く。（ピッ）完了っと」

そのメアドをツナとはまったく別のグループに入れ、『親友』という欄が出来上がったのは、美鈴と凧のヒ・ミ・ツ♪

凧「……………???」

悠里「馬鹿なれクン？ちょーっと後で用事があるんだけど（黒笑）」

（冷汗）いゝやゝだゝっ！！！！！

ダッ

悠里「それじゃ、またいつか会おうね」

凧「……うん」

悠里「（もしかしたらメル友になっても、もう会うことはないかもしれないけどね）」

風「……………また今度……………美鈴」

初めてであった親友（後書き）

うわゝ風が出てきたよ。

姫「どんだけいろんな人と絡ませたいの？」

……あれ？

獄寺夫人「まあ、それがコイツなんだし、仕方ないんじゃない？」

どSちゃん「そうですね」

ななな何でいんのーっ!？

姫／夫／S「どうもこんにちわー。『転生……なのかなあ?』より
コメンテーターとして来ちゃいました」

姫「ま、本音はこのコーナーを乗っ取ろうとしてるんだけどね（黒
笑）」

どSちゃん「それもありますね。私的には作者をいじろうと思って
きました」

獄寺夫人「っていうか、私の名前は結局これなの？」

作／姫／S「え?それ以外になんかあんの?」

獄寺夫人「シクシクシクシクシクシクシク」

姫「バカはさておき」

どSちゃん「次回からこのコーナーは私たちが担当させていただきます。異存はありませんかXANXUS様（笑）」

XANXUS「好きにしゃがれ」

ちょーっ何でXANXUSが許可しちゃってんの！？私の雑談コーナーがあっ。

全「黙れカス」

………（泣）もういいもんっ
ダッ

『どうにでもなっちまえ〜！』

姫「許可も貰ったことだし」

どSちゃん「今回はこの辺で」

獄寺夫人「See y（ガスッ）んぎゃ！」

姫／S「さようなら〜」

獄寺夫人「（酷え〜）」

ポイズンクッキング&十年バズーカ（前書き）

どっちかって言うと、アニメよりです。マンガ派の人ごめんなさい。

ポイズンクッキング&十年バズーカ

今、1―A 沢田綱吉の机の上は地獄と化していた。

悠里「なんだい、これ」

山本「なんか息苦しいのな」

ツナ「えっと…よくわかんない」

獄寺「こ…これは…」

そこには毒ガスを放出する毒々しい食べ物らしき何かが置かれていた。

因みに、この四人以外のクラスメイト（先生含む）は全員、天国への扉を見かけていた。何故この四人は無事なのかって？それは、美鈴が用意したガスマスクをつけているからさ。

悠里「とにかく教室を出るよ」

三人「うん」

（屋上）

山本「一体あれなんだったんだ？」

ツナ「今朝からこれだよ」

獄寺「今朝からですか！？」

ツナ「うん。今朝は、突然女の人くれたジュースが毒だったり、それで近くにいた鳥が皆死んじゃったっていうか」

獄寺「オレ……正直毒物^{アレ}のこと知ってます」

全「知ってんの!？」

獄寺「いや…でも…ありえねえ」

悠里「現実逃避してるし」

山本「まあ、あんまし考え込んでもしゃーねえし、昼飯でも食べようぜ」

ツナ「そうだね。時間的にも丁度だし」

?「ランボさんもお飯食べるんだもんね!」

ツ／悠「(ピクツ)まさか……」

ランボ「ランボさん登場だもんね!」

獄寺「なんスかこの牛は」

悠里「ボヴィーノファミリー、自称五歳のランボ」

ツナ「いいよ、ほっところ。それよりご飯」

ゴソゴソ

悠里「! ! 開けるな、そいつはヤバイ! !」

ツナ「え?」

ランボ「バーカ、ランボさんは開けちゃうもんね」

パカッ

悠里「バックそ……これ付けろ!」

ツナ「へ? んぐっ」

山本「ん? んぐっ」

獄寺「おい! んぐっ」

ランボ「??? (モワーン) ぐぴゃっ (とてっ)」

ツナ「ラ、ランボ! ?」

悠里「この弁当のせいだ。さっきのヤツと同じ物だ」

? 「その通りだ。そいつはポイズンクッキング、食ったら一秒で天国行きた」

ツナ「んな—————っ! ってリボーン! !」

悠里「ポイズンクッキング………毒さそりビアンキか」

リボーン「ピンポーン。（何でコイツ知ってんだ？）ビアンキそこにいるんだろ？」

ガチャ

ビアンキ「さすがリボーンね。私がここに居いることに気づいていたのね」

獄寺「あ…アネキ（ぐきゅるるる）はがあ！」

ツナ「ご…獄寺君！？えっお姉さん？」

リボーン「そーだぞ。腹違いのな」

ツナ「つーか、何でオレが殺されかけてんの………！!?」

悠里「君が十代目って言うのとは関係してるんじゃないの」

ビアンキ「迎えに来たよ。また一緒に大きい仕事しようリボーン。やっぱりあなたに平和な場所は似合わない。あなたのいるべきはもっと危険でスリリングな闇の世界なのよ」

リボーン「言ったはずだぞビアンキ。オレにはツナを育てる仕事があるからムリだ」

ビアンキ「……ぐす……かわいそうなりボーン」

ツナ「え？」

ビアンキ「この十代目が不慮の事故か何かで死なない限り、リボー

ンは自由のみになれないってことだよね（ぐず…）」

ツナ「（ガーンッ）んなぁ————っ!？」

（それでオレ殺そうとしてたの——っ考え方おかしーだろ！
!?!）」

悠里「なるほどね（ニヤ…）」

ビアンキ「とりあえず帰るね。十代目をころ…十代目が死んじやつたらまた迎えにくる…」

ツナ「ちよっ何言っちゃってんのあんた————っ!？」

山本「獄寺の姉さん、またな」

悠里「さてと、ひとまず獄寺を保健室に連れて行かないとね」

ツナ「わわっ獄寺くーん!?!」

悠里「君、沢田綱吉の命狙ってんだね」

ビアンキ「あなたは？」

悠里「僕は五月悠里。今日限りだけど、それ手伝ってあげてもいいよ」

ビアンキ「どういふことかしら」

悠里「今日、家庭科の調理実習でケーキを作るんだ。そのときになつたら分かるよ」

先生「それでは始めてください」

悠里「I t、 s s h o w t i m e ♪」

山本「それにしても獄寺残念だな。こんなときに腹痛なんて…」

ツナ「ホ…ホントだね」

本日のメインイベント。女子が家庭科の調理実習で作ったケーキを男子にくれてやろうじゃないかというイベント。

男子「どんなケーキくれるかな」

男子「誰もお前になんかくれねーよ」

男子「んだとっ」

ガラッ

女子「ケーキを男子にくれてやるーっ」

悠里「ハア。あほらし」

京子「ねえ、悠里君は誰にあげるの？」

悠里「一つは鐘で、一つはツナ、もう一つは笹川と交換でしようかと」

京子「ホント？貰ってもいいの？」

悠里「ああ」

花「ってか、アンタって女子だったんだね」

悠里「どうでもいいよ（毒サソリ、すり返るなら今しかないよ）」

ビアンキ「（さあ、沢田綱吉。毒にまみれて死んでしまえ）」

サッ

ツナ「なっ!？ちよっ待てよっ何してんだお前!？」

京子「ツナ君、私のケーキ食べる？」

ツナ「え…と。その…」

京子「あ、モンブラン嫌いだった？（しゅん…）」

ツナ「いや…そ…そんなことはなくて（問題は、それがビアンキによってポイズン化していることなんだよ（汗））」

ビアンキ「（さあ食べなさい。愛のためなら人は死ねるというのが私の持論よ）」

悠里「渡すタイミングないし…」

山本「ツナがくわねーなら、オレがもらうぜ」

ツナ「ダッダメえええ!」

リボーン「それじゃあそれはお前が食べ（ズガァン）」

死ぬ気ツナ「死ぬ気でケーキを食う!!!」

パクッ モグモグ

死ぬ気ツナ「（ゴクリ）うまい!」

ビアンキ「!! ポイズンクッキングが効かない!!?」

リボン「死ぬ気弾をへそに撃つと鉄の胃袋だ。アイアンストマック何を食ってもへっちゃらだ」

死ぬ気ツナ「たりねー!!」

女子「あ、アレ? ケーキが」

男子「あ!! ツナが食ってる——っ」

もしかもしゃ

死ぬ気ツナ「まだ足りねー」

男子「うわ!! コイツ無差別に食いまくる気だ」

男子「だめだあっ」

男子「誰か止めろ——!!」

悠里「僕が止めようか」

京子「悠里君?」

悠里「はああっ (ズボッ)」

死ぬ気ツナ「(パク) …………… (ドテッ)」

山本「ツ…ツナ!？」

花「沢田！？一体何をしたの？」

悠里「止めろというから止めたただだよ。そのうち起きるさ」

ランボ「ガハハハ！！ランボさんもケーキ食べるんだもんね！！」

山本「お、さっきの奴じゃねえか。もうケーキないぜ」

ランボ「ぐぴゃっ」

悠里「ちっ。（なんだろう、こいつ見てたら殺意が芽生えてきた）」

ランボ「うぐっ…が・ま・んしないもんね！！ランボさんのケーキ！！」

ズガン

全「！！？」

悠里「なんだよアレ」

？「ふう。まさか十年前に来てしまうとは…」

悠里「お前誰だ」

大人ランボ「初めまして、若き悠里さん。オレはランボです」

リボーン「なるほど。十年バズーカか」

悠里「ボヴィーノファミリーに伝わる幻のバズーカ。撃たれた者は、五分間だけ十年後と入れ替わることが出来る」

リボーン「詳しいな」

悠里「別に」

ビアンキ「ボンゴレめ。これで決める……！！ロメオ……」

リボーン「そういえば、アホ牛の十年後はビアンキの元彼にそっくりだな。ホレ（ピラッ）」

悠里「どれどれ………」

合唱」

ビアンキ「あなたの料理なら効くのね。弟子入りさせてくれない？」

悠里「却下だ。手伝うのは今日限りって言ったよね」

ビアンキ「それじゃあせめて、今日のレシピだけでも」

悠里「残念だけど、あのケーキにレシピは存在しない。でも、材料を分けてあげること出来る」

ビアンキ「そうね。それでいいわ」

悠里「明日あたりにでも渡しに行くよ。どこに住んでるの？」

ビアンキ「沢田綱吉の家よ」

ピンポーン

ツナ「はい。……………悠里!？」

悠里「毒サソリに用があつてきた。お前に用はない」

リボーン「何しにきた(チャキツ)」

悠里「毒サソリに用があつてきたと言つたはずだ」

リボーン「昨日、ツナに何を食わせた？」

悠里「ケーキ」

リボーン「嘘をつくな」

悠里「僕は一切嘘はついていない」

ビアンキ「騒がしいわね。ああ、悠里。来てくれたのね」

悠里「毒サソリ、リボーンが五月蠅いんだが何とかならない？」

ビアンキ「迷惑だったらゴメンナサイ」

悠里「とりあえずホレ、材料だよ」

ビアンキ「ありがとう。これで今考えているポイズンクッキング？
が完成するわ」

悠里「ま、がんばってな」

ポイズンクッキング&十年バズーカ（後書き）

姫「パンパカパーン、姫獄Sのコーナー来ました!!!!」

獄寺夫人「やっほーっ」

どSちゃん「落ち着きなさい」

姫「今回は第一回なんでゲストが来ちゃってるよ☆」

獄寺夫人「それではどうぞ。五月み…」

どSちゃん「今作品の主人公、五月美鈴さんです」

獄寺夫人「いつになったらこの酷い扱いを訂正してもらえるのかな？」

姫「一生ムリだね」

美鈴「やっほー☆元気にしてるーっ?と・く・にどSちゃん!」

どSちゃん「はい、おかげ様で元気です」

姫「それにしても、ツナに何を食べさせたの?」

美鈴「んとね……ピーとかピーとかピーとか…」

姫「す、ストロープ!!!聞いた私が悪かった!!!黒いよ君!!!」

美鈴「????????」

どSちゃん「アハハ・・・（苦笑）」

獄寺夫人「何で今回はこんなに獄寺の出番が少ないの??」

全「黙りなさい獄寺夫人」

獄寺夫人「（ガ————ン————）」

美鈴「今度よかったら作り方教えようか？」

和「頼む」

どSちゃん「コラッ出て来るな和。ネタバレは自重しなさい」

獄寺夫人「でも、何でビアンキには教えなかったの？」

美鈴「いずれ敵になるような人とは馴れ合わない」

姫「……………」

美鈴「ま、ツナには死んでもらったほうがボスが十代目になれるからいいんだけどね（黒笑）」

全「……………」

姫「え…えっと、そろそろお時間なので（苦笑）」

全「じゃあね」

美鈴「ひゃっほ☆」

どSちゃん「お前は黙っとけ」

はひいっ！ 天然さん登場です！（前書き）

※美鈴 side

はいっ！ 天然さん登場です！

悠里「ふぁ〜」

本日何度目か分からないあくび。

獄寺「お前大丈夫か？」

悠里「大丈夫だと思ったらほっという、大丈夫だと思わなかったら寝るトコ頂戴」

山本「ビミョーにキャラ変わってるぞ」

悠里「眠いんだから仕方ないでしょ」

山本「寝不足になるくらい何やってんだ？」

何って、この前ツナに食べさせたケーキ、仕組みがどうなってんのか、毒サソリに頼まれてポイズンクッキングのレシピ考えたりとか。

山本「不眠は女子の天敵だぜ」

悠里「君に言われなくても分かってるよ。でも科学者として分からないことはそのままにはしておけない」

山／獄「科学者!？」

間違っていないよね。錬金術師って科学者だよな。

それより私はなんで獄寺と登校しているのかな？ 獄寺とは犬猿の仲のはずだよな？ 何でだろうね。

獄寺「そりゃあ、この前毒から助けてくれたり、薬くれたりしたから……」

悠里「あ、そう」

？ 『絶対にハルは認めません！』

ツナ『そんな事言われたって………』

聞き覚えのある声が聞こえますー。

山本「お、アレ、ツナじゃねえか？」

獄寺「本当だ。10代目ーっ！」

？ 『ハルと勝負してください！ ツナさんが勝ったらリボンちゃんは諦めます』

ツナ『んなーっ！』

悠里「勝負申し込まれてるね」

獄寺「あんにゃろー（ダッ）」

山本「おい獄寺！（ダッ）」

悠里「放置ですか!？」

女子を一人置いていくなんて酷いじゃねーか!

悠里「にしても、あの女子誰？」

?「あいつは三浦ハル。俺に惚れた女だぞ」

悠里「Hi Reborn」

リボーン「何で英語なんだ？」

悠里「さあな。で、何でツナはその三浦ハルって人に勝負を申し込まれてるの？」

リボーン「あいつはオレがマフィアってことが許せないらしいんだ」

悠里「ふうん。関係ないし、先に学校に行くか」

獄寺『10代目!伏せてください!』

ツナ『へ?』

ハル「死ぬ気でハルを助けるー！オレにつかまれーっ！」

悠里「ハア？」

ハル「そんな古臭い台詞、映画の中だけかと思いました。ありがとうございます、リボンちゃんの代わりにハルを助けてくれた、10・代・目（ハート）」

ツナ「んなあっ！？」

ハル「ハルはツナさんに惚れた模様です！ギュウってして欲しいです」

獄寺「ふざけたこと言ってるじゃねえぞ！」

山本「まあいーじゃねーか。ツナもこの子も無事だったんだし」

悠里「結局コイツなんなんだし」

はひいっ！ 天然さん登場です！（後書き）

姫「本編短っ!?!」

どSちゃん「仕方ないよ。さて今回のゲストは何故か最近出番の少ない鐘ことベルフェゴールさんです」

ベル「なんかムカつくけど事実だし……」

姫「ベル——っ（ピョン）」

ベル「ゲッ（ヒョイツ）」

姫「（グシャ）へぶっ」

獄寺夫人「いい気味♪」

ベル「いきなり飛びついてくんなの」

どSちゃん「出てきてもらって早速なのですが、作者に代わってお知らせをお願いします」

ベル「メンド。ま、いや。

えーっと、なんか姫と絡んで欲しいキャラクターが居ればリクエストを待ってるぜ。六道骸って奴以外でな」

獄寺夫人「でわ今日はこの辺で」

ベル「もうかよ!?!」

どSちゃん「さよなら」

姫「ベルーっ（ピョン）」

ベル「（ヒョイ）」

姫「（グシャ）」

どSちゃん「アンタは学習しなさい」

問7

夏休み。

美鈴は珍しく沢田綱吉の監視をできずにいた。原因は、その学力の差。落ちこぼれ組みの沢田綱吉と山本武は学校にて補習、できる組の美鈴と獄寺隼人は公園でおしゃべりをしていた。

悠里「あぢー。何でこんな暑い日に外にいなきやなんないのー」

獄寺「お前が提案したんだろうが」

すでに悠里のキャラ崩壊に慣れた獄寺。

悠里「あれーそうだったけ？」

〓十分前〓

獄寺「くそー。十代目のおそばにいられないのが悔しいぜ（ボソ）」

悠里「獄寺、学校の前をふらついてどうかしたの？」

獄寺「十代目が心配なんだよ」

悠里「ふうん。ま、ここに居るのもなんだし、公園にでも行かない？」

獄寺「ん…まあ、そうだな」

だ、今に至ると。

悠里「そういえばそうだったね」

獄寺「テメエ（イラッ）とにかくここにいちゃ、そのうち日射病か熱中症になっちまうから、どっか建物ん中入んねーと」

悠里「それなら、獄寺の家に上がらせてもらおうかな」

獄寺「はあ!？」

悠里「だって君、アパートで一人暮らしなんでしょ？ 気になるしね」

獄寺「ちっ。しゃーねーな」

（獄寺宅）

獄寺「ここがオレン家だ」

悠里「お邪魔します」

獄寺「別に、たいしたモンはねえよ」

そしてその後、ベルから昼飯の電話が来るまで獄寺の家に居座った美鈴だった。

美鈴「端折ったなコノヤロ」

だって本題はこれからだから。

（．．．．．）

）・）・

ピロロロ ピロロロ

美鈴「はい、何？」

ツナ『ねえ、分からない問題があるんだけど』

美鈴「僕なら解けるかもって？」

ツナ『う、うん。お願いできる？』

美鈴「仕方ないね。10秒待ってな」

（10秒後）

悠里「で、どれ？」

ツナ「この問題なんだけど」

悠里「……………答えは4。簡単な問題だよ、ネコじゃらしの公式を使えばね」

全（リ以外）「ネコじゃらしの公式？？」

悠里「詳しくはリボンが教えてくれると思うよ。ついでに聞くとこの問題、何時間かけた？」

ツナ「えっと…………三時間？」

ハル「ゴメンナサイ………」

悠里「（なるほど。コイツのせいかな）

用が終わったなら僕は帰るよ」

獄寺「ちょっと待て。何でオレですら解けなかった問題がお前には解けるんだ？」

悠里「解けちゃおかしいのかい？科学は不可能を可能にするためにある。数式も然り」

ツナ「か、科学？」

山本「そういえば前に科学者とかって言ってたっけな」

ツナ「マジで!？」

悠里「じゃあね。せいぜい夏休みを楽しむことだよ」

問7（後書き）

姫「また随分テキトーな」

獄寺夫人「つか作者、こっちとかばっかりじゃなくってうち等のもちゃんと更新してる？」

作者「してますよ。今日だって一話」

どSちゃん「せめて、一日に一話のペースでお願いします。新作なんてもう九話目だそうですね」

作者「ばれてた？」

全「勿論」

作者「がんばります」

瀬名「こっちも忘れんなよー」

極限！！ ボクシング部主将笹川了平だーっ！！ (前書き)

熱い！！ サブタイトルの時点で熱すぎるよ！！

極限！！ ボクシング部主将笹川了平だーっ！！

獄寺 side

今日から二学期。

また学校で常に十代目をそばでお守りできる日々が来る。

悠里「何を一人でブツブツ言ってるの？」

鐘「うしし、暑さで頭やられたカンジ？」

獄寺「なっ。っーか、何でお前らと一緒に登校してんだよ！」

悠里「家のある方向が同じなんだから仕方がないだろう？（こっちだって嫌なんだ）」

おい、フツーに（ ）中、聞こえてんぞ。

悠里「二学期か。行事が沢山ある季節だね」

獄寺「大変っちゃ大変な時期だな」

鐘「ま、その分振替休日とかあっていいけどなっ」

悠里「ある意味、日本っていいところだね」

鐘「イタリ^いアでもイベントとかあったじゃん」

悠里「確かにクリスマスとかハロウィンとかはあるけど、日本には

花見とかひな祭りとかこどもの日とか、独自の文化があるだろう？」

獄寺「オレは特に興味はねーけどな」

悠里「KY」

獄寺「んだとテメェ（サツ）↑ボム

悠里「雲雀さーん危険人物！」

獄寺「ああ？誰だソイツ」

鐘「話通じねーの」

んだコイツら。ヒバリって誰だ？

く教室く

山本「おっす。悠里、獄寺」

悠里「おはよう山本」

獄寺「∴」

やっぱコイツは好けねーな。

ガラッ

獄寺「あっ！十代目おはようございます」

ツナ「獄寺君：おはよう」

十代目は珍しく、笹川と一緒に入ってきた。

悠里「京子どうかしたの？随分と嬉しそうだね」

京子「うん、今朝って言うかさっき、久しぶりにお兄ちゃんのうれしそうな様子見たの。そしたら私も嬉しくなっちゃった」

悠里「京子のお兄さんって確かボクシング部主将だよね。何があったの？」

京子「お兄ちゃんがツナ君のこと入部させたいんだって」

悠里「は…？マジで？」

獄寺「なに！？笹川、本当か！？」

京子「うん」

やっと他の奴らにも十代目のすごさが分かってきたらしい。

山本「ツナすげーのな」

ツナ「え…いや、その…：う、うん」

キーンコーンカーンコーン

先生「HR始めるぞー」

チツ先公がきやがつたか。

$$\begin{array}{ll} \}) & \}) \\ \bullet & \bullet \\ \}) & \}) \\ \bullet & \bullet \\ \}) & \}) \\ \bullet & \bullet \\ \}) & \}) \\ \bullet & \bullet \\ \bullet & \bullet \end{array}$$

Side out

その後、ボクシング部の部室にてツナの了平のボクシング対決が行われた。

リボーンが了平・ツナどちらにも死ぬ気弾を撃ち、了平が常時死ぬ気男だと判明。そしてツナは死ぬ気で入部を断り、ツナの勝利。入部をするとはなくなったが、逆に気に入られてしまったツナ。

さらにリボーンは了平を逆スカウトする始末。

そんな様子を美鈴とベルは詰まらなそうに言うか、興味がないというか、冷たい目で観戦していた。

すごく締りが悪くて中身がテキストだけど今回の話はここまで。

極限！！ ボクシング部主将笹川了平だーっ！！（後書き）

姫「おい作者何があった」

作者「さっさと日常編を終わらせたい、ただそれだけ」

どSちゃん「テキトーですね」

獄寺夫人「だったら出す人出してさっさといけば？」

作者「でも前に言ったお知らせ、誰もリクエストしてくれない（泣）」

全「ご愁傷サマ」

最凶の風紀委員長、現る！

く屋上く

ツナ「もー秋かくく。夏休みもあつという間だし、なんかさみしーな」

山本「補習ばっかだったしな」

獄寺「アホ牛がブドウブドウって、最近ウザくねースか？」

悠里「そもそも、夏休みの話が一話しか書かれてないけど」

ツ／山／獄「確かに」

？「そんなときには栗でも食べろ」

ヒュンヒュン

サクサク

ツナ「いだ！いだだ！！リボーンだな！（くるっ）いっ」

リボーン「ちやおっス」

今日のリボーンは栗のコスプレ。

チクチクチクチク

ツナ「痛い痛い刺さってる——！！（ガーン）」

リボーン「これは秋の隠密ようカモフラージュスーツだ」

ツナ「100人が100人振り返るぞ！」

悠里「君は目立つのが隠密だと思ってるの？」

ツナ「大体、学校に出没するなって言ってるんだろ！」

キュッ ↑リボーン着替え完了

リボーン「ファミリーのアジトを作るぞ」

ツナ「はあ！？」

山本「へー面白そうだな。秘密基地か」

獄寺「子供かおめーは！アジトいーじゃないスカ！ファミリーにアジトは絶対必要っスよ！」

ツナ「ちよつまっ」

悠里「（アジトといえば、ヴァリアーのアジト今どーなってるかな？）」

リボーン「決まりだな。早速応接室に行くぞ」

全「！？」

悠里「確か応接室って…」

リボーン「応接室は殆ど使われてねーんだ」

悠里「いや、だから…」

リボーン「家具も見晴らしもいいし、立地条件は最高だぞ」

悠里「（人の話微塵も聞いちゃいない。ま、私には関係のないこと
だけど）」

山本「よし、行くか」

悠里「それじゃあ、僕はこの辺で」

山本「ん？なんでだ？」

悠里「僕はファミリーじゃないからね」

リボーン「何言ってるんだ？お前もファミリーだぞ」

悠里「承諾した覚えはないんだけど。それにこれから用事が…」

リボーン「あっても行かせね（ダッ）ーぞって逃げたな」

獄寺「いいんじゃないスカ？あいつって非協力的ですし」

ツナ「悠里って結局なんなんだろう？」

リボーン「（やっぱり調べる必要があるそうだな）」

（応接室）

ガチャ

山本「へへへこんないい部屋があるとはねー。
！」

雲雀「君、誰？」

山本「（コイツは…風紀委員長でありながら不良の頂点に君臨する、
ヒバリこと雲雀恭弥……！！）」

作者「雲雀さんの説明は、中学生生活を始めるに当たって、悠里君
が説明済みのはず」

山本「そうなのか？」

獄寺「なんだあいつ？」

山本「獄寺、待て…」

雲雀「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？ま、どちらにせよ
ただでは帰さないけど」

獄寺「！！んだとてめー」

雲雀「消せ（ビュッ）」

獄寺「なんだこいつ！！（タバコを切りやがった！？）」

山本「聞いたことがある……。ヒバリは氣にいらねー奴がいると、相手が誰であろうと、仕込みトンファーでめった打ちにするって」

雲雀「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ。視界に入ると咬み殺したくなる」

獄寺「（ゾクツ）こいつ…」

山本「（やっかいなのにつかまったぞ…（汗）」

1
1
1
1
1
1
1
1

「面白い物が見れそうだね。じっくりと楽しませてもらおうか」

1
1
1
1
1
1
1
1

ツナ「へー初めて入るよ、応接室なんて（するっ）」

山本「待てツナ!!」

ツナ「え？」

雲雀「二匹（ガツ）」

ドザアツ

獄寺「のやろお!!ぶつ殺す!!」

フツ

雲雀「二匹（ガッ）」

山本「てめえ……！！！！」

チャキ…ン

ビュビュビュビュ

雲雀「怪我でもしたのかい？右手をかばってるね」

山本「！」

雲雀「当たり（ドッ）」

ドザッ

雲雀「三匹」

┆ ┆ ┆ ┆ ┆ ┆ ┆

？「だゝれも敵いやしない。さすが並盛最強と謳われた男」

┆ ┆ ┆ ┆ ┆ ┆ ┆

ツナ「あーいつつつ……！！ごっ…獄寺君！！山本！！なっなん
で！！！！」

雲雀「起きないよ。二人にはそういう攻撃をしたからね」

ツナ「えっっ」

～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．

？「つまんねー。もうチョイ面白くなんないのかな？」

このままツナが死ぬ気になったとしても、ただ雲雀さんが怒るだけ。

そしたらどうせリボーンが何かするんだろうし。ハアゝいつもいつもワンパターンで先が読めちゃうんだもんゝ」

ドガアアン

？「予想通りの結末。」

それじゃ、はじめっか（ヒュンッ）

～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．

雲雀 side

今、風紀委員総出で応接室の片付けに追われていた。

原因はさっきの赤ん坊。僕の攻撃を止めた上に、爆弾を使うなんてね。興味が沸いたよ。

雲雀「あの赤ん坊、また会いたいな」

草壁「委員長、もうじき片付けが終了します」

雲雀「そう」

その時、突然の殺気を感じた。トンファーで『それ』を防ぐ。

ガキイインッ

『それ』は壁に突き刺さった。

草壁「委員長……これは…」

雲雀「手裏剣…？」

草壁「手紙が付いています」

いつの時代だ。

雲雀「貸して（パシッ）“屋上に来い”？ふーん、この僕に指図するんだ」

草壁「どうなされますか？」

そんなの決まっているさ。

雲雀「いくよ。心当たりは一人しかいないからね。咬み殺してあげない」と

く屋上く

扉を開けると既に人が居た。あの手紙の主だろうね。

向こうを向いていて顔は分からない。学ランを肩にかけ、黒い髪をたなびかせて…ん？僕とキャラかぶってないかい？

雲雀「君だよ。ふざけた手紙をよこしたの」

声をかけると、ソイツがこっちを向いた。

雲雀「やっぱり君だね。」

五月悠里

悠里「ご名答。どうして僕だと分かったのかな？」

雲雀「毎朝君と会って、君が僕に怯えたことが一度もなかった。それどころか僕に向かって殺気を出していた」

悠里「あゝやっぱり殺気は抑えられなかったか。怯える演技は案外うまく言ってたと思ってたんだけどね」

まったくだよ。

雲雀「それで？僕に何のようだい？その学ランは僕のだよね」

悠里「用件はただ一つ。君に手合わせを願いたい。さ。ついでに言っとくと、確かにこの学ランは君のだよ。隙を見てもらっておいた」

雲雀「僕の物は返してもらおうよ」

悠里「残念だけど僕はリボーンのように甘くない（ヒュッ）」

雲雀「！（キイン）

君は僕に咬み殺されたいらしいね。手合わせなら大歓迎さ」

悠里「交渉成立。I t、s s h o w t i m e ♪」↑久々キター
V。

ヒュン キイイン

ヒュン キイイン

彼の攻撃はスピードも遅く軌道が読みやすい。

雲雀「この程度かい？」

悠里「まさか（サッ）」

雲雀「！」

消えた！？

悠里「こっちだよ（ヒュンッ）」

キイイン

後ろ…いつの間に。

悠里「よくかわした、と言いたところだけど甘いね」

スパッ

!!?

左足を手裏剣が切った。

雲雀「君すごいね。僕に傷をつけられる人なんてそういない」

悠里「そりゃありがたいね（ヒュン）」

雲雀「もうその手には乗らないよ」

悠里「本当に？」

スパッ

雲雀「…！」

完全に避けたはず！

……………こうなれば。

ヒュッ

悠里「トンファー投げるとかどんだけ（呆）」

サアッ

悠里「しまっ…！」

投げたトンファーが五月悠里の頭を掠めた。が、その瞬間、黒い髪が落ち、その下から栗色の長い髪が現れた。

悠里「ちっ」

雲雀「カツラだったんだね」

悠里「そうだよ」

雲雀「何のために？」

悠里「素性を隠す以外に、変装の理由ってあるの？僕…いや、この際いっか。私は仕事のために並盛にいる」

仕事？素性を隠してまでする仕事ってあるのか？それ以前に、コイツは女だったのか。

雲雀「仕事って？」

悠里「勝てたら教えてあげてもいい」

雲雀「咬み殺されたいの？」

悠里「やれるモンならね」

（二時間後）

side out

雲雀「はあ…はあ…」

悠里「もう息上がってんの？」

雲雀「いいや」

悠里「肩で息してるじゃん。

まあいいや。こっちも疲れてきたし、そろそろお開きにしてあげてもね」

雲雀「何を言ってるの？」

悠里「じゃあね」

美鈴が何かを投げる。それは雲雀の口の中に入り、雲雀はゆっくりと倒れた。

悠里「さようなら。最強の風紀委員長さん♪」

最凶の風紀委員長、現る！（後書き）

姫「チャッチャラ〜ン」

獄寺夫人「どうしたの？」

姫「先日のアンケートの結果を発表するぜよ」

どSちゃん「何で土佐弁？」

姫「と言うことで、美鈴ちゃんと絡むのはヒバリサンにけっ〜い
！」

どSちゃん「因みに恋愛系で絡むのはベルだそうです」

獄寺夫人「それと何故骸は除外されたのかについて説明します。そ
れは…」

姫「それは骸のことは決定事項だからだよ」

獄寺夫人「人の台詞を取るな」

どSちゃん「でわ今日はこの辺で」

獄寺夫人「だから私の扱い酷いって！」

結局……（前書き）

前回の次の日♪

結局……

ツナ「（あくもどーしよー。ヒバリさんに目え付けられたら終わりだよー!）」

ポン

ツナ「!!!!」

悠里「落ち込んだ顔してるけど、何かあった?」

山本「オッス」

獄寺「おはようございます十代目」

ツナ「あれ?三人一緒に来たの?」

山本「まーな」

ツナ「何で?」

悠／＼獄「知るか!」

悠里「そういえば、昨日の応接室どうだった?」

ツナ「えっと…使えなかった」

山本「あはは…」

獄寺「ちっ」

悠里「やっぱりね」

ツナ「え？」

悠里「昨日の委員長会議で、応接室は風紀委員が使うことになったんだよ」

ツナ「なっ!？」

獄寺「何でそのこと言わなかった！」

悠里「リボーンに邪魔されたからさ。人の話を聞かないのが悪いんだから」

キーンコーンカーンコーン

悠里「……一時間目ってなんだっけ？」

ツナ「確か社会だったはずだけど」

悠里「……………（ドサッ）」

ツナ「ちよっ悠里!？」

山本「どーしたんだ？」

悠里「社会なんて消えればいい、この世から存在を消せ。消えろ（ブツブツ）」

獄寺「社会にすげー恨み持ってたな」

ツナ「そういえば悠里って、唯一社会ができないんだよね」

山本「オレが教えてやろっか？」

悠里「五月蠅い、赤点補習組」

山本「オレがなんか言うといつもそれだな（笑）」

ツナ「そこ笑うところ！？」

ガラガラ

先生「授業始めるぞー」

悠里「授業なんて腐っちゃまえ（ボソ）」

先生「ボソボソ言っている五月は指すぞー」

悠里「Oh my god！」

ツナ「何で英語！？」

悠里「あゝ指されていていいからダレル」

先生「じゃ、指すな」

悠里「ハァ〜」

ガラガラ

全（悠以外） 「?…!」

雲雀 「五月悠里、いる?」

悠里 「ん? 恭弥? どうしたのこんなところまで来て」

全（雲含む） 「恭弥!？」

ツナ 「ヒ…ヒバリさん、どうしたんですか?」

雲雀 「五月悠里、今すぐ昨日の続き」

悠里 「却下。アレは僕の勝ちで終わったでしょ?」

雲雀 「何言ってるの? 君に勝ちなんて与えられないよ」

悠里 「ちっ。それなら逃げるまで（ダッ）」

? 「待ちなさいよ」

女子 「アンタ雲雀さんと何したわけ? 勝ちとかって何?」

悠里 「君たちには関係ない。そこをどけ」

女子 「何よ偉い子ぶって。そんなに頭いいのが偉いの?」

悠里 「君たちみたいな下等生物と話してる暇はない。もう一度言う、

さっさとそこをどけ」

女子「下等生物ですって!？」

悠里「（どく気はないらしいな）
しゃーねえ」

スタスタ

ツナ「あれ？悠里、そっちは窓……」

ピ
ヨ
ン

ツナ「えええええ〜〜〜〜！！！！」

悠里「恭弥、僕と戦いたければここまで下りて来る事だ。僕に勝てたら（ゴソゴソ）」

「この学ランを返してあげてもいい」

雲雀「返せ（ピョン）」

悠里「その下等生物たちも悔しかったらここに来ることだな。最も、来た瞬間にその命はなくなるだろうけど」

山本「……ツナ」

ツナ「何？」

山本「悠里ってあんなキャラだったっけ？」

ツナ「ゴメン山本。オレにも分からない」

雲雀「さあ始めるよ。僕との咬み殺し合い」

悠里「やれるものならね」

ダッ

ガキイイン

ツナ「なんかヒバリさん悠里のことを殺しにかかっているように見えるんだけど（汗）」

山本「やっぱりか？」

獄寺「あいつら何があったんだ？勝つとかなんとかって」

？「あの二人は昨日戦ってたんだぞ」

ツナ「リボーン！学校に来るなって！」

獄寺「悠里とヒバリが戦ってたってどういうことですか？」

リボーン「そのまんまだぞ。おめーらが応接室を後にした後、あの二人は屋上で戦ってたんだ」

ツナ「ええー!!じゃ、じゃあ話の流れからして…」

山本「そーゆーことになるな…」

獄寺「あ、ありえねえ…」

雲雀「ちょこまかと逃げないでくれる？」

悠里「恭弥が殺そうとするからでしょ？普通の反応」

ビュッ

悠里「昨日も思ったけど、トンファーは投げる物じゃない」

雲雀「どう使おうと僕の勝手さ」

悠里「メンドクせ（ボソ）

！ーモンがあった」

ツナ「？アレは？」

獄寺「ケーキ？」

悠里「昨日と同じくさっさと終わらせてもらうよ（ビュッ）」

雲雀「（パクッ）」

ツナ「ふつーに食べてるけど……」

雲雀「うっ………（どさっ）」

悠里「悪いけどしばらく寝ていてもらう」

山本「何が起きたんだ？」

ツナ「さ、さあ（汗）」

悠里「草壁ーっ、恭弥のこと後は頼んだ！」

女子「ちょっと！雲雀さんに何したの！？」

悠里「五月蠅いよ、いつまで群れてるつもり？さっさとどきな」

女子「っっ！」

次の日。

ガラッ

雲雀「五月悠里、話がある」

悠里「咬み殺し合いなら断るよ」

スタスタ

雲雀「君に風紀委員に入ってもらおう。生意気である罰だ」

悠里「それで？僕に何のメリットがあるって言うの？」

雲雀「襲うのをやめ、学ランをあげる」

悠里「それでも断った場合は？」

雲雀「そうだね。

君の正体を学校中にばらそうかな（コソ）」

悠里「！！！！分かったよ！はいればいいんだろ！」

雲雀「いい子だね」

悠里「くっそ~~~~っ」

結局……………（後書き）

姫「おい、ベル出せやアホ作者」

獄寺夫人「もっと獄寺の出番増やせ」

どSちゃん「あんたらはバカですか？」

今日は何の日？

美鈴 side

恭弥の一件（私が風紀委員に入ることになった件）から数日が過ぎた。

最近は妙なことが起こっています。何が妙かって、ベルが見当たらない。登校も下校も一緒じゃないし、家にも帰ってもいない。まあ、ベルはモデルし人気者だから友達と遊んだりでいないのは分かる。でも連絡ぐらいほしい。

そして、特に妙なことといえば。それは昨日のこと。一ヶ月毎の小遣い日で、ベルの口座に小遣いを振り込もうと思ったら、お金が減っていた。ベルのお金だからいくら使おうと私は何も言わない。でも、それだけじゃ全く妙じゃない。妙なのは、昨日と一昨日の二日で、四回も引き落としをしていること。一体何に使っているのやら……（汗）

そして今日も朝からベルの姿が無い。朝ごはんは作ってあった。あれ？ベルってご飯作れたっけ？
違う…昨日の夕食の残りだ。

（学校）

悠里「ツナ、ベ…鐘見てない？」

ツナ「（ベ？）見てないよ。どーしたの？」

悠里「ここ二、三日見てないからさ」

ツナ「え？それって行方不明ってこと！？」

悠里「いや、家に帰ってきてはいるんだ。けど、僕が起きている間は家にいない」

ツナ「そうなの？　そういえば最近リボーンのことも見えてないよな」

悠里「おいおい、かてきょー大丈夫か？」

ツナ「あはは…」

山本「鐘と小僧なら昨日見たぜ」

悠／ツ「どこで？」

山本「商店街。二人で一緒にいたぜ」

ベルがあいつと一緒にいただって？　何考えてるんだろう。

悠里「まったく」

獄寺「鐘の奴がリボーンさんと一緒にいるなんて珍しいな」

ツナ「そもそも、リボーンと鐘ってお互いあんまり知らないはずだよね」

全「確かに」

見つけたらリボーン共々事情聴取だな。

く帰り道く

結局学校ではベルともリボンとも会わなかった。それどころか、最終的にはツナたちまでもが怪しい行動をとり始めた。

美鈴「はあゝ何やってんだろアタシ……あ」

気づいたら家の前。

ガチャ

あれ？家が開いてる。ベル、帰ってきてるんだ。

美鈴「ただいま」

そう言いながらリビングに入ったとたん。。。

パァン！

クラッカーの音が鳴り響いた。

今日は何の日？（後書き）

姫「これまた微妙なところで切ったね」

獄寺夫人「獄寺の台詞がたったの一回……」

姫／S「（コクリ）」

ドガッ×2

獄寺夫人「いだあっ」

ボンゴリアン・バースデイ・パーティー

パアアン

悠里「!!」

？「誕生日おめでとう！」

悠里「は？」

そこにいたのは、ベル・リボーン・沢田綱吉・山本武・獄寺隼人・毒サソリ・笹川京子・三浦ハル。

悠里「何してるの？どうしてみんな揃ってるの」

鐘「しっっ今日が何の日だか忘れた？」

悠里「今日？今日今日きょうきょう…あ！

Today is my birthday.

鐘「当たり前」

ツナ「何で悠里はいちいち英語になるの？」

悠里「I don't know」

山本「ははいーじゃねーか」

悠里「それより二つ目の質問に答えて欲しい」

リボン「お前、これで13歳だろ？ボンゴレファミリーでは、奇数歳の誕生日にはボンゴリアン・バースデー・パーティーを行うんだぞ。知らなかったのか？」

悠／鐘「全く知らん」

ツナ「ボンゴリアン・バースデー・パーティー？」

獄寺「やはり我々に用意しろと言っていた物と関係があるんですね」

悠里「用意した物？」

リボン「ああ。こいつらにはお前を楽しませるためにそれぞれ用意してもらったぞ」

ハル「はひっそーです！ハルは京子ちゃんとこれを買ってきたんです！」

京子「はい、ラ・ナミモリーヌのショコラケーキ」

悠里「いいの！？マジで！？いよっしゃーっ」

全（鐘以外）「何があった！！？」

ハル「なんだかよくわかりませんが、喜んでもらえたなら嬉しいです」

悠里「あゝやっぱり女の子って幸せだよね」

ハル「やっぱり何かが壊れてます……」

リボーン「悠里、この二人に点を入れろ」

悠里「点？」

リボーン「ボンゴリアン・バースデー・パーティーでは、誕生日の奴を楽しませ、そいつが点数を決めるんだ。一位の奴には景品、ビリの奴には死が待っている」

ツナ「んな————っ！？ふざけんなよ」

悠里「ふうん。じゃあ、90点」

京／ハ「ありがとう」

山本「オレからはこれだぜ」

そういつて山本武が出した大きな箱。

パカッ

そこに入っていたのは…

悠里「お寿司……（ヤバイヤバスギマスヨ）

……サーモンある？」

山本「ああ。ホラここに」

パクッ

悠里「もうヤバいつすよこれ。サーモンおいしい」

鐘「ひゝ悠里、ウニもらっていい？」

悠里「どーぞお。おつまグロ発見」

パクッ

悠里「にゃゝ今すぐ死んでもいいかも」

獄寺「（“にゃ”！？）」

悠里「山本は95点な」

山本「サンキュー。親父も喜ぶぜ」

こうして一人ずつ出し物が終わり……

一位山本

二位ツナ獄

三位京ハル

四位毒サソリ

五位ランボ

リボーン「最後に鐘の番だぞ」

悠里「何かくれんの？」↑期待感100%

鐘「もうあげてるし」

悠里「は？」

鐘「オレの出し物は、この誕生日会自体だから。喜んでもらえるように頑張ったんだぜ」

悠里「ふえっ／＼／＼／」

獄寺「キザなヤローだぜ」

ハル「キザだけどかっこいいです」

悠里「…うぐ…ひっく（ポロポロ）」

鐘「ゲッ泣いてるし」

リボーン「女を泣かせたな」

ビアンキ「女の子はハートが脆いのよ」

鐘「なんか責められてね？」

悠里「ありがどー（ギュムツ）」

鐘「つつおい／＼／／／」

獄寺「なっ／＼／／／」

ツナ「ええー！／＼／／／」

山本「おいおい／＼／／／」

リボーン「何お前らまで赤くなってるんだ？」

ビアンキ「子供ね」

京子「悠里君って大胆だね」↑まずは“君”を取る事から始めよう

ハル「ハルもツナさんにギューってしたいです」

ツナ「しなくていいから!!」

悠里「ふえええん」

リボーン「感動してるとこ悪いが点数どーすんだ？」

悠里「グス：そうだった。100点だよ!!」

リボーン「(ニツ)決まりだな。結果は一位が鐘でビリがアホ牛だ」

京子「ランボ君なら飛んでいっちゃったよ」

実は登場して一秒で、私と獄寺の手によってランボはどこかに飛ん

でいっていた。

ツナ「そういえばそんなことがあったっけ」

リボーン「あとで絞めとくか（ぼそ）」

今不吉な台詞が聞こえましたよ。感動泣きしているところに不吉な台詞が入ってきたよ。こんの、KY！

獄寺「それでは一位の景品ってなんですか？」

リボーン「鐘。お前の願いを一つだけ聞いてやる」

鐘「願い？」

悠里「王子様に願いなんてあるのかな？（ぼそ）」

鐘「うっせ。あるし（コソ）」

リボーン「早くしろ」

鐘「コイツとずっと一緒に暮らせればそれでいいし」

悠里「は？／＼／＼」

リボーン「それだけか？」

鐘「ああ」

ベルの……ベルの……

50話達成記念

美鈴の一日

ピピピピピピピピ

朝四時に鳴る目覚まし時計。私はそれで目を覚ます。風紀委員として働くために。

寝ぼけ眼で部屋を見渡す。

薄暗い部屋に、かすかに朝日が差し込む。その光の先にあるものを見て、眠気は一気に吹き飛んだ。

血まみれの少女。

部屋の隅から私を睨むように立っていた。

けど気にしない。一秒でも学校に遅刻したら、恭弥が許さない。急いで着替えてベルの分の朝ごはんを作り、家を飛び出した。

少し血まみれの少女が気になったけど、仕事に身が入らないと色々困るから、記憶から消し去ることにした。

学校に着いたら、まずは応接室に行く。

応接室に置かれた風紀委員活動報告ノート、通称“風紀委員ノート”に私の仕事は書いてある。

今日の仕事は、昼休みに書類の整理をする、ただそれだけ。

ふと、視線が応接室の隅へと動いた。心臓が止まるかと思った。

—————血まみれの少女。確かにそこにいた。

気味が悪い。さっさと人の多いところに移動しないと。

教室に入ると、女子からは殺意のこもった、男子からはいやらしい視線が送られてくる。風紀委員に入ってからの日常茶飯事。慣れて

しまった。

気分が悪い。先生が来るまでの間、しばらく机に伏した。数分毎に、沢田綱吉や獄寺隼人たちからの挨拶が聞こえたが、返事をする気力もない。

それから更に数分後、先生が入ってくる音がした。顔を上げると、

———またいた。

何故だろう、知らないはずなのに、見覚えがある。

授業の間も、少女とその疑問で頭がいっぱいになり、全く集中ができなかった。

昼休みに応接室へ行く。既に恭弥がいた。

目の前に積まれる書類の山。これを全て片付けなければ、午後の授業に出ることはできない。

その条件が凶と出るか、吉と出るか。

———どうやら凶のほうだ。またもや『あいつ』は現れた。

どこにでも来るならば、周りにいる人間は多いほうがいい。と言うより、いつそのことはベルのクラスに逃げ込みたい気分だ。

そして私は、恭弥に驚かれながらも、いつもの十倍のスピードで仕事を終わらせ、教室へと足を運んだ。

教室へ戻ると、沢田綱吉が心配そうに駆け寄ってきた。そんな彼から私は逃げた。

沢田綱吉の隣に『あいつ』はいた。逃げたようで逃げていない私。足がすくんで動けない。吐き気がこみ上げてくる。声すら出すことはできない。

イヤ・・・来ないで・・・

“本当に私が分からないのか”

突然頭に響く『あいつ』の声。

“私は忘れはしない。この怨み、例えば地獄に堕ちたとしても消えはしない”

目の前が暗くなる。『あいつ』の声は、まるで私の中に眠る何かを引きずり出そうとしているようだった。

それでも私は知らない。何か大切なものを忘れてしまっているのか。それすら分らない。

暗闇の中、『あいつ』の声は響き続けた。。。。

気がつくと、私はベッドで寝かされていた。同時に聞こえるざわめき。

そこには、ベル・沢田綱吉・獄寺隼人・山本武・笹川京子の顔ぶれ。会話と雰囲気、ここが保健室のベッドだと言うことがわかった。

話によると、教室に戻った私は、沢田綱吉が駆けつけた瞬間に気を失ったらしい。

情けないな。

全員に、何があったのかと質問されて、渋々全てを話した。

話し終わると、皆が判を押したように同じの不安そうな顔をした。そして、京子が、何かできることは無いかと積極的に言ってきた。

私は、ハッキリ言っても良かったのだが、獄寺の提案で、霊媒師を呼ぶことにした。

霊媒師はすぐに来た。手配したのは恭弥。恐るべし風紀委員長。準備が整ったとのことで、除霊を開始した。

何か呪文のようなものをブツブツとつぶやき始める。暇だ。これでは霊よりも先に退屈で死んでしまう。

それではその退屈しのぎに寝てしまおうか。そう思ったとき、

ズキッ

突然の頭痛。そして、次々に私を襲う、体中の痛み。耐えられない。やむを得ずにベッドに倒れこむ。

意識はあっさりと、闇の世界へ連れて行かれた。

名前を呼ばれて目を覚ます。

全員笑顔だった。ベルも沢田達も霊媒師も、そして、私も。

家に帰っても、『あいつ』が現れることはなかった。

本当に終わったんだな、とやっと実感する。

これで普通の日常に戻れ……。元から普通じゃないか。でも一件落着。いつもの五倍くらい疲れる一日だった。

50話達成記念 美鈴の一日（後書き）

どうも。

なんだかシリアス系ですね。

こんなヤツがあと、5話くらい続くとされます。

「こんなもの詰まん！」

と思う方は、読まなくても大丈夫です。

この後の内容に関するかどうかはまだ未定ですので。

根性のある方や、心の広い方はどうぞ、読み進めてくださいませ。

六時に起きる。起きて家には誰もいない。

姫は、風紀委員つてのに入ってるから五時に学校に行く。朝ごはんはしっかり用意してある。

・・・何時に起きてるんだろう？つーか何時に寝てるんだろう？

そんなことを考えながら、準備を終わらせて家を出る。

学校へ着いて一番に出くわしたのは、クラスの友達(?)。話しながら教室へと入る。次にくるのは女子たち。学校では何気モテル。だってオレ、王子だもん。

・・・これ言ったの姫にばれたら、怒られるな。

正直に言っちゃうと、真面目に授業を受けたことがない。王子、天才だから(と言うより、こいつ等の三つ年上だから)やんなくても関係ない。つーか、必要ねえし♪

気づくと昼休みだった。やる事もないし、姫のクラスに遊びに行こう、そう思ったとき、沢田綱吉がオレのクラスに駆け込んできた。

“悠里が倒れた！”

は？姫が倒れた？何で？

事情を聞きながら保健室に急行。保健室のベッドで姫は寝ていた。顔面蒼白。それが一番ぴったりの言葉だろう。姫の顔は、死人のようだった。

まさか、死んでないよな？生きてるよな？生きてなかったら殺しちゃうぜ？ヴァリアーの皆のところに帰るまで、死んだらダメだかな。

その時だった。

姫の茶色の瞳が見えた。沢田綱吉が、何があったのかを説明する。

オレは一体何があったのか尋ねた。

どうやら姫には、人に見えない奴が見えるらしい。つまりは、幽霊？
笹川が、何かできることは無いか、とやたらに積極的だが、姫はどうでも良いと言った。

よくねえよっ

結局、獄寺の提案によって、霊媒師を呼ぶことになった。

そいつはすぐに来た。姫が、体を起こす。

そして、霊媒師が何かブツブツ言い始めて除霊が開始する。

なんかつまんね。暇。眠い。

バタッ

！！

突然姫が、ベッドに倒れこんだ。それでも霊媒師はブツブツといい続ける。

と、突然違うことを言い出した。

“彼女の体を借りて、言いたいことを言いなさい”

何言ってるんだコイツ？誰に向かって言ってるんだろ？だけど、その声に反応するように、姫がゆっくりと起きた。

ひ、姫？

戸惑うオレをよそに、姫は口を開いた。

“私はコイツを恨み続ける”

は？何言ってるの？姫・・・あ、違う。よくわかんねえけど、コイツは姫じゃない。

“何故あなたは彼女を苦しめるの？”

“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”
よくわからない会話が続く。オレはその会話に耳を傾けた。

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね”

周り・・・？姫は今日しかこいつを見てないって・・・。

そういうことか。姫がコイツを見るのは今日が初めて。でも『こいつ等』を見るのは、初めてじゃないって事か。

“彼らもあなたと同じなの？”

“そうだ。私たちはコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”

“彼女はあなた達に何をしたの？”

“私は・・・私達は・・・皆この女に殺されたのだ！！”

ようやくピースが繋がった。今、霊媒師と話している『こいつ』は、七年前まで姫が暮らしていた町の住人。

嘘だ。沢田がつぶやく声が聞こえた。悠里は人を殺さない、と。

でもオレは、姫の過去を知っている。暗殺者になる前の姫を。それに過去がどうあれオレ達ヴァリアーは殺しを仕事とする暗殺部隊。マフィアになるということは、殺しの道を進むと言うこと。それを拒絶する沢田は、やっぱりボスには向いてない。十代目には、オレ等のボスになるべきだし。

とにかく、姫の過去がこいつ等にばれたら不味い。オレは思い切って聞いた。本当ならば聞きたくないことを。

“お前の望みはなんだ”

“私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”

このつぶざけんな！テメーらの都合で姫を死なせつかよ！多分、初めて憤りを感じた。

何時からだろうか、姫のことを意識するようになったのは。誕生日パーティーだって、昔、姫がやってみたって言うから、ドッキリで用意した。あのときには既に・・・。

“グアッ”

奇妙な声で我に返る。見ると、姫が・・・いや、姫の中のソイツが苦しみ始めた。しかし、突然何かが吹っ切れたように大人しくなり、そして、またゆっくりとベッドに沈んだ。

“ひ・・・悠里”

危うく姫と呼びそうになり、慌てて訂正する。他の奴らも悠里、悠里、と呼んでいる。

しばらくして、姫は目を覚ました。思わず笑顔になる。それは全員同じだった。最後に、姫も薔薇色の笑顔になった。

姫は家に帰ると、相当疲れていたらしく、お楽しみのヴァリアーとの交信前に寝てしまった。

オレは、今日の大まかな流れを説明した。と言っても、体調を崩してしまった、とだけ。幽霊がどうしたと言えば、こいつ等（特にオカマ）が五月蠅い。それに、スクアーロ達に心配をかけたくねえし、姫にこれ以上のつらい思いはさせたくないし・・・・・・。

“ベルちゃん？”

オカマの声で、まだ繋いでたことを思い出した。キーキー五月蠅いルッスーリアは置いて、切り上げる。

きっと明日からは姫も普通の生活に戻れ・・・あり？元から普通じゃねえか。・・・たら良いんだけどな。

50話達成記念パート2 ベルの一日（後書き）

ひっさびっさのヴァリアー登場（笑）

あのゝベルのキャラ崩壊については、なるべくノーコメントでおねがいします。

50話達成記念パート3

ツナの一日

母さんに起こされて一日が始まる。因みに今は・・・8..00。やばいよ！遅刻しちゃう！またヒバリサンに咬み殺されちゃうよ（涙）なんでもっと早く起こしてくれないのかと突っかかると、母さん曰く起こしたのは五回目。おまけにランボにまでバカにされるし、リボーンには蹴られるし朝から最悪だ・・・。

食パンを銜えて急いで家を出る。と、そこで獄寺君とあった。獄寺君は遅刻とか気にしていない様子。獄寺君に喋りながら歩きましょう、と言われて結局学校に着いたときはカンペキに遅刻確定。なんでこーなるかな？

教室に入ると悠里ですらいた。風紀委員の仕事も終わってんのか。おはようと挨拶したけど無反応。それどころかめったに怯えない彼女が、何かを怖がっている様子だった。何があったんだろう。

昼休みになると、仕事があるからと言って姿を消した。それで獄寺君や山本と喋っていると、十分ぐらいたら戻ってきた。

でも顔色が悪い。まるで死人のように青白い。心配で駆け寄った瞬間、悠里は崩れるようにして倒れた。

思わず叫ぶ。それに気づいた獄寺君と山本に悠里を任せて、オレは鐘のいる1-Bに直行した。鐘を見つけると、悠里が倒れたことを伝えた。事情を話しながら急いで保健室に向かう。

悠里はベッドに寝かされていた。Dr. シャマルは貧血か何かだろうと言う。大丈夫なのかな。

心配で見守っていると、しばらくして目を覚ました。現状を分かっているみたいだったから、オレが説明した。鐘が何があったのかと尋ねると、悠里は教えてくれた。人には見えないものが見えるんだと。

京子ちゃんは積極的で、何かできないかと聞いてきた。悠里はどうでもいい感じだったけど、獄寺君の提案で、霊媒師を呼ぶことになった。姿を消した京子ちゃんは一分したらそれらしき人を連れて戻ってきた。ヒバリさんが手配してくれたらしい。ヒバリさんにも優しいところがあるんだ。ちよつと意外。

霊媒師の人が何か、ブツブツと始まった。除霊が始まったらしい。なんだろこれ、聞いてると眠くなってくる。でも皆も同じみた・・・パタッ。え？見ると、悠里が再び倒れた。

それを見計らったかのように霊媒師の人はボソツといった。

“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”

そしてまたブツブツと。すると、悠里がゆっくりと体を起こした。

その時、鐘が何かボソツと言ったけれど、聞き取れなかった。

そして、悠里は口を開いた。

“私はコイツを恨み続ける”

え・・・？

その言葉を聴いて、霊媒師の人は質問を始めた。

“何故あなたは彼女を苦しめるの？”

“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”

会話から、今喋っているのは悠里じゃないって分かる。じゃあ誰なんだろう。苦しめられたって、どういうことなんだろう。

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいる

わね。彼らもあなたと同じなの？”

“ そうだ。私たちはコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”

“ 彼女はあなた達に何をしたの？”

悠里の中の『それ』は、一度唇をかみ締めて答えた。

“ 私は・・・私たちは・・・この女に殺されたのだ！”

えっ殺された！？

嘘だ、無意識的に声が出る。悠里は人を殺したりしない。絶対にありえないよ、信じられないよ・・・悠里が人を殺すなんて。

確かに悠里は普通じゃない。武器とか持ってるし、ヒバリさんより強いし、たまに殺気とか怖いし。でも、誰かを殺したりはしないはず。

“ お前の望みは何だ”

突然、鐘が『それ』に質問する。

“ 私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”

そんな・・・。“ てんめっ” 鐘はそう呟いた。相当怒っている。拳が強く握られて、怒りで震えていた。

しばらく静かだった霊媒師が、またブツブツと言い始めた。すると、『それ』が苦しみだした。でも、ピタッとやんだと思ったら、静かにベッドに倒れこんだ。

“ ひ・・・悠里”

鐘が叫ぶ。『ひ』って言うのは気のせいだね。

オレたちも、呼び続ける。しばらくして、悠里は目を覚ました。ほっとしてオレたちは笑顔になった。勿論、悠里も笑顔だった。

家に帰った瞬間リボーンに蹴りを入れられた。原因は午後の授業に出なかったこと。一体なんで知ってんだろう。仕方ないじゃん、悠里が倒れて心配で皆で保健室にいたんだから。

でもそれで許すりボーンじゃない。それどころか悠里にも説教する言う。

やめろって、罰ならオレが受けるから。そういったら、宿題を倍に増やされた。終わりそうにない量だ。なんだか大変な一日だ。

明日は学校がないから、獄寺君とか誘って悠里のお見舞いに行こう。

50話達成記念パート4

獄寺の一日

朝8…00に目が覚める。普通なら急がねえと遅刻する時間だが、オレにはカンケーねえ。ヒバリや先公が怖くて十代目の右腕が務まるかテキトーに朝食を食って家を出る。

十代目の家の前を通り過ぎようとしたとき、家の中から十代目が食パンを銜えて飛び出してきた。急いでもなんだから、十代目に喋りながら歩きましょうと提案する。

学校に着くと遅刻だとヒバリに絡まれたがシカトする。教室に入ると、十代目が悠里に挨拶したが、悠里は見事に無反応だった。シカトしてんなよ！そう突っ掛かろうとしたがやめた。悠里が・・・めったにビビったりしないあの悠里が何かを恐れている感じがした。・・・今日は雨でも振るのか？

昼休みになると悠里は仕事と言って姿を消し、オレは十代目や山本のヤローと話をしていた。案外、悠里が帰ってくるのは早かった。十代目が悠里の異変に気づき駆け寄った瞬間、悠里は崩れるように倒れた。十代目が叫びオレたちも駆け寄る。十代目は悠里をオレと山本に任せ、1－Bに鐘を呼びに行った。二人で保健室に運ぶ。

保健室にはシャルがいた。シャルは悠里を見ると、ここまで容姿が男子に近いに関らず、女の子と言って飛びついてきた。が、起きていたのか反射的なのか、悠里の蹴りによって地に沈んだ。・
・バカだ。

心配だったのか笹川も来た。そして十代目が鐘を連れて入ってきた。十代目はずっと心配していた。全く、十代目に心配かけてんじゃねえよ。

その時悠里が目を覚ました。全く状況をつかめてねえ悠里に十代目が説明する。話を聞いて、情けないな、と呟くのが聞こえた。皆で何があったのかと聞くと、渋々ながらも話し始めた。

どうやら悠里には人には見えない奴らが見えるらしい。何だ、妖怪じゃねえのかよ、つまんね。

笹川が悠里に何かできないかと言っていたが、ほんにその気はないらしい。そこで、幽霊がらみなら、と興味本意で霊媒師を呼んでみてはどうか、と提案してみた。そしたら他の奴も興味があったのか、あっさり通った。

一分後、霊媒師は来た。ブツブツと何かを言い始めた。随分と眠い声だな、オイ。

ポテッ

ん？悠里の奴、また倒れやがった。寝んの早くねーか？だが霊媒師はそれを待っていたようだった。

“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”

すると、悠里が体を起こした。そして口を開いた。

“私はコイツを恨み続ける”

声が・・・ちげえ！？

“何故あなたは彼女を苦しめるの？”

“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね。彼らもあなたと同じなの？”

“そうだ。私たちはこの女に苦しめられた者達だ！”

“彼女はあなた達に何をしたの？”

“そこまで来ると、『ソイツ』は唇を強くかんだ。そして言った。

“私は・・・私達は・・・この女に殺されたのだ！”

殺さ・・・れた・・・？いや、でもあいつは人を殺すようなタチじゃねえ。嘘だ、十代目がポツリと呟いた。悠里は人を殺したりしない、と。

そして悠里・・・じゃなくて『ソイツ』は注意しなければ聞こえないほど小さな声で“この女のせいで、私達は命を落とした。いや、それだけじゃない。この女は自分が住んでいた町ごと焼き払った”と言っていた。

“お前の望みは何だ？”

不意に鐘が聞いた。その問いに『ソイツ』が答える。

“私の望み、それはこの女を地獄に堕とす事だ！”

なっ！？てんめっ、鐘がそういったのが聞こえた。恐らくコイツ、そーとー切れてる。強く握り締めた拳が怒りで震えている。

すると、今までの成り行きを見守って（？）いた霊媒師が再びブツブツといい始めた。『ソイツ』は苦しんでいた。そして、ピタリと大人しくなり、悠里はゆっくりとベッドに倒れこんだ。

“ひ・・・悠里”

鐘が叫ぶ。とりあえず『ひ』には突っ込まないで置く。十代目に続きオレたちも悠里の名前を呼んだ。しばらくして、悠里は目を覚ました。オレたちはほっとして、そして緊張が解けて笑顔になった。悠里と共に。

家に帰り、ベッドにダイヴする。やけに眠い。

プルルル

電話だ。十代目からだった。明日、皆で悠里のお見舞いに行こうと誘われた。もちっス。そう答えて電話を切る。

・・・ん？『皆で』ってことは山本のヤローのくんのかよ・・・←

←

朝五時起床。六時には朝練が始まるから、これくらい早く起きなきゃならない。親父なんて、仕込があるつつつて四時には起きてっからな（笑）

学校にはランニングで向かう。野球部で最も早く学校に来て人一倍練習している。

オレが来てから数分後、他の部員たちもやってくる。

朝練が終わり、教室に行く。既に悠里がいた。

今日は早いかな。いつもだったら、見回りとか書類まとめてギリギリまでこねーのに。

軽く挨拶したけど、何の反応も無かった。というより机に突っ伏してたから寝てんのかもな。

登校時間を過ぎてから、ツナと獄寺が来た。まあ、先生も来てないしセーフだな。

昼休み、悠里が風紀委員の仕事でいなくなったから、ツナや獄寺と喋っていた。

悠里は意外と早く戻ってきた。ツナが、様子がおかしいと駆け寄っていた。けど、その瞬間に悠里は崩れるように倒れた。ツナが叫

ぶのと同時にオレたちも駆け寄る。

ツナは、オレと獄寺に悠里を任せると1ーBに鐘を呼びに行った。オレと獄寺は、悠里を担いで保健室へと向かった。

悠里の顔は真っ青で、まるで幽霊そのものだった。

保健室にはDr. シャマルという、ツナと獄寺の知り合いがいる。保健室についたオレたちは、ベッドを貸してもらえるように頼んだ。するとシャマルは悠里を見たたん、可愛い女の子お〜とか言いながら飛びついてきたが、悠里の顔面蹴りによって地に伏した。

あれ？起きてんのか？

そう思ったが、悠里はまだ気を失ったままだった。

そして心配したらしく、笹川も来た。少し遅れてツナと鐘も入ってきた。

ツナはずっと大丈夫かな、と心配しっぱなしだし、獄寺はイライラしてるっぽいし、鐘なんてメツチャそわそわしていて、誰一人落ち着かない雰囲気。

そんな中、ようやく悠里が目を覚ました。何があったのかイマイチ分かっていないらしいので、ツナが現状を説明した。鐘は何があったのか聞いていた。なんか悠里には、人には見えないもの、つまりは幽霊が見えるらしい。

笹川が心配して、悠里に何かできないかと聞いていたが、本人はどうでも良いらしく、曖昧な答えしか返さなかった。そこで、獄寺の提案で霊媒師って言うやつを呼ぶことになった。

そして一分後、その霊媒師が来た。何でも、ヒバリ自ら手配したらしいぜ。

霊媒師が何かブツブツと言い始めた。

眠っつ。。

ふぁゝあ。

思わず出るあくび。

ドサッ

あ・・・悠里、倒れた。大丈夫か？

と、そこで霊媒師は一旦ブツブツ言うのを止めた。

“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”

え、幽霊マジでいんの？

“私はコイツを恨み続ける”

あ、マジでいた。

“何故あなたは彼女を苦しめるの？”

“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね。彼らもあなたと同じなの？”

“そうだ。私達はコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”

なんつーか、話についていけねえし。

“彼女はあなた達に何をしたの？”

“私は・・・私達は・・・この女に殺されたのだ！”

ん？なんか、シリ阿斯系になってね？大丈夫なのか？

嘘だ、ポツリとツナの声が聞こえた。悠里は人を殺したりはしないと。確かに同感だな。人殺すような極悪人でもないしな。

次に口を開いたのは鐘だった。

“お前の望みは何だ”

それに対し、返された答えは

“私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”

・・・それは拙いんじゃない？

てんめっ、鐘が呟く声が聞こえた。強く握り締めた拳が怒りで震えているのが見て分かる。

鐘って滅多に怒らないキャラだけあって、キレルと怖えのかな？

そこで、成り行きを見守っていた霊媒師が、またブツブツと始まっ

た。そしたら幽霊が、

苦しむ↓大人しくなる↓パタッ
って感じになった。

“ひ・・・悠里”

鐘が叫ぶ。何故か最近、鐘が悠里を呼ぶとき『ひ』がつくのな。な
んでだろ？

オレたちも名前を呼んでると、しばらくして悠里が目を覚ました。
ほっとして、オレたちは笑顔になった。勿論悠里も一緒にな♪

家に帰ったら、親父の拳骨が振ってきた。悠里の事があったとはい
え、午後の授業サボっちまったもんな（苦笑）

プルルル

電話が鳴る。ツナからだった。明日、皆で悠里の見舞いに行こうと
誘いの電話。了解して電話を切る。

明日、あいつの好きなサーモン持って行ってやるか。

50話達成記念パート6

京子の一日

朝六時。昔から目覚ましがなくてもいつもこの時間に起きられる。お兄ちゃんのご飯、作ったりしないといけないし。

花と一緒に学校に行くと、もう悠里君がいた。朝の見回りとかあるのに、何時に来てるんだろう。でもやっぱり疲れてるみたい。おはようって声をかけようと思ったら、寝ちゃってた。

大丈夫かな？女の子に寝不足は良くないのに。それでも授業前には起きたし、大丈夫だよ。

昼休みになると、悠里君は書類をまとめなきゃ、って教室を出て行っちゃうし、花とお喋りしてたら突然ツナ君の叫ぶ声が聞こえた。見てみると、山本君と獄寺君がぐったりしてる悠里君を運び出しているところだった。

見ていた人に聞いたら、悠里君が突然倒れちゃって、それで山本君と獄寺君が保健室に連れて行ったんだって。

ビックリして保健室に行ったら、悠里君はベッドに寝かされていた。シャマル先生は貧血だろうって言ってたけど、やっぱり寝不足だったのかな？

少ししたらツナ君と鐘君が来た。悠里君を心配してる鐘君は、なんだか私のお兄ちゃんみたいだった。妹を持つお兄ちゃんって、みんな

な似てるのかな？

そんなことを考えてたら、悠里君が目を覚ました。ツナ君が何があったのか説明したら、情けないなって小さく聞こえた。鐘君が悠里君に何があったのか聞くと、今日あったことを全部教えてくれた。悠里君には人には見えないものが見えるんだって。それで、今日は朝から付きまとわれて大変だったらしいの。

心配だったから何かできないか聞いたのに、悠里君はあんまり気にしてないみたいで、曖昧な返事しか返してくれなかった。そしたら、獄寺君が霊媒師を呼ぼうって提案してくれて、急いで職員室に向かった。

先生に、事情を説明したら、そういうことはヒバリさんに頼んだほうがいいって聞いて、今度は応接室に向かった。

ヒバリさんは一人でお仕事をしていた。邪魔しちゃいけないかな、と思ったけど、一応話をしたら、霊媒師さんと呼んでくれた。ヒバリさんにお礼を言って、霊媒師さんを連れて保健室に向かった。

保健室に着いたら、霊媒師さんは悠里君を見ると、すぐにブツブツと何かを言い始めた。

うわぁ、霊媒師さんに、除霊って憧れるな。今度ハルちゃんと一緒にこういう格好をして遊ぼうと。

そんなことを考えてたら、なんだか眠くなってきた。

フツと悠里君が倒れる。そしたら霊媒師さんが

“彼女の体を借りて言いたいことを言いなさい”

って。幽霊さんに話しかけてるのかな？悠里君が体を起こす。

“私はコイツを恨み続ける”

あれ？今の声誰だろう。悠里君が言ったように見えただけど、声が違かったし、誰だろう。

“何故あなたは彼女を苦しめるの？”

“私が苦しめたのではない。こいつが苦しむのは自業自得だ”

“彼女の周りには、あなたの他にも、あなたと同じ境遇の人がいるわね。彼らもあなたと同じなの？”

“そうだ。私達はコイツに、この女に苦しめられた者達だ！”

霊媒師さんと幽霊さんの会話が続く。苦しめられたってどういうことだろう。悠里君がづらい思いをしているのはこの人のせいなのに。

“彼女はあなた達に何をしたの？”

“私は・・・私達は・・・この女に殺されたのだ！”

え・・・・・・？殺された？ウソだね。だって悠里君は優しいし、確かに女の子なのに男の子の格好をしてたりで、よく分からないこともあるけどいい人だよ？それなのに・・・・・・。

嘘だ、ポツリとツナ君が言った。悠里は人を殺したりしない、って。

“お前の望みは何だ”

突然、鐘君が質問をした。

“私の望み、それはこの女を地獄に堕とすことだ！”

ダメだよそんなの！いくら憎くても人を殺すことが望みだなんて・・・。。

そんな時、霊媒師さんがまた何かを言い始めた。そしたら、悠里君（？）が苦しみだして、また大人しくなって、倒れちゃった。

なんだろう。

“ひ・・・悠里”

鐘君が叫んで、それに続いて私たちも悠里君を呼んだ。しばらくして、悠里君は目を覚ました。

よかった。思わず笑顔になる。ツナ君たちも霊媒師さんも、そして、悠里君もみんな笑顔だった。

家に帰ったらお兄ちゃんにすごく心配されちゃった。私が午後の授

業に出なかったことを花から聞いたらしくって、私が調子が悪いんじゃないかって。だから、今日あったことをみんな話した。

全部話し終わったとき、丁度電話がなった。ツナ君からで、明日みんなで悠里君のお見舞いに行こうって誘われた。うん分かった、と
いって電話を切る。

悠里君、早く元気になるといいな。

50話達成記念パート6 京子の一日（後書き）

京子は、悠里が女であるを知っているが、悠里『君』と呼んでお
ります。

理由は、・・・・・・・・よく分からない。

箸休め

作者「終わったーっ!!」

リボーン「オメー何やってんだ？」

作者「とある一日を、それぞれの視点で書いてみたんすよ」

リボーン「何でそんな面倒なことしてんだ」

作者「いやゝ、本当は『主人公ちゃんは幽霊が見えます。あーそうですか。ハイハイ』的なカンジにしようと思ってたんだけど、シリアス系になっちゃった」

リボーン「真面目にやりやがれ（チャキツ）」

作者「ごごごごめんなさい!!」

ハル「何でハルを出してくれないんですかゝゝゝ」

作者「だって学校が違うし関れないじゃん」

ハル「ハルはツナさんと同じ並中に転入したいです!」

ズガン

ハル「はひいっ!?!」

リボーン「ギヤーギヤーうるせーぞ」

作者「全く危ないなあ。私のコーナーで暴れないでよ」

雲雀「僕の出番が少ないよ」

作者「あ、雲雀さん。出ただけいいじゃん」

雲雀「良くない。咬み殺す」

作者「だ〜か〜ら〜私のコーナーで暴れないでってば」

三人「誰がお前(君) (あなた)のコーナーだ(だい) (ですか) !」

作者「私が居なくちゃ誰もここに出れないくせに(ボソ)」

三人「……(汗)」

ベル「つーか、何で幽霊なんだ？」

リボーン「オメェ何時から居た？」

ベル「ししっ最初っから」

ハル「えっと、誰ですか？」

ベル「オレ？オレはベルフェゴール」

作者「何で来てんの！？主人公ちゃんは！？」

ベル「家で寝てるぜ」

スクアール「うゝおおい!! オレたちも出せえ!!」

美鈴「うるせー黙れカスザメ!」

ベル「あ、来た」

ハル「あの……今の一言で大人しくなっちゃいましたけど」

美／＼「え?」

スクアール「……………」↑拗ねた

全「ええゝ!!?」

雲雀「詰まらない。帰る」

作者「じゃねゝ」

美鈴「ってかどうしたの? みんな集まってさ」

作者「ん? お喋り会」

美鈴「ふゝん」

ハル「そろそろツナさんが恋しいので、ハルは帰りますね」

作者「さよならゝもう来なくていいよゝ」

美鈴「酷いな作者」

リボーン「作者とお前ってほぼ同じ人間だろ？」

作者「ち、違うよ……一応」

ベル「そういえば、お前と姫の誕生日って、同じだよな」

作者「ああっ!!」

全「(ビクウツ)」

作者「そうだよ! 変なのかいてる内に誕生日迎えちゃったじゃん!」

リボーン「つーことは、ボンゴリアン・バースデイ・パーティーだな(ニツ)」

美鈴「ちょっと待った! 私はやったばかりじゃないか? ここは作者だけでやってもらおうじゃないか」

作者「あっはっはく何いってんのさ君。私は今年で十五歳……しまった! 奇数才だ!」

リ／美「(ニヤリ)」

作者「ゾクリ」

ベル「ってかどうでもいいけどさ、ハンバーグ作って姫」

美鈴「そっちのほうがどうでも良くない!? っていうか、そこに来

る経緯が分からないよ!？」

ベル「だってお腹すいたし」

全「(グウ~~~~~)」

美鈴「何人居るの?……点呼!」

リボン「いーち」

ベル「にー」

スクアーロ「さん」

作者「しー」

雲雀「ご」↑あれ?

ハル「ろく」↑オイ

ツナ「なな」↑……

山本「はち」

獄寺「きゅー」

京子「じゅう。いいのかな?」

ビアンキ「じゅういー」

美鈴「ってちょっと待った！あんたら何時来たの！？」

雲／ハ／ツ／山／獄／京／ビ「いま」

美鈴「……（汗）あと何人いるのさ」

ランボ「ランボさんも居るもんね！」

イラッ

美／作／獄「消えろアホ牛い！」

ドガッ

ランボ「ぐぴゃあああっ！！」

ハル「はひひひランボちゃんが飛んで行っちゃいました」

ベル「姫こえっ♪」

マーモン「僕たちも居るよ」

ルッスーリア「美鈴ちゃんがハンバーグ作ってくれるんですって？」

美鈴「にゃーマーモン！（ムギユッ）」

男全「（うわー羨ましい）」

マーモン「美鈴、皆の視線が痛いから離してくれるかな？」

美鈴「はっ！ごめん、つい」

マーモン「君たちも出てきなよ」

全「?？」

レヴィ「ぬう……」

XANXUS「ハッ カスが」

美鈴「え？ボスまで？」

レ／X「グゝゝゝ」

美鈴「アハハ……」

？「クフフ…僕たちもい——」

作者「わーダメー！読者さん混乱しちゃうしネタバレ自重！」

？「……仕方ないですね。スグ出してもらいますよ」

作者「ふー（汗）」

ベル「今の誰？」

スクアール「さあな」

和／理／隼「私たちも居たりするよ」

ツナ「あ、出た。姫獄Sの三人」

美鈴「おひさ」

和「私たちも入れてもらおうじゃないか」

作者「実はコイツも誕生日一緒（ボソ）」

和「なんか言った？」

作者「別に」

美鈴「えっと改めて人数は……十八人か。すぐ作ってくるよ」

（二十分後）

美鈴「できたよ」

全「はやっ!？」

美鈴「ルッスの手伝いしてたから、料理の早作りは慣れた」

ルッスーリア「あら、ホント? 嬉しいわぁ」

リボーン「そんじゃ、早速食べるぞ」

全「いただきます」

ツナ「そういえばこれって、元々は和たちが乗っ取った、後書きの

スペースだったんだよね？」

獄寺「そういえばそんな設定でしたね。おい作者！どうなっている」

作者「ほら、今回がいつもと違ったでしょ？だからついでで今回のこれでもいいやっちゃえてカンジで」

獄寺「なっ……テキトーなヤツ」

作者「私だって言いたいこといっぱいあるのに、コーナーを乗っ取られたり、スペースが無かったりって大変なんだよ！」

山本「なるほどな」

リボーン「ところで、何でさっきピーが来たんだ？」

作者「ん？いやあ最近そろそろ黒曜編に入ろうかなうなんて」

リボーン「そうか」

ツナ「コクヨウヘン？」

美鈴「何それ、おいしいの？」

ベル「食べるもんじゃねえだろ」

ビアンキ「愛があれば平気よ」

ツナ「そこ！？」

雲雀「君たち五月蠅いよ。食事のときぐらい静かにしてくれる?」

ツナ「ごっゴメンナサイ!」

美／＼「(プイッ)」

京子「ねえ、悠里君はどこかな?」

ハル「そういえば見てませんね」

獄寺「鐘のヤツもいねえしな」

美／＼「(ギクリ)」

作者「二人ならスグそこ——」

美鈴「だっ誰?その悠里って人」

ベル「鐘なんてオレもしんねえし」

リボーン「何でオメーらが焦ってんだ?」

スクアール「うゝおい!美鈴^{みれ}え!お代わりあるかあ!」

美鈴「無いよ(にっこり)」

スクアール「……(ポテッ)」

ルッスーリア「あらあら、スクアールが固まっちゃったわよ」

マーモン「僕のを分けてあげるよ」

スクアール「お、おう。すまねえ」

XANXUS「カスザメが」

スクアール「んだとXANXUS！」

美鈴「スクアール、落ち着きなよ（ヒュン）」

スポッ

スクアール「……！！！」

ルッスーリア「まあ、久々に出たわね。おにぎり」

スクアール「んんん……！（久々にもほどがあるぞ！！）」

リボーン「今度ツナにもやってみるか」

ツナ「やめて！リボーンがやったら死にかねないから！」

というわけで、ご飯time終了。

全「はやっ！？」

作者「アハツ★」

ハル「そろそろお開きなんですか？」

獄寺「ちょっと待て。その前に気になることが」

ツナ「あ、うん。オレもある」

作者「何？」

獄寺「あの黒いヤツら誰だ？」

黒い奴ら..

美鈴・ベル・スクアール・ルッスーリア・マーモン・レヴィ・XANXUS

ヴァリアー全「アハッ★」

作者「キャラ崩壊しちゃダメだよ！特にXANXUS！」

美鈴「フツッまあ、その内また会えるさ」

？「●◆＋＊♪▲@」

ハル「はひっまた小さな可愛い子が」

リボーン「“自分の出番はまだか”」

作者「大丈夫！次の話から出るので。それでは」

全「チャオチャオ〜！」

嘘か真かそれとも（前書き）

すいやせん

前回、イーピンが出てくるような事言いましたけど、まだでないッ
ス。

嘘か真かそれとも

これは、あの幽霊騒動の次の日の話。

〳五月宅〵

ピンポーン

美鈴「む。お客さんなのだ」

ベル「姫はまだ安静に寝てろよ。オレが出てくつから」

美鈴「ん。任せた。だけど」

ベル「なに？」

美鈴「もし来たのがツナたちで、上がりたいと言ったら、ここまで連れてきて」

ベル「……なんで？」

美鈴「私もあいつらに用事がある」

ベル「わかった。でも、姫は大人しくベッドの中にいろよ」

美鈴「わかってる」

ガチャ

鐘「やっぱり、あんた等だったか」

ツナ「突然大勢で来てゴメン。悠里のお見舞いに来たんだ」

山本「心配だしな」

獄寺「ケッ」

京子「悠里君、大丈夫？」

リボーン「ちゃオッス」

鐘「（限度を考えろっての）

いいぜ。アイツもお前らが来たら部屋に通すように言ってたからな」

リボーン「話が早いな。早速案内してくれ」

ツナ「ちよっリボーン！人ん家にきといてメーワクかけんなよな！」

鐘「（この状況が既にメーワクって気づかねーのか？）

ま、いいか。付いて来いよ」

ゾロゾロ

ガチャリ

悠里「…やっぱり皆だったんだ」

ツナ「悠里、体調はどう？」

悠里「すこぶる悪いぞ」

獄寺「とか言ってる割には元気そうじゃねえか」

悠里「悪かったね、普段から血色良くて」

山本「まーまー落ち着けて。オレたちお見舞いに来ただけだしよ」

ツナ「それと……その……どうしても教えてほしいことがあるんだ。悠里の過去のことを」

悠／鐘「……！」

鐘「それは……」

悠里「そうだね。僕もそろそろ言おうかと思ってたころだし」

鐘「なっ……！？」

悠里「昨日、僕の意識が無い間にどんな会話が行われていたか知ってるんだ」

京子「知ってたの？じゃあ、あれは本当なの？」

悠里「それも含めて、全て話す。」

僕が生まれたのは、小さな町だ。決して裕福なわけじゃないが、不自由も無く過ごすことができた。

父親はヤクザ、母親はマフィア。あの町は、普通の人の道を踏み外した人間が集う、寂れた村だった。だから僕も、気づけば何かにこじつけては兄たちと喧嘩してた。

そしてある日、町はマフィアに襲われた。家族は殺され、町が焼かれ、僕を除く全ての人間がこの世から消え去った」

リボン「ちょっと待て。そしたらどうしてお前は生きている？他の奴らが全員殺されたにも関わらず、何故生き延びることができた？」

悠里「そんなの、こっちが聞きたいよ。僕の右目が赤いのは、その時浴びた血がその事件を僕に刻み込んだ証だ。

これは全て、僕が六歳を向かえた日に起こった」

ツナ「た、誕生日に！？」

京子「酷い……」

悠里「その後、どうやってその町から逃げたのかは覚えていない。気がついたら、今の家族、つまり鐘の家族に拾われて、生きていた」

獄寺「それって要するに…」

鐘「オレとコイツは血が繋がってない、元は赤の他人だよ。」

出かけた帰り道、血まみれになって倒れているコイツを見つけた。そういうことだよ」

悠里「そして僕たちは、今はボンゴレの人間」

全（京除く）「!!？」

京子「??」

悠里「日本に来たのは、同い年のボス候補を見たかったからだ。興味があつた。どんなヤツなのか。実際にあって、友達になってもよく分からない」

ツナ「……………」

悠里「僕から言えることは、これだけだ。昨日言っていたアイツは、当時の親友だった」

リボーン「なるほどな。七年前の事件“町焼失事件”か」

獄寺「あれ、ですか？」

ツナ「なにそれ？」

リボーン「マフィアが手を下したとしか思えない、あまりに残酷な事件だ。だが、生き残りはいないとされてきていた。……いたんだな、こんな近くに」

鐘「なあ、もうそれぐらいにしね？これ以上、こいつが苦しむのか、オレやだしさ」

京子「そうだよね。そろそろ帰ろっか」

ツナ「そうだね。悠里だって、まだ体調悪いんだし」

山本「っとそうだ。親父に頼んでサーモン握ってもらったぜ」

悠里「……ありがとう（フツ）」

獄寺「それじゃあ、帰りましょう、十代目」

ツナ「うん。じゃあね、悠里。お大事に」

リボーン「チャオチャオ」

ボタン

ベル「……姫」

美鈴「なに？」

ベル「さっき言ってたのって、本当か？」

美鈴「本当。全て、私の記憶に刻み込まれた真実」

ベル「そっか。」

（おかしい。昔、オレたちに話してくれたことと、何もかも

が違う」

美鈴「どうしたのベル？」

ベル「いや、なんでもない」

美鈴「そう。私、寝るから一人にしてくれる？」

ベル「昔みたいに添い寝してやろっか？」

美鈴「いくらベルでもぶっ飛ばすよ」

ベル「じよ、冗談だっつーの」

ボタン

美鈴「ふう〜（ドサツ）」

（この違和感は一体なんだろう。私は記憶にあることを全て話した。なのに……

どうして偽り感があるんだろう）

ベル「姫に何があったんだ？スクアーロたちの言っていた、力の暴走が始まってんのか？」

（一体何があったんだよ、姫）」

ツナ「人の過去を根こそぎ聞いて、満足かよりボーン」

リボーン「満足はできねーな。でも、アイツが嘘を言ってるようには見えねえ」

ツナ「なんだよ、納得いかないのって」

リボーン「ツナ、悠里はイタリア出身なんだよな？」

ツナ「そーだけど、それがどうかした？」

リボーン「町焼失事件”が起こったのは、日本なんだ」

ツナ「!？」

リボーン「だが、ヤツがボンゴレであることは間違いない。九代目が言っていたからな」

ツナ「九代目が？」

リボーン「ああ。オレはツナのかてきょーと一緒に、五月悠里のかてきょーも任されていた」

ツナ「は？」

リボーン「記憶が戻らないように、しっかりと見張っているとな」

ツナ「ちよっそしたらなんかおかしくくない!? だって、悠里はオレ達に過去を教えてくれたじゃないか！」

リボーン「だからこそ、納得いかねーんだ」

(後で、ディーノに調べてもらうか)

嘘か真かそれとも（後書き）

主人公の記憶は混乱中です。コイツは本気でこの記憶が正しいと思っています。

この記憶がどこから来た物なのか、その内やります。

・・・多分

記憶の隅のあの子は一体（前書き）

今回は、骸っちゃんのリクエストにより、ヒバリさんと美鈴の絡みを入れてみました。

骸っちゃん、気に入らなかったら、いくらでも言ってください。

記憶の隅のあの子は一体

目の前にちらつく、栗色の髪。

自分を怖がらない、純粹無垢な笑顔。

僕を初めて受け入れてくれた――――

パチッ

……またあの夢だ。いつしか封印したと思われた、謎の少女の記憶。

「ふあゝ」

いつからだろうか。昔に会った幼い少女、彼女がここ最近、夢に出てくる。

名前は思い出せない。

「君は一体誰なんだい？」

？「うええええん」

泣き声が聞こえる。誰のか知らないけど、耳障りだ。

少し歩くと声の主はいた。

栗色の髪をポニーテールで束ね、少し男子っぽい服を身にまとった
幼い少女。

「ここで何してるの？」

？「ヒック……お兄……ちゃんと……はぐれちゃって……家が分からな
いの……」

迷子か。面倒だけど、並盛の風紀を乱すことは許されない。

「家はどこ。僕はこの町が好きだからね、隅々まで案内できる」

？「！本当ですか！？ありがとうございます！お兄ちゃんの名前は
なんていうんですか？」

「僕は、

雲雀恭弥」

？「それじゃ、ひばにいつて呼びますっ。

私の名前は、—————です！」

！！？

聞き取れなかった。

いや、そこだけ空間が削り取られたかのような感覚だった。

僕は、その少女の言葉を頼りに、道を進んでいく。

ソレは、この僕ですら確認のできていない道。

この少女、何者？

？「うぐ……お兄ちゃん……」

家にたどり着くことができずにいると、いつの間にか日は傾き始めていた。

雲雀「ねえきみ、この道で本当に合ってるの？」

？「分からないです……気配が遠すぎて……」

気配が遠いって、明らかに家と方向が違うってことだね？

？「ちょっと待っててください。ひばにいの力があれば、きっと見つかるかもです」

僕の……力？どういうこと？

少女に強く手を握られる。

その瞬間、意識が急に遠のき始めた。

雲雀「くっ……」

それでも何とか持ちこたえる。

？「良かった。やっぱりひばにいは強い人です」

雲雀「一体何を……うぐっ」

その時だった。少女の体が淡く光りだし、僕たちの周りに、沢山の布が現れた。

目の前で起こっていることがわからずに、ただ呆然と立ち尽くす。

？「いた」

少女が呟いた瞬間に、崩れ落ちた。慌てて支える。

……僕は一体何をしているんだ？らしくない。

気づけば、意識もハッキリして、万全の状態だった。

？「ひばに……北に769m、東に30mです」

雲雀「そこが君の家なの？」

？「はい……」

どうやら今の彼女には立つ力は無いらしい。仕方が無いから、背負っていくことにした。

言われたとおりに進むと、一軒の家があった。

雲雀「ここ？」

その瞬間、家の中から一人の少年が飛び出してきた。

？「姫っどこに行ってたんだよ！？」

？「よかったあ」

どうやら彼が、兄らしい。

？「ひばにありがとう」

純粹無垢な瞳。無邪気な笑顔。

それは、僕には決して向けられるはずの無いものだった。

ふと、家の表札に目が行く。

『五月』

ハッ

さっき、聞き取ることのできなかった少女の言葉が蘇る。

？「私は、五月美鈴ですっ！」

同時に、また少女が名乗っていた。

夕日のせいなのか、彼女の頬は、ほんのりと赤く染まっていた。

五月美鈴。僕を恐れなかった、唯一の人間。

応接室で、黙々と仕事を進める。ふと、同じように黙々と進める彼女の姿が目に入る。

黒い髪で男子のような風貌。だけど、その下は、あの少女のように栗色の髪が隠れている。

屋上でこいつと戦ったときから、『美鈴』を思い出していた。

悠里、君はあの少女なのかい？

イーピン

美鈴「今日は平和な一日でありますように」

ベル「何やってんの？」

美鈴「ん？最近疲れる事だらけだから、お祈りしてんの」

ベル「でもなんでご飯中に？」

美鈴「気にすんな♪」

ベル「気にしろよ！

　　そういえば、あの幽霊たちどうなったの？」

美鈴「あいつ等？見えなくなったよ。その代わり自縛霊とかだったらしいけど」

ベル「え———（呆）」

美鈴「ま、全然オツケーだけどね。

Let、s enjoy in today♪」

ベル「テンション高っ！」

（学校）

メンドイからもう放課後。

全「え~~~~~!?」

屋上にて。

悠里「いい天気だなあ」

山本「気持ち良いのな」

リボーン「お日様は健康にいいんだぞ」↑え? そうなの?

ツナ「オレ、全然そんな状況じゃないんだけど……」

? 「●◆♪σΠα▲」

ツナ「何でオレばかり殺されかけんの!？」

リボーン「イーピンだって殺し屋だぞ。ターゲットが誰か、なんてカンケーねえぞ」

悠里「それにしても、香港の殺し屋が来るとはね」

イーピン「βγπ○☆∴」

リボーン「“お師匠様に報いるためにお前を倒す”」

獄寺「十代目! オレが今助けます!」

悠里「ってか僕たちだけで話を進めて良いの? 多分、読者の人、イーピンを理解してない人いるよ?」

えっと、イーピンは香港からやってきた殺し屋で、今はツナを殺そうとしています。

山本「作者、なんかあったのか？」

早く黒曜編に入りたいそうです。

ツナ「リボーン！ヘルプ！」

リボーン「仕方ねえな。おいイーピン。お前の技ダセェから諦めろ」

悠里「それは挑発というのでは？」

イーピン「（ピタッ ザバァ）」

ツナ「うわぁ汗すげ——！！！！」

リボーン「よし。これで“ピンズじげんちようばく 箇所時限超爆”に切り替わったぞ」

悠里「アホタレー！僕たちも殺す気かい！？」

獄寺「おい悠里、どうした！？」

悠里の代わりに答えてあげるよ。恥ずかしさが頂点に達したイーピンの頭には九箇キュウビンが現れて、時とともに一つずつ減り、一箇イーピンになったとき全身の汗腺から餃子ガスを一気に噴出して爆発します。

ツナ「ちよっそれヤバイよ！」

ビュッ

獄寺「十代目、パス」 ポーイ

ツナ「戻さないでよ！」 シュッ

悠里「トス」 とんっ

ツナ「だから戻すなーっ!!」 ビュッ

山本「ん？オレんどこ来た」

ツナ「そうだ！山本、思いっきり投げて!!!!」

山本「んしょっ」 ゴッ

ヒュ——————————

ドオオン

ゝ沢田家ゝ

ツナ「何も、ぐるぐる巻きにしなくても」

獄寺「何言ってるんスカ。コイツは十代目を殺しに来たんスよ…」

ツナ「でも、根はいい奴だと…」

リボーン「お前、この写真の奴を殺せって言われたんだろ？」

イーピン「（コクリ）」

リボーン「これはツナじゃないぞ」

イーピン「！！」

悠里「れどれど？」

獄寺「な！？」

山本「あ…！」

ツナ「誰だよこれ——っ！！！」

イーピンはど近眼だった。

リボーン「まだまだ未熟だな」

こうしてイーピンは未熟な己を鍛錬すべく、日本で修業を始めたのだった。

イーピン（後書き）

全「短っ!?!」

イーピン「^¥」

リボーン「“もっと出してほしかった”」

作者「ゴメンちゃいっ★」

イメチェン

キンコーンカーンコーン

先生「それではH・Rを始め（ガラッ）」

？「すみません、遅れました！！」

先生「あなたは誰ですか？茶色で短髪の生徒なんてこのクラスにはいないですけど」

？「んお？アハハハッ！なくに言ってるんですか先生。私ですよ、悠里！」

ツナ「なっ！？」

獄寺「は！？」

全「見えね————っ！！」

（放課後）

ツナ「ちよっ悠里！？何があつたの！？」

悠里「にひひ。実は昨日恭弥に怒られちゃって（笑）」

獄寺「怒られた？」

悠里「うん」

＝回想＝

雲雀「悠里、ちょっといい？」

悠里「何？何か問題でも？」

雲雀「明日から、その髪と口調、直してきなね」

悠里「は？え？なんで？」

雲雀「僕とキャラが被ってムカつくから」

悠里「理不尽だーっ」

＝了＝

悠里「的なことがあって」

ツナ「それ、ヒバリさんが正しいと思う」

山本「悠里というと、なんかヒバリというみてーな感じになるしな」
獄寺「そうだな。それに、女子ならもっと女子らしくするのが普通じゃねえか？」

悠里「（ガーン）なんだよみんなのイジワル
シクシクシクシクシクシクシクシク」

ツ／山／獄「（え〜〜〜〜〜〜〜〜！！?）」

悠里「（それに、ホントはそれだけじゃないんだよな）」

＝回想＝

雲雀「それと、髪のことだけど、別にカツラでもいいから、君の本
当の色に直しなね」

悠里「ホントの色!?!ど、どうして……」

雲雀「色をごまかしてる時点で校則違反だからね」

悠里「……………そこ、どうしてもよくない?」

雲雀「良くない」

＝了＝

悠里「あゝ鬼だあ。鬼がいるよ」

ツナ「で、でも。そっちのほうが悠里っぽいし、いいと思うよ（こ
こまで女の子っぽい悠里、初めて見た／＼／＼）」

獄寺「十代目の言う通りだぜ（コイツってこんなに可愛い奴なんだ

な／＼／」

山本「ああ。似合ってるぜ／＼／／／／／」

悠里「ほ、本当に……?」

ツ／山／獄「うん／／／／／」

悠里「顔、赤いけど?」

ツ／山／獄「気のせい!!」

イメチェン（後書き）

獄寺夫人「美鈴め……呪ってやる」

姫／S「バカだな」

ディーノ

ある日の登校中。

悠里「なにこれ？」

鐘「さあ？」

二人の目の前には黒い集団が。

悠里「あのく通してもらえますか？」

男「ダメだ。ここは沢田家の人間しか通せない」

悠／鐘「（理不尽だーっ！！）」

悠里「まったく。おいダメツナーッ！！」

ガラガラガッシャーン

ガチャッ

ツナ「あ、悠里、鐘！おはよう」

悠里「おはようもいいけど、何なのこいつ等」

男「沢田さん、この方は？」

悠里「私はツナの幼な———」

リボーン「ツナのファミリーだぞ」

悠里「ってうおい！勝手に言うな！」

リボーン「事実だろ」

悠里「認めてない！」

男「！そうでしたか、沢田さんのファミリー……！」

悠里「そっちも納得しないで！」

？「お、ツナのファミリーか」

鐘「??:?」

悠里「そのタトゥーは確か…跳ね馬ディーノ？」

ディーノ「オレのこと知ってんのか」

悠里「うん。まあ」

今更だけど、ヴァリアーに入隊してから、美鈴はマフィアについて、特に通りなのある有名な人については色々勉強していたのだ。

ベル「姫よく覚えてんね。オレ忘れてた（コソ）」

ディーノ「オレを知ってるってことは、お前もマフィアなのか？」

悠里「まあ一応ボンゴレだし」

ディーノ「何！？そいつはすまねえ。ボンゴレファミリーの奴の顔と名前は全員覚えたつもりだったんだけどな」

悠里「気にしないでいいから。どーせ影薄いし……」

鐘「(っっていうか、ばれたらそれはそれでアウトなんだけどな)」

ディーノ「ま、改めてだ。オレはキャバッローネ十代目ディーノだ」

悠里「五月悠里ッス！」

鐘「五月鐘」

ディーノ「通り名とかあんのか？」

悠里「ない(マジ)」

鐘「ない(嘘)」

悠里「と言うよりも、こうしてる時間は無いのですが」

ツナ「え？わあっ遅刻！それじゃっディーノさん！」

ダダダダッ

悠里「それで置いてくダメツナがあー！！」

タタタッ

鐘「おいっちょっ待てっ！」

タタタッ

ディーノ「あの悠里って奴、なんか気になるな」

リボーン「だろ？九代目が目え付けてっからな」

ディーノ「ほー」

リボーン「今日、アイツと手合わせしてみろ」

ディーノ「は！？女子相手にか！？」

リボーン「アイツ、相当強えぞ」

ディーノ「マジかよ（汗）」

？「やってやれよボス」

ディーノ「ロマーリオ……」

ロマーリオ「ボス前に言ってただろ。知らない人とも仲良くなりた
いってな」

ディーノ「そうだな。いっちょやるか！」

てわけで放課後。

川原にて。

悠里「えっと…よろしくお願いします?」

ディーノ「手加減無しでいくぜ」

悠里「あーマジか。(手加減してほしー)」

鐘「(姫ズルイ。オレも戦いたい)」

悠里「あーもう。持ち物が多くてどこに何があるのかなんて覚えてないよ」

全「??.」

シュッ↑手裏剣

ディーノ「おわっと」

悠里「えーっと他には他には…あ、あった」

獄寺「あ、この前オレが渡した奴」

悠里「よっと」

ヒュッ↑ボム

ディーノ「甘く見るなよ」

ビッ

バッ

ドガガアン

悠里「おお（パチパチ）」

鐘「真面目にやれし」

悠里「だって手合わせなんてしたことないし」

ツナ「え？ ないの？」

獄寺「まあ確かに、今までは悠里が一方的にやってただけだしな」

ツナ「そうだね。ヒバリさんのこととかヒバリさんのこととかヒバリさんのこととか——」

悠里「恭弥のことだけかよ!？」

ディーノ「余所見は厳禁だぜ」

悠里「うわい」

リボーン「さっさと終わらせろ」

悠里「はい。チャンチャチャッチャンチャーン! ケーキ」

あんたはドラ○もんかいな。

ツナ「あ、なんか久々に見たね。あのケーキ」

ディーノ「ケーキ？」

悠里「Let、s e a t i n g ♪（ポイ）」

パク

パタ

悠里「終了」

リボーン「今回は悠里の勝ちだな」

悠里「おーい跳ね馬ー！Wake up！」

ディーノ「ケホッ……強えなお前」

悠里「それはあなたがケーキの初心者だったからです」

鐘「おーい腹減ったから帰るぞ！」

悠里「了解。んじゃね、跳ね馬ディーノ」

タンツ

一瞬にして消えた美鈴とベルだった。

全「……（速っ!?!）」

ディーノ（後書き）

姫「おゝ跳ね馬來たね」

どSちゃん「うち等のほうでは随分とお世話になってますよね」

獄寺夫人「特に姫が」

姫「うるせいっ。仕方が無いんだ！」

どSちゃん「ま、ここでいがみ合ってもしょうがないですから」

姫「次回は、フウ太が出る予定でゝす」

フウ太

side 美鈴

今日、私の家に面白い人が遊びに来てます。

ななななんと！

ランキングフウ太君が来ちゃってます！

フウ太「こんにちは、悠里姉、鐘兄」

鐘「鐘兄って何か久々に聞いた」

ってな訳で、私のケーキについてランキングをしてもらうことに。

フウ太「そのケーキの殺傷力は7万6801位中7万6800位」

ですよ。殺したことないし。

フウ太「睡眠力は80万9805位中三位。絶品だね」

鐘「すげっ」

フウ太「もしこれに神死草を入れたら殺傷力は一位になるよ」

いや、だからこれでは人は殺さないから。

それにしてもこのランキングすごいね。

後々スクアーロ達にもフウ太のことを話したら、メツチャ興味持ってた。

明日もやってもらおうかな。

フウ太(後書き)

和「短いね」

理沙「実際、ノート一ページ分も無いそうですよ」

隼菜「なぜに？」

作者「だって骸が……」

骸「クフフ……早く出しなさい。でないと墮としますよ」

作者「って」

三人「え……結局来ちゃったの!？」

犬「早く骸さんを出すびょん!」

千種「メンドイ」

作者「わー来ちゃダメだってば……!!!!」

和「……苦勞してんだね」

進級（前書き）

？ 「いつもいつもありがとうございます」

？ 「いえいえ。今回は一千万振り込んでおきますね」

？ 「それではいつも通りの手はずでよろしいですね？」

？ 「ええ。お願いします」

進級

晴れて二年生になった美鈴たち。

いつものメンバーは同じクラス。

わーすごいねー。

しかも今年は美鈴とベルは同じクラスだよ。

アハハー（笑）

悠里「うわーメツチャナレぶっ飛ばしたい」

鐘「いいんじゃない？」

すみません許してください。

ツナ「悠里、今年もまた同じクラスだね」

悠里「六年連続の快拳を成し遂げたね」

山本「そんなに一緒だったのか!？」

獄寺「十代目呪われてんじゃないすか？」

山本「なんだそりゃ」

？「悠里さん、初めまして」

悠里「誰？」

フィン「私はアメイラ・C・フィノーレ。^{チエル}皆にはフィンって呼ばれてるの」

鐘「げっ。また同じクラスかよ」

フィン「リン君おはよっ★」

鐘「（ドン引き）」

悠里「ていうか、他の女子が自ら話しかけてくるなんて、京子以来だよ」

フィン「悠里さんと友達になりたいなあなんて」

悠里「（怪しい）……本音は？」

フィン「私、マフィアなの（コソ）」

悠里「！！　それで？何が目的？」

フィン「別に？あなたもマフィアなんでしょ？それなら話が盛り上がるじゃない」

？「マフィアならツナのファミリーに入ったらどうだ？」

フィン「え？」

ウイイイン

悠里「あ、またリボーン。ツナに怒られるよ」

リボーン「チャオッス」

フィン「ちゃ……チャオッス？」

ツナ「あ！リボーン！学校にくんなって言ってるだろ！」

リボーン「ツナ、こいつをファミリーに入れるぞ」

ツナ「は！？進級早々何勧誘してんだよ！」

リボーン「心配はいらねえぞ。コイツもマフィアだ」

ツナ「えええ！？」

フィン「ナチスファミリーのフィンです。よろしくねっ★」

リボーン「ナチスファミリーってあの独裁主義者の多いファミリーか？」

フィン「皆に印象悪いんだね。でも私は違うから」

鐘「どうだか」

フィン「リン君ったら♪」

全「（ドン引き）」

フィン「とにかくこれから一年、皆、特に悠里はよろしくね」

悠里「突然呼び捨て？」

フィン「だって友達だから（ニコッ）」

悠里「（何だろうコイツ）」

時は過ぎて放課後。

？「ねーさーん！かえろー！」

全（フ以外）「だれ？」

フィン「セシル、私ね早速友達で来たよ！」

？「なんだってー！？」

ツナ「フィンちゃん、誰、その人？」

セシル「私はアメイラ・K・セーシャル。^{カル}通称セシルです。姉のフィンとは双子なんです！」

獄寺「見えねー！」

悠里「と言うか、妹のほうが可愛い」

フィン「グサリ」

鐘「確かに言えてるな」

フィン「グサグサリ」

山本「モデル体型なのな」

フィン「グサグサグサリ」

セシル「皆ありがとう!」

フィン「グサグサグサグサリ。

ただ今、現実逃避に走りました。御用のある方は、頑張つて引き戻してください」

悠里「な!?!何があったの!?!」

セシル「あ、姉さんね、ブローケンハートすると、現実逃避してなかなか帰って来れないの」

ツナ「悪いことしちゃった……?」

セシル「気にしないで。ねえ、一緒に帰ってもいい?」

山本「いいぜ」

ツナ「うん」

悠里「ま、たまにはいいんじゃない?」

鐘「悠里が言うなら」

進級（後書き）

和「うわー何か新キャラいるよ？」

フィン「こんにちは。作者さんのご好意で出してもらった、作者さんの友達です！」

理沙「正確には、作者さんの友達をモデルとしたキャラクターです」
セシル「やつほ。私は、その友達によって作り出されたキャラクターです！」

和「正確には、本当は存在しなかったけど、その友達のわがままによって編み出されたお邪魔キャラ」

フィ／セ「本音をいうな〜！！！」

設定パート4

アメイラ・C・フィノーレ（通称フィン）

年齢…13歳

誕生日…二月五日

血液型…O型

身長…160？

瞳…茶色

髪…茶髪のショートカット

性格…テンションの高低差が激しい。

キレルと男っぽくなる。

追記…独裁主義者の多いナチスファミリーに所属している。が、本人曰く『自分は社会主義者』。意外と幹部だったりする。

一年のころはベルと同じクラス。

アメイラ・K・セーシャル（通称セシル）

年齢…13歳

誕生日…二月五日

血液型…A型

身長…158cm

瞳…緑がかった黒

髪…ブロンドのショートカット

性格…フィンとは違って表裏が殆ど無い。基本的におしとやか。

追記…フィンと同じくナチスファミリーの幹部。何とか主義者と言うのは大して気にしてない。

一年二年とCクラスのため、殆ど、と言うか休日ぐらいしかツナたちとの接触は無い。

フィ／セ「みんな、忘れないでねー！」

コロネロ

ツナ「いい天気だね」

獄寺「そうですね」

悠里「ポカポカ陽気が眠気を誘う」

フィン「言ってる」

鐘「言えてない」

セシル「鐘さんの言うとおりです」

悠／フィ「それもこれも、この全てを包み込むような大空のせいだ」

山本「聞いてないのな」

リボーン「オメェら何訳のわかんねえことしてんだ？」

ツナ「だったら早くここに呼び出した理由を教えてよ」

今現在、いつものメンバー（＋フィンとセシル）は川原にいた。全員リボーンに呼び出されたのだ。

リボーン「今日はオレ様の知り合いを紹介しようと思ってんだ」

鐘「今までにも知り合いが居たんじゃねえの？」

リボーン「今日は昔からの腐れ縁だ」

ピカ————ッ

悠里「ワオ。おしゃぶりが光ってる！」

リボーン「来たか」

？「おい、リボーン。用って何だ、コラ！」

リボーン「下りて来いコロネロ」

バサバサ

コロネロ「さっさと用事を言え、コラ」

ガスッ

リボーン「こいつらを紹介しようと思ったんだ」

ガスッ

コロネロ「それだけか！」

ガスッ

リボーン「それだけだ」

ガスッ

悠里「もしもし」

リボーン「紹介するぞ。オレ様と同じアルコバレーノのコロネロだ」

鐘「アルコバレーノ？（マーモンと同じってことか）」

コロネロ「そうだぞ、コラ！お前たちがリボーンの教え子か？」

悠里「いつから教え子になった？」

鐘「さ？」

コロネロ「とにかくよろしくだ！」

コロネロ（後書き）

次回、やっと、やっと

黒・曜・編だあああああ！……！！

隣町ボーイズ来たる（前書き）

骸「クフフフ……ようやく僕の出番が来たようですね」

犬「やったれす！骸さんやったれすよ！」

千種「犬、五月蠅い」

犬「んだと、このダメ眼鏡！」

作者「あ、犬と千種は最初からですけど、骸はもっと後だよ」

犬「げっ!？」

骸「クフフフフフ」

犬「む、骸さん……?」

骸「では作者さん。犬にはお仕置きをしておくので先に進めて置いてください」

作者「了解♪」

犬「理不尽だびょん！」

ダッ

骸「クフフ逃がしませんよ」

ダッ

千種「……（やれやれ）」

トテトテトテ

作者「それじゃ、黒曜編にLet's go♪」

隣町ボーイズ来たる

夜九時。

ドスッ

風紀委員「うっ　ぐはっ」

どさっ

風紀委員「うう……」

？「よえーよえー。風紀委員恐るるに足らーず！」

風紀委員「貴様ら…何者だ…」

？「んあー？遠征試合にやってきた隣町ボーイズ？」

？「それ、つまんないよ。早く済ましろよ犬」

犬「恨まないでね。上の命令だから」

風紀委員「まてっ…やめっ…うぎゃあああ！！！」

～．～．～．～．～．～．．．．．

悠里「また！？これで八人目だよ！」

草壁「はい、分かりました（ピッ）」

雲雀「それで、なんだって？」

草壁「はい。風紀委員以外にも何人も襲われているようです」

雲雀「ふうん。それじゃあ悠里——」

悠里「ねえ恭弥。これ何？」

雲雀「（イラッ）なにが？」

悠里「これこれ。この壊れた時計」

草壁「今までやられたもの全員、それが置いてありました」

悠里「へーそっか」

雲雀「襲われたものは中央病院に運ばれているから、被害状況を確認してきて」

悠里「ん。了解」

タタッ

（病院）

悠里「ウソ……なにこれ」

病院に駆けつけた美鈴が見たのは、溢れんばかりの並中の生徒。

悠里「こんなにも沢山の人が襲われてるって訳？」

ピッピッピッ

悠里「あ、ベル。大丈夫？」

鐘『今、黒曜中を名乗る変な奴をまいたところ』

悠里「襲われてたんかい（汗）気をつけてね。今、被害状況を確認するのにな、病院にいるんだけど、そこらへん並中生ばかり」

鐘『マジ？』

悠里「マジ。去年ツナと戦った持田先輩、あいつもやられてた」

鐘『ふーん。姫も気をつけてね』

悠里「大丈夫だよ。それじゃ」

プチッ

P r r r r r

《雲雀恭弥》

悠里「どうしたの恭弥」

雲雀『これ以上はきりが無い。学校に戻ってそっちの警備をして』

悠里「分かった。それと、鐘が敵と接触した。相手は黒曜中の生徒」

雲雀「黒曜中? ……分かった」

ピッ

学校

悠里「やっぱ人が少ないな」

山本「おつす、悠里」

悠里「山本は無事だったか。獄寺は？」

山本「まだ来てねえよ」

鐘「襲われてんじやねえの？」

フィン「物騒なことじゃないでよ」

鐘「でもわかんねえよ」

悠里「そうだよ」

ガラガラガラ

先生「授業始めるぞ」

山本「あ、先生来たのな」

$$\begin{array}{ccccccc} \sim & & \cdot & & \sim & & \\ \sim & & \cdot & & \sim & & \\ & & \cdot & & & & \\ \sim & & \cdot & & \sim & & \\ & & \cdot & & & & \\ \smile & & \cdot & & \smile & & \\ \smile & & \cdot & & \smile & & \\ & & \cdot & & & & \\ \smile & & \cdot & & \smile & & \\ \smile & & \cdot & & \smile & & \\ & & \cdot & & & & \\ \smile & & \cdot & & \smile & & \\ \smile & & \cdot & & \smile & & \\ & & \cdot & & & & \end{array}$$

ガラガラ

悠里「（あ、獄寺来た。あいつも無事だったか）」

先生「コラ獄寺！遅刻だぞ！」

獄寺「ああ？（ギロツ）」

先生「ひいっ」

鐘「おもしろ♪」

獄寺「（どーなってんだ？欠席してる奴は多いし十代目も来てねえ）」

現状を知らないのは獄寺だけ。

獄寺「（かったりっ）あ、切れた」

ガタッ

獄寺「ケータイの電池切れたんで帰ります」

悠里「（早っ！？）」

先生「おい獄寺！！貴様遅刻してきて今来たばかりだろー！！」

山本「ん？もう昼休みか？」

先生「山本！お前も寝てばかりで！」

山本「（まだ獄寺もツナも来てないのか）」

P r r r r r r

先生「誰だ？授業中にケータイ鳴らしてるのは！」

ピッ

悠里「もしもし、あ、ツナどこしたの？」

先生「五月か！」

ツナ『悠里！獄寺君いる？』

悠里「残念だけどたった今帰った」

ツナ『ええ！？そんな！』

悠里「なにかあった？」

ツナ『襲われている人の規則性が見つかったんだ！』

悠里「！？それで？」

ツナ『次が獄寺君なんだよ！』

悠里「なに————っ！！」

全「（ビクッ）」

悠里「誰か獄寺を止めにいって！ じゃないと……今度はアイツが病院送りだ！」

フィン「どーゆーこと？」

悠里「ツナが襲われた人の規則性を見つけた。次が獄寺、そして、山本お前だ」

ツナ『とにかく、オレは急いで獄寺君を探すから！』

悠里「ああ、急げ」

ピッ

山本「オレ、獄寺のこと探してくるわ」

悠里「お前はバカか！？ 今外に出たら、どうなるか（ダッ）って、人の話を聞けえええ！！」

先生「山本！！……ったく」

P r r r

先生「またか！」

悠里「先生静かに！ 草壁から！」

ピッ

草壁『悠里さん、委員長が敵アジトに乗り込みました』

悠里「な……!!」

鐘「今度はどったの？」

悠里「恭弥が、単独で敵アジトにいったって」

フィン「ホント!!」

草壁『ですのもう安心です』

悠里「そうであることを祈るよ」

草壁『はい?』

悠里「何でもない。報告ありがとう」

ブチッ

悠里「……………あのバカ（ボソ）」

先生「……………えー、今日の授業はここまでにします」

鐘「マジ?ラッキーじゃん」

そして、その数分後。学校中に、学校閉鎖の放送が流れたとさ。

仲間のために何ができる？

※獄寺がやられる辺りからなので、ご了承ください。

獄寺「ふうチョロいぜ」

ツナ「ご、獄寺君！大丈夫！？」

獄寺「十代目！？まさか、オレを心配して！？

ご心配なく！獄寺隼人、たった今敵を撃退したところです！」

ツナ「なあ！？（この人ドンだけ強いんだよ！）

でも、よかつ（ガラガラ）！！！！？」

千種「…………ボンゴレボスが自ら来たか」

ツナ「（ぞくつ）あの人が黒曜中の人…………？思ったよりこえーっ」
「

獄寺「ちっまだ生きてやがったか…ッ

十代目、ここはオレに任せて逃げてください！！」

ツナ「でも…………足がすくんで動けない（ブルブル）」

獄寺「な！？」

千種「壊してから連れて行く」

ビュッ

ツナ「ひいいいっ」

サクサクッ

ツナ「……え？」

獄寺「逃げて……ください……十代……目（どさっ）」

ツナ「そんな！獄寺君！！」

千種「邪魔者はいなくなった。次はお前を壊す」

ビュッ

？「危ない！」

キキキンッ

ツナ「な、何！？（ズザァッ）うわっ」

千種「?？」

山本「助っ人とーじょーっ」

悠里「大丈夫かツナ！」

ツナ「山本！悠里！」

（はっ）獄寺君！」

悠里「しっかりしろ！」

山本「コイツは穏やかじゃねえな（キツ）」

ツナ「（めったに怒らない山本が切れてる）」

千種「山本武：お前は犬の獲物：もめるのメンドイ：

シャワー浴びたい：（フラフラ）」

ツナ「行ってくれた……」

悠里「この針、毒が仕込んである……。ちっ」

パカッ

悠里「山本、何か傷口をふさぐ布、用意して」

山本「お、おう」

ツナ「悠里？一体何を……？」

ポタ…ポタ…

獄寺「ぐあっ」

ツナ「獄寺君！ちよっ何してんの！？」

悠里「解毒だ。研究の試作品、持ち歩いてて正解だった」

ツナ「（いつの間にそんなの作ってたのーっ（ガーン））」

山本「これでいいか？」

悠里「うん、丁度だ」

ギュッ

悠里「よし、ひとまずは安心だから、病院連れてくよ！」

ツナ「そ、そうだね」

？「いや、病院は危険すぎる」

リボーン「学校の保健室に連れてけ」

ツナ「リボーン！」

山本「お、それいいアイデアなのな♪」

悠里「私は、奴を追う。風紀委員としてね」

ツナ「えっちよっ（ダッ）悠里！」

山本「アイツ、大丈夫か？」

リボーン「ほっとけ。行くぞ」

く保健室く

ビアンキ「なぜ？」

どーして隼人が入院してるのがここなのよ」

シャマル「ビアンキちゅわーん（ハート）」

ビアンキ「よるな！」

バキツ↑蹴

シャマル「なんだよー。病院は危険だからってリボーンが連れてきたんだぜ。男の診察はしねーけどベッド貸してんだしさー。いーじやん。おじさんとあそぼーぜ」

ビアンキ「良くないわ！」

ガツ↑殴

シャマル「ボヘッ！」

ビアンキ「隼人の看病は私が付きっ切りでするわー！邪魔するのなら出てってー！」

山本「ビアンキ姉さん」

ツナ「ビアンキ」

シャマル「んなことしたら…治るもんも治らんぞ」

ツナ「確かに」

山本「ハハハ」

ビアンキ「山本武。何がおかしい？」

山本「え…オレ？」

ビアンキ「場合によっちゃ殺すわよ…」

ツナ「……」

パタン…

山本「……ツナ？」

シャマル「そりゃーそーと、この治療誰がしたんだ？」

山本「悠里だぜ」

ビアンキ「何かあったの？」

シャマル「いや。コイツはちゃんとした奴じゃないと治療はできない状態のはずだ。それを解毒までしてある」

山本「さーな。でも、アイツ自分で『自分は科学者だ』って言うたぜ」

と!?!」

リボーン「逆だぞ。奴らはマフィアを追放されたんだ」

「????」

ガタ…

骸「ああ。千種ですか？」

どさっ

骸「! おや、当たりが出ましたね」

犬「千種帰ってきました!」

あら! つひゃーだっせー! 血まみれ黒こげじゃん。レアだよレ
ア…。

つひゃ、血いうつまそ!

骸「噛むな犬!」

ピタ

骸「気を失ってるだけです。ボンゴレについて何もつかまらず千種が
手ぶらで帰ってくるはずが無い。

目を覚ますまで待ちましょう」

犬「そー言えば骸さん。一ついーれすか？」

骸「なんですか犬？」

犬「骸さん、やっと出番来ましたね」

骸「クフフフフそうです。やっと僕の出番が――」

作者「もうすぐ終わるけどね」

骸「……………」

犬「やな予感がするびょん……」

骸「犬、後で覚悟して置いてくださいね」

犬「結局!？」

ゝ並中ゝ

ツナ「あゝゝゝゝゝ

何でこんなことになるかなゝゝゝ!?!」

リボーン「とにかく骸たちを倒すしかねーな」

ツナ「バカ言え!?!そんな奴らに勝てるわけねーだろー!?!?」

リボーン「できなくてもやるしかねーんだ」

ツナ「はあ!？」

リボーン「初めてお前宛に九代目から手紙が来たぞ」

ツナ「なー! 九代目だって!!」

リボーン「読むぞ。

“親愛なるボンゴレ十代目。君の成長振りはそこにいる家庭教師から聞いているよ。

さて、君も歴代ボスがしてきたように、次のステップを踏み出す
ときが来たようだ。

君にボンゴレの最高責任者として指令を言い渡す。十二時間以内に六道骸以下脱獄囚を捕獲、そして捕らえられた人質を救出せよ。
幸運を祈る。

九代目”

ツナ「ちよっなんだよこれー!」

リボーン「追伸 成功した暁にはトマト百年分を送ろう」

ツナ「いらねーよ!! (ガーン)」

リボーン「因みに断った場合は裏切りとみなしぶっ殺……」

ツナ「わーわーわーっ聞こえない聞こえないー!!」

ダッ

[illegible]

ツナ「まったく冗談じゃないよ。リボーンの近くにいるとろくなことが無い」

主婦「あら」

主婦「あの子並中生でしょ？」

主婦「例の事件で今日学校閉鎖したんでしょ？」

主婦「大丈夫かしら。ふらついてて」

ツナ「はっ（そーだった…町も全然安心じゃない！（ガーン）」

リボーン「逃げ場はどこにもねーぞ」

ツナ「リボーン!!」

リボーン「しかも獄寺を襲った奴にお前がボスだってばれてんだ。奴らは直接お前に狙いをつけてくるぞ」

ツナ「ひいひいそーだった——！！リボン！どーしよー！！怖えーよ——！！」

リボーン「もう分かってるはずだぞ」

ツナ「！」

リボーン「奴らがお前を探すためにやったことを忘れるな。

お前が逃げればその分被害はさらに広がることになるぞ」

ツナ「……………そ…そりゃあ

そりゃあオレだって奴等のやり方はおかしいと思うよ。皆ま
で巻き込んで…

骸って奴ムカつくよ！

だけどあのヒバリサンだって帰ってきてないし、悠里も連絡
一本もくれない。

そんな奴ら、ダメツナのオレに倒せっこ無いよ…

無茶だよ…」

リボーン「だけど、まわりはそうは思っただねーぞ」

ツナ「え？」

？「お！いたいた。オレも連れて行ってください！」

ツナ「え…」

獄寺「今度はメガネヤローの息の根止めますんで…！」

ツナ「獄寺君！！つか怪我は大丈夫なの？大怪我だったよ…！」

獄寺「悠里に助けられましたよ。あいつの使った薬、そーとー効き目がよくって、全快です！」

ツナ「良かった！」

？「オレも行くぜツナ！今回の黒曜中のことはチビに全部聞いたぜ」

ツナ「！」

山本「学校対抗のマフィアごっこだって？」

ツナ「（騙されてるよ山本——！！（ガーン））」

？「私も行くわ」

ビアンキ「隼人が心配なもの」

獄寺「ほげーっ」

ツナ「（逆効果ー！！）」

リボーン「よし。敵地に乗り込むメンツは揃ったな」

ツナ「マジかよ！」

リボーン「守りから攻めに転じるときだ。やつ等のアジトは新国道ができて寂れた旧国道の一角だと思われる。多分人質もそこにいるはずだ」

ツナ「人質？」

リボン「ああ。お前たちの良く知っている人質がな」

いざ、突入！

奈々「ツナ帰ってたの？」

ツナ「うん」

奈々「あら？ お気に入りに着替えて、遊びに行くの？」

ツナ「えっ（ドキッ）え…まあ…」

奈々「今日はやめといたら？ また並中生が襲われてるらしいじゃない」

ツナ「（今まさにその元凶に乗り込もうとしてるんだけど…）」

奈々「鐘君や悠里君。大丈夫だった？」

ツナ「あ…うん。鐘も襲われたけど何とか撒いたって。悠里は…：…
獄寺君を襲った相手を追いかけたつきり連絡が無くて…」

奈々「まあ。心配ね」

ツナ「そうだね」

？「準備はできたか？」

そこにはのっぺらな丸い顔をした誰か。

ツナ「どなた——っ！！？」

リボーン「（ぺろん）オレだぞ」

ツナ「な、なんだよお前かよ。何だ？その丸いの？」

リボーン「レオンだ」

ツナ「ふくん……ってレオン！！？どーしちゃったの！？」

リボーン「繭になったんだ」

ツナ「マユ？」

リボーン「ああそうだぞ。レオンがこうなる時はいつもオレの生徒は死に掛けるんだ」

ツナ「不吉~~~~~！！」

それってあのディーノさんも~~~~！！？つーか行く前にそーゆーこと言うか~~~~？」

リボーン「ああ、それとな。

オレは戦わないから頑張れよ」

ツナ「え——————マジで——————！！？お前いるから脱獄犯相手でも何とかなるかもって思ってたのに！！」

リボーン「今回の指令はツナへのもんだからな。オレは“死ぬ気弾”以外撃てない掟なんだ」

ツナ「最悪の掟だな！！！！」

「因みに死ぬ気弾もあと一発しかねーからな」

「ツナへ？」

リボン「死ぬ気弾はレオンの体内で生成されるから今は作れねーんだ」

ツナ「そーだったの〜〜!？」

リボン「死ぬ気弾はボンゴレ伝統の素弾を形状記憶カメレオンの体内に三日間埋め込んでできるんだ。ちようど貝で真珠を作るみてーにな」

ツナ「レオンってそんな重要なペットだったんだ：」

「だから死ぬ気弾をアテにすんなよ」

ツナ「死ぬ気弾一発しか撃たれないのはいいけど、どっちみちやべーよ。どーしよ〜〜〜〜〜っ」

ピンポーン

「おじやまします！」

山本「いよいよだな！茶と寿司差し入れな」

ツナ「（行楽気分だ——!!）つかマファイアごっこだと思っただまま

連れて行っているのか——!!?」

? 「ケンカ売ってんの山本武」

ビアンキ「私の弁当へのケチかしら」

ゴオオオ

山本「え…じゃあ、両方どーすか？」

ツナ「(最近この二人が火花散ってるゝゝゝつ)」

後は獄寺君だけだね」

山本「アイツが遅れてくるなんて珍し」な」

リボーン「とっくに外で待ってるぞ」

ツナ「! (ビアンキ警戒して怪しい人になってる——!!)」

(でも本当に良かったな…。オレをかばって倒れたときは、
もっと重症で死んじゃうかと思ったよ……)」

獄寺「くそお…近寄れねーぜ…」

ツナ「獄寺君…?」

獄寺「十代目!!」

いやあ、すばらしい門柱に見とれてました（焦）」

ツナ「ビアンキなら大丈夫だよ」

獄寺「!」

ツナ「うまく言ってビアンキに顔の一部を隠してもらったから。それなら大丈夫でしょ?」

獄寺「えっマジスカ!?（ぽあ…）」

ビアンキ「隼人も子供ね」↑リスの着ぐるみ

獄寺「（違う意味で一緒にいたくね———っ）」

リボーン「よし、揃ったな。骸退治に出発だ!!」

ツナ「ここだ」

ビアンキ「静かね…」

リボーン「新道ができてこっちは殆ど車が通らねーからな」

ツナ「うわっ既に不気味だ」

獄寺「これ一体が廃墟ッすね」

リボーン「ああ…ここは昔、黒曜センターって言う複合娯楽施設だったんだ」

ツナ「ん…？黒曜センター…？…あッ

オレ昔ここに来たことある！！そーだそーだ！！ここってカラオケとか映画館があって、他にもちよつとした動植物園があった」

リボーン「改築計画もあったらしいが、おとしの台風で土砂崩れが起きてな、それから閉鎖してこの有様だ」

ビアンキ「夢の跡ってわけね……」

獄寺「カギはさびきってる…。奴らはここから出入りはしてませんね。どーします？」

ビアンキ「決まってるわ。正面突破よ」

ブシヨアア…

ツナ「なっちょっビアンキ！」

ビアンキ「ポイズンクッキング溶解さくらもち」

ブシュウウ

リボーン「よし、突入だ」

山本VS犬

リボーン「よし、頂上を目指しつつ、建物をしらみつぶしに見ていくぞ」

ツナ「ひい。緊張してきた～～～っ」

山本「いや～～マジすげーなー。超本格マフィアごっこだな」

ツナ「だから山本～～～～～～！！」

リボーン「ツナ」

ツナ「！？」

リボーン「来たことがあんならお前が案内しろ」

ツナ「な…えー！？来たつつつても超昔だぞ～～～！しかもあの時は悠里に引っ張られてたし…」

オレが覚えてんのは、確か、ゲートを入れてしばらく行くと、ガラス張りの動植物園があって…」

ビアンキ「そんなもの無いじゃない。あなたの目は節穴だわ」

ツナ「なっ」

獄寺「アネキ！」

山本「んー？何か動物の足跡だな…まだ新しい。犬か？にしちゃあ大きすぎるな」

ビアンキ「爪の部分…血よ」

ツナ「ひい…まさかまだ動植物園の動物がいるとかー！？」

獄寺「そんなまさか…」

ツナ「そ…そーだよ。こんなでかい動物いなかったし…」

ビアンキ「あら？木の幹がえぐられてるわ…」

リボーン「何かの歯形だな」

ツナ「えーっ！！気をまるかじりする動物なんている…」
「！？」

獄寺「！あのオリ…」

ツナ「え…あれこそ前にあった動物園の廃棄物じゃあ」

獄寺「あそこ…よく見てください」

ツナ「食いちぎられてるーっ！」

獄寺「気をつけてください、何かいる！」

ガササ

獄寺「後ろだ!!くるぞ!!」

ビアンキ「こっちよ!早く!!」

ミシ…

リボーン「ん？」

?「かかったびょーん」

バリーン

どだっ↑山本 転

ミシ…ミシ…ミシ…

バリンッ

山本「うわああっ」

ガシャーン

?「いらっしゃーい」

ツナ「!

何…?今の…」

獄寺「人影に見えましたが……………」

ツナ「つか山本は!?!」

ビアンキ「落ちたわ」

リボーン「ツナの記憶は正しかったな。動植物園は土砂の下に埋ま
っちまってたんだ」

ツナ「じゃあここ、屋根の上〜〜〜〜!!山本大丈夫〜〜!?!」

山本「いっつー」

ツナ「あんなところまで〜〜!?!」

推定十五メートル程下。

獄寺「あのバカ足引っ張りやがって!」

山本「まいったなハハハ…」

ツナ「(笑ってるし……)あ!?!」

山本ツ!右になんかいる!?!」

山本「!」

ガルルルル…

ツナ「何だあれ!?!け、獣!?!」

リボーン「これだけ離れちゃ手ーだせねーな」

ツナ「そんな!! 山本が——!!!!」

獄寺「山本気をつけろ!! カゲに何か獣がいるぞ!!」

? 「カンゲーすんよ。山本武」

山本「!？」

? 「柿ピー寝たままでさー。命令ねーしやることねーし超ヒマだったの。そこへわざわざオレのエモノがいらっしやっただもんな」

犬「超ハッピー」

山本「お？」

ツナ「あれ? 人だよ……人間だよ!!」

獄寺「黒曜の制服!!」

犬「上の人たちはお友達〜? 首を洗って待っててねーん。順番に殺ったげるから」

ツナ「ひいっ（この人もヤバイ感じプンプンしてるー!!）」

山本「ハハハハ」

犬「?」

山本「あのえぐられた木とかもお前が作ったのか? スゲーのな」

ツナ「（山本、まだ遊びだと思ってる———！）」

獄寺「あのバカ…」

犬「………もしかして天然？ まっいいけど…

よーい…ドン！」

山本「おい」

犬「ギューン！！」

ダンッ

カチャ

犬「ひゃほっ」

クルルルルル…

ツナ「なっなにあれ！？」

獄寺「人間技じゃねえ！！」

犬「ウキッ」

山本「！」

犬「いったらっきまゝす！！」

山本「なっ」

ガツ

バキンッ↑山本のバット折

ヒュンヒュンヒュン

ツナ「山本のバットが——！！！」

サクッ

犬「ヒヤホ———ウ！！次はノドヲえぐるびよん」

ポロポロ…

ツナ「ひいっ木とかえぐったのってやっぱあの人——！！？」

獄寺「ありゃ人間じゃね——！！呪いか！？呪いか——！！？」

山本「フー」

ツ／獄「！？？」

山本「なるほどな。マフィアごっこってのは加減せずに相手をぶっ倒していいんだな。」

そういうルールな（キッ）

ツナ「山本…怖がるどころか………」

リボーン「アイツあー見えて負けん気強えからな。バットを折られて心中穏やかじゃねえぞ」

山本「やり合う前に一つ聞いていいか」

犬「んあ？」

山本「お前ナリ変わってねーか？いつ変装した？爪伸びたし…」

犬「ゲ……やっぱ天然…（ガーン）」

ツナ「（（ゴーン）変わったことにすら気づいてなかった!!）さすが山本…」

犬「まーいーや。教えちゃう。

ゲーム機ってカセット取り替えるといろんなゲームできるっしょ？それとおんなじ」

全「歯!？」

犬「カートリッジを取り替えると（カチャ）いろんな動物の能力が発動するわけよ（カシャン）」

ギギギ…ドンッ

犬「コングチャンネル」

ビアンキ「アレは霊長目オランウータン科ニシローランドゴリラね」

ツナ「うそ——！！？ありえねー！！」

山本「うおすげー。最新のドーピングかよ」

犬「だーかーらー（ガッ）ちがうんよ！！」

ブンッ

山本「うあっ」

ガシャアン

ツナ「山本！」

獄寺「くそっ暗くてよく見えね！！」

どさっ

山本「いっつあんにゃろ…」

犬「ほらほら休むなよ……。どこに逃げてもすぐにわかつからね。暗いところでもオレは

見えんだよーん」

ゴアッ

山本「くっ」

ツナ「山本！」

獄寺「ちっ見てらんねーぜ」

リボーン「ボムはやめとけ。爆発に建物が耐えられず、山本が生き埋めになるぞ」

獄寺「くっ」

犬「ホイ！ソラ！」

ビアンキ「刀を折られて圧倒的に不利だわ。リーチがないから相手の懐に入らない限り、勝機はない」

リボーン「山本にその戦いができるか？」

ツナ「え？」

リボーン「見ろ。あいつは体をかばってるぞ。まるで相手を倒しても怪我しちまったら負けみてーにな」

ツナ「そうだ！野球部はもうすぐ秋の大会があるんだ！山本、スタメン入りできたって、喜んでたし！！」

犬「逃げてばっかじゃん。もしかしてオレ相手に持久戦に持ち込もうとしてんのか？」

山本「いや———そーゆー訳じゃないんだが、オレにはマフィアごっこ以外にも大事なもんがあってよ」

ツナ「（そーだよ。山本にとっては野球が一番なんだ）」

犬「わけわかんねーぞ、ボケ」

ビュッ

ツナ「やばいよ！！こんな所に山本連れてきちゃいなかったんだ！！」

リボーン「そんなに心配なら、お前が助ければいいだろう？」

ツナ「？」

リボーン「いってこい」

どんっ↑蹴

ツナ「うわっ

うぎゃあああ！！！！」

どずーん

ツナ「げふっ」

獄寺「何やってんすかりボーンさん！！」

リボーン「黙ってみてろ」

ツナ「いでゝゝゝゝゝゝ！！死んだかと思つたゝゝゝ」

山本「ツナ！！」

犬「んあ？ザコのお友達れすか？よーし、山本逃げるし、先にウサギ狩つとくかなゝ」

山本「な」

ツナ「うぎゃー！！きたー！！食べられるー！！！！」

ガッ

犬「んあ」

山本「お前の相手はオレだろ？こいよ。こいつぶち当てるゲームセツトだ」

ツナ「たっ助かったー。山本ー」

犬「ほへー――挑戦状だ。面白そーじゃん。んじゃオレも本気を見せてちやおっかな（カチャ）」

ザッザッ

犬「チーターチャンネル！」

ツナ「めっメチャメチャ速え―――っ！」

山本「くっ（ビュッ）」

犬「はずれっ。いたらき!!」

ガブツ

ツナ「山本!」

山本「そいつは」

犬「お互い様だぜ!!」

メキメキツ↑山本の腕が~~~~!!

ビアンキ「!!」

獄寺「アイツ、ハナから腕一本くれてやるつもりで……!!」

ツナ「ええ——!!?」

リボーン「(キラーン)」

ガッ

犬「キャンッ」

どさっ

ツナ「ああ…

(山本の腕が…。オレを助けるためにこんな戦い方…)

ゴメン山本！！オレのせいで腕を…野球あんのに！！大会あんのに！！」

山本「おいおい勘弁してくれよツナ。ダチより野球が大事なんてありえねーだろ。それにこれくらいの怪我じゃ余裕で野球できるぜ」

ツナ「すげえ！！！！でもメキメキってさっき…」

勝者　　山本！！

全「遊ぶなナレ！！」

ゴメンナサイ（渋々）」

ツナ「（渋々って言うてるし（ガーン））」

敵の正体

リボーン「ディーノの情報によると、今倒したのが主要メンバーの城島犬だ。この写真を見てみる」

ツナ「こ…この三人組!？」

「あ。真ん中の奴が六道骸だ」

ツナ「おつかねー！」

写真に写っていたのは犬・千種と、本物とは違う別の六道骸が写っていた。しかし、それが偽者だとは誰も知る芳がなかった。

[illegible]

ビアンキ「これでいいわ」

山本「どもっス」

ツナ「……（また動けなくて山本にメーワクかけちゃったよ。本当こーゆーシチュエーション向いてないよなー。へこむよなー）」

山本「チビわりい。バット壊しちゃった」

獄寺 「つたくしよーもねーな」

リボーン「気にすんな。スペアやるから」

山本「おっサンキュー」

ツナ「（替えあんのー！？（ガーン））」

獄寺「まっでもメガネヤローはまだ寝てるらしいし、アニマルヤローは倒したし、意外と簡単に骸をぶっ飛ばせそうですよ」

？「ププツめでてー連中だぜ！！」

ツ／獄「！」

獄寺「アニマルヤローだ」

犬「ヒヤハハハハ」

ツナ「さっき完璧に気絶してたのに——！！」

犬「引っ掛かったなー。お前たちに口わらねーために、オポッサムチャンネル使ったんだびょん！！」

オポッサム…（有袋目・オポッサム科）

死んだ振りをするのが得意

犬「でもよく考えてみたら、お前たちに何言っても問題ないじゃん！！」

ぜってー骸さんは倒せねーからな！！！！全員顔見る前におっしぬびょん！！」

獄寺「（ムカツ）んだと砂まくぞコラ！！」

ビアンキ「甘いわ隼人」

ひょいっ↑岩落

ツナ「あ」

ヒュ————ン…ゴッ

犬「キャンッ」

獄寺「（ガーン）」

ビアンキ「ヒクヒクしてるけど、あれも死んだ振りかしら」

ツナ「（（ゴーン）やっぱこの女怖^{ヒト}え————！！）」

リボーン「だが、奴の言うとおり、六道骸をあなどらねー方がいい。

奴は幾度となくマフィアや警察によって絶体絶命の危機に陥ってるんだ。だがその度にヒトを殺してそれをくぐり抜けて来たんだ。

脱獄も死刑執行の前日だったそうだしな」

ツナ「この人何してきたの————！！？六道骸やっぱ怖え————！！」

千種「骸様」

骸「おや、目を覚ましましたか」

ムクッ

骸「三位狩りは大変だったようですね、千種」

千種「ボンゴレのボスと接触しました」

骸「そのようですね。彼ら遊びに来てますよ。犬がやられました」

千種「！（ガタッ）」

骸「そう慌てないでください。我々の援軍も来ました」

千種「……………」

？「相変わらず無愛想な奴ね——。久々に脱獄仲間に会ったってのに」

千種「何しに来たの？」

？「仕事に決まってるじゃない。骸ちゃんが一番払い良いんだもん」

？「答える必要はない」

？「……………」

？「スリルを欲してですよ」

骸「千種はゆっくり休んだほうがいい。ボンゴレの首は彼らに任せましょう。」

それでは僕は出かけてきます」

千種「骸様どちらへ？」

骸「一位狩りです」

千種「ボンゴレは来ているのに何故？」

骸「……一度会っておきたい人物なのですよ」

千種「……………お氣をつけて」

骸「クフフ大丈夫ですよ」

敵の正体（後書き）

姫「んあ？」↑犬風に

犬「オレの真似すんな！」

姫「あーようこそ。城島犬さん」

獄寺夫人「どうかしたの？」

犬「骸さんに頼まれて作者からのお知らせを良いに來たびょん」

どSちゃん「それならお願いします」

犬「えーっと、この作者はバカなので、誤字脱字が多いびょん。だから、見つけた人は気兼ねなく指摘をするんだびょん」

姫「なるほどね」

どSちゃん「昨日なんて、骸っちさんにメツチャ指摘されてたもんね」

獄寺夫人「ま、だそうなんです」

ビアンキVS M・M

ツナ「ちよつと………！あの、結構歩いたし、ちよつとや…休まない？

（恐怖と緊張で足が震えてうまく歩けないよ…）

山本「そーだな。オレ腹へってきたぜ」

獄寺「ついでに飯にしましょうよ十代目」

ツナ「う…うん（ほっ）」

獄寺「あそこなんてどースか？」

獄寺がさした先にはテーブルと椅子があった。

山本「んじゃ、寿司と茶を配るぜ」

どんっ

ビアンキ「どきなさいよ山本武。はいツナ。緑黄色野虫のコールドスープ」

ブシヨアアア…

ツナ「虫ですかー！！（ガーン）」

ビアンキ「冷たくて寿司なんかよりおいしいわよ」

ツナ「いや、あの（山本とはりあってるー！！）

（つーかどーしよゝゝ飲んだら死ぬー！！）」

ブシュウウ

ブクブクブク…

ビアンキ「！？」

ボンッ

ビアンキ「あつつ」

ツナ「わあっ！あぢぢぢ何なの！？このポイズンクッキング」

ビアンキ「私じゃないわ」

山本「ん？弁当が…！？」

グツグツグツ…

獄寺「！！やべっ！」

山本「伏せろ！」

ボンボンボンボンッ

ツナ「なんなのこれー！！？」

ビアンキ「敵の攻撃を受けているわ！」

ツナ「えゝ!？」

山本「どこから」

ヴォオオオ…

獄寺「ん…この音…そこか！」

ビッ

ドガン

? 「ダッサイ武器。こんな連中に柿ピーや犬は何を手こずったのかしら」

ツナ「あれ、黒曜中の制服だ!!」

山本「ってことは」

獄寺「しかし敵は三人組だったはず。テメエ誰だ！」

M・M「気安くテメエなんて呼ばないで。私はM・M。私だって骸ちゃんの命令じゃなかったらこんな格好しないわよ。

しっかしあんた達、マフィアのくせにみすばらしい格好してんのね————」

ツナ「え」↑実はお気に入り

獄寺「な」

M・M「あーさえない男見てると悲しくなっちゃう。男は金よ。やっぱり付き合うなら骸ちゃんがいいわ」

ツ／獄／山「(骸……やはりこいつ……!)」

M・M「まーせーぜーうろたえなさい」

そういつてM・Mが取り出したのはクラリネット。

M・M「私にあんたたちをあの世に送って、バックと洋服買い漁るだけ」

ヴヴン

グツグツグツ

山本「やべ」

ボンッ

ツナ「わわ！あの楽器が武器?？」

獄寺「なんなんだこの攻撃は!」

山本「これじゃ近寄れねー」

ボボンッ

獄寺「くっ」

ツナ「わぁっ」

山本「犬って奴に続きまたすげーのでてきたな」

獄寺「ちくしょーどーすりゃ…」

ツナ「ひいひい~~~~~!! まだ死にたくない~~~~~」
~~~~~!!」

ビアンキ「私が行くわ」

ツナ「ビアンキ」

ビアンキ「あなた間違ってるもの。大事なのはお金ではなく愛よ」

M・M「はあ? なんなのこの女。ムカツク」

ビアンキ「その武器は電子レンジと同じ仕組みね。物質に電波を照射して水分子を振動させ、温度を上げる」

M・M「分かったらなんだってのよ。」

そうよ。物質の温度とは物質を作る分子の運動の激しさの度合いのこと。分子の運動が激しいほど、摩擦により物質は高温になるの。

このクラリネットから照射される特殊な音波は分子を一分間に五億回振動させ、物質を沸騰させるって訳。

人間がこの音波を浴びたら沸騰してボンッ！よ。アハハハ」

ツナ「ひいひい！」

山本「マジかよ」

獄寺「何て女だ」

ビアンキ「御託はいいわ。行くわよ。ポイズンクッキング大型料理食べ放題！！！」

ツナ「あんな技あったんだ」

山本「すっげー」

獄寺「おえっ」

M・M「またダッサイ技ね。いいわ、来なさい。あんたの脳ミソからチンしてあげる。」

バーニングビブラート！！！」

ヴェン

ダッ

ツナ「料理を盾にして突っ込む気だ」

山本「うまい…だが届くのか!？」

ポボンッ

ヴウウウウ

M・M「! (ひるまない……!!)」

ビアンキ「そこまでよ!ラスト、ロールケーキ!！」

M・M「キャアアア!！」

なんていうと思って?」

ビアンキ「!！」

ジャキッ↑クラ分裂

M。M「接近戦も得意なの!！」

ビアンキ「あぐっ」

ツ／獄／山「!」

ビアンキ「……!」

ズザッ

M・M「何が愛よ!金に勝る物があるわけないじゃない!」

いや、ここに主人公ちゃんいなくて良かったね。いたら絶対に

「楽器は大切に!!」

とかいいそうだなあ。

山本「言えてるな」

M・M「(イラッ)うるさいわね。さあ、とどめの一吹きよ」

ツナ「やばいよー!!」

山本「おいっ」

獄寺「待て山本…。もう…触れたんだ」

山本「!?!」

M・M「脳ミソを沸騰させてあげる。

!!?! ひぎゃアアア!」

ツナ「クラリネットがポイズン化してる!!」

獄寺「あれはアネキが最近習得した、触れた物をポイズンクッキングにする究極料理…」

ビアンキ「(パチッ)千紫毒万紅!!」

M・M「そんなバキヤなああっ（どさっ）ふぎいい」

ビアンキ「大丈夫？（タッ）」

ツナ「え！？」

ビアンキ「よかったわ。お昼寝の邪魔されなくて」

リボーン「すぴーッ」

M・M「！」

ツナ「リボーンの奴、見ないと思ったら…」

獄寺「じゃあ、アネキが戦ったのは、リボーンさんの眠りを守るため…」

ビアンキ「愛の勝利ね」

M・M「（バタッ）」

ツナ「ビアンキやっぱ、恐るべし…」

山本「さすがだな」

獄寺「…けっ」

勝者　ビアンキ（愛）

## 美鈴VS骸

悠里「くっそっ。あのメガネ見失っちゃった」

？「クフフフどうかしましたか？」

悠里「（ゾクッ）誰だ！

こ、黒曜生？アンタ何者？」

骸「僕は六道骸。今回の事件の首謀者、とでも言っておきましょうか」

悠里「見つけたぜ！（ダッ）」

キイイン

悠里「恭弥をどこにやった」

骸「恭弥とは、あの軟弱な並盛の風紀委員長ですか？クフフ彼には僕たちのアジトで大人しく寝ていてもらっていますよ」

悠里「こんのおっ」

キイイン

骸「クフフフどうしましたか？力みすぎていますよ」

悠里「並盛の風紀を乱すものは許さない。並盛に二つ秩序はいらな



いからね」

骸「クフフ見事に彼と同じことを言いますね。そうですね、僕も二つはいらなと思います。だから彼には大人しくしてもらっているのですよ」

悠里「友達を傷つける奴は、許さないからね!!」

骸「そうですか。それなら君にも大人しく眠っていてもらうために、少し本気を出しましょう」

チャキ…ン

悠里「三叉槍か」

骸「そうです、これが僕の相棒、とでも言うておきます。そして

契約の必需品」

悠里「契約とか何のことか知らないけど、そっちがその気ならこっちも本気を出す」

チャキンッ

悠里「僕の刀で切り刻んであげる」

骸「行きますよ（ダッ）」

悠里「来い（ダッ）」

ガキイイイン

悠／骸「!?!?」

二つの武器が合わさったとき、二人の脳裏に不思議な光景が浮かんできた。

優しく笑う藍色の髪の少年。

無邪気に笑う栗色の髪の少女。

二人は仲良く手を繋いでいた。

骸「これは……」

悠里「武器が共鳴し、持ち主の過去を見せた……」

骸「（あの子はどうしているのでしょうかね）」

悠里「（今のは骸の過去と見て間違いなさそうだな。けど、一緒にいた少女、何か違和感がある）」

骸「おや？ 戦闘中に考え事ですか？」

悠里「そっちこそ」

骸「（今はあの子を気にしている場合ではない。一気にかたをつけ

ますか)」

悠里「（奴がどう出てくるか予想ができない。ならばここは慎重に……）」

骸「そろそろ」

悠里「!？」

骸「そろそろ終わらせましょうか」

悠里「ああ。そうだな」

骸「クフフ（ヴウ…ン 一）地獄を苦しみ味わいなさい」

悠里「!! 幻覚!! しかも強い!!」

キィィ……

悠里「!?!? なん…だ…この感覚…?（幻覚とはまた違う…なんだ?）」

骸「(!?!? まさか、彼女は幻覚にかかっていないのか!?! バカな!）」

悠里「（キィィィィン）うがっ」

骸「?」

悠里「何だ……右目が…焼けるように…いた…い……（どさっ）」

骸「クフフフ当初と少し予定が違いましたが、もしもの場合、彼よりも使えるかもしれない。持ち帰るとしましょうか」

骸は美鈴を担ぐと、足早に黒曜ランドへと向かった。

美鈴の右目にかかっていた前髪がずれ、深紅の瞳があらわになる。しかし骸は気づかなかった。そこに、はっきりと“六”の文字が浮かんでいることに。

## VS バーズ

ツナ「ハア、さっきの人怖かった~~~~っ」

ザ：

？「あの強欲娘のM・Mがやられたのは実に良い気分だ」

ツナ「だっ誰!？」

？「まあまあ落ち着いて

.....

これを見てください」

そういつて開かれたパソコン。そこには、

？「お友達が狙われてますよ」

ツナ「京子ちゃん!! ハル!!」

京子とハルが映っていた。

？「これじゃ分かりにくいですかねー。あちらをご覧ください」

パッ

全「!」

ツナ「壁にモニターが！！つーかなんであの二人が映ってんのー！？」

獄寺「てめー何をたくらんでいやがる！」

ビアンキ「アンタが次の刺客ね」

？「まーまー落ち着いてと言ってるじゃないですか。ちゃんと説明しますから」

バース「私の名はバース。その名の通り鳥を飼うのが趣味でしてねえ。ご覧の映像は可愛い鳥たちに埋め込まれた小型カメラから送られている物です」

花『お兄さんどう？』

京子『さっき寝ちゃった』

ハル『〜♪』

ツナ「（ハルの奴勉強してら…京子ちゃん…今までお兄さんのお見舞いに…）」

ん？何だ？二人の後ろにさっきから」

ゆら ゆらり…

ツナ「うわあ！！」

バーズ「気がついちゃいました？アレは私に忠実な双子の殺し屋でしてね、その名もツインズ。」

あんな可愛い顔してますが、刑務所にいる十年間ずっと拘束具をはずしてもらえなかったほどの凶悪な連続殺人犯なんですよ」

ツナ「なんだってー！！」

獄寺「（アレが可愛くないって言ったら負けだろうか……）」

山本「（全然可愛くないのな……（苦笑））」

ビアンキ「あの子達に何する気？」

バーズ「何もしませんよ。あなた達が私に従ってくれさえすれば

……ね」

ツナ「！！」

獄寺「ふざけんな！！あいつらはカンケーねーだろが！！殺し屋を戻さねーとぶっ飛ばすぞ！！（ぐいっ）」

バーズ「おっと私には触れないほうが良い。でないとお友達が

……バラされちゃいますよ」

獄寺「なっ！」

バース「離れていても私は彼らに指示できる。お友達の命は私が握っているんだ。お前らにガタガタぬかす権利はないんだよ。

二度と触れるなボケ」

獄寺「くつくそっ（ぱっ）」

バース「ウヒョヒョ。それでは始めましょー。うーん、そ・お・だ・なー。

ではお仲間でボンゴレ十代目をボコ殴りにしてください」

獄寺「なっ」

ツナ「（え…っていうかボンゴレ十代目がオレだって知らないはずじゃ…）」

バース「その沢田君を殴れと言ったんですよ」

ツナ「（ばれてるー！！）」

獄寺「メガネヤローが起きたのか……」

バース「彼女達を無事にお家に帰したいんでしょう？」



だったら出血するまで殴ってくださいよ」

山本「無茶言うな」

ツナ「そんな一方的なー!!」

(こんなことになるなんて!ど…どーしよ…!!!)

リボーン「クピーツ」

ツナ「(アイツこんな大事なときにー!!!)」

バーズ「まあ、断られても私は困りませんがね」

全「!?!」

バーズ「私のもう一つの趣味は人を驚かせることでしてね。驚いたときの無防備で無知で無能な人間の顔を見ると、興奮して鼻血が出るようになる。」

例えば、彼女の髪が突然燃え上がったらどんな素敵な顔をするだろう」

ツナ「え?」

バーズ「ウジュ 言ったらやりたくなってきちゃいました〜」

デデ『(ジュッ ボッ)』

ジジ『(ジュッ ボッ)』

全「!!」

バーズ「さあ、決定的瞬間ですぞー。（ハァーハァーハァー）」

うわーメツチャヘンタイおやじだー。キモーイ!!

獄寺「このヘンタイヤロー……ってナレに先をこされた!？」

山本「今ナレに突っ込むときじゃないだろ」

バーズ「ワケわかんねーこといってるとお友達が——」

獄寺「ぐっ」

ツナ「待って!!」

バーズ「ん？」

ツナ「分かった!山本、獄寺君殴って!!（ワケわかんない話してないでよ!!）」

山本「ツナ」

獄寺「十代目」

バーズ「ちえっ いいとこだったのに（ムスッ）」

「じゃあ五秒以内に始めてくださいよ」

ツナ「山本…獄寺君…ボボ……ボコってもらえる？」

（二人のわけわかんない話で京子ちゃんたちにもしものがあつたら）「↑オイ

山本「バカいうな…（○内に対して）」

獄寺「んなことできるわけないっス！（本音）」

バーズ「んー？」

バゴオ↑殴

ツナ「ふげっ！」

殴ったのは……次回に続く。

バーズ「なんだそりゃあ!？」

## VS バーズ 2

ツナ「うわーっ!!」

どぎあっ

山本「あ…」

獄寺「アネキ!! 何てことを」

ビアンキ「私は元々ツナを殺すために日本に来たのよ。こんなもんですんでラッキーだと思いなさい」

ツナ「たったしかに…ん？」

(あんまり痛くない…ありがと…ビアンキ)」

ビアンキ「(プイッ) 嫌われ役はなれてるわ」

山本「……」

獄寺「ケ」

バース「いやあお見事クリアです。次の要求もクリアして、彼女たちも助かりそうですね」

ツナ「え! まだあんのー!?!」

バース「誰もこれで終わりなんて言ってませんからね———」。

しかし、今のクリアっぷりがよかったので次で最後にしま  
しょう」

獄寺「ヤロー調子に乗りやがって！」

バース「お次は（こそ…）このナイフで沢田さんを刺してください」

山ノ獄「な！」

ツナ「えー！！！」

ビアンキ「！」

バース「ウジュジュジュ。皆さんの今の驚き顔、実に良かったです  
よ〜〜」

ツナ「そんなメチャクチャナー！（やっぱキモイこの人！）」

バース「ナイフの柄までぶっすり刺してくださいね。ウジュ」

獄寺「ふざけんな！！ヘンタイヤロー！！（ヘンタイ ヘンタイ  
ヘンタイ ヘンタイ ヘンタイ ヘンタイ！！！！）」↑連呼しすぎ

バース「いかんいかん。鼻血出てきちゃいました。そんじゃー決め  
てください。

やるかやらないか」

獄寺「できるわけねーだろ！」

山本「無茶言うな」

ビアンキ「断るわ」

バーズ「それはありがたきお返事（ハート）」

それでは次のドキドキいきましょう。じっくりこの子から  
行きましようか？

いやー可愛いですな。天使のようだ」

ツナ「京子ちゃん！！」

カメラが少しずつずれていき、ジジが映し出される。更にずれてその  
手元にあったのは：

ツナ「りゅ…硫酸！？何する気なのー！？」

バーズ「硫酸って人にぶっ掛ける以外使用法ってあるんですか？」

いっぱいあるよー。料理に混ぜたりとか↑オイ！

バーズ「お前は黙っている」

………ぐすん（泣）

ツナ「ナレぐれた！？」

山本「こんなときにかよ！」

バーズ「今度ナレーションの方にも硫酸ぶっ掛けてあげますよ。まあ、それより先に彼女にやりますがね。

いやー楽しみだ。彼女、痛くて驚くでしょうね!!

ただれてまたビックリ!!」

山本「こいつ!」

獄寺「マジ切れてやがる!!」

良い子はまねしないでね?

バーズ「やっちゃって」

ジジ『ギィ……』

バーズ「ウジュ」

ツナ「まって!! ナイフでも何でも刺すから!!!!」

ピタ ↑あー。後1。だった。

山本「ツナ!」

獄寺「十代目!」

ツナ「絶対絶対だめだ!!!!カンケーない京子ちゃんをひどい目に  
合わせるなんて!!!!」

「バーズ」(ウジュジュジュ)。なんとまああつけない。ナイフには引  
ついただけでも即死する毒がたっぷり塗りこんであるんだ。

趣味の前に仕事終わっちゃうな〜〜〜）

「それではやってもらいましょうか？制限時間は十秒ですよ」

山本「て……てめえ！」

獄寺「十代目！もう一度考え直してください」

力チヤ…

ピアノキ「すぐに救急車を呼んであげる。ナイフ貸しなさい」

ツナ「いいよ。自分で…やる……」

山本「！」

獄寺「十代目……」

ツナ「(獄寺君と山本だって、自分の事をかえりみずにオレをかばってくれたんだ。オレだって…)

「これくらい……！！！」



バーズ「ウジュジュユ」

ボゴツ

ジジ『ギギイッ』

バーズ「！　どうしたジジ！！」

ジジ『ギ…ギ…』

？『おめーみたいなのがロリコンの印象悪くするんだよ』

全「『あっ！！』」

？『ハーイ京子ちゃん。助けに来ちゃったよ。』

おじさんカワイコちゃんのためなら』

シャル『次の日の筋肉痛もいとわないぜ』

ツナ「Dr. シャマル！」

バーズ「な、なにー！！？　シャル！！？」

超一流の闇医者でありながら天才殺し屋と言われるトライ  
デント・シャルだと！？

何故…何故奴がこんな所に！！」

山本「やるな、保険医のおっさん」

獄寺「おせーんだよヘンタイヤブ医者が!!!」

バース「まーまー皆さん落ち着いて。こっちにはもう一人いるんですからね。」

ほーら、次はこの子の顔が潰れる危機ですよ。ウジュ」

ツナ「ハル!!!」

バース「嫌なら続けてもらいましょうか、ボンゴレ十代目。さあ、ナイフを刺してください、今すぐに!!!」

? 『<sup>は</sup>哈っ!!!』

バキッ

デデ『ギギヤ!!!』

バース「!!!」

? 『やれやれ』

? 『ハルさん! 怪我ありません?』

ツナ「あれは…」

大イーピン『許せないな、女性を狙うなんて』

大ランボ『ハルさん。ここはオレ達に任せてください』

ツナ「イーピン!!ランボ!!」

バーズ「バカな!!次から次へと。このことは誰にも知られていないはずだ!!」

大イーピン『言われたとおりにハルさんを見張ってて良かった』

シャマル『奴の読みはどんぴしゃりだったな』

ツナ「(言われたとおり? 奴の読み? ま…まさか…)」

リボーン「ゴホン」

ツナ「リボーン、お…お前…」

リボーン「よかったな。困ったときに助けてくれる仲間ファミリーがいて」

ツナ「うん…ん? ファミリーじゃないだろ!!」

リボーン「さあ、こっちの番だぞ」

バキツ↑蹴

ツナ「うわわわわ(ヨロ…ヨロ)」

ガッ↑殴

ツナ「!!」

バーズ「ぎゃ」

ドザアツ

バーズ「おーいておーいて。おのれ許さんぞーガキの分際で――!!」

チヂ&ジジ!! 何をしている!! こうなれば皆殺してしま  
え!!」

ツナ「えゝえゝ!!」?

京子『こんにちはシャマル先生』

花『どーして保健のオッサンがここに?』

シャマル『今日は速やかに帰ることをお勧めするよレディ達。オレ  
の戦いっぷりを見たら惚れて眠れなくなっちまうぜ』

ツノ獄「(何言ってるんだあのエロオヤジ)」

山本「(ドン引き)」

花『やばいよ! こいつヘンタイだって! いこいこ京子』

シャマル『今度チューしよーね! 麗しの子猫ちゃん! フフン♪』

さーやろーか? にしてもつくづくお前』

ジジ『ギイゝイゝイゝイゝ』

シャル「乙女たちには刺激が強すぎる野郎だな。まあ、医者として言うておくがお前は振動症候群しんどうしんどうろーむにかかった。あまり動かんほうがいいぞ

………つっても遅かったか。

発病だ』

ブシャ

ツナ「ひいいあれもトライデント・モスキートの病気の一つー!? 怖え———!!」

バーズ「おのれシャル!! こうなればもう一方だけでもぶっ殺せ!!!」

ハル『はひー何の騒ぎですか?』

大ランボ『オレ達が来たからもう大丈夫ですよ』

ハル『ほえ?』

大イーピン『ランボ。ハルさんをお願いね』

大ランボ「オーケー。さあハルさん、ここはイーピンに任せて安全な場所へ』

ツナ「（ランボ戦わないのー!!?）」

ヂヂ『ギィィィィィィィ』

ドゴツ

大イーピン『哈<sup>は</sup>っ!』

たっ

大イーピン『白<sup>ハク</sup>（ガッ）撥<sup>ハッ</sup>（ボッ）中<sup>チュン</sup>（グッ）

ハイサンゲン  
高三元<sup>ハク</sup>!!』

ゴギヤ      ボキツ      ベキツ

バーズ「バ…バカな!! すさまじい!!」

ツナ「すげーイーピン。さすが将来有望ランキングベスト3の十年後の姿!!」

バーズ「奴らは双子の悪魔と呼ばれた連続殺人犯だぞ。こんなことが…」

やっぱ六道さんのミッションはレベルが高い（焦）

くわばらくわばら（そそくさ…）」

獄寺「どこへ行くんだ」

ドガッ↑蹴

バース「ひげっ」

どぎっ ブクブク↑泡

獄寺「げ…一発でのしちまった」

山本「命令する本人はたいしたことねーのな…」

VS  
バース

獄寺の一発蹴りでノックアウト。

## 抜けられない幻覚世界

美鈴 side

美鈴「ん……ここは…？」

目が覚めると、見慣れない場所にいた。

四方を冷たい壁に覆われた、小さくて狭い部屋。

コンコン

壁を叩いてみる。

随分と頑丈にできた壁だなあ。でも、

パンツ

ガラガラガラ

私の錬金術の敵じゃない。

美鈴「さーって、ここはどこかなあ。

………あ」

何か違和感があると思ったら、カツラが無くなっていた。

つまり、今の私は悠里ではなく、美鈴。



美鈴「骸の仕業…かな？」

まあいいや。どーせこの姿を見られたって、悠里であることがばれなければ何の問題も無い。

よし、とりあえずは、

美鈴「逃げるか」

外に向かって走り出す。

出口はあっさり見つかった。

そこから外に飛び出した……はずだった。

美鈴「あり？なんだこりゃ？」

目の前に広がるのは外の風景ではなく、さっきと同じ部屋。

美鈴「どーなってんの？」

もう一度、外に行く。が、結果は同じだった。

美鈴「んー？やばいねこれ」

どうやら幻覚に嵌ってるな。マーモンの幻覚さえも見破る私が。

だがしかあし！！これでめげる私ではない！！！！

錬金術で手当たり次第に壁をぶち壊していく。でえてこおい!! 出口いい!!

一時間後

……いい加減疲れたよ？

知らないかもだけどねえ、錬金術って死ぬ気の炎みたいに、スнгеー気力が必要なんだよお？

それを一分間に二回のペースで使ってたから、まあ、持ったほうじゃない？

美鈴「って、ここにくたばってたまるかアアアアッ」

再発進。

と、その時だった。

腹部に感じた強烈な痛み。

見ると、三叉槍の先が突き出ていた。

振り向いた其処には、不気味な微笑を見せる骸の姿。

そこで、私の意識は途切れた。

## 骸と陰

ツナ「ねえ、このおっさんといい双子といい、さっきの楽器の女子といい……一体何なの？こんな刺客聞いてないぞー！！」

リボーン「こいつらは骸と一緒に脱獄した連中だな」

ツナ「ちよつとまってよ。骸達三人の他にも脱獄囚いたのー！？」

リボーン「ディーノの情報によると脱獄は結束の固い三人組にM・バーズ・ツイنزが加わる七人で行われたんだ。

三人組以外の消息は途絶えていたんだが、まさか骸のところに来ていたとはな」

ツナ「まさかじゃないよー！！」

リボーン「だってだって、ディーノがこいつらはカンケーねーなって言ってたんだもん（プクーツ）」

ツナ「キャラ変えてごまかすな！」

獄寺「にしても、あのおっさんキモかったぜ」

作者「ねー。皆はバーズって何歳だと思う？」

ツナ「あれ、作者が」

獄寺「70？」

山本「いや、60とかそんぐらいじゃねーの？」

作者「実は37! シヤマルの二歳年上なんだよ」

全「え――

――つ! ! ! ?」

作者「ビックリしすぎ……(呆)」

ビアンキ「ちょっと静かに! 誰かいるわ。

隠れてないで出てきたら?」

ツ／＼獄／山「な! ! ?」

ビアンキ「そこにいるのは分かっているのよ」

? 「……」

ビアンキ「来ないならこちらから行くわよ」

? 「ま…待って。僕だよ」

全「!」

ツナ「フゥ太!」

獄寺「こ…こんなところに」

山本「逃げてきたんじゃねーの？」

ツナ「と…とにかくよかったー！元氣そーじゃんかー！皆いるからもう大丈夫だぞー！」

さあ一緒に帰ろーぜ！」

フウ太「来ないでツナ兄」

全「！」

ツナ「え…？」

フウ太「僕…もう皆のところには戻れない。僕…

骸さんについていく…」

ツナ「な…何言ってるんだ…？」

フウ太「さよなら…」

ツナ「ちよつまでよフウ太！！フウ太！オイ待てって！！（タタツ）」

獄寺「十代目！！深追いは危険です！！（ダッ）」

山本「どーなってんだ？」

ビュッ ドゴッ

獄寺「なんだ!!」

山本「て……鉄柱？」

獄寺「！！」

ザ  
:  
ツ

全「（次の刺客か！！）」

[illegible]

ツナ「フウ太——！どこ——！？やっぱさっきとこ右だったかな…」

コケツ

ツナ「！おっとつと」

こけたツナの目の前に現れた黒曜生。

骸  
「おや？」

ツナ「ひいつ黒曜生——！！」

骸「（ニコッ）助けに来てくれたんですね！」

ツナ「え!？」

骸「いやあ助かったー。一生ここから出られないのかと思いましたよー」

ツナ「え~~~~~!？」

（もしかしてこの人、黒曜の人質…? そっか…黒曜中も骸に征服されたよーなもんだもんなー）」

ここに居るのが骸本人だとは知る芳もない。

ツナ「あの…期待してるとこ悪いんですけど…まだ…助け出す途中っていうか…」

骸「すすいません、一人で先走ってしまつて。でも、助けに来てくれたという行為に本当に感激しているんですよ。ありがとう」↑  
アニメの骸カワイかったb v作者

ツナ「いや…そんな~~~~（ここに来て初めてまともな人に出会えた気がする~~~~（ほっ）何か脱力~~~~）」

骸「すごいな~~~~やはり選りすぐりの強いお仲間とこられたんですか？」

ツナ「いや…あの…女の人とか赤ん坊もいたりするんですけどね…  
（言っちゃった!~!）」

骸「え…赤ん坊!?! こんな危険なところですか!?!」

ツナ「ええ…まあ。アイツは例外って言うか」



骸「へーすごい赤ちゃんだなー！まさか、戦うとすごく強いとか？」

ツナ「まっまさかー赤ん坊が戦うわけじゃないじゃないですか……………」  
……（はーっ）

いや、実際直接的に戦ってくれたらどんなにいいことかと思うんですけどね（ボソ）」

骸「というと間接的に何かするんですか？」

ツナ「え…まあ…詳しくは言えないんですけど…（死ぬ気弾撃たれんだよなー）

あ…そーだ。それよりヒバリさんって並中生知りませんか？」

骸「このどこかに幽閉されています」↑うわ優し

ツナ「やっぱりここにー！どこの建物か分かりませんか！？」

骸「今質問しているのは僕ですよ」

ツナ「え…？」

骸「その赤ん坊は

間接的に何をするんですか？」

風で骸の右目が現れる。

そこには六の文字があった。

ツナ「ひっ（目…目が…！っていか何か感じが変わった）」

そーだ！はぐれちゃったんで皆のところに戻らなきゃ！友達とまた来ます！じゃあまた！」

骸「クフフフ」

千種「やはりあの赤ん坊、アルコバレーノ」

骸「そうですね。そして赤ん坊は戦列には加わらないが、何か手の内を隠している…。ボンゴレ十代目を手にかけるのはそれを解明してからにしましょう（クスクス）」

千種「…………うれしそうですね…………」

骸「実際にあって呆気にとられてるんですよ。

神の采配と謳われた、人を見抜く力に優れているボンゴレ九代目が後継者に選んだのは、僕の予想をはるかに超えて弱く小さな男だった…。

何なんだろうね彼は……

クフフフフフフフフフフフ

千種「…………（いつまで笑えるんだろう）」

骸「まあ、どちらにせよ、あのアルコバレーノの手の内はすぐに見えますよ。彼等の手には負えないでしょうからね。

[illegible]

山本「くつくそつ。こつちもふさがれたぜ」

山本「しかしなんつーバカ力だ……」

（ズキン）！？  
な……っ

ハアハア……くそつ。さつさと終わらず怪力ヤロー。こつちやひまじゃねーんだ」

山本「お前は！！」

570

獄寺「こいつが…」

山本「ついに出てきたな」

ビアンキ「フウ太に何をしたの？」

骸（一応）「フウ太…？知らんな。

……………（一応）とはなんだ（ボソ）」

獄寺「ぐ…（ガクッ）」

山本「獄寺？」

ビアンキ「ハヤト！！（すごい熱…薬の副作用かしら…？）」

山本「お前の相手はオレがするぜ」

骸（一応）「千蛇烈覇！！」

山本「（遅い…！）」 サッ

ぐん

山本「！？？」

メキヤッ

山本「がっ」

リ／ビ「!？」

獄寺「山本！」

リボーン「ヤベーな。こいつはつえーぞ（カシャン）」

## 骸と陰（後書き）

姫「あ、久々に来れた」

骸（一応）「おい、何でオレは（一応）なんだ」

ドSちゃん「仕方ないですよ。骸はちゃんといるんですから。

ね、先輩？」

骸（一応）「ぐ…お…」↑“先輩”トラウマ

骸「あなたはSですか」

獄寺夫人「名前を見て気づこうよ。完全にSだよこの人」

姫「うんうん」

骸「なるほど。僕とは気が合いそうですね。

しかし作者さん、

可愛いって酷くないですか!？（ガーン）」

V  
S  
骸の陰

ツナ「ハアハア。フウただじゃなくてヒバリさんも捕まってたなんて……！ 悠里は……！？」

（にしても黒曜生の人質だった人、変わってたな…。不自然  
って言うか不気味って言うか…。六道骸の人質になると皆おかしく  
なっちゃうのかな…。）

と、とにかく早く皆と合流しないと、こんな所で敵に出会ったりしたらシャレにならないよ〜〜!」

[illegible]

獄寺「山本！！」

「ビアンキ、なぜ!? 完全に避けていたわ」

ズズ  
ズ  
：

骸（一応）「これで分かったはずだ。貴様らに生きる道はない。希望は捨てろ」

獄寺「こいつ…！」

「おいおい待てよ。まだ負けちゃいねーぜ」

山本「フー。バツこつを盾にしなかったらやばかったな」

ビアンキ「山本武」

獄寺「あのバカ……………」

リボーン「だがピンチには変わりねーぞ。あの鋼球の謎を解かねーと」

山本「ああ。チビの言うとおりだ」

骸（一応）「抵抗するとは愚かな。無駄なあがきは惨死を招くぞ。」

千蛇烈覇！「」

山本「見切ってやるさ」

ガガガガッ

山本「こいつでなっ」

ザッ↑砂煙

山本「鋼球の周りに……………！！」

ビアンキ「気流だわ！」

山本「やべえっ」

ビュオッ

山本「ぐおっ」



どだっ↑転

山本「フー。転ばなきゃ危なかったぜ。

鋼球の周りに風が起きてやがる。野球のボールは後ろに気流を作りながら進むっつーけど、そんなレベルじゃねーな」

リボーン「鋼球に彫られた蛇に秘密があるな」

山本「!？」

リボーン「あの蛇の溝が球に当たる空気の流れを捻じ曲げているんだ。溝を通して生まれた気流は複雑に絡み合うことで、威力を何倍にも増幅されて烈風を生み出す」

骸（一応）「理解したとて攻略にはならぬ。

暴蛇烈覇!!（ドン）」

山本「基本に忠実に行くぜ。

（確実に避けて、投げた直後の隙を突く）」

骸（一応）「無駄だ」

山本「!」

ギョルルル

山本「回転!!」

ゴオオオ...

山本「ぐっ うああ!」

ゴギヤツ

山本「!!!!」

獄寺「山本ー!!」

ゴッ ずず...

骸（一応）「言っただ。希望は捨てろと。」

約束通り惨死をくれてやる。止めだ」

獄寺「やろう...まちやが...（ズキッ）うっ」

どさっ

ビアンキ「させないわ」

ブシヨアアア×2

骸（一応）「オレはまだ三割の力も出していない。貴様に万に一つの勝機もない。諦めろ」

ビアンキ「（汗）」

ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・

ツナ「皆どこー？確かここら辺だったような…」

！ 発見やっと思つけた！！

え…？あれって…写真で見た六道骸だゝゝゝゝゝ！！！！

ひいい！！バックバック！

…ん？獄寺君！！山本！！ビアンキが山本をかばって…！

（ムカア…アイツ…）

コラア！！！！何やってんだ————！！！！」

骸（一応）「！」

ビアンキ「ツナ！」

リボーン「（ニッ）」

ツナ「あゝ

（何やってんだオレ————！！？何でランボ叱るみたいにな  
チュラルに六道骸叱ってんの————！！）」

骸（一応）「降りてこいボンゴレ」

ツナ「ひっいや…あの…（ど…どーしよー！！）」

骸（一応）「女を殺して待つ（ドン）」

ビアンキ「！！」

ツナ「ビアンキ！」

リボーン「死ぬ気になるのは今しかねーぞ。暴れて来い。

ラスト一発だ（ズガン）」

ガッ

ズジャジャ

ビアンキ「ツナ…！」

骸（一応）「！（暴蛇烈覇を止めただと……？）」

死ぬ気ツナ「復<sup>リ</sup>！！活<sup>ボーン</sup>！！…！」

六道骸…死ぬ気でお前を倒す！！」

リボーン「最後の切り札だぞ。しっかり骸と決着<sup>ケリ</sup>つけて来い」

影に差し込む光

千種「鋼球を止めるなんて……」

アルコバレーノが0.05秒以下の早撃ちで撃ったのは恐らく特殊弾」

骸「しかし、最後の一発だったとは。まんまと術中に嵌ってくれましたね。これでまた一歩、ボンゴレ十代目の略奪に近づきましたよ」

[illegible]

骸（二応） 「半端な強さではオレは倒せんぞ」

死ぬ気ツナ「こいつ」

骸（二心）「剛蛇烈霸！！！」

サ  
ツ

ダダッ

死ぬ気ツナ「おりゃあ!!!」

ゴツ↑投

骸（心）「！」

「あの子あんなに…」

リボーン「ここに来て急激に成長しているぞ」

骸（一応）「飛蛇烈覇！！！」

ガッ↑止

死ぬ気ツナ「うおおおりゃああ！！！！（ドン）」

ゴッ

骸（一応）「ぐあっ」

ドガッ

死ぬ気ツナ「ハァハァ」

ビアンキ「や…やったわ！！！」

リボーン「これで並盛に帰れそーだな」

千種「アレがボンゴレ…」

骸「これは驚きですね。しかしあの程度では僕の先輩だった男は倒せませんよ…」

骸（一応）「貴様になら全力を出せそうだ」

全「!!」

ビアンキ「あの攻撃を受けて平気だなんて……なんて奴なの!？」

骸（一応）「玉遊びなど余技に過ぎん!」

死ぬ気ツナ「!？」

骸（一応）「オレが真に得意としているのは（ダッ）

肉弾戦」

ドン

死ぬ気ツナ「うがっ!!」

リボーン「ハツタリじゃねーぞ」

死ぬ気ツナ「グァ…」

骸（一応）「まだだぞ」

死ぬ気ツナ「!!」

グイッ

ガッ↑膝蹴り

死ぬ気ツナ「ギャ」

骸（一応）「まだだ」

死ぬ気ツナ「!!」

ドゴォッ

ビアンキ「ツナ!!」

骸（一応）「フィニッシュだ」

死ぬ気ツナ「!!」

ドガアッ↑蛇鋼球 落

ビアンキ「あ……………ああ……………」

骸（一応）「貴様等の希望は潰えた。次は誰だ…？」

ガラガラ…ドズン…

骸（一応）「! 何!!!!」

バカな…コイツは化け物か…？」

死ぬ気ツナ「あなたはそんな悪い人じゃない」

骸（一応）「!!」

ビアンキ「!？」



骸（一応）「貴様…何を言っている！」

死ぬ気ツナ「そんな弱い心では死ぬ気のオレは倒せない」

骸（一応）「……心だと！オレの事を分かったような口を聞くな！  
！殺しはオレの本心だ！！！」

死ぬ気ツナ「ウソだ！！！」

骸（一応）「黙れ小童！！！」

死ぬ気ツナ「死ぬ気で倒す！！！」

ドッ↑殴

骸（一応）「うう…こ…このオレが負けただと…？」

死ぬ気ツナ「攻撃するとき必ず目を閉じているのも鋼球を使わなくては止めをさせないのも、あなたの心の中に罪悪感…迷いがあるからだ」

骸（一応）「な」

シュウウウウ

ツナ「あなたを最初に見たときからおかしいと思ったんだ。まるでウチにいるランボって子供にみたいにあったかくて怖い感じがしなかったから」

骸（一応）「！（こいつ…一見してオレを見抜いたというのか…）」

……………（なるほどな。これがボンゴレの血…）

完敗だ。お前を六道骸が警戒するのも頷ける」

ツナ「え！？な！？何言ってるんですか？だ…だって六道骸ってあなたのことでしょ？」

？「オレは影武者だ」

ツナ「え」

ビアンキ「ニセモノ！？」

？「その証拠に名前にずっと（一応）が入っているぞ」

ツナ「あ！ホントだ！

で…でも刑務所の写真にあなたの顔が…」

？「本物の骸は自分の姿を残すようなへまはしない。そして六道骸…アイツは…

オレの全てを奪った男だ！！」

ツナ「！」

リボーン「何があったか言え」↑上から目線ww

？「五年前：オレはある北イタリアにあるマフィアの一員だった。

孤児だったオレを育ててくれたボスとファミリーはオレの命：

オレは奴等の恩に報いたくファミリーの用心棒としてエリア最強までになっていた：

そんな折、ボスがまた孤児を拾ってきた：

何でも野望に満ちた目が入ったらしい。奴の面倒はオレが見ることになった。

オレは奴を本当の家族のように可愛がった。ファミリーがオレにそうしてくれた様に。

ところが間もなく事件が起きた。

オレがカードをしにアジトに戻るとファミリーが全員殺されていたんだ：」

リボーン「有名な事件だな」

？「オレは犯人への怒りに燃えた。だがその後の調査で意外なことが分かった。

オレが殺ったんだ」

ビアンキ「!」

ツナ「ど　どーゆーこと?」

? 「それからは目を覚ますたびに、身に覚えのない屍の前に何度も立っていた」

ツナ「だって殺してるつもりはないんでしょ?」

? 「もちろんだ……。オレは自分がすっかりおかしくなっちゃった  
と思い…自殺を決意した。」

だが無理だった…

全てを奴にコントロールされていたんだ…

ツナ「な!」

? 「そう…あのガキ、六道骸に…

オレは操られていたんだ!」

ツナ「なんだって!」

? 「いつしかオレは名も心も奪われ、ニセの六道骸となった…」

ビアンキ「そして何もかもに絶望して殺人マシンと化したのね…」

ツナ「なんて奴だ六道骸…人間のやることじゃない……」

獄寺「ぶっ倒しましょう 十代目!!」

ツナ「獄寺君!! 大丈夫なの!？」

ビアンキ「（副作用の発作が引いたのね（ほっ））」

？「ボンゴレ…お前ならできるかもしれない…」

いいかよく聞けボンゴレ…骸の本当の目的は…

（はっ）どけっ!」

ビュビュ

サクサクッ

獄寺「メガネヤローだ!」

リボーン「行ったな。一撃離脱か…」

獄寺「く!」

ビアンキ「山本武は無事よ!」

？「うが（どさっ）」

ツナ「あ！ああ！！」

リボーン「目的は口封じか」

ツナ「そんな！大丈夫ですか！？しっかりとしてください！！」

？「散々な人生だったぜ」

ツナ「そんな……あっあなたの本当の本当の名前は！？」

？「！」

ツナ「六道骸じゃない、ちゃんとした名前があるでしょ！？」

ランチア「……………オレ…は…ランチア…」

ツナ「しっかりとくださいランチアさん！」

ランチア「その名で呼ばれると…思い出すぜ……昔の…オレの…フ  
アミリ…」

これでみんなの下へ逝ける…な………」

そう言ってランチアは涙を流し、静かに目を…閉じた。

ツナ「そんなー！！ランチアさん！！！！」

獄寺「散々利用しといて不要になった途端…」

クソッこれがあいつ等のやり方かよ！」

ビアンキ「人を何だと思ってるの？六道骸」

ツナ「やっぱりアイツムカつくよ。」

行こう。骸のところへ」

リボン「だが最後の切り札は使っちゃったぞ」

ツナ「分かってる…だけど…でも…六道骸だけは何とかしないと！  
」

リボン「（ニッ）じゃあ行くか。骸倒しにな」

# 骸と人質

「ここもだわ。階段が壊されてる…」

リボーン「やる気はマンマンってことだな。敵が来る道は一つに絞れた方がいいからな」

ツナ「なあ!？」

獄寺「ん？ケータイが落ちてる…。壊れてら…」

ツナ「あ！もしかしてヒバリさんのかも！ヒバリさん、着うた、うちの校歌なんだよね！」

獄寺「なあ！？ダッセー！！（ガーン）」

リボーン 「早く行くぞ」

[illegible]

ツナ「あ、あつたー！！」

パシ

シ  
ユ  
ル  
ル  
ル  
ル

パ  
シ  
ツ

ツナ「でた！ ヨーヨー使い！」



ジュッ

千種「!?!」

パカッ

プシューウウウウウウウ

ツナ「煙幕…」

獄寺「十代目、ここはオレに任せて先に行ってください」

ツナ「獄寺君!!」

……聞いて獄寺君、前にやられた時、悠里のおかげで命を取り留めたんだ」

獄寺「ええ、知ってます」

ツナ「それで…その…あの薬には副作用があって、完全に効くまでに何回か激痛が襲うんだ。それでもいいの?」

獄寺「……やります。そのためにオレがいるんですから」

ビアンキ「行きましょツナ」

ツナ「うん（獄寺君、本当に大丈夫なのかな…）」

獄寺「十代目」

ツナ「!！」

獄寺「終わったらまた皆で遊びに行きましょう」

ツナ「そーだよね。いけるよね」

獄寺「もちっス！」

ツナ「わかった! いくね！」

ダッ

獄寺「大人しく行かせてくれたじゃねーか」

千種「骸様の命令だ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ツナ「(怖え〜)」

ギイイイ

ツナ「!」

骸「また会えて嬉しいですよ」

ツナ「ああ! ! 君は! ! もしかしてここに捕まってんの! ?」

あ、あの人さっき会った黒曜生の人質なんだよ」

骸「ゆっくりしていつてくださいね。君とは永い付き合いになる。  
ボンゴレ十代目」

ツナ「え？何でオレがボンゴレって…？」

「違おうツナ！こいつ……！」

骸「僕が六道骸ですよ」

ツナ「な……はあー！！！！？」

ボタン

ツナ「フウ太！」

[illegible]

バリオン

ガ  
ガ  
ガ  
ツ

獄寺「ヘツタクソが！！」

千種「……（ハッ）」

ヂヂヂ

千種「！」

ドガアンッ

ズザッ

獄寺「二倍ボム!!」

千種「!」

シャツシャツ

ブチブチブチブチブチブチブチ

獄寺「前回やられたのがよっぽど脳裏に焼きついてるらしいな。素早すぎる反応だ。」

おかげで足元がお留守だぜ」

千種「!!」

獄寺「障害物のある地形でこそオレの武器は生きる。ここで待ち伏せた時点でお前の負けだ」

ドガガガン

ゆら…

獄寺「おっとしぶてーんだったな。コイツで果てな。」

(ズキン)!! がっ うがああア!」

千種「(フラ)」

獄寺「くそっ(どんっ)こんな時に…!!」

千種「!? (フラ…)」

バリンッ

犬「スキありびょん」

グサッ

}.}.}.}.}.}.}.}.}.}.}.}

ツナ「フウ太! おゃ驚かすなよ」

ビアンキ「無事みたいね」

ツナ「あの後随分探したんだぞ」

ビアンキ「危険だから下がってなさい」

ス…

ビアンキ「フウ…」

ドスッ↑刺

ツナ「ビアンキ!」

「（いや…）」？

風紀委員長 参戦！

千種「無事だったの？」

犬「死ぬかと思ったけどね。ヒヤハハハ ザマーみろバーカ」

獄寺「（フラ…ズリッ）」

ズダダダダ↑落

犬「んあ？ぶっざまー♪」

獄寺「（体が…動かねえ…）」

鳥「（バササ）ヤラレタ！ヤラレタ！」

獄寺「（くそう…ヘンタイヤローの鳥まであざ笑ってやがる。何が十代目の右腕だ…」

何の役にも立っちゃいねえじゃねーか…

くそっ…くそっ…！…！）」

鳥「緑たなびく並盛の———」

獄寺「（……………！？）」

鳥「大なく小なく並がいい———」

獄寺「へへ…へへへへ…」

犬「っひゃーこいつまだ闘う気かよー」

獄寺「ううっ」

とん　コロコロコロ

ドガアン↑壁　爆

犬「っひゃーどこ売ってんのー？」

千種「！」

ガラガラガラ

獄寺「へっ……ウチのダッセー校歌に愛着持ってるのは…おめーぐらいだぜ…」

犬／千「！」

ガラガラガラ

犬「んあ？こいつ……」

千種「並盛中学風紀委員長…

雲雀恭弥———」

獄寺「元気そうじゃねーか」



犬「ヒヤハハハハもしかしてこの死に損ないが助っ人か――!?」

雲雀「自分で出れたけどまあいいや」

獄寺「へへっ」

雲雀「その二匹は僕にくれるの? (ヨロ……)」

犬「こいつバースの鳥手なずけてんの」

雲雀「じゃあもうよ」

獄寺「好きにしゃがれ」

犬「死に損ないが何ねぼけてんだ? こいつはオレがやる」

千種「言うと思った」

犬「徹底的にやつからさ(カシャン)百獣の王

ライオンチャンネル!!!!」

ガルルル…

雲雀「ウォ子犬かい?」

犬「うるへーアヒルめ!!! (ダッ)」

パシッパシッ↑トンファー構

ヒュッ

犬「ひょい♪」

くるんっ

犬「!？」

ガッ

パリーン

千種「犬！」

雲雀「次は君を……………咬み殺す」

千種「(汗)」

## 囚われの姫

ツナ「ビアンキ！しっかりして！

ちよっ フウ太何してんだよ！！」

ス…

ツナ「な！？」

ヒュッ

ツナ「うわっ（どてっ）」

ストッ

ツナ「フウ太！？おい！」

骸「彼には何を言っても無駄ですよ。本当の彼はここにはない」

ツナ「は…どーゆー……？」

リボーン「マインドコントロールか」

骸「流石ですねアルコバレーノ。

そうです。彼にはマインドコントロールが施してあります。つまり、僕の意のままに

…ほうら」

ビュッ

ツナ「うわっ！」

？「（ニヤ…）」

タタタタッ

リボーン「！ 危ねーぞツナ！」

ドスッ↑蹴

ツナ「な！？」

サクサクサクッ

ツナが立っていたところに幾つもの手裏剣が刺さっていた。

ツナ「しゅ…手裏剣！？」

…悠里！？悠里がいるの！？」

あたふめくツナの前に現れた美鈴。

ツナ「悠里じゃ…ない？」

骸「油断する暇はあるのですか？」

ツナ「！」

ビュッ

ツナ「わっ」

リボーン「一度に二人からの攻撃か…これはつれーな」

美鈴「あなたにはここでいなくなってもらおう。」

皆と…世界のために」

ツナ「あーゆー目が笑ってない笑顔ってメッチャ苦手なんだけど！  
！つか怖いよ！！」

リボーン「お前、アイツに見覚えあるか？」

ツナ「は？こんなときに何を言ってるんだよ！知るわけないだろ！？」

リボーン「……そうか」

骸「無駄話をしていると……」

ヒュンッ

サクサクサクッ

ツナ「ひいっ」

骸「クフフフ」

リボーン「マインドコントロールされてちゃ手が出せねえな」

ツナ「そんな!!」

骸「さあ、どうしますか？ボンゴレ十代目」

ツナ「(ビッ)わあっ」

骸「クフフフフフフ」

## 仲間

リボーン「そー言えば、前にディーノから貰った鞭を持ってきてやったぞ」

ツナ「はあ！？今そんなの渡されても困るから！

（はっ）そーだ、マインドコントロールが骸のせいなら

骸本人を攻撃すれば…

よしっ（タッ）」

骸「おや？」

ビッ

バシッ

グルルル

ツナ「ぎゃっ」

鞭を放ち、軌道がそれて、自分がぐるぐる巻きとなったツナ。

さすが運動オンチ。

骸「クハハハ！！やはり君は面白い。

ホラ後ろ、危ないですよ」

フウ太「うう……」

ツナ「な！？フウ太まで絡まってるー！？」

フウ太「うう……」

ツナ「あっわっダメ！」

カラカラ↑三叉槍 飛

ツナ「！（この目、ランチアさんと同じ目をしてる…

もしかしてフウ太も骸に酷いことをさせられてその罪の意識  
で…）」

フウ太「ううう……（がしっ）」

ツナ「わっ（フウ太…）」

お前は悪くないぞ」

フウ太「！」

骸「！？」

ツナ「お前は何も悪くない。皆お前の味方だ。

だから安心して帰って来いよ」



骸「（ほう。マインドコントロールを解く唯一の方法

“一番望むこと”を言い当てたか）」

フウ太「うう………ツナ…兄…（どさっ）」

ツナ「フ…フウ太!？」

骸「おやおや、君が余計なことを言うから彼、クラッシュしちゃいましたよ」

ツナ「な!？」

骸「思えば始めから手にかかる子だった。

次期ボンゴレ十代目が日本にいと聞いて来たまではよかったが、

情報は何一つなかった。

そこで、ボンゴレと知り合いというフウ太君に来てもらったのですよ。

しかし彼も沈黙オメルタの掟を貫き通し、心を閉ざし

終いにはランキング能力まで失ってしまった」

リボーン「それで前に行われた並中ケンカの強さランキングを使ってファミリーをあぶり出そうとしたんだな」

骸「もくろみは成功でしたよ。現にボンゴレはここにいる」

ツナ「人を何だと思ってるんだよ！」

骸「おもちゃ…ですかね」

ツナ「ふざけるな！」

骸「おっと、油断する暇はあるのですか？」

ツナ「？ ……！」

カカカカッ↑手裏剣

リボーン「そーだぞバカツナ。もう一人いることを忘れてるぞ」

美鈴「ふふふ…（たっ）」

ツナ「ひいっ」

キイイイン

美鈴「！」

ツナ「あ！」

フィン「ツナ、加勢しに来たよ…！」

ツナ「フィンちゃん…！」

リ  
ボ  
ー  
ン  
「  
ニ  
ッ  
」

## 本格的になっていく戦い

ツナ「フィンちゃん！どうしてここに！？」

フィン「ツナには悪いと思ったけど、ずっと後をつけてたの。」

でも、足手まといになるのが嫌だからずっと気配を消してて……

だけどやっぱり出たくなって出てきちゃったww」

ツナ「なあ！？」

美鈴「頭数が一人増えただけでいい気にならないでよね。」

アタシ達の目的を邪魔する奴らは何人たりとも生かさない」

フィン「いいわ。私が相手する」

ツナ「ちょっやめた方が…」

フィン「大丈夫。それでも私幹部だから（ニッ）」

タッ

ガシッ↑蹴 止

美鈴「！」

フィン「マインドコントロールされてる人の攻撃を止めるなんて容易いことよ」

ツナ「え？じゃああの子もマインドコントロールされてんの！？」

リボーン「にしては妙だな。その割には自分の意思で動いてるように見えるんだが」

骸「クフフ当然ですよ。

マインドコントロールと言っても、彼女はフウ太君とは違う。

心を操り、“隠す”ということができなくした。

それによって、本来の力を発揮できない物の、目的に合わせたことしかない」

フィン「目的？」

骸「そう」

骸／美「打倒ボンゴレ」

フィ／ツ／リ「！？」

フィン「ま、いいわ。今最優先すべきことは、貴女を止めること」

美鈴「クスッ」

フィン「その余裕の笑み、できなくしてあげるわ」

タッ

タッ

フィン「はっ」

ガッ↑平手押し込み

美鈴「！ がはっ」

ツナ「すごい…」

フィン「あなたが一番望むことなんて知ったことじゃないわ。

だから————」

ドガッ↑蹴

フィン「武力行使よ」

美鈴「く……（がくん）」

どさっ

ツナ「やった！すごいよフィンちゃん！」

フィン「それほどでも〜♪」

骸「クハハッ君たちは何も分かっていない」

ツナ「え？」

骸「今の戦闘の間に少し細工をさせていただきました」

ドゴゴゴ↑床 崩

フィン「きゃっ！」

ツナ「そ、そんなあ！！建物が！！ああ、皆！！」

リボーン「ちっ」

ツナ「わわっうわああっ！！うわああああ」

次回、ツナの運命や如何に！？

リボーン「テキトーに切りやがったな」

ドガッ↑蹴

作者「がふっ」

## 六道輪廻

ツナ「うわああああ」

バキツ↑殴

ツナ「ブー!!」

どさっ

ツナ「いで——————っ何すんだよりボー…んっえっあれ…?  
じ…地面が戻ってる…」

リボーン「お前が見たのは幻覚だぞ」

ツナ「へっげ…げんかく!?!」

骸「クフフフやりますね。見破るとはさすがアルコバレーノ。

そう、六道輪廻第一の道 地獄道は永遠の悪夢により精神を破壊するスキル」

ツナ「ひっこええ…!! (ぞくっ)」

リボーン「六道輪廻…だと?」

骸「そうです。これをご存知ですか?」

リボーン「人は死ぬと生まれ変わって地獄道・餓鬼道・畜生道・修



羅道・人間道・天界道のいずれかに行くというやつだな」

骸「僕の体には前世に六道全ての冥界を廻った記憶が刻まれていますね。六つの冥界から六つの戦闘能力<sup>スキル</sup>を授かった」

ツナ「なに……言ってるんだ？」

リボーン「それが本当ならオメーはバケモンだな」

骸「君に言われたくありませんよ。呪われた赤ん坊アルコバレーノ」

“アルコバレーノ”については、かなり前で説明済みです。

骸「さて、君は攻撃してこないのですか、アルコバレーノ。僕は三人を相手にしても、構いませんよ」

リボーン「掟だからだ」

骸「掟とききましたか。実に正統なマフィアらしい答えですね」

リボーン「それにオレがやるまでもなくお前はオレの生徒が倒すかな」

ツナ「な…おいリボーン！」

フィン「いいんじゃない？」

骸「ほう。それは美しい信頼関係ですね。面白い。」

いいでしょう（ヴヴ…ン 三）」

ボト…ボト…ボト…

フィン「ひっイヤッ蛇!!」

ツナ「へ!? 蛇だ! ひい! きたあ!!」

あ、こ…これも幻覚なんじゃ!」

骸「正真正銘の毒蛇ですよ。なんなら咬まれてみますか」

フィン「来ないで! 蛇キライ!!」

骸「第三の道 畜生道スキルの能力は人を死に至らしめる生物の召喚。

さあ、生徒の命の危険ですよ。いいんですか?」

ツナ「ひい!! やめて! 助けて!!」

リボーン「あんまり図にのんなよ骸。オレは超一流の家庭教師だぞ」

ビッ ギュルルル

キンッ

ツナ「!」

カラカラカラ

フィン「トンファー!?!」

？「十代目…フィン…！伏せて！」

ツ／フィ「え！？」

ドガガガガ

ツナ「うわあ…！！」

……！！」

獄寺「遅くなりました」

ツナ「獄寺君…！！ヒバリさん…！！ふ…二人とも…」

リボーン「分かったか骸。オレはツナだけを育ててるわけじゃねーんだぞ」

雲雀「借りは返したよ（ポイ）」

獄寺「（どさっ）いでっ」

ツナ「ちょ」

ツ／フィ「（す…捨てたー！！（ガーン））」

骸「これはこれは。外野がゾロゾロと。千種は何をしているんですかねえ…」

獄寺「へへ。メガネヤローならアニマルヤローと下の階で仲良く仲

びてるぜ」

ツナ「すごいよ獄寺君！か…体は大丈夫なの！！？」

獄寺「ええ…大丈夫っス…。つーかあの…オレが倒したんじゃないーんすけど…（ずーん）」

フィン「（なるほど。ヒバリさんか…）」

雲雀「……あれは…美鈴？」

骸「！！！！」

ツ／フィ／獄「？」

リボーン「ん？」

骸「クフフ…まさか、この世界に彼女を知っている人物がいるとは思いませんでした」

雲雀「美鈴に…何をしたの？」

骸「彼女が君とどういう関係かは知りませんが、生きているのでご安心を」

雲雀「……………（やはり、悠里と美鈴は同一人物なのか…？）」

ツナ「ヒバリ…さん？」

雲雀と美鈴の意外な接点を彼らが知っているはずもなく、ただ首を

傾げるばかりの面々だった。

勝利。そして……

骸「クフフフ。何故君が美鈴を知っているのかは知りませんが、今君は立っているのもやつとの状態のはずだ。骨を何本も折りましたからねえ」

ツナ「ヒバリさんそんなヒドイ目に……!!」

雲雀「遺言はそれだけかい？」

骸「クフフフフ。面白いことを言う。君と契約しておいてもよかったかな？」

仕方ない。君から片付けましょう（ヴヴ…ン 四）

ツナ「目から死ぬ気の炎が!!」

骸「第四の道 修羅道。格闘のスキルです。」

さあ、一瞬で終わらせますよ（ダッ）

ガギキキキキキンッ

フィン「す…すごい。速すぎて何にも見えないよ」

ギンッ

雲雀「君の一瞬っていつまで？」

骸「（ニヤリ）」

ツナ「やっぱり強い！さすがヒバリさん！！」

リボーン「こいつらを侮るなよ骸。お前が思ってるよりずっと伸び盛りだ」

骸「なるほど。そうですね。」

彼が怪我をしていなければ勝負は分らなかったかもしれない

雲雀「（ブシュウ）！」

骸「クフフフフ…時間の無駄ですよ。手っ取り早く済ませましょう  
（ヴウン 一）」

そこに現れたのは満開の桜。

ツナ「さ…桜！？何で桜！？」

リボーン「ヒバリは桜を見ると動けなくなる桜クラ病にかかったま  
ってんだ」

ツナ「え——っうそー！！」

フィン「（あの変態シャルめ。余計なことを）」

骸「クフフさあ、また膝まづいてもらいましょう」

ツナ「そんな！ヒバリさん！」

フッ

バキッ

ツナ「!」

フィン「え?」

リボーン「ニッ」

骸「おや?」

獄寺「へへ：甘かったな。シャマルからこいつを預かってきたのさ。  
桜クラ病の処方箋だ」

ツナ「それじゃあ!!」

ドッ

骸「がはっ……」

カラカラカラ

同時に桜も消える。

ツナ「桜は幻覚だったんだ!って言うか…これって…」

獄寺「ちっおいしいとこ全部持っていきやがって」



フィン「あ…ああ…」

リボーン「ついにやったな」

ツナ「……！お……終わったんだ…。これで家に帰れるんだ！！」

リボーン「しかしお前、見事に骸戦役に立たなかったな」

ツナ「ほっとけよ！！」

ひ…ヒバリさん、だいじょうぶですか…！？」

雲雀「（フラ…）」

ツナ「！」

ばたっ

ツナ「大丈夫ですか ヒバリさん！」

リボーン「こいつ、途中から無意識で闘ってたぞ。よほど一度負けたのが悔しかったんだな」

フィン「ヒバリさんすごい…」

リボーン「ま、それ以外にもありそうだけどな（ニツ）」

ツナ「?？」

！！早く皆を病院に連れて行かなきゃ！！」

リボーン「それなら心配ねーぞ。ボンゴレの医療チームがこっちに向かってる」

獄寺「それならよかったっスね（フラフラ…）」

ツナ「獄寺君ムリしちゃダメだよ」

骸「その医療チームは不要ですよ」

全「！」

一同が声のしたほうを向くと、骸がこちらに向けて銃を構えていた。

骸「なぜなら生存者はいなくなるからです」

獄寺「てめー！！」

ツナ「ご獄寺君！！」

骸「クフフフ（チャキッ）」

全「！？」

しかしその銃を自らの頭に向け、

骸「A r r i v e d e r c c i」

ズガンッ

全「……………！」

しゅん…

獄寺「や…やりやがった」

ツナ「……そんな…どうして」

リボーン「捕まるぐらいなら死んだ方がマシってやつかもな」

獄寺「やるせないっス……」

ツナ「（何だ…この感じ…吐き気がする…）」

リボーン「生きたまま捕獲はできなかったが仕方ねーな」

ビアンキ「ついに…骸を倒したのね」

獄／ツ／フィ「！」

ビアンキ「うう」

獄寺「アネキ！」

ツナ「よかった！ビアンキの意識が戻った！」

リボーン「無理すんなよ」

ビアンキ「肩貸してくれない…」

ツナ「……？（あれ……？）」

獄寺「しょーがねーな。今日だけだぞ」

ツナ「！ 獄寺君！！行っちゃダメだ！」

獄寺「え？」

ビッ

獄寺「おわっ」

ビアンキ？「クフフフ。舞い戻ってきましたよ。

輪廻の果てより」

作者が壊れました。少々お待ちください

[illegible]



内容的には、前回の終わりから察して、骸の憑依によりピンチになったツナ。く

く黒曜編、もうすぐで終了!というところまで来てたんですよ。

それが全部パーになったんで。

作者「黒曜編なんてやめてやらあ!!」

落ち着きなさい。

えくと、作者がこんななんので、ホントに黒曜編終わっちゃうかもです。

楽しみに読んでくださった皆様方、ゴメンナサイ。

でも完全に終わるんじゃないかって、内容が思いっきり飛ぶだけなんです。

きっと次回は、骸が倒されてからになる可能性が……

ほんっとうにゴメンナサイ!!!

**作者が壊れました。少々お待ちください（後書き）**

和「……誰か、この哀れでバカな作者を慰めてやってくれ」

理沙「そうですね。いくら馬鹿でアホなヤツでも、これでも私たちの作者ですからね」

要「ちっ。オレの方にまで支障をきたすなよなアホ作者」

隼菜「ということで、感想&慰めの言葉、待ってます」







作者「三通目。」

『王子出さないとサボテンにすんぜ』

以上、H・N自称王子サマ」

骸「……………」

作者「まだまだ百通ぐらいあるよ。」

H・N 姫サマ。H・N ムツツリ、H・N オカマ、にH・N キ  
レるお父さん。他にもH・N ツナさんラブ、H・N 妹ラブ、H・N  
牛などなど」

骸「多すぎじゃないですか!?!」

作者「ということなのだよ」

骸「……………」

美鈴「せめて予定されていた前回の爆笑シーンを入れろ!! アレは  
皆に教えるべきだ!!」

骸「アレですか!?!」

作者「りょーかい」

） L e t、 s      g o !、

ビ<sup>骸</sup>アンキ「いいですか？君の仲間をこれ以上傷つけられなくなかったら、逃げずに大人しく契約してください」

ツナ「な…！そんな…ムリだよ…」

ビ<sup>骸</sup>アンキ「お願いします！」↑土下座

その他（全骸）「お願いします！」↑土下座

ツナ「え〜〜〜〜〜〜！！？」

リボーン「お前にプライドはないのか？」

獄寺<sup>骸</sup>「プライドなんてあったら他人を乗っ取ったりしません」

ツナ「リボーンどーしよ！オレ一人じゃ突っ込みきれない！」

リボーン「オレは何もしてやれねーぞ。自分で何とかしろ」

ツナ「この状況をか！？」

全（全て骸）「（バツ）」↑土下座中

ツナ「無理があるよ！ねえ、いつもみたいに助けてくれよ！！」

バキツ↑蹴

ツナ「ブフツ」

リボーン「情けねー声出すな」

ツナ「だって…オレ…どうしたら」

リボーン「まずはこの土下座モードを解け」

ツナ「え！？どーやって！？」

作者「ピンポンパンポン。はい、その土下座集団。ツナが憑依してもいいってさ」

ツナ「ちよっ何言って」

(骸)「本当ですか!?!」

ツナ「え〜〜〜〜!?!?」

リボーン「いいかツナ。折角作者が土下座モードを解いたんだ。次はお前の番だ」

ビアンキ<sup>骸</sup>「クフフフ、それではお友達を壊してから君を乗っ取りますか」

ツナ「なっ話がちがうぞ!」

獄寺<sup>骸</sup>「だから僕にプライドなど無いと、言ったじゃないですか」

ツナ「くっ…こんなヤツに負けたくない」

レオン「ブルッ…」

犬<sup>骸</sup>「おや?まさかそんな台詞が出てくるとは思いませんでした。やはり君の仲間は君の手で葬ることにしましょう」

ツナ「こんなふざけたヤツに負けたくない…。コイツにだけは勝ちたいんだ!!!」

了



終わりとそれから……

※結局骸を倒しちゃいました。

リボーン「終わったな」

ツナ「うん……」。

あっそうだ、みんなの怪我！」

リボーン「心配ねーぞ。ボンゴレの医療班も敷地内に到着したらしいしな。」

ランチアの毒も用意してきた解毒剤で間に合ったそうだ」

ツナ「（ほっ）よかった……」

？「ケホッ……ケホッ……」

ツナ「！ フィンちゃん」

フィン「あ……ツナ。……骸倒したんだね」

ツナ「うん。大丈夫？」

フィン「平気だよ。この中で一番軽症だったしね。獄寺君たちは？」

ツナ「傷が酷くて心配だけど、ボンゴレの医療班が来てくれたって」



フィン「お！一件落着カナ？」

ツナ「あはは。

……骸……。死んでないよな？無事だよな」

フィン「…どうして敵の心配をするの」

リボーン「まったく甘いなお前は」

？「近づくんじゃねえびよん！！！」

犬「マフィアが骸さんにさわんな！！」

ツナ「ひいっあいつらが！！」

フィン「いたんだ……」↑酷！

リボーン「ビビんなツナ。奴らはもう歩く力も残ってねーぞ」

ツナ「な…なんで…？何でそこまで骸のために？君たちは骸に憑依されて利用されていたんだぞ」

千種「分かった風な口を聞くな…」

犬「大体これくらい屁ともねーびよん。

あの頃の苦しみに比べたら」

ツナ「あの頃……？」

リボーン「何があったんだ？ 言え」

犬「……………へへっ

オレらは自分のファミリーに人体実験のモルモットにされてたんだよ」

リ／ツ／フィ「！！」

リボーン「やはりそうか。もしかしてと思ってはいたが、お前たちは禁弾の憑依弾を作ったエストラーネオファミリーの人間だな」

フィン「あの有名なエストラーネオ。そっか、骸が使った禁弾は、そういうことなんだ…」

犬「禁弾？ それはテメーらの都合でつけたんだろーが。」

おかげでオレらのファミリーは人でなしのレッテルを貼られ、他のマフィアからひっでー迫害を受けた。

外に出れば銃を向けられ虫けらみてーに殺される。それがファミリーの大人たちが進めていた特殊兵器開発の実験にますます拍車をかけたびょん。

仲間はず々と死んでいった。毎日が地獄だった——…。大人の一人が言っていた。

『特殊兵器の開発は地に堕ちたオレ達が再び栄光を取り戻すための礎だ。開発に携り死ぬことは名誉なことと思え』

ってな」

フィン「そんな……酷い」

犬「オレらはどこへ行こうとどうあがこうと生き延びる道は無かった。

でもあの人は――…たった一人で現状をぶっ壊したんだ。大人しくて目立つタイプじゃなかった。声を聞いたのもその時が初めてだった気がする」

『クフフ。やはり取るに足らない世の中だ。全部壊してしまおう――…』

このとき生まれて初めて…

『一緒に来ますか？』

オレらに居場所ができた――…。

犬「それを…おめーらに壊されてたまっかよ!!」

ツナ「………でも」

犬「!」

ツナ「でも、オレだって…仲間が傷つくのを黙ってみてられない…

だって………

そこがオレの居場所だから」

犬「ぐっ！」

千種「……………ッ」

フィン「（ゾクッ）……………何か……………来る？」

ツナ「え？……………あ！」

リボーン「医療班が着いたな」

ビュッ

ガチャッ↑首枷

犬「！」

ツナ「な！！？」

ガチャ

ガチャン

リボーン「早えおでましただな」

ツナ「い……………一体誰！？」

フィン「ヴァインデイチエ“復讐者”。マフィア界の掟の番人で、法で裁けない人たちを裁くのが彼等の役目」

ズザアッ

ツナ「あ！ちよっ…何してるんですか！？」

リボーン「やめとけツナ」

ツナ「ああ…」

リボーン「奴らに逆らうとやっかいだ…」

ツナ「お前がそこまで…：そんなにヤバイの…：…？」

ギイイイイ

リ／ツ／フィ「！！」

ツナ「も、もう一人！？」

ガチャン

ツナ「あ、あの子は…！」

復讐者に捕まったのは、あろうことか美鈴だった。

しかし、気絶しているために抵抗はできない。

ツナ「待って！その子が何をしたの！？」

復讐者「イマこそ罪ヲ償ウトキガキタ」

リボーン「……………」

ツナ「罪を償う？……ちよつとその子は何も…」

復讐者「コノ女ハ大罪ヲ犯シタノダ」

ズルズルズルズルズル

フィン「あ……！」

リボーン「追うな。奴らに手を出したら取り返しがつかなくなる」

ツナ「そんな……。でも、あの子は何で？」

リボーン「さーな。もしかしたら骸の一味だったかもしれないし」

フィン「でもさっき言ってた『大罪』って言うのは…」

リボーン「わからねーが、復讐者の言うことは絶対だ。アイツも何か罪を犯したことには間違いねーんだ。

つーかお前ら、何で知りもしねーヤツを気にかけてんだ？」

フィン「なんだか、遠い昔に会ったことがあるような気がして…」

ツナ「オレもなんか、知ってる人だった気がするんだ。それに、ヒ

バリさんが気にかけてたし」

リボーン「そうか。だが今は」

医療班「おまたせしました！けが人は！？」

リボーン「お、医療班が来たな」

そして、フウ太・ビアンキ・獄寺・山本・雲雀は病院へと運ばれた。ランチアは骸が連れ去られた際に、他の脱獄囚とともに連れて行かれてしまった。

どうしてランチアまで、と問い詰めるツナだったが、リボーンはただこう言ったただけだった。

リボーン「オレ達マフィアの世界はそう甘くねーんだ」

さて、所変わって先ほど美鈴を連れ出した復讐者。なぜか他のとはずれ一軒の家にたどり着いた。

ピンポーン

おい、何故に復讐者が行儀よくインターホンを鳴らしている。

ガチャッ

そこから現れたのは金髪にティアラを乗せた少年。ベルだ。

ベル「ししっ。お帰りマーモン」

“マーモン”確かに彼はそういった。

サアアと霧が纏い、晴れたそこにはマーモンがいた。

ベル「姫のこと連れ戻してきた？」

マーモン「もちろんだよ。ちょうど六道骸が連れ去られるときでね、それにまぎれて連れてきたよ」

ベル「ししっ。さっさと家に上がれよ。話すことあんだろ？」

マーモン「そうだよ」

ガチャン

マーモン「というより、その前に美鈴に目を覚ましてもらわなくちゃね」

ベル「オレに良い考えあるぜ」

マーモン「ムム。本当かい？」

ベル「しししっ」

そういつて彼が取り出したのは……ケーキ。

ベル「ひゅめっここにおいしいケーキがあるぜ」

美鈴「ケーキ!? (がぼっ)」↑覚醒



マーモン「（絶句）」

美鈴「がはっ」↑吐血

ベ／マ「!?!?」（ビクッ）」

美鈴「ゲーギ（ダボダボ）」↑吐血

ベル「ちよっ姫!?!?」

マーモン「美鈴ストップ!何か色々とグロッキーになってるよ!?!?」

美鈴「（ゲボゲボゲボ）」↑吐血

ベ／マ「わ—————っ!?!?」

「少々お待ちください」

ベル「姫、落ち着いた?」（汗）」

美鈴「うむ」

マーモン「なるほどね。腹部に深い刺し傷があるよ。きつとこれが

原因だ」

ベル「ゲー。姫ってば何してきたんだし」

美鈴「あ、こんぐらいなら問題ないよ」

パン

バシユウウ

美鈴「錬金術応用編」

ベル「すっげ」

美鈴「で、マーモン。話って何？態々日本に来るほどなんだから、大事なことなんでしょ？」

マーモン「そうさ。よく聞いて。ボスが目を覚ました」

美／＼「！！」

美鈴「マーモン、それ、本当！？」

マーモン「どうして日本に着てまでウソを言うんだい？ホントのことだよ」

美鈴「よ…よかったあ」

目から流れる一筋の涙。しかし、なぜか赤い」

マ／ベ「!?!」

ベル「姫?それ、どうしちゃったカンジ?」

マーモン「右目、怪我でもしたのかい?」

美鈴「右目...?怪我なんてして...」

ベル「ん?何かかいてあるぜ?

.....六って」

美鈴「(六!?)まさか.....」

ダダダダダダッ

鏡で確認中。

はいありました。右目にしっかりと六の文字。

美鈴「あんのクソナッポー何しやがったー!!! (怒)」

ベ／マ「(.....ナッポー?)」

誰も知らなかった美鈴の隠れた力、それは六道輪廻だったWW

美鈴「WW。じゃないよ!」

終わりとそれから……（後書き）

和「あーあー、マイクのテスト中マイクのテスト中……おし。

久々すぎてマイクの調子がおかしかったぜ」

理沙「ウソをつかないでください。つい最近出たばかりですし、そもそもこのコーナーはマイクを使いません」

和「んだよ、リアクション薄いなー。まあいいや、本題にいこう。

「あんたらは六道輪廻が使えたら、一番使ってみたいスキルってなんだ？」

理沙「なんですか突然」

和「いいから」

理沙「そうですね。強いて言えば地獄道ですね」

和「理由は？」

理沙「そりゃやっぱり、夫人を弄りたいですから」

和「なんだ、僕といっしょか」

隼菜「私は、餓鬼道使ってみたいなあ。だって…」

和／理「聞かなくてもわかるから言うな」

隼菜「だから扱いなおせて！」

和「ま、読者の皆さんにも質問だぜ。好きな六道輪廻のスキルとその理由。教えてくれな」

理沙「あ、いやなら書かなくていいんですからねー」

## 別れるとき

美鈴とベルは、イタリアに帰るために学校に転校（表上はネ）の手続きをしにきた。

恐らくこの日が最後の悠里と鐘である。

（職員室）

コンコン

悠／鐘「失礼しまーす」

先生「五月、どうしたんだ？」

悠里「父親の都合でイタリアに帰ることになりました。急な話ですが今日の夜には日本を立たなくてははいけません」

先生「えっそうなんですか？」

悠里「突然のことですみません」

（教室）

ツナ「にしても、また平和に戻れたなあ」

獄寺「お役に立てなくて申し訳ございません！」↑土下座

ツナ「そんな…って土下座しないでー！！」↑軽くトラウマ

山本「ははっ終わりよければ全てよし、だぜ」

獄寺「んだとこの野球バカ！（怒）」

あれ？皆さん復活すんの早いっすね。ふっつーあれほど怪我してたら全治一週間、獄寺に至っちゃ一ヶ月かかると思うんだけど。

作者「だってこいつらいねーと話が進まねーもん」

作者に免じて許す。

ガラガラガラ

先生「はい皆さん席について。とても残念なお知らせがあります。二人とも、入って」

悠里「ちーっす」

鐘「ししっ♪」

先生「二人が家の都合でイタリアに帰ることになりました」

ツナ「えっ」

獄寺「マジか」

悠里「皆、今までありがとね」

時は過ぎて放課後。↑だから早いっつーの！！

ツナ「悠里、鐘」

鐘「ん？」

ツナ「これからオレンち来て。二人のお別れパーティーするから」

悠里「お別れパーティー？」

ツナ「うん。二人には六年間もずっとお世話になってたから、お礼がしたいんだ」

悠里「クスッ。いいよ」

〳〵沢田宅〳〵

京子「今までありがとう」

ハル「ハル達のこと忘れないでくださいね」

フィン「折角友達になれたのにね」

セシル「姉がお世話になりました」

山本「また寿司食べたくなったらいつでもこいな」

了平「極限に妹が世話になったぞー!!」

京子「〳〵〳〵〳〵もう、お兄ちゃんったら」



獄寺「もしよかったら、一緒にピアノでも弾こうぜ」

悠里「おっしゃ」

話も弾んでいた。

リボーン「それにしてもオメーらがいなくなったら少し寂しくなるかもな」

ツナ「ホントだね」

リボーン「悠里はツナの女友達一号だったのにな」

ツナ「うんうん……って何で知ってるの!？」

リボーン「オレを舐めるな」

フィン「今度さ、イタリアの家に遊びに行ってい」

悠里「(げっ)ダメ」

フィン「えー(ブーブー<sup>3</sup>〓)なんでえいーじゃん」

悠里「(イラッ)ダメったらダメ」

フィン「じゃあ、勝手にいこっかなあ?」

悠里「(ブチッ)ざけんなー!!」

ボトボトボト

全「!！」

ハル「はひひひへビです！」

ツナ「へビ!?!どっから来たの!?!」

獄寺「しかも、にーさんしー…六匹いますよ」

ビアンキ「これは……」

悠里「ハブ？」

ハル「はひひっ毒蛇じゃないですか!」

ツナ「でもなんで毒蛇なんて」

このとき誰も気づかなかったが、美鈴の右目には“三”の文字があったりなかったり。

悠里「ま、とにかく捨てて…ゲフン。逃がしてこないとね」

ガシッ

山本「素手で大丈夫か？」

悠里「問題ない」

ビアンキ「待ちなさい」

悠里「なに？毒サソリ」

ビアンキ「そのへび私にくれるかしら？」

全「は？」

ビアンキ「ポイズンクッキングの材料にするわ」

ツナ「なっ（ガーン）」

悠里「これ全部！？」

ビアンキ「ええ」

ハル「デングジャラスです（怖）」

イタリアに帰ってきたぜ！

く空港（イタリア）く

美鈴「ついに…ついに…帰ってきたあ———！！！！」

ベル「姫テンション高すぎ（汗）」

でも確かに六年ぶりのイタリアだしね」

美鈴「んじゃ、アジトに帰ろっか」

くアジトく

ベル「何か静かじゃね？」

美鈴「はれれ？」

おーい！！マーモン！ルッス！スクアーロ！レヴィ！ボス！」

しゅん…

美／べ「いない！？」

ベル「ちえっ。こんなんだったらマーモンに聞いとくんだった」

ついでにマーモンは、二人に用件を言うとその日の内にさっさと帰ってしまっていた。

美鈴「うーん、多分、あっち」

ベル「あっちってどっちだし」

美鈴「南に向かってLet's go!」

そして、南に歩くこと二十分。そこには立派なお屋敷がありまっせ。

よく迷子にならないねー。

美鈴「そりゃ、霊圧を追っかけるだけだし」

ガチャッ

美鈴「すんませーん、誰かいやせんかー?」

しゅ…ん

返事が無い。ただの空き家のようだ。

ベル「誰もいねーじゃん!」

美鈴「(ゴーン)たしかにここからみんなの霊圧があつたのに……」

ガサガサ

? 「あら? 美鈴ちゃんにベルちゃんじゃない」

? 「ム。帰って来たんだね」

美鈴「ルッス！マーモン！ただいま」

ベル「ゲ：帰って来て最初にみんなのがオカマかよ」

ルッスーリア「んまあ！？酷いわぁ」

美鈴「マーモン！アジトのこと言ってくれなきゃわかんないじゃないか！」

マーモン「ム：悪かったよ」

ルッスーリア「あらマモちゃん、二人に言わなかったの？よくここが分かったわね」

美鈴「私を誰だと思っている。人探し（気配限定）のエキスパートだぞ」

ベル「んで？他の奴らは？」

マーモン「中にいるよ。こんな時間だし、皆寝てるだろうね」

美鈴「あ：だから返事が無かったのか」

ベル「つかさ、ここで喋ってないで中はいんね？」

マ／ル／美「ですよー（笑）」

テコテコテコ

美鈴「そおだ、ルッス。隊服さ、作り直してくんない？デザイン代

えなくていいからさ。

ちっちゃくなった」

ベル「オレのもよろしく」

ルッスーリア「はいはい。二人とも大きくなったのね。あんなに小さかったのに」

美鈴「何スカその、何年かぶりに会った親戚のおばちゃんみたいな発言!？」

ルッスーリア「すぐやってくるわね」

たっ

美鈴「シカトっすか!？」

ベル「ししっ」

美鈴「いいや。スクアーロのこと起こしに行こうっと」

ベル「レヴィとかボスは?」

美鈴「朝からムツツリの顔なんてみたくないし、ボスは…（ブルツ）」

ベル「あ、なるほど」

「スクアーロの部屋」

美鈴「スクアアロはまだ寝てますかね？」

スクアアロ「ZZZZZZZZ」↑爆睡中

美鈴「寝てる（笑）」

ベル「どーやって起こすの？」

美鈴「これを使う」

取り出したのは小さな機械。

ベル「なにそれ」

美鈴「ボイスレコーダー。スクアアロの大声（八年前のだけどね）が入ってるんだ」

ベル「いつ録ったんだし（汗）」

美鈴「いくよ（ピッ）」

ボイレコ『うゝおゝおおい！！起きやがれえ！！』↑音量MAX

ベル「うっせ。マジでいつ録ったんだよ」

美鈴「スクアアロが私のことを起こしに来たときだよ」

スクアアロ「ZZZZZZZZ」↑爆睡中



二人「起きないの!?!」

美鈴「こうなったら、必殺、声真似!」↑秀〇ww

ベル「誰の?」

美鈴「ボスの」

ベル「いやいや、ムリだろ。ボスの声メツチャ低いし」

美鈴「私の声帯は無限なのだ。いくよ。」

《起きやがれ!カスザメ!!(※XANXUS voice)》

スクアール「うるせーぞ!!!」

起きましたww

美鈴「お前の方が五月蠅いわボケェ!!」

あんたのせいです。

スクアール「XANXUSは」

美鈴「いないよ。ぜーんぶ私の声」

スクアール「……………」

帰って来たんだな」

ベル「ししっ。ボスが目え覚ましたんだってな」

美鈴「わー…」

ベル「ん？姫どったの？」

美鈴「…長っ」

ス／ベ「は？」

美鈴「？スクアアロ髪長っ」

スクアアロ「お前だって長いだろうがあ！」

美鈴「だって女の子だもん♪」

ルッスーリア「美鈴ちゃんベルちゃん、仕立て直し終わったわよ」

ベル「サンキュー」

美鈴「さっすが。早いね」

ルッスーリア「それじゃ、朝ご飯を作ってくるわね」

美鈴「あ、私も手伝う！」

タタッ

スクアアロ「おい、ベル」

ベル「ん？」

スクアール「美鈴になんか変わったことはあったか」

ベル「んー特に無いんじゃない？けど、スクアールたちが言ってた特殊な力ってのはホントにあるみたいだぜ」

スクアール「！その力を見せたのか？」

ベル「全然」

スクアール「じゃあなんで…」

ベル「王子の勘」

スクアール「てめえ…！」

ベル「ししっ冗談だって。プリンスジョーク。

だって六年間も一緒にいたんだぜ？そりゃ分かるっての」

スクアール「……………」↑睨

ベル「オレ腹減ってるし、姫んとこ行ってこよ♪」

## コンプレックス?

（台所）

美鈴「ねえルッス。何でアジト変わっちゃったの？」

ルッスーリア「（ビクッ）あのねえ、なんだかボンゴレから撤退命令が出ちゃってね」

美鈴「マジで？」

ルッスーリア「美鈴ちゃん、棚の上にあるお砂糖とってくれる？」

美鈴「ういーっす（はっ）」

？はうっ……………ッ

ルッスーリア「あら？どうしたの？」

美鈴「と、届かない」↑百五十三cm

ルッスーリア「あらあら、ゴメンなさい」↑百八十五cm

ベル「（ひょこっ）今日の朝飯なに？」↑百七十cm

ルッスーリア「パスタよ」

スクアーロ「XANXUSがうるせーからさっさとしやがれえ」↑百八十二cm

レヴィ「ぬ…」↑百九十三cm

ベル「何だレヴィ起きてたんだ」

美鈴「うう……みんなのバカア————！！」

ダッ

全「え！？」

ベル「オレらなんかした？」

ルッスーリア「あの様子だと、身長が低いことを気にしてるのね」

ベル「そーいや、九月の身体測定のとき百五十三cmって言ってたっけ」

全「ちっさ！？」

美鈴『そんなにでかいのが偉いかコノヤロー！！』

ベル「まだ言ってるし」

ルッスーリア「マモちゃん、美鈴ちゃんのこと慰めてきてあげて」

マーモン「あとでお金貰うよ」

全（ル以外）「（いつからいた！？）」

ベル「つーか、何でマーモン？オレでもよくね？」

ルッスーリア「だめよ。あの子よりも大きい人が言ったって逆効果よ」

スクアーロ「なるほどなあ」

マーモン「身長なんてどーでもいいのにね」↑四十cm

というわけで、ヴァリアー内最小のマーモンがいくことに。

マーモン「僕だって好きで小さいんじゃないんだ」

ですよねー（笑）

く美鈴の部屋く

コンコン

マーモン「美鈴いるかい？入るよ」

ガチャッ

美鈴「マーモン！！」

ギュームッ

マーモン「!?!」

美鈴「もー皆イジワルだよー。私だって好きで小さいんじゃないの

に~~~~!!

それでも毎日牛乳飲んでるんだよ~~~~!!」

マーモン「むぐぐ…とりあえず苦しいから一旦離してくれる？」

美鈴「あ！ゴメン！苦しかったよね」

マーモン「突然だったから受身が取れなかったただだよ」

美鈴「（受身！？）」

マーモン「それにしても何で美鈴は小さいのが嫌なんだい？」

美鈴「だって皆大きいし、学校でもチビって言われるし」

マーモン「ハア…」

ガヤガヤ…

マ／美「?？」

ガチャ

ドダダッ

美鈴「ベルにスクア―ロにルッス！？何してんの？」

外が騒がしいと思ったら、この三人の仕業だった。

ベル「だって姫が心配だったし」

ルッスーリア「あと、ご飯できたわよ」

美鈴「了解っス」

（食堂）

ルッスーリア「美鈴ちゃん何か飲む？」

美鈴「牛乳」

マーモン「（即答!?!）」

スクアアロ「（しかもチビならではの発言!?!）」

バゴツ↑殴

美鈴「今チビって思ったよねえ?（ニコツの反面怒り）」

スクアアロ「ピクピク…」↑瀕死

マーモン「あー、今の一撃でスクアアロがグロッキーになったよ」

美鈴「知らないっ（プイッ）」

バンッ

全「!?!」



XANXUS「おい、飯はまだか」

美鈴「ボス~~~~~~~~っ!!」(泣)

ギムツ

XANXUS「……………」

全(ル以外)「(うわー羨ましー)」

美鈴「淋しかったよ~~~~(泣)」

XANXUA「……………とりあえず離れろ」

美鈴「ふわっ!?!ごめんなひゃい!!」

全「(“ひゃ”!?!)」

美鈴「嬉しすぎてついつい」

XANXUS「そうか。大きくなったな(ナデナデ)」

美鈴「んにゃ〜(ニコ)」

レヴィ「(オレの時と接し方がちがう(ガーン))」

スクアーロ「(相変わらず美鈴には甘えなXANXUSのヤロー)」

ルッスーリア「(こーやって見ると親子みたいねえ)」

マ／ベ「（美鈴／姫ってネコみたいだね／だな）」

なぜか頭を撫でられて嬉しそうな美鈴をみるだけで、若干一名をのぞいて、その場全員の心が和んだ。

## Who's birthday?

ピンポンパンポーン

本日は美鈴の誕生日でっせ。

ま、本人は忘れてるけど。

忘れていてもいつか思い出すのだ！

っーワケけ夜なんです。↑おい！

ベル「ひーめっ」

美鈴「あ、ベル。どったの？」

ベル「大広間に来な。パーティーやつから」

美鈴「パーティー？今日って何か特別な日だっけ？」

ベル「（また忘れてるし）いいから」

美鈴「??ふむ」

く大広間く

ガチャッ

美鈴「ういーっす。ただ今来——」

パンツ

全「誕生日おめでと」

美鈴「What!？」

ルッスーリア「今日が何の日だか忘れちゃったの？」

美鈴「え?…:あ、My birthday」

ベル「ししっ当たり」

あ、何か既視感。  
デジャヴ

ベル「にしても、何で自分の誕生日を忘れんの？」

美鈴「だって興味ないし。皆だって——」

ベル「十二月二十二日」

ルッスーリア「四月四日」

スクアーロ「三月十三日」

マーモン「七月二日」

レヴィ「:十一月十四日」

XANXUS「十月十日」

あ、XANXUS参加してたんだ(笑)

XANXUS「ナレーションかつ消す」

サーセン(汗)

美鈴「って全員覚えてるんかい！つか私の誕生日も」

全「知ってた」

ルッスーリア「だから皆プレゼントを買ってきたのよ」

ベル「そうだぜ。んで、これがオレから」

美鈴がベルに渡されたもの。それは――

美鈴「ティアラ？」

である。

美鈴「Why？」

ベル「だって姫は姫じゃん」

美鈴「意味が分からないけどありがたく貰うっ」

憧れ(?)のティアラに目がキラッキラです。

ルッスーリア「私は美鈴ちゃんのためにかわいい服を――」

美鈴「いつでも燃やす用意はできてるよ」

そういつて笑いかける美鈴の手には手袋（発火布）が。

ルッスーリア「と思ったんだけどそう言うと思ってクールな服を買ってきたの」

美鈴「ですよー（笑）」

ルッスーリアが渡した紙袋の中には、ジーパンにデニムベストに水色（無地）のシャツが入っていた。

美鈴「許容範囲かな」

スクアーロ「オレからはこれだあ」

渡されたのは小さな箱。

美鈴「うわっキレー」

中に入っていたのは、十字架をかたどったサファイアの付いたネックレス。

ベル「スクアーロにしてはセンスあるじゃん」

スクアーロ「サファイアは九月の誕生石だからなあ」

美鈴「あ、ありがとう。これ、大事にするね」

マーモン「僕はこれだよ」

スクアードとは反対に大きな箱。というよりケース。

カチャッ

美鈴「こ…これは!!」

SAX!?

フウ太に言わせれば、美鈴が最もほしいもののランキング堂々の一位。

美鈴「何で…?」

マーモン「ベルから聞いたのさ。君がこれをほしがってるってね」

ベル「ししっ」

レヴィ「ぬ…（このあと渡しにく!?）」

美鈴「んで、レヴィは？」

レヴィ「ぬう…」↑喋れよ!

気まずそうに差し出されたものは、

美鈴「写真立て？」

レヴィからとはとても思えないような、あまり派手ではないがちょっとかわいいピンクの写真立て。

ベル「よかったじゃん姫。あの写真、いつもポケットの中だろ？」

美鈴「あ、ばれてた？」

“あの写真”とは、八年前、作戦実行前日に撮った、ヴァリアーの集合写真。

ポケットの中からそつと取り出す。

常に持ち歩いてたために、もうボロボロだった。

マーモン「年季が入っちゃってるね」

美鈴「これ持ってる時、遠く離れていても皆がすぐ近くに気がして、すごく安心できた」

改めてヴァリアーの絆の深さを知る一枚だった。

マーモン「それでボス。さっきから後ろにあるものが気になるんだけど」

その一言で全員の視線がXANXUSの後ろに行く。

そこには、マーモンが出したSAXに負けない大きさの箱が置いてあった。

XANXUS「プレゼントだ」

中には――――



全（美／X以外）「ゲ…」

大きなクマのぬいぐるみ。

美鈴「キャ～～クマちゃん～～」

ギョムツ

全（X以外）「え――――！！！！？」

美鈴「ふかふかで気持ちいい～～～～（ふわぁ～ん）」

堪能しておりますゆえ、暫しお待ちを。

～十分後～

美鈴「クマ～（フカフカ）」

全「……………」

ご堪能中なので更にお待ちを。

～更に十分後～

美鈴「にゃ～（フカフカ）」

全「……………」

まだまだ足りないようなのでご了承ください。

く更に更に十分後く

美鈴「にゅく（フカフカ）」

全「長い!!」

美鈴「ふわっ!？」

ベル「姫、長すぎ」

ルッスーリア「フカフカも大概にね」

マーモン「これだけで三十分も使ってるよ」

美鈴「ごめんなしゃい」

ヴァリアー隊員「我々からはこれです」

ちゃっかり参加しちゃってる隊員の皆様。

隊員「罵倒が聞こえたけど気にしないのであります!」

隊員「というわけでこれを」

ヴァリアー隊員の皆からはハイヒールブーツ。

美鈴「おっ?」

隊員「美鈴様に気に入ってもらおうべく、我々がデザインし、ルッス



泣いているルッスーリアを余所にパーティーは過ぎていき、皆樂しみましたとさ。

めでたしめでたし。

美鈴「ナレーションなんかあった？」

ベル「いつものことじゃね」

美鈴「そっか♪」

## Who's birthday? (後書き)

作者「XANXUSの誕生日って私の親の結婚記念日と同じ日なんだよ」

スクアーロ「うゝおおい!! そんなプライベートなこと言っているのかあ!？」

美鈴「作者がいいならいいんだよ」

作者の両親「アハッ★」

作者「あんたらなんで出てきてんの——!？」

作者の両親「アハッ★」

作者「それ以外になんか言えよ!」

作者の両親「あはっ♪」

作者「片仮名が平仮名になって星が音符になっただけじゃねーかあ!？」

ルッスーリア「苦勞してるわねえ」

美鈴「私の親はもっとまともだったハズ……」

作者「フッフ、君の親のモデルはこいつらだよ(黒笑)」

美鈴「（ガーン）」

ベル「あ、罷免がいろんなショックで石化しちゃったぜ」

作者「美鈴がやばいのでサイナラ」

作者の両親「あはっ♪」

作者「いい加減帰れ———!!!!」



ベル「姫ーそのポテチとってー」

美鈴「はい」

パリパリパリ

ベル「コーラ」

美鈴「はい」

ゴクゴクゴク

ベル「チョコ」

美鈴「ん」

パキツ      ポリポリポリ

美鈴「あのさ、ベル」

ベル「んー？」

美鈴「私が言うのもなんだけど、あんまり甘い物ばかり食べてると体に悪いよ？」

ベル「大丈夫だって。オレ王子だし♪それにたったこんだけじゃ病気になるってならないよ」



美鈴「王子関係ないし。私だって甘い物好きだから、ちよつとやそつとじゃ注意しないけどさ——」

辺りを見回す。そこにはお菓子のごみや未開封のお菓子が山のよう  
に積んである。

あれ、ベルってこんなにお菓子食べたっけ？なんて突っ込んではいけない。

これが無いと話が進まないんで。

[illegible]

美鈴「言わんこつちやない」

ルツスーリア「全く。王子様でも人の忠告は聞かなきゃだめよう」

レヴィ「貴様は一体何を考えているのだ」

ベルはお説教を受けていた。

顔をパンパンに膨らませ、だんまりとしている。

彼は何も言わなかった、否、言えなかった。

美鈴「何で虫歯になるかなあ？」

重度の虫歯によって。

スクアード「まったく、XANXUSに知られる前に歯医者に行くぞ」

お」

マーモン「僕がいいところ紹介してあげようか？」

ベル「……………（ブンブンブン！！）」

ルッスーリア「ダメよ、ワガママ言っちゃ」

ベル「……………（ブンブンブン！！）」

レヴィ「虫歯なんぞさっさと治してしまえ」

ベル「……………（ブンブンブン！！）」

美鈴「ベル、自業自得だよ。ずっと痛いまんまでいいの？」

ベル「……………（ダッ）」

スクアアロ「おい、ベル！」

マーモン「ハア。誰でもいいから彼を連れ戻して」

隊員「了解しました。行くぞお前ら！」

隊員達「おうっ」

．．．．．

スクアアロ「うゝおゝおい！ざけてんじゃねえぞお！」

ドガアンツ！

スクアール「てめえ、なめやがってんのかあ！

あいつに逃げられた挙句、何もできねえでノコノコ帰ってきただとお！」

スクアールに怒られているのは、ベル捕獲隊のリーダーもとい、隊員達を引っ張ってベル搜索に向かった隊員。

スクアール「うゝおゝおい！（ぐいっ）なんだ、てめえ？

文句でもあるってツラしやがって」

隊員「し……仕方なかったのです……。まさか、ボンゴレの同盟ファミリーであるキャバッローネの“跳ね馬”が出てくるとは……。

我々の判断できるレベルを超え……」

ぐいっ

隊員「ひ、ひいっ！」

マーモン「そこまでにしなよ、スクアール」

スクアール「（ピタ……）」

マーモン「ヴァリアーは復活してまだ日が浅い。無闇に駒を減らすのはやめてほしいなあ。

スクアーロ「……ケツ。守銭奴チビが」

隊員「は、はいっつ！」

ルッスーリア「それにしても困ったもんねえ、あの子には」

レヴィ「どうする……ボスに知らせるか？」

美鈴「バカッそんなの自分で自分の首を絞めるだけだよ！」

スクアール「虫菌を治すのが怖くて逃げ出したあ？こんなことがXANXUSに知られてみる！ただで済むわけねえだろうがあ！」

全「……」(ゴーン)「

レヴィ「し、しかし……罰を受けるのはやつだけでオレ達は……」

スクアーロ「逃がしたオレ等も同罪に決まってるだろうがあ！」

「……これから大事に……」

美鈴「私がちゃんとしなかったから……私がちゃんと止めていればこんなことにはならなくて済んだのに……」

ルッスーリア「美鈴ちゃんの責任じゃないわ」

美鈴「でも……」

マーモン「今君が落ち込んだって何にもならないよ。それよりベルだ。」

こんなことになるんだったら、無理矢理虫歯を治そうとしなきゃよかったね」

ルッスーリア「あらあ。虫歯を舐めちゃいけないわ。グツッと歯を食いしばれないだけで、攻撃するときの力は格段に落ちるわ。」

100%の力を出せないなんて、任務が務まると思う？」

美鈴「うゝむ」

ルッスーリア「困ったわねえ、ホントにあのこったら怖がりで。一体どうやったら虫歯を治療してあげようかしら」

マーモン「寝てる間にやる、ってどう？目を覚ます前に、ささつとやっちゃうのさ。起きたら、もうすっきりって感じで。」

僕がいい眠り薬を用意するよ」

ルッスーリア「でも……お高いんでしょう？」

マーモン「そこは特別ご奉仕価格。殺し一人分の半額という驚きの

依頼料で」

ルッスーリア「まあ、信じられないわ！これはもうお電話するしか……」

スクアアロ「つて、遊んでんじゃねえええつ！」

ドガアンツ！

スクアアロ「寝てる間に治すう？すぐに起きるに決まってんだろぅがぁ！それにアイツが簡単に眠り薬を飲むとは思えねえ！」

マーモン「そうかなあ？」

スクアアロ「そうだあ！」

マーモン「そうかもね……ちえっ」

スクアアロ「まさかてめえ、オレ達を騙して金だけを取りつもりで……」

美鈴「飲がダメなら食でいく」

スクアアロ「はぁ！？」

美鈴「日本にいたときに開発したケーキがある。これを食べた人は一秒以内に眠ってしまう。」

しかもその効果は絶大。ゾウだって眠っちゃう」

スクアール「虫歯なのに甘いもん食わせてどうすんだあ!!」

美鈴「あ、そっか」

レヴィ「ここは基本に立ち直った方がいいのではないか？」

スクアール「基本？基本ってなんだあ？」

レヴィ「虫歯を治すために、古来より伝わる方法があるだろう」

美鈴「なんかいいideaがあるの？」

レヴィ「虫歯に糸をくくりつけ、それを勢いよく引っ張るといふ…」

ドゴツ！↑蹴

レヴィ「ぐお……!!」

スクアール「バカか、てめえは！まず最初にその糸をどうやってつけるんだ！」

レヴィ「き、貴様！誰が馬鹿だと！」

ガッ！↑殴

スクアール「何しやがんだ、てめえ！」

そして二人の殴り合いが始まり――

ルッスーリア「これよ!」

美鈴「どれよ!？」

ルッスーリア「あの子の顔に思いっきり愛の拳をお見舞いするのよ。そうすれば虫歯なんてポーンと飛んでいくわ。……まあ、他の歯も抜けちゃうかもしれないけど、それは気にしないってことにして……」

マーモン「で、誰がやるの？」

ポツリとマーモン。

マーモン「殴ろうとしたらあっちは間違いなく本気で反撃してくるだろうね。確実に、こっちもタダじゃすまないよ。こればかりは美鈴でも同じ結果になるだろうね」

ルッスーリア「あ(汗) そ、そうね……ここは、やっぱり、皆で協力して……」

レヴィ「貴様がやれ」

スクアーロ「てめえがやれ」

美鈴「アンタがやって」

マーモン「ルッスーリアがやってよね」

満場一致。



というカルツスーリア。殴ったらそれは齒が抜けるんじゃない、折れてるぞ。気づけ。

スクアーロ「チツ……とにかく、何が何でもヤツを連れもどさねえとな」

美鈴「ハア。確か、ベルはキャバツローネのどこにいるんだよね？」

スクアーロ「そうだあ」

美鈴「……悠里しか動けないよなあ」

ルツスーリア「悠里？」

美鈴「ちよつとやつに頼るしかなさそうだね」

「キャバツローネアジト」

悠里「まさか、こんな早くにまた悠里となるとはね」

コンコン

悠里「ばんわ、荷物引取りに来ました」↑!?

ガチャツ

ディーノ「お、悠里じゃねえか。イタリアに帰ってたんだな」

悠里「夜遅くにごめんください。鐘を拾いに来ましたぜ」

ディーノ「鐘？ いや、いねえけど」

悠里「あれま？ んじゃ、変なヤツいない？ 顔パンッパンに膨らましてるヤツ」

ディーノ「ああ、いるぜ。なんか、プリンス・ザ・リツパー切り裂き王子のファンらしくてな。金髪にティアラしてたぜ」

悠里「ういゝソイツが鐘でっせ」

ディーノ「え？ でもアイツは茶髪じゃなかったか？」

悠里「やっぱマフィアだし、憧れってヤツですかねWW」

ディーノ「なるほどな。 んじゃ、呼んで来るからちよつと待ってろ」

悠里「へーい」

アジトの中に消えていったディーノの。しかし彼は、ベルではなく叫び声とともに戻ってきた。

ディーノ「大変だ——っ！」

悠里「（ビクッ）な、何!？」

ディーノ「いなくなっちゃった!」

悠里「はいっ!？」

## 王子様の大脱走（下）

スクアールロ「うゝおゝい！まだみつからねーのか、ベルの野郎はあ  
！」

ルッスーリア「もう、落ち着きなさいよ」

ベルが逃げ出してから六日が経っていた。

ルッスーリア「仕方ないじゃない。街は、キャバツローネのマフィアたちで溢れてるのよ。下手に動いて私達のことを知られるわけにはいかないでしょ。

動けるのは、美鈴ちゃんが言ってた悠里って子だけ  
ね」

スクアールロ「ちいいっ！」

ヴァリアーの皆は、まだ“悠里”の正体を知らない。

スクアールロ「それで、美鈴はどうしたあ」

ルッスーリア「そうねえ、連絡くれてからさっぱり音信不通になっちゃって」

スクアールロ「何やってんだあいつはあ！」

美鈴がディーノに巻き込まれ大変なことになっておるとは誰も知らない。

ルッスーリア「仕方ないわ。マモチちゃんに頼むしかないわね」

スクアール「チツ……背に腹はかえられねえ」

レヴィ「……だな」

マーモン「これは、ヴァリアーの任務とは別件だからね。それで……」

いくら払ってもらえるのかな」

[illegible]

美鈴 「ここどこだろ。ハア、お腹すいた」

キャバッローネに出向いたあの日、ベルがいなくなつた事に気づいたデイノは美鈴を連れて街へ出た。

が、しかし、見つけたものの、突然銃撃を受け、その隙に逃げようとしたベルを追いかけ、足を滑らせ、ベルと美鈴を巻き込んで海に落ちた。

美鈴は二人とはぐれ、目が覚めたときは一人ぼっちだった。

美鈴 「霊圧は……変な“気”のせいで辿れないし……（ズーン）」

と、その時。

? 『……………!』

? 『……………!』

美鈴「あ、誰かいる。ベルたちかな？」

声が聞こえそちらの方へ走っていった。

こちらはベルとディーノ。

子供の喧嘩中

ゴロゴロゴロゴロ      ガン!

突き出した岩に頭をぶつけたディーノは、簡単に気絶した。

ベル「……………あ…」

そしてベルは、こちの中の痛みが消えていることに気づいた。

プッ

異物に気づいて吐き出すと、大きな穴が開いた歯が出て来た。

ベル「……取れた。」

いししししししっ！あ————っ気分ソーカイ————  
「————っ！」

ガサガサ

？「あ、やっと見つけた」

ベル「姫じゃん。どったの？」

美鈴「なく〜が〜『どったの？』だ！どんだけ心配したことか！  
！」

ベル「何言っちゃってんの。オレ、ぴんぴんしてるし」

？「やっと見つけたぞ、ベルううっ！」

ベル「あ、スクアアロ」

スクアアロ「ベルうっ！てめえ、いつまで跳ね馬のヤローと遊んで  
るつもりだあ！」

美鈴「！そーだ、跳ね馬は？」

ベル「それなら、もう終わったよ。ほら」

美鈴「ちょっ！何があったの！？」

スクアール「てめえ、まさか……」

ベル「殺ってはねーよ。今同盟ファミリーと問題起こしちゃ不味い  
だろ」

スクアール「お、おう……」

ベル「さー、ボスのところに帰ろーぜ」

美鈴「こら、跳ね馬を忘れてくな」

ベル「あ。そーだな。跳ね馬も一緒に連れてくか」

美鈴「こいつ連れて帰んなきゃ怪しまれんのウチだしさ。

ほれスクアール、さっさとこっちに運んで」

スクアール「ああ！？なんでンなこと……」

ベル「オレ、他人に借りとか作らない主義なんだよねー」

美鈴「上に同じく」

スクアール「知るかぁ！だったらテメーらで運びやがれえ！」

ベル「やーだね。そんなメンドイこと、オレがするわけねーだろ……」

美鈴「やーなこった。メンドっちーことはお断りだよーん……」

べ／美「だって」

ベル「オレ、王子だし♪」

美鈴「アタシ、女の子だもん♪」

スクアーロ「ふざけんなあ——————っ!」

後日、ディーノは無事にファミリーに届けられたそう。



新しい色々、出て来いやあ！

XANXUS 「今日からヴァリアーに新しいやつが来る」

ベ／美／ル／レ 「はい？」

XANXUS 「スクアアロ」

スクアアロ 「オレかよ！？」

マーモン 「かたいと言わない」

スクアアロ 「ちっ。出てきやがれえ、デカブツうう！」

ベ／美／ル／レ 「！！！！」

ドガアンツ！↑壁破壊

マーモン 「キミ達に紹介するよ。コイツの名はゴーラ・モスカ。僕等の新しい仲間だよ」

レヴィ 「不気味な……」

美鈴 「（あれれのれ？なんかおかしいよ〜）」

ぺちぺち

ベル 「何やってんの？」

美鈴「無機質なヤツから霊圧がします」

X／ス／マ「(びっくり)」

ベル「それって中に人がいるってこと？」

美鈴「そういうことになるけど、ま、ありえないか。ロボットだも  
んね(笑)」

XANUS「それと、てめえらに渡すものがある」

XANXUSが取り出したのは、ボンゴレの紋章が付いた箱。

中には歪な形をした指輪が七つあった。

XANXUS「ハーフボンゴレリングだ」

全「!！」

XANXUS「晴れがルッスーリア、雷がレヴィ、嵐がベル、雨が  
スクアーロ、霧がマーモン、雲がモスカだ」

ルッスーリア「はあい」

レヴィ「了解しました」

ベル「ししっ」

スクアーロ「……………」

マーモン「オーケーだよ、ボス」

ベル「あり？姫は？」

美鈴「あ、そいえば」

XANXUS「悪いが美鈴には外れてもらう」

ルッスーリア「え？」

スクアーロ「何っ!？」

マーモン「何故だい、ボス？」

XANXUS「美鈴に適任の守護者はねえ。それだけだ」

ベル「でもよ、姫は幹部に欠かせない戦闘力を持ってるだぜ？」

美鈴「いいよ、ベル。何も守護者になれるとは思ったことはないし。

そんな…私が守護者なんて…もったいないし…」

ベル「姫…？」

美鈴「大丈夫だったら大丈夫なの!!」

タッ

バタンッ

ベル「姫！」

バタンッ

ルッスーリア「……私は部屋に戻ってるわ」

レヴィ「オレも戻るとしよう」

ボタン

XANXUS「……………」

マーモン「ボス、何のつもり？」

XANUS「お前らは————を知ってるか」

マ／ス「!!?」

く美鈴の部屋く

美鈴side

なんで…どうして涙が止まらないの…？

私は何があったもボスについていくと決めた。それは、守護者になれなくても同じのはず…

なのに…どうしてこんなに悲しいのっ!？

美鈴「お父さん…お母さん…」

首にかけてあるリングを握り締める。

運命の日から常に持ち歩いていたリング。すべての始まりとなったリング。

ふと、骸戦の日を思い出した。

かすかにあった意識で復讐者を見た。あのと時の感覚、知ってる。

コンコン

スクアール『美鈴、いるか？』

美鈴「スクアール：いるよ」

ガチャッ

スクアール「美鈴、話が「ねえ、スクアール」：なんだ？」

美鈴「一ついいかな？」

行かなきゃ。

美鈴「日本に行かなきゃ：」

気持ちの引っ掛かりは任務に支障をきたす。

スクアール「どういいうつもりだあ」

美鈴「行かなきゃ。あの町に」

スクアール「あの町…？まさか、お前…」

あの町。そう、全てが始まった、私の生まれ故郷。

美鈴「今からボスに言ってくる」

スクアール「うゝおゝおい！オレが許可しねえぞお！これからが大  
事だって時に！」

美鈴「分かってるよ！」

分かってる。分かってるんだ。だからこそ行かなきゃいけない。

それに…それに私は——

美鈴「私は守護者じゃないから」

s i d e o u t

スクアール「……………っ！！」

言葉につまるスクアールを残し、美鈴は部屋を出て行った。

スクアール「……………（やっぱり気にしてんじゃねえか）」

**新しい色々、出て来いやぁ！（後書き）**

もうすぐリング戦だ！

突然ですが、好きな属性ってなんですか？

私は大空です（ボンゴレリングが好きなだけ）！

## ノロワレタマチ

）??？？

そこは一面焼け野原だった。

元々は賑やかであつたろう町の面影はなく、その姿は変わり果てていた。

家と言う家は全て跡形もなく、人はおろか、犬や鳥といった生き物すら近づくことはない。

世界から忘れられたようなその町は、音さえも存在しない。

その町にあるのは静寂だけだった。

“呪われた町”

人々はそう呼んだ。

その呪われた町を一人の少女が歩いていた。

楽しげでもなく、悲しげでもなく、ただ歩いていた。

町の一角で少女の歩みが止まった。

そこは元々、他の家より少しばかり裕福な家族が住んでいた。

もう家すら残っていないが。



少女はずっとその焼け野原を見ていた。

俯いているため、表情は分からない。

胸の前で手が合わせられる。まるで祈るかのように。

その手の中には彼女の宝物がそっと包み込まれていた。

ふいに、空を見上げるように、少女が上を向いた。

その頬にひとすじの涙。

沈んでいく夕日が、少女と町を照らす。

空も少女も町も真っ赤に染まる。

全てが真っ赤に染まった世界をみて少女は――

## 再会と初対面

ツナ「あー暇だー!!」

山本「平和だし、インじゃねーの？」

獄寺「そーですよ十代（P r r r r）……」

ツナ「あつゴメン。オレの携帯だ（ピッ）もしもし」

京子『ツナ君、今から皆で遊びに行かない？』

ツナ「えっっ／／／／／う、うんいいけど。えっ？どーしたの？」

京子『あのね、悠里君、今日本にいるんだって！』

ツナ「えっ!？」

山本「ん？どーしたんだツナ？」

ツナ「悠里が今日本にいるって」

山本「本当か!？」

獄寺「本当ですか!？」

京子『それで、悠里君が皆で並盛商店街に行こうって誘ってくれたの』

ツナ「うん。行く。すぐ行く」

京子『ありがとう。私の家の前集合だから』

ツナ「わかった（プツツ）」

獄寺「それじゃあ行きましょう十代目！」

（並盛商店街）

ぞろぞろ

獄寺「何でこいつらもいんだよ」

ハル「悪いですか！？ハルだって悠里ちゃんに誘われたんです！」

悠里「フィン、セシルは？」

フィン「補習だったさ」

悠里「そっか。京子、ケーキ屋行こう」

京子「うん。京子はティラミス安んだよ」

悠里「よしっっ」

リボーン「おいツナ。サボった分の補習の勉強は帰ったらネツチヨリやるからな」

ツナ「ネツチヨリやだ——！！（ガーン）」



悠／ツ「？」

京子「何の音だろう？」

ドーン…ドーン…

ドゴオツ

ツナ「な…：…何！！？」

悠里「京子、離れてな」

京子「うん」

ガキツ

ひゅううう

ツナ「え…：…ええ！！？」

ドツ

ツナ「ぎゃああ」

ぐしゃあつ

？「す…：…すみませ…：！！！」

ツナ「いててて」

？「……おぬし……!!」

悠里「あれ？確か、あいつって門外顧問の…」

？「うゝおゝおい!!」

？「あ、しまった！」

## 猫と鮫と鮪？

？「うゝおゝおい！！」

スクアール「なんだあ？外野がゾロゾロとお」

悠里「（す…スクアール！！）」

スクアール「邪魔するカスはたたっ斬るぞお！！」

獄寺「ああ！？」

ツナ「な…何なの一体！？」

悠里「京子（ボソ）」

京子「なに？悠里君」

悠里「ハルやフィンたちと一緒に先に帰ってて」

京子「悠里君……………！」

？「折角会えたのに……。こんな危険な目にあわせてしまって」

ツナ「え？あ…あの…誰でしたっけ！？」

？「来てください！」

ツナ「ちょっ何なの！？」

？「安全な場所へ！！おぬしに伝えたいことが！！」

悠里「んお？向こうに行っちゃう。

真相を確かめるべく、ダッシュだ私！！」

スクアール「うゝおゝおゝい」

ダンッ

ツ／？「！！」

スクアール「もう鬼ごっこは終わりにしようや」

ツナ「ひいい、でた————っ！！」

スクアール「で、何だ？そいつは」

悠里「ボ…ボンゴレボス十代目…候補…：沢田つ…綱吉」↑息切れ中

ツナ「ゆ、悠里！なんでついてきてんの！？」

悠里「人のバトルを見るのが趣味だからね」

ツナ「趣味悪っ！」

スクアール「うゝおい、てめー誰だ？悠里つつつたら美鈴がいった奴じゃねえか」



ツナ「美鈴？（あれ？どっかで聞いたような…）」

悠里「にしししっ」

美鈴は首にかけてあったネックレスを取り出す。

あ、スクアール口からもらったやつね。

スクアール「！！ それは！…なるほどな（ニヤリ）」

とりあえずテメーから片付けてやるぜえ！！」

？「！！！」

ブンッ

ツナ「ひいっ」

？「がっ」

ツナ「！！」

バリーンッ

ツナ「き…君！！」

スクアール「うゝおゝおい」

ツナ「！（ビクッ）」

スクアール「そーだあ、貴様だあ。このガキとはどーゆー関係だあ？」

悠里「いやいや（汗）さっき言ったじゃん」

スクアール「ゲロっちまわねーとお前を斬るぜ」

悠里「シカト！？仕方ない、大人しくしよう」

賢明な判断ですよ♪（ニコッ

悠里「前言撤回！ナレをぶっ飛ばす！」

キャ~~~~~！（笑）      ダッ

悠里「腐れ！アホ野郎——！！」      ダッ

バツ↑ボム

スクアール「！！」

ドガガガッ

スクアール「なんだあ？」

ザッ…

スクアール「……………？」

獄寺「その方に手をあげてみる。ただじゃおかねえぞ」

山本「ま、そんなとこだ。相手になるぜ」

ツナ「獄寺君!! 山本!!」

山本「持って来てねーのになぜかオレのバットが立<sub>て</sub>かけてあつたんだよな(笑)」

ツナ「(アイツの仕業だーっ!!! (ガーン))」

スクアール「てめーらもカンケーあんのか、うゝおゝおい」

悠里「関係あるよ」

ツナ「あ、帰ってきた」

スクアール「そおかあ。テメーらに一つだけ確かなことを教えてやるぜ。オレにたてつくと……死ぬぞお」

獄寺「その言葉、そのまま返すぜ」

山本「ありゃ剣だろ? オレから行くぜ」

? 「やめてください! おぬし等の敵う相手ではありません!!」

悠里「バジルの言うとおりで」

獄寺「ん?」

山本「!」

ツナ「そんな…（バジルってこの人の名前かな？）」

スクアール「後悔してもおせえぞお」

山本「行くぜっ」

キイン

悠里「バト1♪」

キンッ キキキンッ

スクアール「貴様の太刀筋、剣技を習得してないな」

山本「だったらなんだ」

スクアール「軽いぞお！！！！」

ガキンッ

ドシュッ↑火薬

山本「！！！」

ドゴッ

獄寺「！」

ツナ「山本お！！！」

悠里「ピュ〜♪」

ぐらっ どさっ

獄寺「ヤロツ!!」

スクアーロ「おせえぞ」

獄寺「!?!」

スパン

悠里「バト2♪」

ヒュンッ

獄寺「!?!」

ゴッ↑蹴

獄寺「ぐあっ」

ツナ「獄寺君!!」

悠里「ワオ、さっすが♪」

スクアーロ「うゝおゝおい、話にならねーぞおこいつら」

ツナ「!?!」

スクアール「死んどけカス」

バジル「くっ（タッ）」

ガキッ

スクアール「いよおお、ゴミ野郎。そろそろゲロっちう気になったかあ？」

バジル「断る！！」

スクアール「なら、ここが貴様の墓場だあ」

キンッ

キキキンッ

悠里「バジルも頑張るねえ」

ツナ「悠里はあの二人を知ってるの？」

悠里「フッ。僕の情報網を舐めるな」

ツナ「（この人いろんな意味でこえー！！）」

ガッ

バジル「うう……」

スクアール「うゝおゝおい、まさかオレに勝てるんでも思ってたのかあ？野良犬の分際で……。」

話は美鈴はそっちのガキから聞くことにしたぞお。てめえは死ねえ！！！」

ズガン

死ぬ気ツナ「復リ…活ボーン……！！！」

ス／バ／悠「！！！」

死ぬ気ツナ「ロン毛！！！！死ぬ気でお前を倒す！！！！！」

## 鮫VS鮪

死ぬ気ツナ「復<sup>リ</sup>…活<sup>ボン</sup>…!!!!」

ス／バ／悠「!」

死ぬ気ツナ「ロン毛!!!!死ぬ気で、お前を、倒す!!!!」

悠里「キヤー目に悪いものー(笑)」↑酷

スクアーロ「うゝおゝおいなんてこった…死ぬ気の炎に…このグロ  
ーブのエンブレムは…まさかお前、噂に聞いた日本の…」

悠里「ドンだけ人の話し聞いてないの!?!」

スクアーロ「ますます貴様ら何を企んでんだあ!?!死んでも吐いて  
もらうぞおオラァ!!!!」

悠里「本日シカト四回目!!」

死ぬ気ツナ「うおおおお!!!!」

ガッ

死ぬ気ツナ「!?!」

スクアーロ「うゝおゝおい、よええぞ」

ガキッ



悠里「やっぱり沢田綱吉じゃ、スクアールに敵いつこないか（笑）」

スクアール「うゝおゝおい、いつまで逃げるきだあ!？」

ツナ「ひいいっ」

スクアール「腰抜けが!!」

ドシュシュッ↑火薬

ツナ「わ! うわあああ!!!!」

ブウウン

ドガガン

スクアール「ぐっ」

悠里「爆風ハンパなくい!

ねっリボーン」

リボーン「!! オレが後ろに居たことに気づいていたのか」

悠里「にししっ当たり前じゃん」

バジル「ハアハア」

ツナ「あ…ありがとう…。き…君! だ…大丈夫なの?」

バジル「拙者はバジルと言います。親方様に頼まれて沢田殿にあるものを届けに来たのです」

ツナ「は？オレに？…っ！か親方様って…」

バジル「これです」

ツナ「？」

バジルが出したのは、ボンゴレの紋章のついた箱。

パカッ

中には、やはり歪な形をしたリングが七つ。

ツナ「なに…これ…！？」

悠里「なっ！？ハーフボンゴレリング！？」

スクアーロ「うゝおゝおい、そおいうことかあ。こいつは見逃せねえ一大事じゃねえかあ」

バジル「！！」

スクアーロ「貴様らをかっさばいてから、そいつは持ちかえらねえとなあ」

バジル「くそ」

ツナ「ひいいいっなんなのー!!どーしよー!!」

リボーン「…………やべーな」

スクアール「うゝおゝおい、それを渡す前に何枚におろして欲しい？」

バジル「渡してはいけません沢田殿」

ツナ「え!?!ちよっなんなの?どーなってんのー!?!」

? 「相変わらずだな。スぺルビS・スクアール」

スクアール「!?!」

ツナ「!!(この声は…………!!)」

ディーノ「子供相手にムキになって恥ずかしくねーのか?」

バジル「!?!」

ツナ「ディ…ディーノさん!」

悠里「ちっ。跳ね馬か…」

ディーノ「その趣味の悪い遊びをやめねーって言うなら、オレが相手になるぜ」

スクアール「(やはり、跳ね馬は向こうか)」

ディーノ「黙ってねーで何か言ったらどうだ」

ダッ

パシッ

悠里「もらいつ」

ツナ「え…？」

バジル「な…！」

リボーン「！？」

悠里「ハーフボンゴレリングは貰っていくよ。バイビ♪」

ダッ

スクアール「うゝおゝおい！待ちやがれえ！」

ダッ

バジル「まっまでっ

ううつ（ドサッ）

ツナ「！」

ディーノ「おい、無茶すんな」

リボーン「深追いは禁物だぞ」

ツナ「リボーン！どーなってんだ？どうして悠里が……？」

ファンファンファン

ロマーリオ「ボス：サツだぜ」

ディーノ「ああ。ツナ、その話はあとだ。廃業になった病院を手配した。行くぞ」

ツナ「ま、待ってください！！獄寺君と山本が……！！！」

リボーン「あいつらなら心配ねーぞ」

山本「大丈夫かツナ！」

獄寺「一体何なんすか？奴は？」

ツナ「二人とも！！！」

リボーン「お前らがいるだけ足手まといだ。とっとと帰っていいぞ」

山／獄「！」

ツナ「リボーン、なんてコトを……！！！」

リボーン「いくぞ（ぐいっ）」

ツナ「わっわっちょっおい！！！」

リ  
ボ  
ー  
ン  
「  
ほ  
っ  
と  
け  
」

## 敵の正体

「中山外科医院」

ディーン「バジルはどーだ？ロマーリオ」

ロマーリオ「命に別状はねえ。よく鍛えられてるみてーだ。傷は浅いぜボス」

ツナ「あの…で…彼…何者なの…？」

ディーン「こいつがボンゴレでないことは確かだ。だがもう一つ確かなことがある。それはコイツはお前の味方だって事だ」

リボーン「ついでに言っとくと、お前を襲ったあのロン毛はボンゴレだぞ」

ツナ「なあ！？どーなってんの？ボンゴレが敵でそーじゃない人が味方って…。

つーかオレ、別に敵とか味方とかありませんから！」

ディーン「それがなツナ。そーも言ってらんねえみたいだぞ」

リボーン「あのリングが動き出したからな」

ツナ「リング？

つそーだリボーン！悠里は！一体なんで…！」

リボーン「……………」

ディーノ。頼んでいたやつはどーなった」

ディーノ「すまねえ。まだ調べがつかなくてな」

ツナ「?? え? 何の話?」

ディーノ「偽名の線を考えるにしても、本名が分からないんじゃない?」

リボーン「ああ」

ツナ「オレにもわかるように説明して!」

リボーン「ツナ、あのロン毛の名前はスクアアロって言ってな、ボングレで最強と謳われる独立暗殺部隊ヴァリアーのメンバーなんだ」

ツナ「ボングレで最強!?!」

リボーン「ヴァリアーは忠誠心が高く、あらゆるミッションをこなしてきたが、あくまで裏の部隊だったからな、表舞台に出てくることはなかったんだ」

ツナ「って、それと悠里と何がカンケーあるんだよ!」

リボーン「やつはバジルが持ってきたハーフボングレリングを狙ってきた。そして、そのリングは悠里によって奪われた」

ツナ「え…それってつまり…」



リボーン「まだハッキリしたわけじゃねえからな、ディーノに調べてもらってんだ」

ディーノ「だがな、未だにボンゴレファミリーの悠里って名前の女子マフィアはみつからねーんだ。鐘もな」

ツナ「え！？鐘もなの！？」

ディーノ「偽名の線も考えたが、本名を知らないんじゃない話にならない」

ツナ「偽名？」

……あ、ディーノさん。“美鈴”って名前に聞き覚えはありませんか？」

ディーノ「美鈴？」

リボーン「黒曜で聞いたあの名前か」

ディーノ「分からないが、どこかで聞いたような気がするな……」

リボーン「調べてみて損はないな」

ディーノ「ああ。そうだな」

ツナ「でも……そんな……悠里や鐘が暗殺部隊……？」

「日本のどっかの森」

ザザッ

ザザザッ

スクアアロ「うゝおゝおい！てめえ、待てって言ってんだろぅがぁ  
！！」

悠里「五月蠅いよ。木から落ちたらどうするつもり？」

スクアアロ「知るかぁ！つーかいつまで変装してるつもりだぁ」

悠里「五月蠅い」

美鈴「ま、邪魔だからいっか（ポイ）」

どさっ

よい子はポイ捨てなんていけないぞ★

美鈴「（ピタッ）ハァ」。

スクアアロ」

スクアアロ「……なんだぁ」

美鈴「リングをアジトまで頼むよ。（ポイ）」

僕はまだ日本に用事が残ってる」

スクアール「（パシ）用って何だあ。あの町には行ったんじゃないのか？」

美鈴「ちよつと忘れ物。大丈夫。すぐに帰るから」

ダッ↑去

スクアール「おい、美鈴！

……クソガキがあ」

ダッ↑帰

くやっぱり日本のどっかの森く

美鈴「……………（行かなきゃ、行かなきゃ、行かなきゃ！）」

フラ…

美鈴「！」

ドサッ

## 偽物

? 「…………め……き……」

誰?

? 「…………き…………ろ」

誰が呼んでるの?

? 「姫、おきろ!」

パチッ

美鈴 「…………え?」

ベル 「やゝっと起きた。寝ぼすけ姫」

美鈴 「ベル? ってことはここってイタリア?」

ベル 「なに? どしたの? 森中でぶっ倒れてるなんて何年前の話だよ」

美鈴 「誰が私をここに?」

ベル 「スクアール。何か知らないけど、姫が森の中で倒れたからつつて、背負って帰ってきたんだぜ」

美鈴 「先に帰れて言ったのに(ボソ)」

ベル「で、何やってんの？勝手に日本に行っただけだと思っただけだ、勝手に沢田達と接触してるしさ。マジで何してんの？」

美鈴「別に。沢田達とは会いたくて行っただけじゃないし、ただ、

あの町のことになっただけだし」

ベル「あの町って……まさかのアレ？」

美鈴「まさかって言うほどじゃないでしょ」

バンツ↑扉開

スクアール「うゝおゝおい！会議室に集合だあ！」

美／ベ「うるせ！」

（会議室）

美鈴「で、何？」

スクアール「何ってボンゴレリングを完成させるんだろがあ」

美鈴「あ、そ。それだけ。僕がいる意味ってあるの？」

レヴィ「ない」

美鈴「てめえには聞いてねえよムツツリ」

レヴィ「なぬ!？」

美鈴「どーせいるいみないなら部屋に戻らせてもらうよ」

スクアーロ「うゝおい、ふざけてんじゃねえぞ。お前の説教もかねてんだよ」

美鈴「あっそ。だったらさっさとしてよ」

スクアーロ「てめえ……ちっ。

リングを配るぞ」

スクアーロによって全員にハーフボンゴレリングが渡される。

ベル「ししっ。んじゃ早速」

カチッ (ペキッ) ↑あれ?

( ) 内は美鈴にしか聞こえてないよ★

美鈴「(“ペキッ”?)」

XANXUS「解散しろ。美鈴は残れ」

ルッスーリア「はい」

レヴィ「了解しました」

ベル「ししっ」

スクアール「…」

マーモン「わかったよ」

美鈴「フン」

ボタン

XANXUS「美鈴。てめえが日本に行った理由だが…」

美鈴「あの町に行きたかっただけ。出かける前にもそう言って許可貰ったでしょ？」

XANXUS「じゃあ何故沢田綱吉といた」

美鈴「知らない。ただぶらついてたらあいつ等がいて、そこにスクアールが乱入してきた。

それだけで充分」

XANXUS「信じていいんだな」

美鈴「フツ。今更ボスに信じる信じないを言ってどーすんの？裏切りがどーのこーのって？あほらし」

XANXUS「（ピクッ）」

美鈴「僕の性的的に、裏切るならもっととっくに裏切ってるよ。ボ

スが閉じ込められたあの日にね！

……聞きたいのはそれだけ？言いたいのはそれだけ？なら、僕は部屋に帰らせてもらおうよ」

XANXUS「……………」

美鈴「その沈黙、肯定と受けさせてもらおうよ」

ガチャッ

美鈴「それと、どーせ自分で気づいただろーけど、

そのリング、偽物フェイクだよ」

XANXUS「！」

ボタンッ

美鈴「クスクス。あの鮫も馬鹿みたい。こんな偽者にだまされるなんてね……クスクス」

くスクアアローの部屋く

ガチャッ

スクアアロー「！ ……美鈴か」



美鈴「クスクスクス」

スクアール「何を笑っていやがる」

美鈴「今すぐボスのところに言った方がいいよ。」

あんたが追いかけて取ってきたリングについて話があるみたいだから」

スクアール「？」

くXANNXUSの部屋く

スクアール「うゝおゝおい、お呼びかボス？褒美をくれるってんなら、ありがたく頂戴するぜ」

ガッ↑頭？

ゴッ↑机に

スクアール「なっ何しやがる！！？」

XANNXUS「フェイクだ」

グシャ

スクアール「偽物！？」

XANNXUS「家光…」

日本へ発つ。奴らを…

根絶やしにする」

**偽物（後書き）**

……美鈴が怖いよ……。

## 日本へ(前書き)

恐らくメチャクチャ短いよ♪

日本へ

XANNXUS 「フェイクだ」

グシャ

スクアーロ 「偽物!？」

XANNXUS 「家光…」

日本へ発つ。奴らを…

根絶やしにする」

ボタン

美鈴 「にししっバーカ」

スクアーロ 「てめえ! これを知ってて行かせたなあ!」

美鈴 「何言ってるの。当たり前でしょ?」

ベル 「実際悪いのはお前だろ、スクアーロ」

ルッスーリア 「八つ当たりはダメよ♪」

レヴィ 「だからボス、スクアーロではなくオレに任せてくれれば…」

ベル 「それはねーだろ。お前の場合、門外顧問のガキにまかれてお

終いじゃんタコ」

レヴィ「タコオッ!？」

美鈴「にしし」

ルッスーリア「それにしても見破ったのって美鈴ちゃんよね？」

どうして分かったの？」

美鈴「まず、リングを合わせたとき音が明らかにおかしかった。まるで違うパーツをはめた時みたいだね。

それでボスに説教されてる間に、ボスのリングを観察した。思ったと通り、0・00001ミリずれてたよ」

ベル「は？」

ル／マ／レ／ス／ベ「じ――

――

.....

.....

わかるか!?!」

美鈴「はあ?なんで？」

じゃ、モスカ……」

モスカ 「グオン…グオン…」

美鈴「に聞いてどーする！なんでロボットに聞いてんの！しっかりしろよ私！！」

ルツスーリア「落ち着いて美鈴ちゃん！」

美鈴 「I、m sorry. I、m BAKA.」

ベル「なんか色々と処理が間に合ってるけど」

美鈴 「★♪\*#♭Γ×●@+£」

マーモン「ここは地球だよ！ マイクが翻訳できてない！」

美鈴

~~~~~

[illegible]
$$\lfloor$$

全「わ……………!!!」

バンツ

XANXUS 「準備はできたかカスども」

美鈴「That's
ok
boss.」

全「あ、戻った」

XANXUS「美鈴。ついてくるのか？」

美鈴「もちろん♪（ニコッ）」

XANXUS「／／／／／／／／／／／／／／／／」

スクアーロ「（XANXUSが…）」

レ／ル／ベ／マ「（ボスが…）」

全（美／X除く）「（顔を赤くした!?!）」

XANXUS「日本に行くぞ」

全「はい!」

日本へ（後書き）

ここまで来てお分かりでしょうが、美鈴は一種の二重（？）人格です。

因みに、ほんわか系の時は、人を惚れさせるほどキュートらしいです↑メツチャ他人事

集合（前書き）

※メンドクサイので全員が集まるところからです。

集合

レヴィ「雷のリングを持つオレの相手はパーマのガキだな」

ランボ「！（ゴクリ）」

レヴィ「邪魔立てすれば皆消す」

獄／山／了「！」

ツナ「（やばいよ！！）」

スクアーロ「待てレヴィ！」

全「！」

ルッスーリア「一人で狩っちゃだめよ」

マーモン「他のリングの保持者もそこにいるみたいなんだ」

ツナ「うわわわ……こ……こんなに……！」

スクアーロ「うゝおゝおい！！！！よくも騙してくれたなあカスども
！」

ツナ「で…でた——っ」

山本「！」

獄寺「あんにゃろう」

美鈴「騙される方が悪いんだけどね（ボソツ）」

スクアール「雨のリングを持っているのはどいつだあ？」

山本「オレだ」

美鈴「（ふむ。雷はアホ牛で雨は山本か…

悪くない人選だな）」

スクアール「なんだあてめーか。

三秒だ、三秒でおろしてやる」

ツナ「ひいいいそんな…やばいよ！！！！」

ガッ↑肩？

スクアール「！！」

XANXUS「のけ」

スクアール「ぐっ」

レヴィ「のけっ」

スクアール「うゝおゝおい！てめーはカンケーねーだろ！」

リボーン「でたな…まさか、また奴を見る日が来るとはな。

XANXUS

ツナ側全「!!」

ツナ「う…（な…なんだ…この人…!!?）」

XANXUS「（くわっ」↑睨

ツナ「ひいっ（ぞくっ）

うわあ!!」

獄／山「（く…う…動けねえ）」

XANXUS「沢田綱吉…」

コオオオオ

ツナ「!!」

ルッスーリア「まさかボス、いきなりアレを…!!」

スクアーロ「オレ達まで殺す気か!？」

リボーン「やべーぞ!逃げろ!」

ツナ「! ええ!？」

ベル「ボス！オレ達の努力を無駄にする気かよ！！」

XANXUS「死ね」

コオオオオ

美鈴「XANXUS！！」

全「！！」

XANXUS「……………美鈴」

美鈴（タブンネ）「XANXUS。俺の努力、無駄にする気か？」

XANXUS「てめえは誰だ」

ヴァリアー全「！？」

美鈴（タブンネ）「言う必要はない。その手をおさめやがれ」

XANXUS「……ちっ」

シュウウウ

ツナ「た…助かったの？」

リボーン「あいつは…」

ツナ「あ！もしかして、美鈴って子！？」

ヴァリアー全「!?!?」

美鈴「フツ。なんでアタシの名前を知ってるのかは知らないけど、その名前、軽々しく口にすると首が飛ぶよ? (ニコツ)」

ツナ側全「(ぞくっ)」

リボーン「なんつー殺気だ……」

ガッ

? 「そこまでだ」

獄寺「あ、あいつは……」

家光「ここからはオレが取り仕切らせてもらう」

ツナ「と……父さん!!!?」

美鈴「あらあら、門外顧問の家光じゃない。もう逃げなくていいのかしら?」

バジル「何を!」

家光「待てバジル。オレは逃げていたんじゃない。九代目からの回答を待っていたんだ」

美鈴「それは言い訳にしか聞こえないよ」

XANXUS「美鈴、黙っている」

美鈴「アハハッ」

家光「オレは近頃のお前達のやり方と、それを容認する九代目に疑問を持ってな。九代目に異議申し立ての質問状を送っていた。そして、その回答と取れる勅命が今届いた」

ツナ「何の話かさっぱりわかんないよ〜っ。」

つーかなんで父さんが…!?!」

リボーン「門外顧問。それが家光のボンゴレでの役職だ。

ボンゴレであってボンゴレでないもの。

平常時には部外者でありながら、ファミリーの非常時において、ボスに次ぐ権限を発動できる、実質？2だ」

ツナ「な!?!父さんが？2!?!」

リボーン「そして門外顧問は、後継者選びにおいてボスと対等の決定権を持つてる。つまりボンゴレリングの半分であるハーフボンゴレリングを後継者に授けられる権限だ」

ツナ「ボンゴレリングの半分って…」

リボーン「言わなかったか？七種類あるハーフボンゴレリングはそれだけではただのカケラにすぎねーんだ。対となる二つが揃って初めて後継者の証であるボンゴレリングになるんだ」

ツナ「それでこんな変な形なんだ」

リボーン「逆に言えば二つ揃わなければ後継者にはなれねーんだ」

美鈴「へえーそーなんだ」

ベ／ル／レ／マ／ス「知んなかったの!？」

リボーン「ボスと門外顧問が別々の後継者を選ぶなんて、滅多にあることじゃないけどな」

家光「XANXUS、これが勅命だ」

パシッ

ボッ

マーモン「それは九代目の死炎印。まちがない。本物の勅命だね」

そこにはこう書かれていた。

“今まで自分は、後継者に相応しいのは家光の息子である、沢田綱吉だと考えてそのように仕向けてきた。だが、最近死期が近いせいか、私の直感は冴え渡り、他により相応しい後継者を見つけるに至った。

我が息子、XANXUSである。

彼こそが真に十代目に相応しい”

ツナ「なあっ!？あの人九代目の息子なの!？」

美鈴「騒がしい」

“だが、この変更に不服な者もいるだろう。現に家光はXANXU Sへのリングの継承を拒んだ。かといって、私はファミリー同士の無益な抗争に突入することを望まない。そこで皆が納得するように、ボンゴレ公認の決闘をここに開始する”

家光「……つまりこーいうこった……。

同じ種類のリングを持つもの同士の一対一のガチンコ勝負だ^{バトル}」

ツナ「ガチンコバトル~~~~!!?」

家光「ああ。後は指示を待てと書いてある」

獄寺「指示…!?!」

?「お待たせしました」

ババツ

?「今回のリング争奪戦では、我々が審判^{ジャッジ}を務めます」

チェルベツロ「我々は九代目直属のチェルベツロ機関の者です」

チェルベツロ「リング争奪戦において、我々の決定は九代目の決定だと思ってください」

チェルベツロ「九代目はこれがファミリー全体を納得させるためのギリギリの措置だと仰っています。」

異存はありませんか？XANXUS様」

XANXUS「……………」

チエルベツロ「ありがとうございます」

家光「待て、意義ありだ。

チエルベツロ機関など聞いたことがないぞ。

そんな連中にジャッジを任せられるか」

チエルベツロ「意義は認められません」

チエルベツロ「我々は九代目に仕えているのであり、あなたの力の及ぶ存在ではない」

家光「なに…っ」

ルッスーリア「んまあ、残念ね〜家光♪」

美鈴「にししっバツカみたい」

チエルベツロ「本来、七種類のハーフボンゴレリングは（中略）

そこで、真のリングに相応しいのはどちらなのか、命を懸けて証明してもらいます」

美鈴「あ、新技でた」

ツナ「『中略』とかどんだけ!？」

作者「あまりにも説明が長ったらしいので斬った」

全「（微妙に字が違う…）」

ベル「ま、いんじゃないね？」

美鈴「確かに気にするだけ無駄だ」

チェルベツロ「場所は深夜の並中。詳しくは追って説明します」

山本「え!？」

ツナ「並中でやんの!!？」

美鈴「この町で一番楽しんで戦える場所だね」

ルッスーリア「あんらあ。でも美鈴ちゃんは戦わないわよお」

美鈴「それを言ったらダメだよ」

ベル「ししっ姫グレてやんの」

チェルベツロ「それでは明晩十一時、並盛中でお待ちしています」

チェル×2「さようなら」

バツ

ツナ「ちょ まって そんなっ！」

XANXUS「……」↑睨

ツナ「うわああ!!（ぞくぞく…っ）」

XANXUS「帰るぞ」

ヴァリアー全「はい」

バツ

ツナ「か…帰ってくれた…」

リボーン「……………」

ツナ「リボーン？」

山本「小僧、どーしたんだ？」

リボーン「あの美鈴って奴、どーも引っ掛かるな」

ツナ「あの子がどーかしたの？」

リボーン「ヴァリアーに女子隊員はいないはずなんだが」

全「!?!?!」

美鈴「フフフツ。楽しませてくれよ、沢田綱吉」

集合（後書き）

前回、美鈴は二重人格かも、とかいったけど、二重どころじゃないね・・・。

やばい！早くそこまで（話を）辿り着かせないと！！

読者の皆が誤解したまま話が進んじゃう！！

予想タァイム!

くヴァリアーアジトく

美鈴「さて、リング争奪戦においてのみんなの相手の守護者を私が分かる範囲で予想を試してみた。

まずは、晴、つまりはルッスーリアの相手は、笹川了平と思われる」

ベル「誰だっけそれ」

美鈴「並中ボクシング部主将。座右の銘は“極限”。やけど注意。

→より、ムエタイを使うルッスーリアとしても、歴代の晴の守護者からしてもコイツしか考えられない」

ルッスーリア「ボクシングねえ……。あまり好きじゃないのよね、あのスポーツ」

美鈴「次に嵐、つまりはベルね」↑無視

ルッスーリア「キィーツ！無視しないでえ！」

美鈴「ベルの相手は獄寺だと思う。ま、私の勘ね。というより、嵐
Ⅱ荒々しいⅡボムってなって、獄寺が出てきたただけなんだけどね」
↑なお無視

ベル「獄寺ね、アイツたいした実力もないくせに右腕とか言ってるだもんな。ししっ」

美鈴「雲、ゴーラ・モスカの相手は……考えにくいけど恭弥だね」

ベル「ん、アイツってやんのか？」

美鈴「よく分からないけど、一人でいるのを好む奴だからさ、いかにも『雲です』って感じだし」

ベル「ふーん」

マーモン「で、霧はどーなんだい？」

美鈴「霧……か。マーモンは術師だから、相手も術師で来るかもしれない。

い
となるとそーとーありえない話になるけど、六道骸しかいない」

ベル「でも今は復讐者に捕まってるんだし、戦えねーだろ」

美鈴「アイツを舐めたらいけない。脱獄だっけるかもしれないんだ」

マーモン「何がどうあれ用心しておいた方がよさそうだね」

ルッスーリア「雷と雨はもう分かってるから情報は要らないわね」

レヴィ「一応あの牛ガキについて聞かせてもらおう」

美鈴「いいよ。」

ランボはボヴィーノファミリーのヒットマン。元々はリボーンを殺すために日本に来たらしいけど、今は完全に沢田の家族になってるね。

アイツは10年バズーカという秘宝を所持している」

マーモン「10年バズーカか。珍しい物を持ってるね」

美鈴「十年後のアイツは自らの角に雷を呼び込み、その電圧は百万ボルト。注意しな」

レヴィ「ふん。オレの電気傘パラボラの前では通用せぬことを教えてやる」

スクアアロ「うゝおい、刀小僧はどーなんだあ」

美鈴「山本に関してはノーコメント。あいつの力は未知数だ。今情報を与えてしまうと、そこから先に進めないからね」

スクッ

美鈴「さてと、私は疲れたから寝るよ。」

(…………アイツが目覚め始めてる…。抑えなきゃ)」

ベル「ん。おやすみ」

ルッスーリア「しっかり寝て疲れを取るのよ」

美鈴「オツケーオツケー♪」

晴の守護者戦

く並中く

チエルベツロ「厳正なる協議の結果、今宵のリング争奪戦のカードが決まりました。第一戦は、

晴の守護者同士の対決です」

ツナ「晴の守護者同士の対決……ってことは…」

ルッスーリア「あの坊やね」

了平「あいつか……」

チエルベツロ「よくお集まりいただきました」

チエルベツロ「それではただ今より、後継者の座を賭け、リング争奪戦を開始します」

チエル×2「あちらをご覧ください」

ツナ「？」

カツ カツ↑照明 付

獄寺「!!」

ツナ「ああ！？な……何これ——！！？」

チエルベツロ「晴の守護者の勝負のために我々が用意した特設リングです」

チエルベツロ「今回は晴の守護者の特性を考慮した結果リングとしましたが、指輪争奪戦では各勝負ごとに、特別な戦闘エリアを設置いたします」

ツナ「んな―――！！あんな大掛かりな物を……………！！？」

ベル「ケツコー金かってんね」

マーモン「でも勝負は見えてるんだ。無駄遣いだよ」

美鈴「なんでマーモンは口を開くと金、金、金、金なのかぁ？お金で買えない大切な物だってあるのに」

スクアーロ「わけわかんねーこと言ってんじゃねーぞ！」

美鈴「ワケわかんなくないよ。家族だってそうなんだ……」

スクアーロ「！」

ルッスーリア「ねえ？ボスまだかしら？」

私の晴れ舞台だって言うのに……………」

マーモン「欠席みたいだね」

スクアーロ「あの男が他人の戦いに興味あるわきゃねえ………」

レヴィ「！（ピクツ）」↑睨

スクアーロ「そもそも奴の柄にもねえようなこんなセコイ勝負受けてねえでオレにやらせればいいんだ。あんなガキども五秒でかつさばくぜえ……」

ってうゝおゝおい！いつまで睨んでんだあ！？」

レヴィ「じ——」↑睨

ベル「なんかガンみしてるチビいるんだけど、マーモン」

マーモン「分かってるよ。あいつ守護者でもないのに……」

見物料ふんだくってやりたいよ」

美鈴「へ！？」↑ガン見しててチビで守護者じゃない人

ベル「姫じゃないし。あいつ。リボーン」

美鈴「あ」

チエルベツロ「それでは、晴の守護者、リングの中央へ来てください」

ルッスーリア「遊んでくるわねー」

マーモン「楽しませてもらうよ」

スクアール「とつとと殺れえ」

美鈴「私が睡魔に負ける前によろしく」

全「（じゃあ来るなよ!!）」

チエルベツロ「間違いありません。正真正銘の晴のハーフボンゴレリングと確認しました」

チエルベツロ「指輪は原則として首からさげることとします。そして相手を倒し、指輪を奪った者が勝ちです」

ルッスーリア「！ あらあ？ んまあ。よくみりゃあなた、いい肉体してるじゃない！！ 好みだわ~~~~~♪」

了平「なに!？」

獄寺「！ アイツ今…なんて言いました!？（ガーン）」

ツナ「さ…さあ…?（ガーン）」

ルッスーリア「お持ち帰り決定♪（チュッ）」↑投げキッス

了平「何を言っている!」

マーモン「滅多にいないいいよ。ルッスーリアのお眼鏡にかなう奴なんて…」

レヴィ「あのガキ…ついてないな…」

美鈴「……………（おえっ）」

ベル「ししっ。姫が露骨に嫌そうな顔してんだけど」

了平「さっきから何を言っているかわからんが、オレは正々堂々戦うだけだ」

ルッスーリア「んまあそのポーズ。

そういえばあなた、ボクシング部の主将なのよね」

了平「！！ 何故知っている！」

リボーン「情報収集は怠っていないようだな…」

美鈴「（ピースピース）」

ルッスーリア「ほんと、イケてないわねー。

このルッスーリアが立ち技最強のムエタイで遊んであげる」

了平「なにぃ…！！」

リボーン「やはりヴァリアーも晴の守護者は格闘家か」

ツナ「やはり……？」

リボーン「歴代のファミリーを見ても晴の守護者は皆、強力な拳や足を持っていた。

ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で碎き明るく照らす
日輪となる。

それが晴の守護者の使命なんだ」

チエルベツロ「では晴のリング ルッスーリアVS笹川了平

バトル
勝負開始！！」

了平「貴様！！ボクシングへの侮辱は許さんぞ」

ルッスーリア「んっふふっ」

カッ カッ カッ↑ライト 付

了平「ぬおっ」

獄寺「まぶっ」

ツナ「な…何これ——っ

リングが光ってる——！！！！」

チエルベツロ「この特設リングは晴の守護者の決戦に相応しく設計された、疑似太陽により照らし出される、日輪のコロシウムなのです」

美鈴「グラサン装着！（チャッ）」

ベル「姫 似合わねーし」

美鈴「そりゃなあ」

ドゴツ↑蹴

了平「ぐあっ」

ツナ「ああ！！ヴァリアーの人はサングラス付けてるから自由に動けるんだ！！これじゃ、勝負にならないよ！！お兄さんにもサングラスを！！」

チェルベツロ「勝負中の守護者との接触は認められません。もし行えば失格としリングを没収します」

ツナ「そんな……………！！」

ルッスーリア「あーらこの感触、思ったよりいい体してんのね。ますますタイプ♪」

了平「どこだ！？」

ビュッ ビュッ ビュッ

ルッスーリア「こっちよ」

ガッ↑殴

ルッスーリア「ん……………♪私の完璧な理想の肉体に近づいてきたわ……………」

ベル「ルッスーリア…本当に遊んでるね」

マーモン「当たったんじゃないくて、当たりにいったんだよ」

美鈴「器用な奴」

ルッスーリア「いじめちゃいや～～～～ん♪」

了平「なにっ!？」

だが今の感触…奴は空中…!次は逃がさん!

もらった!!」

ルッスーリア「ムフ(ニヤ)」

ガッ

了平「うおお」

ブシュウ

了平「ぐあっ!腕がああ!」

獄寺「!」

ツナ「ああっ!」

了平「うぐっ……!」

どだーんっ

ルッスーリア「晴の守護者らしく逆境を跳ね返して見せたのよん♪

私の左足は鋼鉄が埋め込まれたメタル・ニーなの。

もうあなたの拳は使い物にならないわ」

獄寺「Che!!」↑イタリア語です

ツナ「お兄さんの手が……」

リボーン「やべーのはそれだけじゃねーぞ。了平の奴、

ライトの熱にやられて脱水症状が始まっている」

了平「ハア…ハア…」

ベル「もう勝負は決まったようなもんだね」

？「立てコラ!!!」

ツナ「コロネロ!!!」

スクアーロ「あのチビはアルコバレーノのコロネロだぜえ」

レヴィ「何故奴がここに？」

美鈴「そりゃ、コロネロもあっち側だからね」

ス／レ／マ「!!」

コロネロ「そろそろ頃合だぜ。お前の本当の力を見せてやれ了平！」

ルッスーリア「今更誰が何を言っても無駄よ。この子はもう終わり♪いただくわ♪」

了平「ハア…ハア…ハア…

コロネロ……………師匠……………!!

その言葉を待っていたぞ!!」

ルッスーリア「!」

晴の守護者戦(後書き)

次回、コロネロに喝を入れた了平が活躍!?

ルッス「んもうっ! 活躍するのはわ・た・し♪」

了平「いいやオレだあ!!」

※えゝハートマークが記号にならないので、音符で代用しています。
はい。

逆境を撥ね返す日輪

ツナ「お兄さんが起き上がった!!」

美鈴「しぶとい…」

ルッスーリア「あなたと私じゃ肉体の出来が違うの。灼熱のライトの中ではもうもたないでしょうに。」

さっさと死んで私のコレクションになりなさいな」

了平「いいや…! まだだ!!」

ルッスーリア「立ってもいいことないわよ。あなたのパンチは通用しないんだから」

了平「ああ…確かに通用しなかった…」

左はな…」

ルッスーリア「!」

獄寺「!」

リボーン「そーいやフウ太達を助けたときから左しか撃ってねーな」

ツナ「え!?!」

コロネロ「そうだ。右は一度も撃ってねーぜコラ!」

美鈴「体力温存ってわけ？」

コロネロ「それもあるが、奴が晴の守護者だからだ」

了平「この右拳は圧倒的不利をはね返すためにある……！」

ルッスーリア「んまあ、これは傑作だわ！滑稽だわ！おほーほほっ」

了平「何がおかしい！」

ルッスーリア「あなたの温存しているパンチがどれほどの物か知らないけど（スス…）当たらないと意味が無いのよ」

スススス…

了平「？」

獄寺「なんつーフットワークだ」

山本「まるで忍者の影分身だな」

ツナ「お兄さん…っっ

タダでさえ見えないのに……！」

ガッ↑殴

ドシャッ

ツナ「お兄さん！」

了平「大丈夫…夫だ…」

いくぞ…」

ざっ…

ベル「へえー」

マーモン「なかなか雰囲気があるよ」

美鈴「何を見せてくれるのかな」

ルッスーリア「（はずした瞬間があなたの最期よ）」

了平「そこか！」

ルッスーリア「！」

了平「うおおお！」

グッ

了平「マキシママキャノン極限太陽！！！！」

ガッ

パリ…ン…

スクアール「！」

美鈴「何を慌ててるの？」

ベル「アレでやられるほどあのオカマは弱くねーと思うぜ」

クルツ

ダッ

ルッスーリア「ふっっっっつ

クリーンヒットしてたらちょっとやばかったかしら」

了平「いいや、確かに当てたぞ」

ピシ…ピシ…

ルッスーリア「!？」

パリーン↑照明 割

ルッスーリア「！」

ツナ「……………!?!? しょ…照明が…」

了平「うおおおお!!!!」

ドドド

バリーン

パン…

フツ↑ライト 消

了平「これでやっと貴様とイーブンの状態でやりあえそうだな」

ルッスーリア「!?!」

了平「剋目!?!」

獄寺「芝生の奴!?!」

ツナ「これで見える!」

リボーン「はなっから照明を狙ってやがったんだ」

ルッスーリア「目を開こうが閉じようがどうでもいいわ。それよりも信じがたいのは照明を割るほどの拳圧よ」

ベル「ルッスーリア。奴の体をよく見てみるよ」

サラサラサラ

ルッスーリア「!?!? なあに? 砂…? いやちがうわ。アレは…!?!」

なっ!?!? 塩!?!? 塩の結晶ですって!?!?」

ツナ「し…塩——！！？」

ルッスーリア「なるほど。脱水症状により吹き出した汗の水分のみが照明の熱で蒸発し、汗に含まれる塩分は残る。

その塩分を拳に乗せ散弾のように放ったってわけね…

なはんだ…」

了平「気づいたところでもう遅いぞ」

ルッスーリア「おほっおほほほ

あまり笑わせないで！腹筋がもっと割れちゃうわ」

了平「なに…」

ルッスーリア「私がちょっぴりヒヤッとしたのは拳圧で照明を割ったと思ったからよ。

だってそんなことが出来たのは光り輝くパンチを放ったと言われる初代晴の守護者だけなんだもの」

了平「!？」

ルッスーリア「でもこの程度の猿芸なら私にもできるわ」

ス…

了平「!！」

ビュッ

バリーン

了平「なっ!？」

獄寺「芝生頭の塩をかすめて…!!！」

ツナ「同じ技を!？」

リボーン「いいや、それ以上のテクニクを要するぞ。よける了平の体の塩を拳圧で吹き飛ばしている。

まさにヴァリアークオリティだな」

ツナ「ヴァリアー…クオリティ…？」

リボーン「ヴァリアーは人間業では到底できないと言われる殺しを、ミッションいかなる状況でも完璧に遂行してきた殺しの天才集団だ。

その悪魔の所業ともいわれる殺しの能力の高さを、人々は畏怖の念をこめてヴァリアークオリティという」

ルッスーリア「さすが、よく言えたわねリボーン♪

分かったかしら。私達とあなた達では実力に差がありすぎて遊びにはなっても戦いにはならないのよ」

了平「遊びかどうかはこの右拳を受けてから言うんだな」

ルッスーリア「んもう、分からない子ね。そのパンチはさっき真似して見せたでしょ？見切ったわ」

了平「何？………やってみなければ…分からん！」

ルッスーリア「んもう、諦めの悪い…」

コロネロ「よく言ったぜ了平。それでこそオレの弟子だコラ！」

美鈴「むゝ長い」

ベル「さっさと終わらせちゃいなよ」

マーモン「どうやら美鈴に限界が近づいてるみたいだよ」

美鈴「悪いルッス。寝る」

ツナ側全「なっ！？」

．．．．．

美鈴が寝てしまったので、彼女が起きた辺りから

獄寺「適当な奴…」

．．．．．

了平「オレはもう、負けんと…!!!!」

ツナ「た…立った…!」

了平「みさらせ…!!これが本当の」

ルッスーリア「全くしつこいわねえ。これで終わりにしてあげましよう」

ススス…

了平「^{マキシマム}極限…!!^{キャノン}太陽…!!」

カッ

ピシピシ

バギヤッ

ルッスーリア「ぎゃあ…!!」

弱肉強食

ドサッ

ツナ「お兄さんのパンチが…決まった!!!!」

ルッスーリア「うぎゃあああ!!!!」

う…うそよお!メタル・ニーが砕かれるなんて!!」

マーモン「勝負あったね。ルッスーリアにはもう、あのパンチを防ぐ術がない」

ベル「笑かすよな、あのヘンタイ」

美鈴「幸先よくないことしちゃってさ」

了平「緊張感あるいい戦いだっただぞ。さあ、リングを渡してくれ」

ルッスーリア「! いやっいやよ!」

了平「!?!」

ルッスーリア「私はヴァリアーよっ片足だって勝って見せるわ! 楽勝よ! おほほっ」

ツナ「すごい執念だ……!!」

リボーン「ちげーぞ」

ツナ「!?!」

ルッスーリア「さあいくわよ!! 続けるわよ!! 早く!!」

了平「!?!?!?!?! 何を焦っているのだ…」

? 「破道の三十三 蒼火墜!」

ドスッ

ツ／了「—————」

グシャッ

マーモン「さすがだね。まさか美鈴が手を下すとは思わなかったけど」

にやりと笑う美鈴は、右手を前に出し左手をそれに添えるという、不思議な体勢でいた。

そして、右手をゆっくり下ろす。

ツナ「な…あの子が!?!」

美鈴「マフィアの世界は弱肉強食。ヴァリアーは常に最強でなければいけない。

弱者はいらない。出たら消す」

ツナ「弱者は……消す……？そ……そんな……」

了平「おい！しっかりしろ！」

チエルベツロ「近づかないでください」

了平「なにいつ」

チエルベツロ「たった今ルッスーリアは戦闘不能とみなされました。
よって晴のリング争奪戦は笹川了平の勝利です」

了平「……………」

し……………ん……

チエルベツロ「今宵の勝負はこれで終わりますが、今回より決戦後に
次回の対戦カードを発表します」

ツナ「え……！もっもうわかつちゃうの………！？」

スクアーロ「うゝおゝおい！次はオレにやらせろお！」

チエルベツロ「それでは発表します」

スクアーロ「うゝおゝおゝおい……！」

美鈴「にしし。シカトされてやんの」

チエルベツロ「明晩の対戦は……………」

雷の守護者同士の対決です」

マーモン「雷…次はレヴィだね」

チェルベツロ「それでは明晩お会いしましょう（カチッ）」

バシユツ↑リング 壊

美鈴「それじゃ、かえろっか」

ツナ「あ、ま、待って！」

ベル「ボスが切れてたりしてな」↑無視

ツナ「み、美鈴ちゃん！」

ジャキン…

ツナ「ひいっ」

美鈴「軽々しくその名を呼んだら首が飛ぶって、言わなかったっけ？」

一瞬で振り返った美鈴が突き出してきたのは、巨大な鎌。

その切っ先はツナのノドに当たっていた。

ツナ「ははは話が…あるんだ…」

美鈴「話ねえ。つまらないことだったら一瞬であの世行きだよ？」

ツナ「（ブルブルブル）」

ベル「姫ー。遊んでないでさっさと帰ろうぜ」

美鈴「……クスッ。皆先に帰ってて。あ、ベルは残ってね♪」

マーモン「用事があるならさっさと済ませてね」

スクアール「オレ達は帰ってるぞお」

美鈴「（だから帰れって言ってんじゃん）」

うん、きつとすぐに終わるよ」

バツ

美鈴「それで？ 沢田綱吉。話ってなに？」

ツナ「あ、あのさ、君達って……」

鐘と悠里……だよね？」

美／＼「！！！」

ツナ側全「！？？」

獄寺「十代目？」

山本「ツナ！？？」

美鈴「あっはっはっは!!」

突然何を言い出すのかと思えば」

ツナ「だってそうだよね?あの二人なんだよね?」

美鈴「なに?超直感?ばれてたの?つまんなあい。いつから?」

リボーン「っていう事は本当に鐘と悠里なんだな」

ベル「そうと言えばウソになるけど違うといってもウソだね」

了平「どういう意味だ?」

美鈴「そのまんまの意味。アレは偽名だからアレと私達が一緒かって言うけど、結局は同じ人物ってコト」

獄寺「騙してたのか?」

美鈴「騙してた……まあ、そーゆーことになるね」

フィン「何のために……」

美鈴「全てはボスのため。」

その目的は次期ボス候補沢田綱吉の監視及びその周囲の人間
観察」

リボーン「オレの誘いを断り続けていたのもヴァリアーだからだっ

たんだな」

美鈴「そゆこと♪」

山本「それじゃあ、今までオレ達と過ごしてきたのもウソだったってことか？」

ベル「しししっ。あったり前じゃん。お前らといって面白いことといったら、いつもやってるバカ騒ぎの見物ぐらいだし」

ツナ「そんな……」

フィン「ねえ、私達友達だよね？そうだと言って！」

美鈴「否」

フィン「！」

美鈴「私に友達なんて存在しない。あ、たった一人だけ面白い子がいるけどね、あの子以外の人間は興味ない。」

あんた達と友達？そんなのこっちから願い下げ」

フィン「……信じてたのに……」

美鈴「いいねえその顔。絶望に満ち溢れ憎しみがつまったその表情、大好きだよ」

ツナ「(ぞく……)」

美鈴「その命を刈り取りたいぐらいに」

ベル「ひーめっ。そろそろ帰ろうぜ」

美鈴「ベルく？折角のいいムードが台無しじゃないか」

ベル「いい加減帰んねーと、スクアアローがうるせえし」

美鈴「あーそれは困る。よし、帰ろう」

バリバリ

パアン↑鎌 壊

ツナ「あ、ちょっと待って！」

美鈴「まだ何かあんの？さっさとして」

ツナ「あのさ、この戦いでオレ達が勝ったら友達になってくれないかな。二人ともさ」

美／＼「!!」

獄寺「十代目…」

山本「ツナ…」

了平「沢田…」

ベル「ふーん。随分と自信満々じゃん、ダメツナのくせにさ」

美鈴「勝ったら、ね。そしたら考えてあげてもいい。でもあたし達
が勝ったら、あんたら全員の命刈り取らせてもらうから」

ベル「オレ達の世界は弱肉強食。手加減なんてないから。」

そこんとこ理解しとけよ、獄寺」

ツナ「えっなんで獄寺君？」

獄寺「つー事は嵐のリングは……」

ベル「ししっ。んじゃな、バイビ♪」

美鈴「せいぜい頑張りな。おバカさんたち♪」

ダッ

雷戦？（前書き）

タイトルに？が付いている理由は簡単。

入りそうで入らないから。

雷戦？

ベル「姫、本当によかったのか？」

美鈴「ま、いんじゃない。

ん？何の話？」

ベル「ルッスーリアのこと」

美鈴「あ、そっちな。いいの、負けたあいつが悪い。

それにあの技はまだまだ弱い。あの程度でくたばるんだったら、

それこそヴァリアーに入らない弱者ということ。

死んでも仕方ないよ」

ベル「姫がいいならいいんだけどさ」

マーモン「二人とも、今心配すべきなのは彼女（訂正）彼じゃなくて」

→オイ

ガシャーン ドガン

マーモン「あっちだと思うよ」

美／＼「(汗)」

アジトに帰ってきた彼らが見たのは、空腹のせいで暴れまくるX A
NXUSの姿↑子供か!?

今はスクアアロいびりをしている。

美鈴「まったく(呆)」

急いで何か作ってこないとね」

ダッ

マーモン「ルッスーリアが負けて料理できる人が美鈴だけになった。
彼女にとっては今日からは大変になるね」

↓数分後↓

美鈴「(ぐったり)」

ベル「大変ならルッスーリアのことやんなきゃよかったんじゃない
の?」

マーモン「いや、美鈴がやらなかったとしても恐らくゴーラ・モス
カが手を下していた。

結果オーライさ」

美鈴「ふぁー。んじゃ、寝る」

ベル「明日からご飯よろしくな」

美鈴「（ピキーン（凍））」

で、結局次の日朝ごはんを作った美鈴でした。

そして夜。↑早すぎ

ザ――――ツ↑雨

ピカッ　ゴロゴロゴロゴロ↑雷

美鈴「雷戦にはもってこいの天気になってるね」

夜の十時。XANXUSの夜食を作りながら外を見る美鈴。

ベル「つーかさ、レヴィは？」

そしてその夜食をつまみ食うベル。

マーモン「さあね。ベル、つまみ食うの止めな。ボスが怒るよ」

答えながらベルを注意するマーモン。

スクアーロ「XANXUSんとこで機嫌取りでもしてんじゃねえのかあ？」

マーモンと美鈴にばれないようにつまみ食うスクアーロ。

美鈴「ねえ、ボスに怒られるからいい加減つまみ食いを……ってな

んでマーモンまで食べてんの!？」

マーモン「むぐ…(しまった、つい手が)」

美鈴「マジ勘弁してよ。帰ってきたらみんなの分の夜食も作ってあげるからさあ。」

これじゃ私の命がいくあっても足りないよ」

その一言で全員のつまみ食う手が止まる。

ベル「わりっ」

マーモン「謝るよ」

スクアーロ「すまねえなあ」

美鈴「ったく。そんじゃ、ボスに届けてくる」

ボタン

＼XANXUSの部屋＼

コンコン

美鈴「ボスー夜食持って来たよ」

「……………」

美鈴「？」

ガチャッ

美鈴「もしもーし？」

XANXUS「……………」↑睡眠中

美鈴「……………（寝てる！？）」

コトツ↑料理 置

〈夜食を作ったので私達が帰ってくるまで暴れないでね♪〉

ボタンッ

〈台所〉

美鈴「ボス、寝てた。あとレヴィはいなかった」

マーモン「そう、なんだ。それじゃ、僕らも行こうか」

雷戦？（後書き）

そういえば何でヴァリアーの皆さんは美鈴の多重人格（特にXAN
XUSに生意気な口を聞いたこと）について突っ込まないんでしょ
うか。。。

作者である私にも分かりかねる。

雷戦？え、やらないよ。

（並中）

美鈴「いないと思ったら二時間も前から！？」

並中に着いた美鈴たち。そこには二時間も前から待っていたというレヴィの姿と、ちょうど今到着したツナたちの姿があった。

ベル「信じらんない」

マーモン「仕方ないよ。君達と違ってレヴィは不器用な男だからね」

スクアール「とっとと終わらせろお！！」

美鈴「あっち側の雷は……ランボ」

ベル「あのチビ戦えんの？」

美鈴「あーだめだ。ランボって思ったら無性に殺意が芽生えてきた。

レヴィー、さっさと殺っちゃっていいからねー」

チエルベツロ「それでは雷のリング レヴィ・ア・タンVSランボ

バトル
勝負開始！！！！」

作者「開始とはよく言ったもんだな。もう終わるのに」

レヴィ「なぬっ！？貴様！どういふつもりだ！」

作者「どうもこうも、あんたの戦いを見て面白いって思う人、絶対に居ないから」

二十年後ランボ「と、言うことはオレ様も出ないんだな」

作者「ご名答♪ゴメンねえ、私二十年後のランボなら好きなんだけどな」

二十年後ランボ「ここに出れただけでも充分ですよ」

レヴィ「オレを置いて話を進めるな！」

作者「あ、そうそう。雷戦を飛ばしたのってXANXUSの命令なんだ♪」

レヴィ「ボスううー！」

~~~~~

※超ツナご登場の辺りから

レヴィ「とどめだ」

獄寺「やめろー!!」

マーモン「えぐい死体が見れそうだね」

スクアード「うゝおい、とつとと焼けえ」

レヴィ「死ね」

グラッグラァ…

レヴィ「なに!？」

ダッ

ドズウン↑避雷針 倒

全「!」

獄寺「避雷針が!」

ベル「風…じゃなさそうだ」

マーモン「ああ…あの曲がり方は」

美鈴「熱だね。熱が避雷針の細くて弱いところを溶かしている」

チエルベツロ「エレットウリコ・サーキット全体が熱を帯びている。

熱伝導……?」

チェルベツロ「！サーキットの外に」

超ツナ「目の前で大切な仲間を失ったら……

死んでも、死にきれねえ！」

ベ／美「！」

ス／マ／レ「！！」

了平「なっ」

山本「なんだ……？」

獄寺「あの炎は……！！！！」

了平「だ……誰だ？」

獄寺「まさか……」

山本「ツナ……？」

獄寺「……………ああ……間違いねえ……あれは十代目だ！！」

山本「だな。ありゃツナだ」

了平「うむ。あんなことができるのは沢田しか居ない」

マーモン「なるほど。エレクトウリコ・サーキットの導体は金属でできていて熱を伝達する働きがある。その熱が避雷針のくびれ部分ま

で伝わり、溶解したために重量に耐え切れなくなって倒れたんだ」

スクアール「うゝ、おい、美鈴、ベル。聞いてねえぞお、アイツがあんなバカでかい炎を出せるなんてなあ」

ベル「オレに言うなよ。王子は姫の監視だけだったし」

美鈴「はっはっは。何言ってるのさみんな。

私だって見んのは初めてじゃボゲエ!!」 ↑逆切れ

超ツナ「……いくら大事だって言われても…ボンゴリンググだとか…次期ボスの座だとか…そんなもののためにオレは戦えない」

全「!」

ツナ「でも……友達が……仲間が傷つくのはイヤなんだ!!!」

? 「ほざくな」

## タイトルが思いつかない

？「ほざくな」

ドッ

ツナ「がっ！！」

うわああ！！」

どさあっ

獄寺「十代目！」

山本「ツナ！」

ツナ「く……うう……あっ！あれは……！XANXUS……！！」

（キッ）「↑睨

XANXUS「………何だその目は……。まさかお前、本気でオレを倒して後継者になれると思ってんのか？」

ツナ「そんなこと思ってないよ……オレはただ……！！この戦いで仲間を誰一人失いたくないんだ……！！」

XANXUS「（ピクッ）！　そうか……てめえ……！！」

コオオオ……

チエルベツロ「XANXUS様いけません！ここで手をあげてはリング争奪戦の意味が！！拳を収めください！！」

XANXUS「うっせえ！」

ガッ

ツナ側全「！！」

チエルベツロ「う……あ……」

XANXUS「オレはキレちゃいねえ。むしろ楽しくなってきたぜ（ニヤ…）」

ツナ「！！（わ……笑った…！？（ぞくっ）」

リボーン「こいつはレアだ」

マーモン「いつから見てないかな、ボスの笑顔」

レヴィ「八年ぶりだ」

美鈴「は？何言ってるの？先月笑ったじゃん。私の誕生日ンときに」

ヴァリアー全（X除く）「！！？」

マーモン「あの日も別に笑ってなかったと思うけど」

ベル「何か見間違えたんじゃないの？」





ベル「ごまかしたな（ボソ）」

スクアール「クソボスがあ（ボソ）」

美鈴「?？」

XANXUS「おい女。続けろ」

チエルベツロ「はっ。では勝負の結果ですが、今回は沢田氏の妨害により、レヴィ・ア・タンの勝利とし、雷のリングならびに大空のリングはヴァリアーの物となります」

ツナ「W!!?」

獄寺「アホ牛だけでなく、十代目のリングまで!？」

バジル「話が違う!!!失格ではないはずだ!!!沢田殿はフィールドに入っていないかった!!!」

美鈴「よく考えなよ。ツナはフィールドを破壊して、勝負を妨害した。立派な失格の理由だよ」

ツナ「そ…そんな…っ」

ベル「自業自得だっつーの」

ちゃり…ぶちっ

了平「くっ」

獄寺「き…汚ねえぞっ!!」

チェルベツロ「XANXUS様、リングです」

XANXUS「……」

ピキンッ

XANXUS「これがここにあるのは当然のことだ。オレ以外にボンゴレのボスが考えられるか」

獄寺「くそっ」

XANXUS「他のリングなど、どーでもいい。これでオレの命でボンゴレの名のもとお前らをいつでも殺せる」

山／獄「!!」

ツナ「そん…な!!」

XANXUS「だが老いぼれが一時だとはいえ後継者を選んだお前をただ殺すのではつまらなくなった。お前を殺るのはリング争奪戦で本当の絶望を味わわせてからだ。」

あの老いぼれのような」

ツナ「!?!」

リボーン「!」

家光「XANXUS!! 貴様!! 九代目に何をした!!」

XANXUS「ぶはっ

それを調べるのがお前の仕事だろ? 門外顧問!」

家光「きっ…貴様まさか……!!!!」

リボーン「落ち着け家光。何の確証もねーんだ」

家光「お前こそ銃をしまえ」

リボーン「……………」

ツナ「どーゆーこと…? XANXUSは何をしたんだ?」

XANXUS「喜べモドキ共。お前らにはチャンスをやったんだ」

ツナ「!」

XANXUS「残りの勝負も全て行い、万が一お前らが勝ち越すよ  
うなことがあれば、ボンゴレリングもボスの地位も全てくれてやる」

ツナ「!!」

家光「!」

XANXUS「だが負けたらお前の大切な物は全て…消える…」

ツナ「た……大切な物全て……!？」

XANXUS「せいぜい見せてみる。あの老いぼれがほれ込んだ力を。」

女、いいぞ」

チエルベツロ「はい。では明晩のリング争奪戦のカードを発表します。」

明日の対戦は……

嵐の守護者の対決です」

XANXUS「………ベルか…悪くねえ…」

レヴィ「ボス。雷のリングだ。収めてくれ」

XANXUS「いらねえ。次に醜態をさらしてみろ」

レヴィ「死にます」

美鈴「もーボス!来るならくるって言ってよね?」

XANXUS「………」

美鈴「頑張り損だよ……ふわあ。眠い…」

XANXUS「夜食の礼だ。オレが担いでいく」



フィン「(タイムリミットが迫ってる…早く…早く…

早く“魅麗”を戻さないと!!)」

**タイトルが思いつかない（後書き）**

フィンの言う“魅麗”とは一体誰なんだろうか……



## 嵐の予兆

くヴァリアーアジトく

スタツ

XANXUS「着いたぞ」

美鈴「んお、ありがとボス」

ベル「ひーめっ夜食」

美鈴「ちっ、覚えていたか」

ベル「あったり前じゃん」

美鈴「Let's three minutes cooking♪」

マーモン「いいよ。三分だけ待ってあげる」

く三分後く

美鈴「チャーハンができた」

全「早っっ!?!でもさすが」

美鈴「では、眠いのでこれで」

ベル「ん?姫は?」

美鈴「夜食は女の子の敵ですよ♪」

全「……………」

バタンッ

次の日。

コーケコッコー コケー（棒読み）

美鈴「（ムカツ）」

ベル「いつぶり？」

一年と半年。コケーコケー

美鈴「（チャキッ）」

……………（汗）

美鈴「……………（イライラ）」

無口の怒りが一番怖い ダッ

美鈴「（ダッ）」

スクアーロ「オレにもやらせろお！（ダッ）」

マーモン「なんでナレは学習しないんだろうね」

ベル「オレ外に行ってくる」

マーモン「ム…どこに行くんだい？」

ベル「しししっ」

バタンツ

美鈴「んー（ぐぐっ）あれ？ベルは？」

マーモン「たった今出かけたよ」

美鈴「あ、ご当地の殺し屋殺しね。んじゃ、どーでもいいっか」

マーモン「ハア。緊迫感ないね」

美鈴「今晚、お寿司だから」

（路地裏）

ブシャアアッ

マーモン「派手にやってるねベル」

ベル「また覗き見かよマーモン」

マーモン「任務の度にご当地の殺し屋消して遊ぶのよくないよ。裏社会の政治が無駄にこんがらがるだろう」

ベル「政治なんて知ったことかよ。だってオレ王子だもん」

殺し屋「ヴァ：ヴァリアー！！貴様よくも弟を！！」

ベル「おっ来た。弟をやれば来ると思ったんだよね。売り出し中の殺し屋兄弟だし」

殺し屋「死ねや！！（ジャキンツ）」↑釘バット

ビュビュビュ

ベル「ん、コイツ期待はずれだな」

ビュ

ベル「コレ、オレの武器ね（キラン）」

殺し屋「（汗）」

スパッ

ゝアジトゝ

美鈴「くあゝ」↑猫か！？

ガチャ

ベル「ただいま」

美鈴「遅い！寿司が腐るぞゴルア！」





## 嵐戦 開幕

く並中前く

リボーン「いよいよ獄寺の勝負だな」

ツナ「獄寺君ならきつと大丈夫だよな」

リボーン「獄寺の相手をする鐘：いや、ベルフェゴールは“プリンス・ザ・リッパー”って通り名なんだ」

ツナ「プリン…？」↑バカ

リボーン「“切り裂き王子”って意味だぞ」

ツナ「え、切り裂き…：おうじ…？え？あの王子！？」

リボーン「ああ。本当に王族の血を引いてるらしいんだ。だが、その常人離れたたぐいまれなる戦闘センスをもてあまし、自らヴァリアーに入隊した変り種だ」

バジル「拙者も親方様から聞きました。こと戦闘においてだけならヴァリアーで最も才能があるのはベルフェゴールだと」

ツナ「！ 鐘が戦っているのって見たことなかったけど、そんな恐ろしいなんて…」

リボーン「厳しい戦いになることは間違いねーな」

〔校舎内〕

美鈴「んー？獄寺はどーしたのかな？」

ベル「逃げてどーすんだか。どうせ殺されんのに」

美鈴「右腕が来ないなんて、沢田綱吉もそれだけ人望が薄いつてことかなあ？」

ツナ「獄寺君……」

チェルベツロ「あの時計が十一時をさした時点で獄寺隼人を失格とし、ベルフェゴールの不戦勝とします」

カチ カチ

了平「いかん」

カチ カチ

シュルルル

ツナ「！」

ドガアン↑時計 爆

美鈴「！」

ベル「ん？」



キュッ

獄寺「お待たせしました、十代目！！獄寺隼人、行けます」

ツナ「獄寺君！！」

了平「タコ頭！！」

チェルベツロ「約束の時間に間に合いましたので、勝負への参加を認めます」

チェルベツロ「それでは戦闘フィールドの説明に移りますが、その前に、怪我のため我々の一名が交代となりましたので、報告させていただきます」

チェルベツロ「よろしく」

了平「やられた奴とよく似ている」

リボーン「チェルベツロにはいくらでも替えがいるらしいな」

チェルベツロ「今宵のフィールドは校舎の三階全てです」

チェルベツロ「もちろんこの棟と繋がる東棟も含まれ、廊下だけでなくこの階にある全ての教室を含みます」

美鈴「ワオ。広いね」

チェルベツロ「ただし」

ガタガタガタハタ

バリ———ンッ

獄寺「!!」

チェルベツロ「フィールドのあらゆる場所に、このようなハリケーンタービンが仕掛けてあります」

獄寺「ハリケーンタービン？」

チェルベツロ「ハリケーンタービンは吹き出し口が四つあり、四方向にランダムに超強力な突風を発生させる嵐の装置です」

フィン「すごい危険だね……」

マーモン「まともに食らったら外へ飛ばされるだろうね」

チェルベツロ「そして今回は、勝負に制限時間を設けます。試合開始から十五分後にどちらかが嵐のリングを完成し所持しなければ、ハリケーンタービンに仕掛けられた時限爆弾が順次爆発し、この階を全壊にします」

ツナ「そ……そんなっ……!!? じゃあ勝負がつかなかったら二人とも……」

チェルベツロ「死ぬでしょう」

チェルベツロ「二人とも嵐の守護者には相応しくないと言うことです」

ツナ「そんな…!!」

美鈴「ま、ベル的にはこれぐらいやった方が楽しめたりすんじゃないの？」

ベル「ししっ

だな♪」

獄寺「デスマッチかよ…おもしれーじゃねーか」

？「何だ？今のガラスの音は」

シヤマル「ケガ人はいねーか？」

ポン↑肩に手

美鈴「！」

獄寺「なっ」

ス／マ「!？」

美鈴「気安く触んじゃねえ！」

ドガッ↑回し蹴り

ガンッ

シャル「のへー!!」

ツナ「シャ…シャル！」

ヴァリアー全「!!」

マーモン「ドライデント・シャル…噂では二世代前のヴァリアーにスカウトされ、それを断ったほどの男……」

シャル「つてわけで、オレこっちつくから。よろしくな、喪服の連中ーっ」

マーモン「へえ。シャルがあいつらとね」

美鈴「これ、喪服なの…？」

スクアーロ「ディーノにコロネロにシャル…。これほどの人材が何故集まる…」

美鈴「そりゃ、あっちにはリボンがいるからね」

ベル「ま、でもこの勝負楽しめそーじゃん」

チエルベツロ「それでは両者中央に来てください」

美鈴「お金と精神をかけてんだから勝ってよね」

ベル「いししし。あったり前じゃん。オレ、王子だから」

チエルベツロ「なお、今回のフィールドは広大なため、各部屋ごと

に取り付けたカメラで、校舎端の観覧席に勝負の様子を中継します」  
チエルベツロ「また、勝負が妨害されぬよう、観覧席とフィールドの間に赤外線レーザーを設置しました」

ツナ「！」

ベル「そー言えばお前って爆弾使うんだったよな。

あと、肩に力が入りすぎてんじゃねーの？（ポン）」

獄寺「（ぜってー負けらんね！たどえ鐘だとしてもな……！（ギツ）」↑睨

ベル「ししっ怖いねえ」

チエルベツロ「それでは嵐のリング　ベルフェゴールVS獄寺隼人

勝負開始！！」  
バトル

## 吹き荒れる疾風

獄寺「いくぜ!!（ピッ）」

ベル「導火線短かつ」

ドン

獄寺「（まずは様子見だぜ。さあどーする?）」

キラキラ

獄寺「な!!」

気づいたときにはナイフに囲まれていた。

カカカカ

獄寺「（そーだ。鐘はナイフを使ってたんだ）」

ベル「猪口才なことすんのやめとけって。誰相手にしてんのか分かってんの?」

シャマル「ヴァリアークオリティとはよく言ったもんだ。こりゃあ余裕ぶっこいてる暇はねーぞ」

獄寺「（……………!こうなりゃ出し惜しみは無しだ）」

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

獄寺「三倍ボム!!!」

ベル「ん」

バジル「アレが獄寺殿の新技っ!!」

ツナ「すごい! ついに三倍ボムを完成させたんだ!!」

美鈴「むー。アレは新技とか完成とかじゃなくって単純に持てるかどうかの話になると思うんだけど」

ベル「(ス...)」

ベルは、三倍ボムを見ても半歩後ろに下がっただけだった。

獄寺「(なぜよけねえ...)」

バリーン↑突風

獄寺「な!!!?」

ドドドドドンッ

獄寺「この風……あの機械か!!」

ベル「風には敏感なんだよね。嵐の守護者だから」

獄寺「くそっ!」

ガタガタガタ

バキヤツ↑突風

獄寺「めゃちゃくちゃだぜ!!」

ツナ「ランダムに突風が!」

フィン「これじゃあボムが使えなくて不利よ!」

リボーン「それはお互い様だぞ」

獄寺「(だがこの風じゃ…鐘のナイフもまともに飛びやしねー)」

ビュオオオオ

フ…

ヒュ…

獄寺「(うそだろ———!!!!) くっ」

ビビッ

バリーンッ

獄寺「つくしょー!!!!どーなってんだ!? まぐれか!?!」

ベル「王子にまぐれとかないから」



獄寺「!!」

ベル「死ぬほど簡単な話さ。吹き荒れる気流を読んで、目標ライン上にそっとナイフを添える」

獄寺「!？」

気流に乗せられたナイフは、的確に獄寺を傷つける。

ツナ「気流を読むなんて…そんなこと…」

シャル「不利だと思われる状況を逆に利用して、こんな人間離れたことをやってのけちゃうんだ……。認めざるをえないな。」

奴は本物の天才だ」

アナウンス〈三分経過しました〉

獄寺「（気流の流れを読むだと…？）」

ベル「嵐の守護者の使命って知ってる？

常に攻撃の核となり、休むことのない怒涛の嵐。

オレにはできるけど、お前にはムリだね」

獄寺「！」

シャル「何突っ立ってんだ。立ち止まるな隼人」

キラキラキラ

獄寺「！」

カカカカ

獄寺「くっ。ふざけやがって!!」

ビュビュッ

カカカッ

獄寺「くそっこれじゃあ攻撃に移れねえ!!」

レヴィ「スキのない流れるようなナイフ捌きで相手の攻撃を一切封じる」

マーモン「こんな風の中でこんなことができるのはベルぐらいだよ」

美鈴「なにを! 私だってできるぞ!」

スクアーロ「はんっ!」↑興味なさ気

カカカッ

獄寺「ちくしょう! 撃てねえ!!」

ベル「日本にいる間、殺しは姫に制限されてたからさ、おかげで思  
う存分楽しめるよ」

獄寺「（ここは一旦引くしかねえ。奴の攻撃の届かないところに！  
！）」

ドン

ベル「爆発に乗じて隠れたつもりかよ。かくれんぼ、だあゝい好き」

ゝ理科室ゝ

獄寺「あのナイフと正面向いてやりあうのは分が悪い。トラップ張  
って死角からチャンスをうかがうしか……」

ビュビュッ

スパンッ

獄寺「どっからきやがった！！！」

ツナ「鐘はまだ廊下にいるよ！！！」

バジル「では、相手が見えていないのに！？」

美鈴「分かってないなあ。どこにいても当たるのがベルのナイフだ  
よ」

ベル「オレ王子だからさ、お前らパチもんとは出来が違うんだよね」

ザクッ

獄寺「うぐっ」

ツナ「獄寺君!!」

獄寺「いってー!! なんだっ」

ベル「うしし、もう当たり? もっと楽しませてくれてもよかったんじゃない?

ま、いいや。怒濤のシメは針千本のサボテンにしてやるよ。

バイバイ(ビッ)

ツナ「ああ!!」

ビュッ

了平「いかん!」

ビュオッ

ドスドスッ

ツナ側全「!!!」

ドスドスドスドスドスドスドスドスドス

ベル「うししし♪サボテン一丁上がり」

ツナ「ご……！！獄寺君！！！！」

バリン

ベル「！！」

バジル「あ……あれは……」

ツ／了／山／フィ／美「もっくん！！！！」

その他全「もっくん??」

説明しよう。

もっくんとは、並中にある人体模型につけられた愛称なのである。

とはいっても、そう呼んでいたのはツナ・獄寺・山本・了平・美鈴・ベル・フィン・セシル・京子のみである。

ベル「もっくん……なるほど、身代わりね」

獄寺「コイツがテメーの技の正体だ」

ツナ「い……糸だ！！」

獄寺「テメーは勝負の前、肩を叩くのと同時に視認しにくいワイヤーをオレの肩に取り付けやがったんだ。ご丁寧に重量を感じねーよう、今日局部麻酔まで打ってな。そしてワイヤーを手繰り寄せ、そ

ここにナイフの突起を引っ掛けて投げる。ナイフは目標に当たる寸前までレールの上を端って飛んでくるって仕掛けだ。今回はもっくんに代わってもらったがな」

ツナ「そ…それでナイフが獄寺君に吸い込まれるように飛んだんだ」

シャマル「まるでモノレールだな」

ベル「頑張ってるけど五十点ってとこかな。つかお前こんなもんで得意になるのもいいけどさ」

ガタガタガタ

獄寺「!?!」

ゴッ↑突風

ベル「この風じゃなんもできないじゃん。なあ、どーする?」

獄寺「(す…)」

ツナ「ボ…ボム!で…でも」

ベル「それ、当たらないから」

シャマル「あたんねーボム当てるようにするために、ナンパ返上で付き合っただぜ。かつて天才の名をほしいがままにしたこのオレがな」

ツナ「え…!?!」

獄寺「果てろ!!!」

バジル「ダメです!また風の壁にぶつかる!」

ツナ「頭悪くて口あんぐり」

獄寺「(行け)」

バシッ

ベル「!」

ツナ「あれは!!!」

ドシユウ

美鈴「ボムが進む向きを変えた!?!」

ベル「!?!」

獄寺「オレが下手うって十代目に恥をかかすわけにはいかねーんだよ」

ベル「(汗)」

ドガガガッ

バジル「す…すごい……………今のは…」

ツナ「まさかこれも……新技……!?!」

シャマル「ロケットボム……コイツこそが六日間で奴がつかんだ技だ」

リボーン「方向転換するボムか」

シャマル「ああ。仕込んだ推進用の火薬の噴射であらかじめ決めた方向に二度変化する

(後略)」

ツナ「え!?! 説明してよ!」

詳しくはWeb……じゃなくて原作で★

ツナ「でもすごいよ獄寺君」

了平「やったのか?」

バジル「分かりませんが……直撃しました。大ダメージには違いありません」

リボーン「そーだな」

レヴィ「ベルの奴、無傷ではあるまい」

マーモン「その通り……アレが始まるね」

スクアード「おぞましいぜえ」



美鈴「にししししっ♪」

スパパ

ガラガラガラ

美鈴「本当の戦いはここから始まる」

シャマル「!!」

ベル「うしししし!! あああゝゝ流しちゃったよ、王族の血をゝゝゝ!!」

獄寺「!?! (何だコイツ・・・・・・?)」

マーモン「自分の血を見てから始まるのさ、プリンス・ザ・リツパーの本領は」

## 吹き荒れる疾風（後書き）

少々長くしておきました。

## 王子の覚醒

獄寺「……!!」

ベル「あゝはあゝあゝドクドクが止まんないよ」

獄寺「（どーなってやがる…!?!）」

ツナ「わ……笑ってるよ…!?!」

シャル「キレタな…」

スクアード「あいつの奇行、相変わらず理解できねーぜ」

マーモン「知らないのかい？ベルが自分の血を見て興奮するのは、自分の血に、血を分けた双子の兄の姿を見るからさ。」

彼は幼少の頃、双子の兄をめった刺しにして殺したらしい。その時のことを彼は何食わぬ顔で『ゴキブリと間違えたんだ』と言っていたよ。そしてその時、最高の快感を得ることができたとも――…

ベルが暗殺部隊ヴァリアーに入隊したのは、殺しの興奮を忘れなかったからだ。

あの表情、無邪気でむき出しの残虐性が蘇ってる」

ツナ「あれが……鐘なの…?」

美鈴「そーだ、沢田綱吉。これで、どうして私が、ベルをあらゆる戦闘において出さなかったか、分かるよね」

ツナ「え……?」

美鈴「何かの拍子でベルが怪我しちゃったら、全員あの世行きだからだよ。」

ま、それはそれで私的にはよかったんだけど、後で厄介なことになりそうだったからね。私、面倒事、嫌いだから♪」

ベル「血だよ~~~~王族の血だ~~~~」

獄寺「よくわかんねーが、糸は見破ったんだ。もうこの風人中、ロングレンジのナイフは来ねえ。一気に行くしかねーぜ。」

ロケットボム!!」

ドシュ

ベル「あ~~~~?」

バジル「! よけないのか……?」

獄寺「へっ。頭ん中にまでヤキがまわったか?」

ベル「ししっ」

シュツ      チツ

シュツ      チツ      チツ

ドガガガ

ベル「あゝはあ!!」

獄寺「!!」

ツナ「かわしたっ!?!」

リボーン「ただかわしたんじゃない。ムダがねえ」

シャル「あれほどの身のこなしとは…」

レヴィ「いよいよ奴らしくなってきたな」

マーモン「うむ。キレてこそベルの天賦の才は冴え渡る」

ダッ

ベル「ししっ」

ビュッ

くん

シュツシュツ

獄寺「（風の影響で狙いがデタラメだ。ビビることはないぜ!!）」

バシユッ

獄寺「なに!!」

ツナ「え!!?」

獄寺「どーなってんだよ!! ナイフには当たってねーぞ」

フィン「触らないで切るなんて、まるでかまいたちみたい…」

ベル「どがーん」

獄寺「!!」

ベル「血い」

獄寺「(ぞく…) や…やられる…!!」

つかよお!!」

ピン↑チビボム

ドンッ

獄寺「っで——っっ」

スクア—ロ「肉を切らせても骨を守る。いい判断だな爆弾小僧。だが」

シュッ

スパッ

獄寺「な!？」

ツナ「まさか…当たってなかったの!？」

はい。説明しよう。

獄寺がチビボムを投げた瞬間、あるものがチビボムの軌道を変えました。

そのあるものとは、小石。

とっさに美鈴が投げ、それがチビボムに当たって、ベルにはダメー  
ジが来ないようにしたのでした。

あ、どうやって投げたとか、どうやって届かせたとか聞かないでね？

ヴァリアークオリティですから。

因みにばれたら失格行為。

獄寺「くそ…っ。とにかくこの距離は不味い……」

ベル「待ちなよ」

ヒュッ

ブシュッ

獄寺「ぐっ（またナイフが当たってねーのに………!! どうすりゃいいんだ!?!）」

アナウンス「あと六分でハリケンタービンが爆発を開始します」

獄寺「時間もねーのかよ!! くっそお!!」

ビュビュッ

獄寺「こーなりゃ…!」

ダダッ

ベル「ん」

キキッ

ベル「ししし。またかくれんぼ?」

「図書室」

獄寺「さあ、来やがれ…」

思いつきりぶちこんでやるぜ」

ツナ「図書室には入り口があそこだけなんだ!」

美鈴「あいつ…。ベルとサシで勝負するつもり?」



マーモン「袋小路でベルと勝負なんて、自ら死を選ぶようなもんだよ」

ベル「しししっ」

ビュビュビュッ

バツ

獄寺「飛んだな！食らいやがれ！！」

ドシュッ

ベル「ニッ」

ヒュッ

スパ…

ツナ「ああ！！また当たってないのに…！！」

バジル「あんなことが…」

シャマル「……？」

獄寺「（今のはなんだ……おかしい…

切られた場所も…切り口の方向も

何かが不自然だ!!」

ベル「反撃開始いゝゝゝっ」

獄寺「!!」

ビシュッ

獄寺「ぐあっ」

タタッ

ブシュッ

獄寺「ま……まだだぜ……」

ベル「いーやっ（ビュッ）でっきあっがりゝゝゝゝっ」

カカカッ

獄寺「!!?（ピタ……）」

………」

バジル「獄寺殿、止まってはダメです!!」

ツナ「早く逃げないと!!」

マーモン「逃げないんじゃないのさ」

ツナ「!?!」

美鈴「にししっそゆこと♪」

モニターで見るのは難しいけど、あいつの周りには…

鋭利なワイヤーがはりめぐらされているのさ♪」

バジル「!?!」

ツナ「いつのまに!?!どーやって!?!」

シャル「やはりナイフだな」

リボーン「ああ」

ツナ「ナイフ…?」

リボーン「ナイフのケツにワイヤーが付けてあったんだ。これか  
まいたちの説明もつく」

シャル「うむ…これだけで二つの切断方が生まれる…

一つ目は投げて切る場合だ。

ナイフをよけたと思っててもその後で軌道がターゲット側  
に曲がれば、奴とナイフの間にあるワイヤーが内に切れ込み、切り  
つけられる。

二つ目は設置型…

壁にナイフを刺してワイヤーを張れば、そのまま見えな  
い切断機となる。図書室に入る前にナイフを投げ、隼人のボムを切  
ったのはこつちだ。

つまり奴は、吸い込まれるトリックといい、ただのナイ  
フ使いじゃなく、

ナイフとワイヤーの両刀遣いだったわけだ」

美鈴「さっすがヴァリアーにスカウトされただけあるね、シャマル。

ベルの技をそこまで見切っちゃうなんて」

マーモン「まんまと術中に嵌ったね。体技だけでなく策を張れるの  
もベルが天才たるゆえん」

ベル「しししっおっしまーい」

獄寺「お前がな…」

マーモン「？」

ツナ「!？」

チヂチヂチヂチヂチヂ

ツナ「ああ！」

バジル「こぼれた火薬が導火線のように!!」

シャマル「フン」

ドガガガガ

獄寺「たわんだ糸じゃ切れねーぜ」

ツナ「分かってたんだ獄寺君!!」

獄寺「そしてこのボムの行き先は」

ドシュ

獄寺「てめーのワイヤーに案内してもらうぜ!!」

シュルルルル

ベル「!!」

獄寺「これが嵐の守護者の怒濤の攻めだぜ」

ドガガガンッ

獄寺「これでダメ押しだぜ!!」

ドシュウウウウ

ドガガガガッ

バジル「決まった!!」

ツナ「すさまじい…!」

レヴィ「……………バカな……………」

マーモン「これだけ撃ち込まれれば、さしものベルも…」

スクアール「堕ちたな」

美鈴「……………」

シャマル「やーりやったな……。いいんじゃねーか？アイツが嵐の守護者で」

獄寺「……………終わったぜ」

チェルベツロ「いいえ。完成した嵐のリングを所持するまで、勝利と認められません」

チェルベツロ「二つのリングを手にし、嵐のリングを完成させてください」

獄寺「けっ。めんどくせー」

アナウンス「残り時間はあと三分です」

獄寺「（がくっ）!?!」

バジル「!」

ツナ「獄寺君!!」

獄寺「大丈夫っスよ十代目。リングを持ってすぐに戻りますから」

美鈴「……………まだだ」

ツナ「…え？」

美鈴「まだ終わっていない!」

ベル「あゝ…はあゝ…」

獄寺「!!」

ツナ「!!」

マ／ス「!!」

シャル「!」

ベル「勝つのオレっ!」

獄寺「ってめえ!!」

ガッ↑殴

獄寺「放せ!」

レヴィ「ベルの奴まだやれるのか?」

マーモン「いいや。恐らく彼を動かしているのは勝利への本能。負けを認めない王子の本能だ」

美鈴「クスッ。そんなもんだと思う？」

マーモン「む？」

美鈴「私達だってこの六年間ただ過ごしてたわけじゃない。ベルが暴走したらいけないからって、戦ってなかったわけじゃない。

この六年間、私たちは毎日殺し合いをしてたんだから！！

アハハハハハハハ！！！」

ツナ「（ぞくっ）悠…里？」

スクアール「このバカ、狂いやがった」

美鈴「バカ？バカはあんた達じゃないの？よく見てみなさいよ。

獄寺、押されてるよ？」

バジル「！！！」

獄寺「（くそっ！！血い流しすぎて目がかすんできやがった……！！）」

ツナ「獄寺君！！！」



チエルベツロ「……………そろそろ…」

チエルベツロ「(コクツ)」

チエルベツロ「間もなく、約束の時間です」

ピーピー

ドガガン

獄寺「!?!」

ツナ「な」

スクアーロ「お」

チエルベツロ「お話したとおり、勝負開始から十五分が経過しましたので、ハリケーンタービンの爆発が順次開始されました。図書室の推定爆破時刻はおよそ一分後です。なお、観覧席には爆発は及びません」

ドガガガンッ

ツナ「そ……っそんな……!! このままじゃ獄寺君が!」

リボーン「敵もろとも死にまうぞ」

了平「何をしているタコヘッド! 急がんか!」

獄寺「るせー! やってんだよ!」

どんっ

獄寺「ぐあ！」

シヤマル「いかん…出血とともに体力が落ちてる…このままではまずいぞ……」

ベル「リング〜」

チエルベツロ「十五秒経過。残り四十五秒です」

スクアーロ「チキンレースかぁ。面白くなってきたじゃねーか」

マーモン「美鈴、いいのかい？」

美鈴「ベルのこと？フフツ。ベルがくたばるとは思っではないけど、くたばったらそれはそれ。ベルが弱かったてことでしょ？」

ヴァリアーに弱い人は要らない。ベルであっても同じことだよ♪」

リボーン「ツナ、どーすんだ？」

ツナ「どーするって…」

シヤマル「やむをえんな。リングを敵に渡して引き上げろ隼人！！」

獄寺「！！」

ベル「あゝはあゝ」

バ／ツ「!!!」

シャマル「こんなもんでくたばるなんてバカげてる! 戻れ!」

獄寺「ふざけんな!」

ベル「あゝはあゝ」

獄寺「オレが負けてみろ! 一勝三敗じゃもう後がねえ!! 致命的敗北なんだよ!!」

シャマル「お前の相手はいかれちまってんだ! もはや勝負になっちゃいねえ! 戻るんだ!」

獄寺「手ぶらで戻れるかよ!! これで戻ったら十代目の右腕の名がすたるんだよ!!」

ツナ「! 獄寺君、そんなこと:!!」

ドガガン

獄寺「十代目! オレが勝てば流れは変わります! 任せてください、これくらいオレが……!!」

山本「獄寺!!」

了平「タコヘッド戻って来い!!」

フィン「獄寺君、戻って!!」

チェルベツロ「図書室まで、残り二十秒です」

シャル「隼人!! 修業に入る前に教えたことを忘れたのか!!」

獄寺「忘れるかよ...! だからこそ、一番の使い時で使うんじゃないかよ。ここは死んでも引き下がれねえ!!」

ツナ「ふざけるな!!」

獄寺「!!」

ツナ「何のために戦ってると思ってるんだよ!!」

獄寺「!!」

ツナ「また皆で雪合戦するんだ!! 花火見るんだ!! だから戦うんだ!! だから強くなるんだ!! また皆で笑いたいのになら君が死んだら意味がないじゃないか!!」

リボーン「.....」

ツナ「獄寺君、分かってるの? 君がいなくなったら悲しむ人が居る

んだよ!! もう二度と、悠里や鐘と笑う日が来なくなるんだよ!!  
それでもいいの!？」

美鈴「!!」

獄寺「……………十代目」

ピ—————ッ

ドガガンッ

ザ————…

ツナ「獄寺君…獄寺君!!」

山本「獄寺!!」

シャマル「……………あのバカ…」

ツナ「そ…そんな…うそ…」

バジル「くっ」

ツナ「そんなことって…なんで…獄寺君…（へたっ）」

リボーン「……………! あそこみろ」

ツナ「?」

リボーンが指した先。煙の中から姿を現したのは、獄寺だった。

獄寺「すみません十代目。リング取られるってのに……

花火見たさに戻ってきちまりました」

ツナ「うん。よかった……」

獄寺「な！オレ負けてんスよ？手ぶらで戻ってきたんですよ！？」

フィン「ううん。手ぶらじゃないよ。獄寺君は、ちゃんと自分の命を持ち帰ってきた」

獄寺「……！！」

美鈴「リング……」

にししっリング回収に行こーっと♪」

タッ

美鈴「ベール、ベール、どこかなっ♪」

テテッ

美鈴「あ、みっけ。

ベールくんっ生きてますー？」

ベル「しししっ

リング アイムウィナー」

美鈴「……なんか微妙に元気そうだな……」

ベル「ひ……め。王子ちゃんと約束果たしたからな……」

ししっ」

美鈴「……！」

にしし、ベルったらバカ正直で変なの。

ご褒美に、傷直してあげるから、大人しく寝てな」

ベル「姫のくせに生意気なの……（くたっ）」

美鈴「………（ま、生きてたんだし、よしとするか）」

美鈴がベルの体にかざすと、ベルの体の周りが淡く光りだした。

所変わって皆のそこ。

チエルベツロ「嵐のリングはベルフェゴールの物となりましたので、この勝負の勝者はベルフェゴールとします」

スクアアロ「うゝおゝおい、笑える結末だったなあ。これでいよいよ貴様等の命は風前の灯だあ」

了平「くっ」

マーモン「それに、まだ君達の霧と雲のリング保持者は現れないじゃないか。出場者がいなくて不戦勝、なんてオチじゃないだろうね」

チエルベツロ「それでは、次の対戦カードを発表します。次の対戦は……」



## 王子の覚醒（後書き）

フィンのモデルの奴がこの小説読んだとき、「私こんなキャラじゃないよ」と突っ込んできた。

そりゃそうだ。お前であってお前じゃないんだから。

でもどっちかって言うと、私から見たそいつなんだよなあ。

## 星と望

くヴァリアーアジトく

ベル「ひーめっ。何してんの？」

美鈴「いる場所から考えようか？」

→屋根の上

美鈴「私がここに来るってことは星を見に来てるの」

ベル「明日のバトル、緊張してんの？」

美鈴「まっさか！

……でも、私まで戦うことになるとはね」

Ⅱ回想Ⅱ

チエルベツロ「それでは次の対戦カードを発表します。次の対戦は……」

フィン「ちょっと待って！」

チエルベツロ「……何でしょうか」

フィン「話があるので、美鈴が来るまで待ってくれませんか？」

チエルベツロ「用とは何でしょうか？」

フィン「揃ったら話します…」

ツナ「フィンちゃん？」

タツ

美鈴「おまたせー」

マーモン「随分と遅かったね」

美鈴「にしし。ごめんよ。」

でもその代わり、ベルは無傷になったから勘弁してちょ

マーモン「!？」

ベル「そゆこと♪」

獄寺「な!？」

ツナ「傷が全部……治ってる!？」

フィン「……………」

チエルベツロ「それでは全員揃いましたので」

美鈴「ん？」

フィン「私を…戦わせてください」

全「!?!?」

チエルベツロ「しかし、守護者以外の戦闘は認められていません」

フィン「分かっています!でも…美鈴に話があるんです」

チエルベツロ「話なら個人的にしてもらえると幸いです」

ツナ「フィンちゃん、一体どーゆー…」

フィン「公の場で、ここにいる全員に知ってもらいたい」

チエルベツロ「……分かりました。では、明晩の対戦はボーナスバトルとし、五月氏とフィノーレの勝負<sup>バトル</sup>とします」

美鈴「(何を考えてるんだか…)」

チエルベツロ「それではお二方には、最も大切なリングを持参してきてもらいます」

フィン「リングを？」

美鈴「どうして？」

チエルベツロ「これはリング争奪戦の一環として行う物。よってリングが必要とされるのです」

美鈴「なーる」

バッ

？「失礼する！」

雷撃隊「レヴィ隊長！！校内に何者かが侵入しました。雷撃隊が次々とやられています！！」

レヴィ「！ おのれ！何者だ！！」

マーモン「どんなハエが来るのか楽しみだね」

スクアーロ「うゝおゝおい！！」

美鈴「一人しか思い当たらないのはどして？」

ベル「ぜってーにアイツだよな」

ツナ「あいつ！？」

雷撃隊「ぐああっ」

どしやっ

ツナ「！！ ヒバリさん！！」

美鈴「やっぱし恭弥だ（あちゃー）」

雲雀「校内への不法侵入及び校舎の破損。連帯責任でここにいる全員咬み殺すから」

獄寺「なっオレ達もかよ！」

ツナ「あの人校舎壊されたことに怒ってるだけだ——！！！」

山本「おいつ、本当に学校好きなのな」

フィン「咬み殺されるのは勘弁！」

マーモン「むむ…あいつが雲雀恭弥」

レヴィ「よくも…オレの部下を潰してくれたな」

チェルベツロ「あなたは沢田氏側のリング保持者ですか？でしたらこのような行為をされては…」

レヴィ「どけチェルベツロ。奴はただの不法侵入者だ！！！」

美鈴「元風紀委員の立場として言うけど、不法侵入者はあたし等だよ」

ガッ↑足掛け

雲雀「まずは君から咬み殺そうか」

レヴィ「なに！？」

シャマル「おーおーかっこいいねー」

獄寺「あのバカ、出てくるなりメチャクチャしやがって」

ツナ「でもやっぱりすごいよ。ヴァリアーの攻撃をいとも簡単に」

山本「ああ。さすがだな」

バジル「できる…！何者なんですか？」

リボーン「奴はウチの雲のリングの守護者にして並風紀委員長、雲雀恭弥だ」

スクアール「てめーら、奴をどう思う」

マーモン「確かにレヴィはヴァリアーでも鈍重なうえに故障しているが、それを差し引いてもなかなかの身のこなしだね」

美鈴「そお？だってレヴィって幹部内最弱だし、恭弥だってただ足掛けただけ」

ベル「ま、あんなキモイおっさんからしたら難しいのかもな♪」

レヴィ「貴様ら！さりげなくオレをバカにするな！」

美／べ「全然さりげなくない」

スクアール「うゝおゝおい！！貴様、何枚におろして欲しい！！」

雲雀「ふうん。次は君？」

チェルベツロ「おやめください。守護者の場外での乱闘は失格となります」

了平「なに!!」

ツナ「やばいよ!」

美鈴「まーまー。落ち着こうじゃないか、恭弥」

雲雀「悠里、何してんの?それとも、美鈴と呼ぼうか?」

美鈴「!!　なんで私の名前を……!!?」

ツナ「そーだ。オレ達が悠里の本名を知ったのってヒバリさんのおかげだった」

マーモン「いつばらしたんだい?」

美鈴「ばらした覚えはないけどなあ」

雲雀「小さいころはもっと純粹だったのにね」

美鈴「オイ貴様!知らないくせに何を言う!!」

ベル「んー?姫と雲雀って学校以外で接点あったっけ?」

美鈴「とにかく、とにかくだ。落ち着いてもらわないと困る」

雲雀「ふうん。じゃあ、咬み殺されてくれるなら、ね」

ツナ「んなー!」



美鈴「待てっつーの！全部終わったら相手してあげるからさ」

雲雀「ホント？それじゃ、その日を楽しみにしてるよ」

ツナ「（ほっ）」

雲雀「校舎の破損は完全に直るの？」

チエルベツロ「はい。我々が責任を持って」

雲雀「そう……。美鈴、約束守ってね」

美鈴「はいはいーい。じゃねー（ニコニコ）」

ツナ「あのひばりさんが……。戦いをやめた」

リボーン「それほど悠里とのバトルは大切ってことなんだな」

獄寺「悠里とヒバリって仲がいいのか悪いのか……」

ツナ「謎が多いって言うか……」

山本「怪しいのな」

獄／ツ／山「……………」

フィン「三人のほうが謎だと思うよ。美鈴のことになると何かと反応してさ」

獄／ツ／山「……………」

美鈴「あー私なんかした？」

マーモン「さあね」

美鈴「ま、いっか。明日楽しみにしてるよ。じゃあね」

バツ

||了||

美鈴「アイツ、そんなに自信あるのかな？」

ベル「さーな。けどよかったんじゃないの？どーせ、戦いたいって思ってたんだろ？」

美鈴「まあね。いやーそれにしてもキレーな空だなー（リング…か。あのリングを公にはしたくなかったけど、仕方ないか）」

く数時間前。っていうか、ヴァリアーが帰ったあとく

ツナ「ふう、帰ってくれた」

獄寺「ヒバリが来たときはどーなるかと思ったぜ」

了平「うむ」

リボーン「だが、ヒバリが仲間に加わるとなると強いぞ」

フィン「なんてったって並盛最強の風紀委員長だもんね！」

獄寺「ま、それより強いのが悠里だけだな」

フィン「うっ…」

ツナ「フィンちゃんどーしてあんなことを…」

っていうか獄寺君治療しなきゃ！」

獄寺「これくらいかすり傷っス」

バジル「！ Dr. シャマルに診てもらってはとうですか？」

シャマル「オレ、男はみねーから。バイビ〜」

バジル「えゝ！！？」

ツナ「あーゆー人なんだよ」

？「しよーがねーなー。ロマーリオ、代わりに診てやってくれ」

ツナ「！ この声…」

ディーノ「よっ」

ツナ「ディーノさん！」

ディーノ「ヴァリアーと入れ違いになったみてーだな」

獄寺「今頃何しにきやがったんだ？」

ディーノ「ようやく奴について調べがついたんでな」

全員「!!」

ディーノ「悠里は本名を五月美鈴。八年前に六歳で入隊し、その時には既に幹部の座が用意されていたつわものだ」

ツナ「ろ、六歳!？」

ディーノ「しかも奴は入隊に必要な条件を全くクリアしていなかったのにも関わらず、入隊試験——つまりは戦闘試験だ——をクリアして入隊したんだ」

山本「条件って何スか？」

リボーン「ヴァリアーに入隊する際にアンケートをとるんだ。戦闘経験や、武器についてなどな」

獄寺「ですが、前に聞いたとき、いつも戦闘(?)してたとかって言っていましたよね」

ツナ「確かに」

ディーノ「それがな、違うんだ」

獄寺「違うって何がだよ」

ディーノ「あいつの家は至って平凡な家族だ。マフィアなんてこれ

っぽっちもカンケーねーんだ。しかも生粋の日本人だ」

獄／リ「!?!? なんだと!」

ディーノ「マフィアではないが、少し特殊でな、他の家よりも裕福だったらしい。

だが、ある日突然あいつはいじめを受けた。最初は幼稚園のクラスメイトだったらしく、あまり気にせずに暮らしていたんだが、そのうちいつの間にか家族を含む町の奴全員からの総攻撃となった」

ツナ「な!」

ディーノ「イジメに耐え続けて一年、ついに奴は反撃に出た。家族、友達、クラスメイト。見境なく次々と町の人間を自らの手で殺していった。それが奴の六歳の誕生日らしい。

最終的に町を焼き、生き残りはゼロ。これが八年前に起きた、町焼失事件の真相だ」

獄寺「アイツが…自らの手で町を……」

ツナ「悠里が言ってた、“戦わざるを得ない状況”ってこういうことだったんだね」

ディーノ「そしてイタリアに逃亡し、森で倒れているところを拾ったのがヴァリアーってワケだ」

フィン「美鈴は、ウソをついてたってこと?」

リボーン「そーなるな」

ツナ「でも、あのときの悠里、ウソをついてる感じじゃなかった。言いたくない物を何とか思い出しながらって感じで、辛そうだった気がする」

獄寺「なんか、しっくりこねーな…」

ディーノ「六歳で裏社会に入り込んだあいつは、恐るべきスピードで名を上げ、半年後には既に通り名があった」

リボーン「なんて言うんだ？」

ディーノ「プリンス・サングエ・マツキアート」

リボーン「血に染まりし姫…か」

ディーノ「ミッションにいけば服は血にまみれ、まるでゲームのよう楽しめるながら人を殺していく。無邪気に笑うその笑顔は、心から楽しんでる笑顔らしい」

ツナ「姫っていうのは？」

ディーノ「ベルフェゴールと共に行動しているからだとか、姫のよう  
うに気高いだとか諸説ある」

獄寺「そんなスゲー奴なのになんで今まで正体がつかめなかったんだ？」

ディーノ「XANXUSだ」

全「え？」

ディーノ「XANXUSが美鈴の入隊を本部に報告しなかったんだ。それに、奴と接触した人間は、ヴァリアー以外は皆殺されていて、正体をつかむのが更に難しくなっていたんだ」

リボーン「その割には細かく調べてあるじゃねーか」

ディーノ「匿名の情報があつたんだ。ヴァリアーに入る前の美鈴を知っている人物と、入隊後の美鈴を知っている人物、最低二人からのな。」

ま、入隊後の情報が、オッタビオって奴からってのはわかつたんだけどな」

リボーン「そーいえばの話だが、ツナたちが久々に悠里とあつた日の前日、あの町が再び燃えたんだ」

全「!！」

ツナ「あの町って、さっき言ってた？」

リボーン「ああ。火が上がる前後、黒服に身を包んだ栗髪の少女が目撃されている」

フィン「美鈴のこと？」

リボーン「恐らくな。何のためかはしらねーが」

ツナ「ねえフィンちゃん。そうしてあんなことを言ったの？」

フィン「言ったでしょ。皆に知ってもらいたいことがあるから。」

“ 皐月魅麗 ” に関してね」



## ボーナスバトル当日！

スクアール「うゝおゝおい！！美鈴はどこにいるんだあ！」

ベル「姫ーどこだー？」

マーモン「美鈴、隠れてないで出てきたらどうだい？」

レヴィ「……………」

朝から響くヴァリアーの声。

それもそのはずで美鈴を探していた。

今日は美鈴の戦いだと言うのに、朝から美鈴の姿がなかった。

こんな置手紙を置いて。

『プチ家出じゃあ！探すんじゃねえぞゴルァ！！』

見つけ出した奴はぶっ殺す（ニコッ）

ま、見つけようにも私は私じゃないから見つけられないだろうけどね♪

リング戦には出席するから心配すんな！！

んじゃな♪ by美鈴』

と言うことです。

全「美鈴（姫）どこだー!!」

一方、美鈴側。

美鈴<sup>ネコ</sup>「（にししっ♪まさか私がこの姿になっ<sup>ネコ</sup>てるとは思わないですよ。

我ながらいいアイディア♪」

ガヤガヤ

美鈴<sup>ネコ</sup>「ん？何か向こうが騒がしいな。いっちょ行ってみるか」

タタッ

ツナ「フィンちゃん、考え直して！いくらなんでも無茶すぎる！」

フィン「無茶じゃない！私は皆を守るために来たんだよ？それなのに見てるだけなんて……！」

それに急がないと魅麗が……ッッ」

リボーン「落ち着けフィン。お前の言っている“魅麗”ってのは一体誰なんだ？」

フィン「ダメなの…まだ言えない…」

お願いツナ、修行を続けさせて」

ツナ「でも…」

フィン「はやくっ!」

ツナ「うん。分かった。リボーン頼む」

リボーン「ちっ。わかった」

ズガンッ

ボウッ

超ツナ「いくぞフィン」

フィン「うん」

美鈴<sup>ネコ</sup>「(アイツ、あんなボロボロになってまで修行を…!?)

何がアイツをそこまで…

って、ここで覗き見しちゃったら今日のお楽しみなくなる  
じゃん!!

……………む…陰に隠れて声だけを聞いてくか」

ササッ

…数分後…

フィン「ハア…ハア…」

超ツナ「フィン、もうやめよう。これ以上は意味がない。ただお前が傷つくだけだ」

フィン「やめないで！お願いだから…！」

超ツナ「だがもうボロボロじゃないか！！続けることはできない！！」

リボーン「そうだぞフィン。今のお前がツナと修行してもただ疲労し、バトルで力が出せなくなるだけだ」

フィン「……私じゃ力不足なの…？足手まといなの…？」

たった一人の親友を守ることもできないの…！！？」

シュウウウ

ツナ「親友？守るってどーゆーこと？」

フィン「美鈴は…魅麗は…私の親友なの…。二度と会はずのなかつた……たった一人の…」

美鈴<sup>ネコ</sup>「…！？（どういうこと？美鈴<sup>わたし</sup>とフィン<sup>あいつ</sup>は何の接点もないはず…

会ったとしても学校が初対面のはず…）」

リボーン「詳しく教えろ」

フィン「ダメ…その話は今日の勝負でね？」

だからそれまで待って…？」

ツナ「フィンちゃん……」

美鈴<sup>ネコ</sup>「……………（今日の勝負、大丈夫かな…？自我を保っていられるといいな。あいつが出てこないように）」

こうして並盛は夜を迎えた。

ち・な・み・に。

くヴァリアーアジトく

美鈴<sup>ネコ</sup>「ミヤくん」

スクアール「あゝあ？なんだあのネコ」

レヴィ「ぬ…妖艶だ」

スクアール「うゝおゝおいてめえ、ネコに恋するとかキモイんだよお」

レヴィ「なぬ！？貴様……！」

マーモン「む…入り口で何を騒いでるのさ」

レヴィ「このネコがだな…」

マーモン「む、そのネコ」

ベル「あ、姫みつけ」

ス／レ「は？」

ベル「覚えてねーの？このネコ、八年前以来じゃん♪」

スクアール「言われてみれば…」

レヴィ「見覚えが…」

美鈴<sup>ネコ</sup>「ニャーゴロゴロゴロ（V≡）★」

マーモン「美鈴、ふざけてないでさっさと戻りなよ。（バサッ）」

シュルルル

美鈴「みー。マーモンのバカ、イジワル、チビ、強欲」

マーモン「フン。何を言っても僕は動じないからね」

美鈴「むむむむむゝゝゝ！！」

こんのマーモンのほったムニムニめゝゝゝ！！！！！」

バフツ↑ほっぺ潰し

マーモン「ムギヤ」

美鈴「べーだべーだべーっだ！！！！」

ダッ

ベル「姫……どんだけマーモンに悪態ついてんだし」

スクアーロ「お前、あいつに何かしたか？」

マーモン「してるわけがないだろ」

ベル「の割にはスンゲー怒ってるけど」

マーモン「ムムツ。よく分からないが、バトルに行く前に謝りに行くとするよ」

スクアーロ「そうしておけえ」

バトルの前に謝ってくださいよマーモン

（美鈴の部屋）

コンコン

マーモン「美鈴？入るよ」

ガチャッ

美鈴「美鈴ちゃんキーク！！！」

ドスッ

マーモン「ムギャッ」

どさっ

マーモン「何のつもりだい？」

美鈴「何のつもり？フン、手紙読まなかったの？」

私を見つけたらぶっ殺すって言ったよね？」

マーモン「ム、見つけたものにも、君の方から帰ってきたんだろ？」

美鈴「うるさいうるさい！」

マーモンなんてほったムニムニしてやるんだから！！」



ぶぎゅ

マーモン「むぐぐ……」

そもそも見つけたのが僕じゃなかったらこれはできない  
と思うけど」

美鈴「（ピタッ）むむむ…

ベルだったら半殺し

スクアーロだったら三分の二殺し

レヴィだったら本殺し

ボスだったら素直に謝る」

マーモン「……………（呆／汗）」

美鈴「ま、いっか。あーもう色々とメンドクなった。

お先に行ってまーす（パサ）」

シュルルル

美鈴<sup>ネコ</sup>「みゃーん♪」

タッ

マーモン「……………これ、僕が来なくてもよかったんじゃない？」

バトルの前に謝ってくださいよマーモン（後書き）

短！？

なんですかこのあってもなくても変わらないような話！！

メツチャいらねー！？

## ボーナスバトル？幕開け

ツナ「あ~~~~とうとう勝負<sup>バトル</sup>の時間になっちゃったよ~~~~」

フィン「全くツナったら、そんなに心配しなくてもいいのに」

ツナ「心配だよ！いくら修行したって言ってもフィンちゃんが勝てるような相手じゃないと思うって！」

リボーン「ま、フィンにもワケがあんだろ。とりあえずはファミリーを信じてしたいようにさせてやれ」

フィン「ふふっ。ありがとう」

〜並中〜

ツナ「あ、あれ？ヴァリアーの人まだ来てないのかな……？」

？「いいえ既にお待ちです」

ツナ「あ、チエルベツロ！」

フィン「お待ちです……っていなくない？」

美鈴<sup>ネコ</sup>「いるよアホタレ」

ツナ「わっネコが喋った!?!」

美鈴<sup>ネコ</sup>「ただのネコじゃないよん♪」

シュルルル

ツナ「ネコが人になった!?!」

フィン「アニメーガス……?」

美鈴「にしし♪」

チエルベツロ「今宵のフィールドは校内プールとさせていただきます」

ツナ「校内プール? そんなのうちの学校にあったっけ?」

フィン「あったよ。私、毎日泳いでるからね」↑水泳部だったりする

美鈴「ふくん。それってどこにあるの? 意外と私知んないからさ連れてって」

チエルベツロ「こちらです(バッ)」

美鈴「んじゃ、プールで待ってるよ♪(バッ)」

? 「遅れてスマンな!」

ツ／フィ／バ「?」

了平「こいつを連れてきたんでな」

? 「~~~~~!」↑包帯人間

ツナ「ファラオ——ッ!!!!」

? 「(フガフガ) ち……違うっス! オレっス!! (ファラオ……)」

獄寺「ロマーリオのおっさんが『これが男の治療だ』とかぬかして大雑把に包帯巻きつけやがったんスよ!」

ツナ「ご……獄寺君!? (ガーン)」

怪我、大丈夫なの?」

了平「安静が必要なのだがどーしても行くと言うので手を貸したんだ」

獄寺「借りてねーよ! 勝手についてきたんだろ!!」

いくら勝敗がカウントされねーつつつても、勝負の行方も知らずに殺られたらたまねーからな」

フィン「全然大丈夫だよ。心配ナッシング♪」

獄寺「てめーお気楽すぎんだよ!」

さ——いきましょ……うっ (ぼたっ)」

ツナ「獄寺君!!」

バジル「大丈夫ですか獄寺殿!」

リボーン「やっぱコイツバカだな…」

くプールく

美鈴「……さっさと来なさいよ。私は短気なの——っ！」

バツ

ベル「だったらこんな早くにこなきや良かったんじゃねーの？」

美鈴「む、ベル…」

マーモン「ベルの言う通りさ。散々僕の悪口を言って飛び出してっ  
たんだ。待つのが普通だよ」

美鈴「マーモンまで……」

フィン「美鈴！来たよ！」

美鈴「はあ。やっと来たね。待ちくたびれちゃった」

待ちくたびれたぜ』

山本「何だ今の？」

獄寺「あいつの声と同時に男の声が聞こえたぜ」

美鈴「ゴチャゴチャうるさいなあ。さっさと始めようよ」

『ゴチャゴチャうるせえなあ。さっさと始めようぜ』

チェルベツロ「それでは両者揃いましたので、リングを提示しても

らいます」

フィン「はい。私が持ってるリングってこれしかないから。

あ、お母さんの形見だから大事に扱ってね？」

チエルベツロ「確かに確認しました」

チエルベツロ「五月氏もリングを」

美鈴「ん。私もちょー大事なリングだからさ、」

チエルベツロ「確かに確認……！？」

リボーン「？　どーした？」

美鈴「何か不都合でもあった？」

チエルベツロ「いえ。それでは、守護者戦同様リングは首からさげてもらいます」

チエルベツロ「観覧される方はプールサイドの外に出てください。

フィールドはプールサイドから内側全体のみ。万が一プールサイドからはみ出すようなことがあれば赤外線レーザーが感知し、圧縮粒子砲が放たれます。なお、はみ出しても失格にはなりません」

美鈴「狭すぎね？」



フィン「べっつに構わないよ。水は私の領域だからね」  
フィールド

獄寺「意味わかんねーし」

チェルベツロ「それではボーナスバトル  
五月美鈴VSアメイラ・  
C・フィノーレ

勝負開始!  
バトル

## ボーナスバトル？美鈴VSフィン

チエルベツロ「ボーナスバトル 五月美鈴VSアメイラ・C・フィン  
ノーレ

バトル  
勝負開始！！」

美鈴「さ、修行の成果とやらを見せてもらおうか」

フィン「ええ。まずは手始めに（シュッ）」↑ナイフ

美鈴「（ヒョイツ）ナイフだなんて、ベルのパクリじゃん」

フィン「無駄口叩いてると（シュッ）怪我するよ」

美鈴「怪我するのはどっちだよ！」

キーン

美鈴「私にだって飛び道具があるんだよ（シュッ）」↑手裏剣

フィン「お互い様ってことね！」

キーン

ツナ「……大丈夫だよね」

リボーン「まあ見てろ」

フィン「じゃあ行くよ、ナイフ二十連！」

ビュビュビュッ

美鈴「舐めないでね。こんなのよけるまでもない（シュッ）」

キキキキン

美鈴「こんなの遊びにもな「百連！！」ならないっての。

破道の三十一 赤火砲！！」

ドオオン

獄寺「何だあの技…」

フィン「ナイフは効かないみたいね。それじゃあ次」

ジュッ

ツナ「アレはダイナマイト！？」

美鈴「アンタの修行ってのは人の技を盗むこと？」

フィン「二倍ボム！」

ドシュッ

美鈴「にしし♪（ダッ）」

バジル「自らボムの中に？」

チッ　チッ

ドガアン

美鈴「やっほーい♪」

山本「よけたぜ！」

美鈴「さあ、その血を献上しな（ビッ）」

スパッ

フィン「くっ」

ツナ「ああ！」

美鈴「隙だらけだね」

ドカツ↑蹴

フィン「がは…っ」

ドオンッ

ツナ「フィンちゃん！やっぱりムリだって！」

フィン「ムリかどうかなんて、まだ分からないよ」

タッ

美鈴「甘い」

タッ

フィン「(かかった)」

ピ…ン

美鈴「？」

カッ

マーモン「ムムツ、これは閃光弾」

美鈴「(ちっ。前が見えない…)」

デデデ

美鈴「！」

ドガァン

美鈴「がつ」

ツナ「当たった！」

ジャボン↑into水

フィン「ゴメンね美鈴。ここまでするつもりはなかったけど」

ピチョン↑謎の薬

美鈴「！　ゴボツ」

（息ができない…！？）

ベル「何入れたの？」

フィン「これは麻痺薬。たった一滴で人の活動をとめることができるの」

ツナ「活動？」

フィン「そう。さあ美鈴、これもあなたのためなんだからね？」

？「ほう。殺すことがその人のためってか」

フィン「誰！？」

……………まさか、そんな…！！」

獄寺「な！？」

美鈴「そのレベルで私を殺せると思ったら大間違いだよ」

フィン「いつの間に…どーやって！？」

美鈴「話は簡単。さっきプールの中で溺れた私は幻覚。偽物ってこと」

フィン「いつから幻覚だったの？」

美鈴「最初っから。」

それじゃ、データ分析始めまーす」

ツナ「データ分析？」

マーモン「美鈴は戦いの中で敵を観察し、データとして分析する。それによって相手の弱点などを見出すのさ」

美鈴「まずはナイフ。時速五十キロ・ナイフの質Dランク・手入れ度二十％・コントロール三十％

あと、そのナイフ、デザインがダサい」

ツナ「な!？」

フィン「ちよっ それどーでも良くない!？」

美鈴「続いてダイナマイト。」

瞬間時速は三十キロ・手入れ度九十五％・コントロール四十  
二％

っていうか、このボムって獄寺のじゃん」

獄寺「オレのボムも分析してあんのかよ!？」

美鈴「それと、誰が造ったのか知らないけど、その麻痺薬、上物だよ。羨ましいな」

フィン「あげないよ。これは私のファミリーが作ったんだから」

リボーン「ナチスファミリーは技術面で支えているらしいな」

美鈴「ま、いっか。なあアメイラ。あんた、自分で何回攻撃してきたか覚えてる？」

フィン「何よいきなり」

美鈴「答えは百五十。もし仮に、全く同じ数だけ同時に攻撃を受けたらどうなる？」

バジル「同時? 一体どういうことだ?」

フィン「な、何が言いたいだよ」

美鈴「にししっ。それではショーを始めようか」

右手が前に出される。するとどこからともなく手裏剣が現れ、宙に浮いた。

ツナ「なっ! どーなってんの!？」



獄寺「これも幻覚か？」

マーマン「いいや、これが現実だよ。彼女には僕達でさえ知らない力が沢山あるからね」

美鈴「そゆこと。」

I t、s s h o w t i m e ♪」

ビュッ      ビュッ

ツナ「ああっ！まずいよ！！」

了平「まるで手品のようだ」

ヒュンヒュンヒュン

美鈴「ばいばい♪」

ヒュ…ン

ガキイイン

美鈴「!？」

ベ／マ「?」

ツナ「えっ?何?何が起こったの?？」

美鈴「…………手裏剣が全部はじかれた?」

ブウン…

美鈴「…なにそれ」

フィン「あーあ。こんなタイミングで出さなきゃいけないなんて。

これが私の本当の武器。私の本命はこのブーメランなの」

ブオン      ブオン

フィン「さあ、よけてみな!!」

ブウンっ

美鈴「回転数2・5回／秒・スピード3・7m／秒・角度58°。  
折り返し地点は……」

ここだ」

ガシッ

ツナ「と、とった!」

獄寺「すげえ……」

リボーン「あの動体視力、伊達じゃねえな」

ポタ…ポタ…

ベル「ん？血が出てる」

フィン「当たり前でしょ。だってそのブーメラン、刃が全部刃にな  
ってるんだよ」

美鈴「そんなこと、私が知らずに取ったと思う？」

フィン「！」

美鈴「物心ついたときから人を殺してたせいかもしれないけど、私  
は血を浴びるのが好きでね。誰のでも構わない。だから……」

全「（ぞくっ）」

美鈴「私のために血を流しな！」

ブウン

フィン「ちよっそれ私のブーメランなんだけど……！」

ザシュッ

フィン「うぐっ」

ツナ「フィンちゃん！」

フィン「……くっ。こうなれば……ッ」

パチン

フィン「Mein Diener, versammeln  
sich jetzt hier!」

全「!？」

ザザッ

ナチス「フィノーレ様ご無事ですか!？」

ベル「誰こいつ等」

フィン「この人たちは私の部下達。もしものことを想定して待っていてもらったの」

チエルベツロ「フィールド内への部外者の侵入は認められています。引かなければフィノーレを失格とし「別に構わないよチエルベツロ」!？」

美鈴「部外者は殺すまで。ごみは掃除しないとね★」

チエルベツロ「分かりました」

フィン「甘いな♪ここにいるのはみんなファミリーの精鋭部隊、つまりは私達幹部の次に強い人たちなの。それが五十人。手を出せるはずがないわ」

美鈴「そっちこそ甘い。私はヴァリアーだよ！

『さあゴミ共、かかって来い!』

チャキッ↑短刀2本

リボーン「アイツ、刀も使うのか!」

ナチス「かかれえ!! (ダッ)」

美鈴「にしししししっ♪..

ザクツ      ザシュツ

ブシャアアア

美鈴「キャハハハハハハ!」

ディーノ「これがプリンセス・サングエ・マツキアートの実体か…」

マーモン「無駄のない姫のような流れる動き、必ず血でぬれる服。それこそ

プリンセス・サングエ・マツキアート  
血に染まりし姫」

スクアーロ「アイツに取っちゃ殺しはゲームだ。如何に多くの人間をグロテスクに殺すか」

ドシュツ

美鈴「さうつてと、ゴミ掃除かんりよー♪」

プールは一面血の海となっていた。

フィン「あ…ああ……ウソでしょ?？」

美鈴「後はアンタだけだよ、アメイラ」

フィン「ひっ…いや……ッッ

……なんてね」

ポロロン

美鈴「!？ うっ…何だこれ…頭が、割れそうだ…ッ！」

フィン「(スクッ) さあ、本番はここからだよ」

## ボーナスバトル？形見箱

美鈴「うあ…っ何これ…ッ」

フィン「形見箱って知ってる？」

美鈴「形見…箱……？」

リボーン「聞いたことがある。何か箱に自分の人生をあらわす思い出の品を入れる。それを死ぬまで続けることで、その箱一つでその人物の人生を知ることができる」

フィン「そう。その人の人生を箱につめた物が形見箱。魅麗も自分の人生を形見箱として残したの」

美鈴「だから…何ッ!？」

マーモン「それがその箱ってことかい？」

フィン「そういうこと。魅麗はこの箱に人生をつめた。」

それも特殊な方法だね」

ツナ「特殊？」

フィン「形見箱は本来、思い出の品を入れるもの。でもね、魅麗は品ではなく記憶をつめた。このオルゴールにね」

獄寺「記憶をつめるだど？そんなことが」



リボーン「できる奴はできるぞ。それに記憶をつめると言っても、持ち主の魂が移って自然と記憶がしまわれるパターンもある」

フィン「だから、このオルゴールを開けば魅麗の記憶を知ることができる」

ツナ「それじゃあ、フィンちゃんがこのバトルを望んだのって…」

フィン「皆に、特に美鈴にこの記憶を見てもらうため。」

何が何でも思い出してもらうよ、美鈴」

美鈴「何が言いたいのか？私とその魅麗が同一人物だとしても？あり得ない！それじゃあ、もし仮に私が魅麗だとしたら、あなたは何か？」

フィン「それは全部この形見箱が教えてくれる。魅麗の全てを」

マーモン「興味深いね」

フィン「フフッ。じゃ、皆と一緒に

過去の世界に誘え」

ゆっくりとオルゴールの箱が開かれて、静かにメロディーが流れ出した。

**ボーナスバトル？形見箱（後書き）**

メツチャ短いね W W

次回はとうとう、魅麗の正体と、美鈴の過去が明らかに！！

## ボーナスバトル？魅麗と楓

私は、小さな村で生まれた。人口百人と言う、小さな村。

自然が溢れ、そんな環境で育った私には外の世界には興味はない。

自分で言うのもなんだけど、私は気前がいい。

友達も多い。

その中でも一番仲がいいのは楓。俗に言う“親友”と言うやつ。

楓は幼馴染でいつも一緒だった。

彼女がいればそれでいい。他に友達がいなくなったとしても、楓さえいれば。

そう思えるほど、楓の存在は私には大きかった。

でも、そんな日常もあえなく崩れることとなった。

楓が重い病気にかかった。

“白血病”というらしい。

この小さな村には病院がない。

村人が利用するのは、隣町の小さな病院。

でも、その病院でも処置はできなかった。小さすぎたのだ。

結果、楓は遠くの大きい病院へと入院することになった。

私は、毎日毎日病院へ通った。お見舞いに行った。

その度に日に日にやつれていく楓を見た。

辛かった。今にも死にそうな顔をする楓を見たくなかった。

それでも通い続けたのは、一番辛いのが楓だってことを知っているから。

ある日、楓は言った。

“あなたが来てくれるだけで元気が出る。

生きなきゃって思う。

だって親友だから”

だから私は、楓が元気になるのを信じて通った。

病院のほかに神社にも通って、祈った。

病院が頑張ってくれたのか、お祈りの成果か、それとも楓が頑張ったのか、

彼女は少しずつ回復していった。

私の病院通いも回数を増した。

あと何日で退院できるかな、

帰ってきたらまた、思いっきり遊ぼう、

頭の中は楓が帰ってきた後のことしかなかった。

楓も絶対元気になって帰るって約束した。

なのに――……………

彼女は、この世を去った。

信じられない、信じたくない

元気になるって約束したのに…………ッ

絶対帰ってくるって言ったのに……ッ

楓のいない世界は考えられなかった。

楓のいない未来は闇しかなかった。

私は泣いた。

涙が枯れるほどにずっと。

彼女のそばで

生き返ってほしくて

そのために涙を流した。



そんなある日、あいつは現れた。

白く光る不思議な少年。

彼は自分を神様と言った。

神様だから、死人を生き返らせることができる、と。

そうか、私が祈ったから

私が泣いたから

願いを叶えてくれるために

神様が来てくれたんだ。

そう思った。

——楓を生き返らせて……

彼にすぎた。

彼以外にすぎる物がなかった。

彼は微笑みながら言った。

“友達を生き返らせたいならば、名前を呼びなさい。”

その呼び声に戻ってきた魂を僕が肉体に入れます”

もう一度会いたい

もう一度笑いあいたい

だから…だから…

生き返って…

———楓  
ツツ！！！！

目の前で起きたことが信じられなかった。

自分で望んだ事だけど、あり得なかった。

ベッドの上で冷たく横たわっていた楓が温もりを取り戻しながら起き上がった。

楓、楓！楓ッ！！

彼女に向かって手を伸ばした。

が――――

そこから先は“闇”だった。



寂  
し  
い

寒  
い

暗  
い

真っ暗の空間で、私はそれ以外の感情を持ち得なかった。

そこに彼が現れた。

“ 友達が生き返って満足か？ ”

不気味な笑顔だった。

まるで獲物を見つけた肉食獣のように。

ここはどう？

楓に会わせて！

どうして私はここにいるの？

“ 僕は君の願いをかなえた。

だから今度は君が僕に代償を払う番だ”

代…償…？

どういう意味だか全く分からなかった。

神様なのに、どうして代償？

その時、彼の容姿かたちが変わった。

神様らしい白い服は黒く染まり



人の形だったのが耳がとがり爪が鋭く伸びて：

ああ、彼は“悪魔”だったんだね。

私は悪魔と契約をしてしまったんだ。

ようやく分かった事実には愕然とした。

悪魔と契約してしまったら無事ではいられない。

“安心しろ。確かに僕は悪魔だが、君の友達は確かに生き返ったよ。

だからその代償として、君の魂を喰らうだけさ”

楓は生き返った

でも私は死ぬ

結局、もう二度と二人で笑い会える日は来ない。

その瞬間、私の中に“憎しみ”が溢れた。

楓を蝕んだ病気

病院のない村

尽くしてくれなかった医者

そして――――

病気に負けた楓を。

溢れた“憎しみ”は心<sup>いれもの</sup>から零れ、体全体に行き渡った。

次に見た光景は真っ白の世界だった。

いつの間にか気を失っていたらしい。

私の周りに沢山の“白い人”がいた。

本物の神様。

私は意識があるだけで指一本動かせなかった。

“ 悪魔と契約したなんてけしからん ”

“ 今すぐ追放すべきだ ”

“ 存在を抹消し、関わりのある人間全てから記憶を消せ ”

たったこれだけの会話を聞いただけで私の犯した罪・そしてこれらが分かってしまった。

私は、もうこの世に存在することができないと結論が出された。

もう二度と “ 意識 ” を持つことは出来ないし

折角生き返った親友も私を思い出すことはなくなる。

悲しかった。

苦しかった。

辛かった。

私はただ、もう一度楓と笑いたかっただけなのに。

もう一度楓の笑顔が見たかっただけなのに。

頭の中でいろんな考えがぐるぐるしている間に周りには誰もいなくなっただ。

いや、いた。一人の青年が。

どうやらこれから私を消すつもりらしい。

けれど、彼は言った。

“ 悪魔と知らなかったのは罪じゃない。

ましてや、友達思いのいい子なだけなはずなのに。

どうしてそれで存在を消されなくちゃいけないんだろう”

この人は何をいつているんだろう。

この人も神様なのではないか？

それなのに、どうして他の神様の意見を批判するのだ？

“僕は気が悪いとは思わない。だから君を助けるよ。

僕の独断と偏見だ。

君を別の人間として他の世界に送り込む。

あいつらにばれないようにね。

僕は、君にチャンスを与えるよ。だから――

新しい人生を充分に楽しんできてね。

皐月魅麗ちゃん”

そこで私の意識は途切れた。



もう何も考えることはできなくなった。

次に景色を見るときには

私は五月美鈴となった。





## ボーナスバトル？真実

美鈴「楓……？」

目の前にいる人物と、ついさっき見た人物の顔が重なる。

フィン「そう。私は楓」

ツナ「今のはなんだったの？」

リボン「これが“記憶”か」

フィン「思い出してくれた？」

美鈴「私…私…なんてことを…ッ」

美鈴はその場に泣き崩れた。

フィン「魅麗は悪くない」

その時不思議なことが起こった。

美鈴とフィンを光が包み込んだ。

光が晴れると、そこには全員が見た“美鈴”と“楓”がいた。

楓「魅麗は何も悪くないの。悪いのは病弱だった私のほう」

魅麗「ちがうっ！！私があんなことをしなければ……」

悪魔となんか契約をしなければ……ッッ」

楓「でも！」

それでも魅麗のおかげで私は生き返ることができた！

魅麗のおかげで私はまた笑えるようになった！！」

魅麗「楓……ごめんなさい……っ」

楓「いいの。だって私達……」

魅／楓「親友だから」

ベル「ん、まさかのハッピーエンド？」

マーモン「別にいいんじゃない？美鈴がそれを望むならさ」

ツナ「でもこんなことってあるんだね」

リボーン「親友を思って追放された少女と

親友を思って追いかけた少女。

友情が巻き起こしたミラクルってやつだな（ニッ）」

魅麗「楓……私……（ポロロン）うっっ」

どやっ



ボーナスバトル？五月美鈴（前書き）

不定期更新ですんません≧●≦  
≦<sub>≡</sub>。

なぜか長いですけど割愛で。

ボーナスバトル？五月美鈴

暗い

冷たい



ここはどこだろうか。

私は誰だろうか。

ついさっき何かが起こった気がする。

でも、思い出すことはできない。

思い出すことのできない記憶がいくつか存在する。

理由は、わからない。

早くここから出たい。

この、暗く狭いところから。

私は足掻いた。

一秒でも早くここから抜け出したくて。

無駄だと思っていたけど足掻いた。

こうすれば出れるような気がして。

でもやっぱり無駄だった。

足掻き疲れた私は、早く出られることを願って

静かに眠った。



“…………い…………”

み…………き…………”

私を呼ぶのは誰？

“み…………れい…………”

みれいって私のこと？

どこかで聞いたことがあるような名前……

「美鈴、起きなさい」

バシッ

「いったあ——！！！」

頭を叩かれて飛び起きる。

目の前には藍色の髪の子がいた。

「くーちゃん！なにするの！」

「呼んでも起きないあなたが悪いのですよ。」

「そもそもかくれんぼの途中で寝ますか普通？」

「ねます」

彼はくーちゃん。

本名は覚えてない。

ただなぜか私は彼をくーちゃんと呼ぶ。

私の従兄妹。

実際は違うかもしれない。

でも従兄妹みたいなもの。

「皆あなたを探して待っていますよ」

「ごめんなさい」

くーちゃんと手をつないで皆のところへ行く。

私の名前は五月美鈴。

産声がかわいらしい鈴の音のようだったから親がそう付けたらしい。

友達が多く、今は幼稚園の年長。

くーちゃんは一つ上。

「みれーちゃんどこに行ってたのお。さがしたよ」

「くやしかったらじりきでみれいをみつけなさいよ」

「まったくみれーちゃんたら」

皆で笑いあう。

それだけでも幸せ。

「くーちゃん、かえろっ」

私とくーちゃんは手をつないで家に帰った。

「美鈴はもうすぐで五歳ですね」

「うん。ござい。」

おとーさんとおかーさんにいいプレゼントもらうの」

「それはいいですね。」

しかし、今年は不況でお金がないのでは?」



「ふきよーってなあに？」

「仕事がうまくいかずにお金が無くなってしまいうことです」

「ふーん？」

たまにくーちゃんは難しい言葉を使う。

年上であることを自覚させたいのだろうか。

それとも頭がいいと思わせたいのだろうか。

でもそれもくーちゃんのいいところ。

嫌いになんかならない。

「プレゼントがもらえなかったらどーしよーね」

「僕はあまり関係ありませんがね」

「かんけーあるもん。プレゼントなかったらねー

ショックであそんであげなくなるかも★」

「さらっと酷なことを言わないでください」

あはは、とお互いを見て笑う。

家に着いたときくーちゃんは言った。

「美鈴の誕生日までに僕が考えておきますから

心配しないでください」

「うん。やくそくだよ♪」

それから数日後、約束通りくーちゃんから一つの提案が来た。

それは“宝探し”

くーちゃんが用意したプレゼントを私が見つけると言う

いたってシンプルな物。

私は喜んだ。

でも、これが悲劇の始まりだなんて夢にも思っていなかった。

宝探しで私が見つけたのは、リング。

銀色に輝く石がはめ込まれた不思議なリング。

キラキラと輝く石が綺麗で魅力的だった。

私はくーちゃんにお礼を言った。

“綺麗なリングをありがとう”

と。

だけど、クーちゃんは驚いていた。

“僕が用意したものはリングではありませんよ”

と。

もう一度探しなおした。

そこにクーちゃんからの贈り物はいた。

小さなハムスター。

つぶらな瞳に魅せられて、リングのことは頭の中から消えた。

その次の日からだった。

――死ね

幼稚園に行った私の机にはその一言が刻まれていた。

誰が……

どうして……

先生に言うとは衝撃のことが分かった。

書いたのは親友だった。

私は一気にどん底に落とされた気がした。

それからは“地獄”ばかりだった。

暴言

暴力

落書き

持ち物隠し

イジメのご定番。

それだけじゃなく、やってくる人は日に日に増えた。

家族に言っても信じてもらえず、先生もまた然り。

心の拠り所が無くなった。

いや、一つだけあった。

くーちゃんだけはいつも私の味方だった。

“僕は美鈴を信じますよ。”

辛くなったら言ってください。

いつでも助けます”

そう言ってくれたくーちゃんだけが神様みたいだった。

あんなことになるまでは









## ボーナスバトル？町焼失事件

イジメが始まって四ヶ月が経った。

だんだんとエスカレートしてきたそれは

クラスメイトだけでは収まらなくなった。

家族まで。

私の存在を消し、

ご飯を作らず、

踏みにじっていく。

生きるために私は、

万引きをするようになった。

犯罪であることは分かっている。

それでも生きるにはそうするしかなかった。

イジメが始まって半年。

とうとう味方はいなくなった。

外に出れば町の人間に殺されそうになり、

家にいれば家族に殺されそうになる。

行き場がなくなった私は、秘密基地にいった。

私とくーちゃんの二人だけの基地だった。

ここにいれば襲われることがないと思った。

ここにいれば最近姿を見せないくーちゃんと会えると思った。

秘密基地は絶対に誰にもばれることはなかった。

秘密基地に隠れ始めて三ヶ月。

くーちゃんは一向に表れることがなかった。

居場所が知らなくても私が危険であることには変わらない。

食べ物を求めて外に行くときは、いつもいつも誰かに襲われる。

もう精神がイカレそうだ。



一秒も気が抜けない生活。

誰かに助けを求めたい。

でも、周りにいる人間は皆敵だ。

せめてくーちゃんがいれば……

その時くーちゃんの言葉が頭の中に蘇ってきた。

“呼べば助けに行きますよ”

私は呼んだ。

誰かに見つかるかもしれないけども

力の限りくーちゃんの名前を叫んだ。

寂しくて

会いたくて

助けて欲しくて

涙があふれてきて、

声がかれてきて、

それでも呼んだ。

もう、声が出なくなった。

こんなに呼んだのに

こんなに会いたいの

くーちゃんは来てくれなかった。

約束を守ってくれなかった。

基地の中でくーちゃんがくれたハムスターが私を見つめていた。

そいつを見ているだけで憎らしくなった。

裏切り者のくーちゃんを見ているようで

殺してやりたくなった。

気付けば、私はハムスターの首を絞めていた。

ハムスターがか弱く悲鳴を上げる。

私は静かに手を離した。

次から次へと涙が溢れてきた。

悲しかった。

苦しかった。

唯一の味方までもが消えてしまった。

私の心は闇へと沈んでいった。

イジメが始まってから一ヶ月が経った。

私の六歳の誕生日。

今までと全く違う。

私を祝ってくれる人は誰もいない。

今までと同じなのは、私が生きているかどうか。

ただそれだけ。

私の精神は限界だった。

もう二度と平和な日が来ない。

分かっていることだけれど、やっぱり信じたくなかった。

今までの一年が全て夢だったらいいのに。

何度かそう思った。

そう思って外に出る。

そして、そこにいる武器を持った大人達を見るたびに

私は現実へと引き戻された。

今日も外に出る。

食料調達のために。

ハムスターは割と元気に育った。

結構大きくなったハムスターを連れて私は基地を出た。

いつものようにいろんな人に襲われるかと思った。

けど、そういうわけか、誰もいなかった。

不気味だ。

どこかに隠れているのか？

注意深く道を進む。

そのときだった。

————キイイッ

私の肩に乗っていたハムスターが悲鳴を上げ、

血まみれになって落ちた。

振り返ると結局人が居た。

そいつが持っていたアイスピックがハムスターを貫いたのだ。

目の前で息絶えたハムスター。

その傷口からあふれ出た血が地面を赤く染め上げた。

それを見ているうちに、私の中の何か

大きく弾け、どっと溢れ出した。











ブ  
シ  
ャ  
ア  
ツ

血が飛ぶ。

ザシユウツ

肉片が飛ぶ。

地面は血をたっぷり吸い込み、紅く紅く染まっていた。

町には“それ”が通り過ぎた証拠の様に

大量の死体が道を作っていた。

高い位置にあった太陽は大きく傾き、

紅く染まった町を、そりいっそう紅く染め上げた。

私は屍を踏みつけて道を進む。

手や顔についた鮮血を舐め取る。

近くにいた大人を見つけて持っていたナイフをその心臓に深く突き刺す。

勢いよく抜くと鮮血が吹き出した。

それは返り血となって私に降りかかる。

快感だった。

今までに感じたことがないほどいい気分だった。

やがて町は闇に包まれた。

それを待っていたように私はマッチで火をつけた。

火は炎となって全てを飲み込んだ。

生きる者死んだ者全てを。

闇色の空を紅く紅く染め上げる。

私は赤が好きだ。

血の色炎の色。

全て、全てが紅あかに染まった世界を見て

私は笑った。

狂ったように



心から愉しそうに

私は笑い続けた。





## ボーナスバトル？決意

美鈴「うあああああああああ……！！！！！！」

フィン「美鈴……！！」

ツナ「これが、悠里の過去……」

獄寺「信じらんねえ」

美鈴「頭が割れる………ツツ

うあっ………あああああ……！！！！！！」

フィン「美鈴……！！しっかりして……！！みれ（ドスッ）

………がはっ………！！」

ツナ「フィンちゃん……！！」

どさっ

フィンのお腹には深く深く深く刀が刺さっていた。

？『感謝………するぜ』

ベル「……？ 男の声………？」

ブアッ

美鈴を中心に漆黒の炎が吹き荒れた。

マーモン「ム、一体何が起こってる？」

ツナ「悠里！フィンちゃん！！」

スクアーロ「おもしろーことになりそうだなあ」

ギユルツ

炎が一気に晴れた。

そこにいたのは――――

ベル「……姫？」

山本「なんだ、ありゃ……」

確かに美鈴ではあった。でも違う。

純白だったリボンは血のような赤に染まり

栗色だった髪は漆黒に染まっていた。

バジル「あれは一体……」

レイ「オレの名は、レイ」

獄寺「この声……！」

リボーン「あのもう一つの声の奴か」

レイ「感謝するぜエアメイラ。オレを六年の呪縛から解き放ってくれてよオ」

マーモン「六年、と言うとちょうど美鈴とベルが日本に行った時だね。

なにかあったのかい？」

ベル「しんねーし」

？「ゴホッ…」

レイ「！」

フィン「美鈴は…？美鈴はッッ！？」

レイ「しらねえな」

ガッ↑蹴

ドガアン

ツナ「フィンちゃん！」

レイ「弱えくせにいきがってんじゃねえ」

フィン「うう……っ

み……れい……」

『もういない？』

真っ白な空間に二人の男女がいた。

『ああ』



男は答えた。

『いないってどういうこと!?!?』

『この世から追放されたんだ』

『追放って、どうしてッッ!?!?』

『何も悪いことはしてないッッ!?!?』

女は男の言葉を拒絶するように叫んだ。

『したんだよ。悪魔と契約という、重罪をね。』

我々の決定は絶対。周りの人間に聞いてみる。

アイツを覚えている人間はいない』

女を見下すように、男は冷たく言い放った。

『悪魔……』

『なんだと？』

『あんた達の方がよっぽど悪魔よ！』

私からしたら、私を生き返らせてくれた悪魔の方がよっぽどいい人よ！』

『……………』

『あの子に……魅麗に会わせて!!』

“楓”は叫んだ。

『……………』

しかし“神様”は答えなかった。

『会わせなさいよ! 神様なんですよ!?! あんた達が魅麗をどっかに  
やったんですよ!?!』

人から大切な物を奪っておいて、その態度はないんじゃないのッ  
!?!』

『会えないことはない』

“神様”は口を開いた。

『だが、あいつはお前を覚えていない。会ってもムダだ』

『ムダなんて分かんないでしょ!？』

それに、覚えてなくてもいい、私は魅麗のそばにいたい!』

『………………。分かった。お前を皐月魅麗のいる世界へと送ろう。』

但し人生は一から、つまり赤ん坊からやり直した。

それでも覚えていられると言う自身があるのならそのうちあえる

だろう』

“神様”が“楓”に手をかざす。

“楓”が淡く光りだし、その形が薄れていった。

『ただ一つだけ言っておく』

“楓”はもう殆ど見えない。

『世界は広いぞ』

そして“楓”は完全に消滅した。





フィン「(美鈴…ごめんなさい…」

私が、もっと早くあなたを見つけていられたら…」

ずず…

レイ「まだやる気か？ムダだと言うのがわからねえのか？」

ゴッ

パシッ

レイ「!!」

ツナ「フィンちゃん!？」

フィン「私はね…ムダって言葉が…大嫌いなんだ…」

コオオオオ

フィンの体が光ります。

その光が手に集中し、光の矢となった。

マーモン「ムム、あいつ何をする気だ？」



フィン「美鈴……遅くなってごめんね……？」

レイの胸の中心に深く刺した。

レイ「ぐあああっ」

そこから光がほとばしった。

フィン「私の魂の力で、あなたを浄化させる」

レイ「この…クソアマがつ……」

よく覚えとくが良い。次にオレが出てきたときがてめえらの最期だ」

光は完全にレイを包み込んだ。

晴れたそこにはいつもの美鈴が立っていた。

しかし、気を失っていた。

バランスを崩しフィンに倒れこむ。

抱きかかえたフィンも既に気力の限界であり、一緒に倒れた。

ベル「姫ッ」

ツナ「フィンちゃん！」

獄寺「おいアメイラ！しっかりしろ！」

チエルベツロ「お待ちください」

チエルベツロ「両名戦闘不能となりましたのでこの対決は引き分けとさせていただきます」

チエルベツロ「なお、リングは回収とさせていただきます」

バジル「回収？」

了平「何故だ？」

山本「こいつ等のリングとボンゴレリングはカンケーねーだろ？」

チエルベツロ「それにお答えすることはできません」

獄寺「なに！？」

チエルベツロ「我々の決定に従えない場合は失格とします」

ツナ「そんな！」

チエルベツロ「それでは明晩のカードを発表します」

チエルベツロ「明晩の対決は————雨」

スクアーロ「ようやくオレの出番かあ」

ツナ「そうだ。山本の相手は激強のロン毛だ！」

スクアール「首を洗って待っているお」

ダッ

マーモン「ベル、僕達も帰るよ。」

美鈴を頼んだよゴーラ・モスカ」

モスカ「プシュー」

ダッ

ツナ「行っちゃった」

リボーン「ツナ、急いでフィンを病院に連れて行くぞ」

ツナ「うん」

獄寺「十代目、オレも行きます」

山本「オレもついてくぜ」

ツナ「皆で行こう」

## ボーナスバトル？決意（後書き）

この回にしてようやくスクアールが喋った。。。。

レヴィなんて一回も喋ってないWW

## ボーナスバトル〇真意

〽中山外科医院〽

全「……………」

ツナ「フィンちゃん…大丈夫かな…」

ロマーリオ「できる限りのことはした。後は、この嬢ちゃんの生きる気力だな」

ツナ「……………大丈夫…だよね……………」

バンツ↑扉開

全「!！」

? 「姉さん!！」

ツナ「セシルちゃん!? どうしてここに!？」

リボーン「オレが知らせたんだ」

ツナ「お前また余計なことを!！」

セシル「姉さん! 一体何があったの!?! どうしてこんな…」

こんなボロボロになってるの!？

!？」

ツナさん!教えてください!姉さんに何があったんですか

ツナ「つつ………」

セシル「黙らないでください!姉さんは何の戦いに巻き込まれたんですか!？」

?「セ……シル……」

全「!」

セシル「姉さん!」

山本「気がついたのな」

フィン「セシル……ツナを……責めないで……」

悪いのは姉さん……だから……」

ディーノ「喋るな。傷口が開くぞ」

フィン「美鈴は……私の命に代えても助けなくちゃいけない……」

セシル「美鈴?美鈴って五月美鈴のこと?」

ツナ「セシルちゃん知ってるの!?!」

セシル「昔からうわ言でいつも『美鈴、美鈴』って言ってた。

そうか、そいつが姉さんを苦しめるんだね？ だったら私が排除する」

フィン「止めて！！うっ……」

ツナ「安静にしてて」

セシル「どうして？ 姉さんが苦しむならそいつは姉さんにとっての敵でしょ？ 敵は排除していかないと私たちは生き残れない。」

分かってるでしょ？

姉さんをそんなにしたのもそいつなんですよ？」

フィン「美鈴は…友達…なの…。だから…そんな事…言わないで…」

セシル「友達なら傷つけないでしょ！！？ だから」

フィン「分かったら姉さんの言うことを聞きなさい！！うあっ…」

山本「落ち着けて。な？」

リボーン「セシルも落ち着け。ここは病院だ」

セシル「……………」

バジル「しかしセシル殿は何故そこまで美鈴殿を消すことばかり考えるのですか？」

セシル「私たちは生まれながらのマフィアなの。だから敵は必ず排

除しなければ生きていくことはできない。ただそれだけ」

ツナ「セシルちゃん……」

フィン「私は…この世界に來ても魅麗を忘れることはなかった」

全「？」

フィン「あのクソ神にムダだと言われても、心のどこかで、絶対に会えるって信じてた。

だから…だから…学校で出会ったときはすごく嬉しかった  
…でも…

美鈴は私を覚えていなかった。

神様の言ったとおりだった。

だからこそ、私は、私達の記憶を取り戻したかった」

リボーン「だが、余計な物まで見せちゃったみてーだな」

フィン「あり得なかった。“魅麗”の形見箱に“美鈴”の記憶が入ってるなんて」

バジル「もしかして、ですが、美鈴殿の記憶とレイは何か関係があるのでしょうか？」

フィン「私の不注意だった。ちゃんと神様に言われてたのに。



『記憶と力が完全に取り戻されたとき、あいつはアイツじゃなくなる』と」

ツナ「?? どーゆーこと?」

リボーン「記憶と力が取り戻されたとき……か。なるほどな」

ツナ「え?」

リボーン「お前らに聞くが、悠里としていたとき、アイツから何か感じなかったか?」

全「?」

獄寺「どーゆーことスかりボーンさん。何かって」

ツナ「あ…そういうえば…」

了平「何か知っているのか?」

ツナ「皆と会うずっと前の話なんだけど、ああリボーンには話したな。」

オレ達が小学生のときだ。悠里のことが気に入らなかった人たちがいてさ、悠里をいじめてたんだ。

けど、全員仕返しに遭った。

その時、オレが実際に見たわけじゃないし、その人を信じていたわけじゃないけど、

仕返しを受けた人たちは皆、『手を触れないで人を傷つけることができる悪魔だ』って言ってたんだ。

オレはその時、いや、ホントは今でも悠里がそんなことをするなんて信じたくなかったけど、

今こうして考えると、もしかしたらアレはレイだったんじゃないかな……」

獄寺「でも、そう決めるのは早いのでは？」

山本「力と言えばさ、あいつ、ダイナマイトを撃ち落すとき、よくわかんねー技使ってたよな」

ディーノ「言われてみればそうだな」

リボーン「なるほど。力は前々から取り戻されてたってワケだな」

バジル「そういえば拙者、親方様からよく沢田殿の話を聞かされていたのですが、そのときに美鈴殿の話も出てきたんです。

その時の親方様の弦きが気になっていたんです」

ツナ「父さんの弦き？」

バジル「はい。

『彼の記憶は触れてはいけない。もし触れてしまったら取り返しがつかない』

そのときは意味が分からなかったのですが、今になってみるとよく分かりました」

獄寺「なっ!?! お前知ってたのかよ! 知ってたんならなんでフィンを止めなかったんだ!?!」

バジル「すみません。気になってはいたものの、何年も前の話なので…」

ツナ「バジル君は悪くないよ」

バジル「すみません」

ツナ「……………リン<sup>この戦い</sup>グ争奪戦が終わったら、ちゃんと美鈴ちゃんと話をしよう。オレ達は何も知らなすぎた。

何も知らないのに無責任なことばかり言って…………。

だから、ちゃんとお互いのことを知ってから、分かち合える友達になりたいんだ」

レオン「(フルフル)」

ツナ「えっ? なっ何!?!」

獄寺「レオンが…!」

リボーン「一瞬にしてマユになったぞ」

了平「何が起きているのだ!？」

セシル「何これ」

リボーン「本来レオンはオレの生徒に試練が近づくとマユになるんだが…」

ツナ「あ、そっか。じゃあ山本？」

リボーン「今の一連でなんで山本になるんだバカツナ。」

いいか？今レオンはお前の言葉に反応したんだぞ」

ツナ「え？じゃあまたオレ!？」

リボーン「そーとも限んねえ。確かにツナの言葉に反応したが、大体の問題はその中身だ」

獄寺「中身っていうと美鈴の話っスか？」

バジル「と言うことは、沢田殿か美鈴殿か、もしくはこの場にいる全員と言うことですね」

リボーン「ああ」

了平「つまりはここからは絶対に負けられない戦いと言うことだな」

ツナ「山本……明日の勝負、頑張ってね」

山本「おう」

獄寺「負けんじゃねーぞ」

了平「極限に頼んだぞ」

山本「わーってますって。任してください」

## ボーナスバトル◎失意

くヴァリアーアジトく

ガラガラ

マーモン「美鈴、起きたかい？」

ベル「まだだぜ」

マーモン「ハア。ベル、ちょっといいかい？」

ベル「何？」

マーモン「レイが言っていた六年前、何があったの？」

ベル「またその話？オレは知んねっていつてんじゃん」

マーモン「それじゃあ美鈴が不審な行動をしてたとか……」

ベル「あのなあマーモン。確かにオレは監視として姫と一緒にいたぜ？」

でも、姫の行動を全部見てるわけじゃねえんだよ。

オレにだって分かんないことぐらいあんの」

マーモン「……………」

ベル「オレだって何があったのか知りたいぐらいだしさ。

それに、目え覚ましたら本人に聞きゃいい話だろ」

マーモン「……そう…だね。

それじゃあ、僕は部屋に戻ってるから」

バタンツ

ベル「……………」

（姫、本当に何があったんだよ…。オレに言えないことでもあんのかよ…）」

チュツ

ベル「起きたらちゃんと話し聞かせてもらおうからな」





紅く燃え上がる町が目の前に広がる。

沢山の人の悲鳴が聞こえる。

町中に人が焼ける臭いが充満してる。

目を閉じるたびにいつも見ていたこの風景。

ずっと……皆は殺されたんだと思ってた。

自分で殺したのが真実なのに…。

どうして……

マーモン「ウソ、ついてたんだね」

！！？

いつの間にか町は無くなり、闇の空間にいた。

マーモン「僕達にウソをつくなんて卑怯じゃないか」

違う…私は…ウソなんて…

ルッスーリア「だめよう美鈴ちゃん。私達仲間なんだからちゃんと本当のこと話してくれないと」

ウソなんてつく気はなかった!!

騙してたんじゃない!!

レヴィ「やはり貴様はヴァリアーのお荷物になるだけだ」

イヤだ!私はお荷物なんかじゃない!!

スクアール「腰抜けはいらないんだよ、うゝおゝおい」

待って…置いてかないで……

XANXUS「……………カスはさつさと失せやがれ」

お願いボス!!捨てないで!!一人にしないで!!

ねえ…ベル!!

ベル「……………オレ、ウソとか嫌いだからさ…

じゃあな、姫」

ヤダよ！！行かないで！！お願いだから！！みんな！！

レイ「さあ美鈴。こっちに來い。樂になるぞ」

イヤ…………

レイ「さあ」

いやああああああああ！！！！！！！！

美鈴「あああああ!!!!

……ハア……ハア……

………夢………?」

本当に、夢だったの…?

頭が…痛い…

?「………んん…」

美鈴「(はっ)

………ベル?」

なんでベルがこんなところで寝てるの…?

ああ、手が震えてる。

皆、レイのことを知ってしまったのだろうか…

過去を見た後の記憶が何にも無い：

もし、レイのことを知っていたとしたら、話さなきゃ、いけないだろうか：

イヤ：ダメだ：話せない：

話したりしたら、それこそ本当にあの夢のようになってしまう：

『話せばいいじゃないか』

！！  
レイ！！

『どうせ、ヴァリアーの奴らはお前を信用してなんかいない。

お前が再び日本に出向いたときに信用なんてとつくに崩れてんだよ』

違う！！そんな事無い！！

『どこが違うんだ？XANXUSだって何も言わなかったが、内心はいつお前を消そうかと考えてるだろうぜ』

ありえない！！ボスは：そんなこと：

『考えるだけ無駄だ。さっさとヴァリアーこんなどこ出てってオレにその体を受け渡せばいい話だ。お前一人がいなくなったところで悲しむ奴なんて一人もいねえ』

美鈴「黙れ!! さっさと消えうしろ!!」

ベル「姫…? 大丈夫か?」

美鈴「(はっ) 声に出てた?」

あ、うん。大丈夫」

パンツ

スクアアロ「うゝおゝおい!! 起きたかあ!!」

美／＼「うるせえ!」

スクアアロ「うゝおゝい。随分と元気そうじゃねえかあ」

マーモン「やっと起きたか。それなら話を聞かせてもらおうよ」

美鈴「(ビクッ) 話…?」

マーモン「そうさ。レイについてさ」

ドクンッ

美鈴「や……ッ」

スクアアロ「あいつは何者なんだあ」

美鈴「ダメ……ッ」

《オレ、ウソとか嫌いだからさ》

美鈴「いやぁ……ッ」

ベル「姫。オレ、ウソとか嫌いだからさ」

ドクンッ

美鈴「イヤアアアアッ」

ブワッ

全「!」

マーモン「まずいね。このままだとレイが出てくるかもしれない」

スクアーロ「ちっ」

ベル「姫ッ」

ギュッ↑抱

ベル「落ち着けて、な？何がやなのか言ってくんねえとわかんねえし」

美鈴「ああ……うあっ……」

怖い……私……怖い……」

マーモン「怖いって何がさ」

美鈴「本当のことを知ったら皆がいなくなる気がして…レイに取り込まれそうで…」

ベル「だーいじょぶだって。何心配してんの？オレ達が姫を捨てるわけねーじゃん」

マーモン「そうだよ。だから、話してくれない？」

美鈴「…………グズツ（こくり）」



美鈴「レイは、私のもう一つの魂なの」

ベル「は？」

スクアード「どういふことだあ」

美鈴「レイは元々、全く違う人から生まれるはずだった。でも、レイの母親はレイの出産直前にレイをおろした。わざと赤ん坊に悪い薬を飲んで、流産した。生まれることのできなかったその魂は、ほぼ同時期に生まれることとなった私の魂に溶け込んだ。」

だからレイは私であり私でない、もう一つの“私”である」

マーモン「ちょっとストップ。魂が溶け込むって、普通じゃありえないと思うんだけど」

美鈴「普通じゃありえない。そりゃそうだよ。私は普通じゃないんだから。」

魅麗の記憶を見たでしょ？あらゆる物を恨んだまま生まれ変わった私は、記憶が無くとも心のどこかにとても濃い負の感情が存在していた。そして同じように、強制的に流産されたことによって生まれることのできなかったレイも、とても濃い負の感情を持っていた。

“憎しみ” “恨み” という形で持ち合わせる感情が同じだった

たからこそ、私達の魂は溶け込んだ」

ベル「んー。何かよくわかんねえけど、そこまでの理解はオツケー。で、なんでこの話でオレ達が姫を捨てるとか思うわけ？」

美鈴「こうなった以上は、いつレイが出てくるか分からない。実際に、この戦いが始まる前のとき、ボスの攻撃を止めたのはレイだった」

全「!！」

スクアール「なるほどなあ。それである時XANXUSを呼び捨てにしてたんだなあ」

美鈴「そういうこと」

ベル「ま、あん時の姫はそれはそれでかっこよかったけどなあ」

マーモン「あまりいい話じゃないけどね」

美鈴「だから、」

ベル「心配すんなって言っただろ？オレ等はヴァリアー。みんな似た物同士だしっ♪」

スクアール「あまり気に病むことはねえ。XANXUSにはオレから話してやる」

マーモン「君はもう少し休んでいなよ。たいした怪我はしてないんだし、君が倒れたのは気力の問題だろうから、そのあたり、しっか

り回復してもらわないと困るから」

美鈴「皆…ありがとう…」

拾ってくれたのがヴァリアーで……よかった…（にこっ）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9617t/>

---

星は何処に

2011年12月1日05時48分発行